

滋賀大学経済学部研究叢書第42号

「虚業家」による泡沫会社乱造・ 自己破綻と株主リスク

—大正期“会社魔”松島肇の事例を中心に—

小 川 功 著

滋賀大学経済学部

滋賀大学経済学部研究叢書第42号

「虚業家」による泡沫会社乱造・自己破綻と株主リスク
—大正期“会社魔”松島肇の事例を中心に—

小 川 功 著

滋賀大学経済学部

はじめに

「彼等ハ各種商品ノ買占売惜ヲ行ヒ法外ナル物価騰貴ヲ来サシメテ民衆ヲ苦シメ、又有価証券ノ価格ヲ不当ニ高下セシメテ民衆ヲ惑ハスノミナラス、斯種ノ思惑ハ最後ニ於テ常ニ失敗ニ帰シ財界ヲ攪乱スルニ至ル。彼等カ真面目ナル事業家、金融業者、乃至一般国民ヲ毒スルヤ大ナリト云フヘシ。銀行業者カ彼等投機師ニ対シテ極メテ厳正ナル態度ヲ執ラレンコトヲ茲ニ重ネテ切望スル所以ナリ」¹⁾

これは大正11年4月6日井上準之助日銀総裁が銀行業者を前に演説した“投機師”に対する警告の一節である。

昨今、堀江貴文、三木谷浩史、孫正義などといった特定領域に棲息する人物の名が当初は球団買収を目論む旦那衆としてスポーツ紙面を賑わせた。最近ではさらに村上世彰を加えたある種の特異体質を有すると思われる人々の派手な経済行動が日々の新聞・放送のトップを飾り、彼らの虚々実々の言動により単に株価だけでなく、日本経済そのものも大きく左右されはじめている。しかし市場経済を信奉する各所管大臣は資本主義社会での自由な投資活動を容認する旨を声明するのみである。²⁾

歴史的なアプローチに立つ著者は彼らの生態を学問的に論評する立場にはないが、彼らとある種の類似点を有すると思われる人物が多数跳梁跋扈した大正期の大戦景気の時期（大正バブル期）の解析にこれまで取り組んで来た。こうした投機的性向の濃厚な人物が銀行・保険・証券などの金融分野に拠点を有して、多くの企業に関係し、株価を煽り買占めを行い、一時的には金融界のみならず、世間一般にも新進実業家などとして持て囃されることも少なくなかった。しかし結果として彼らに眩惑され付和雷同した資本家はもとより、目先の利益に誘惑されて彼らが扇動した投機に乗った一般国民の多くも実に悲惨な結末を迎えたのであった。いわば当時の日本国民の多くがリスク管理に甘かった結果、リスクの顕在化という最悪の事態を招いたのが大正バブル期の一応の総括であ

る。

本書は大正バブル期に盛んに活動した松島肇³⁾という投機的な銀行家・特異な資本家の関わった数十社にのぼる企業群を可能な限り網羅的に把握しようとした個別的研究を通じて、こうしたリスク管理の手痛い失敗の実例を解析しようと試みたものである。筆者のこれまでの極端なリスク選好者・リスク・テーカーたる「虚業家」研究（序章参照）の一環をなすものであり、滋賀大学リスク研究センターの金融リスク等に関する共同研究プロジェクト成果の一部を構成する。本書の主要情報源である新聞・雑誌・会社録・頻出資料等は略号⁴⁾で本文中に直接示した。

また本書には都合で企業名索引・人名索引を割愛した代替策として、①目次に主人公松島肇の関係した企業名を必ず入れた「節」の名前を掲げるとともに、②松島の関係企業（巻末〔表－3〕〔表－4〕）と、松島との関係が濃密なパートナー（第10章参照）には必ず*印を付して松島との関係の存在をその都度明示し、③*印を付した人物はまとめて巻末参考資料1の「松島肇のパートナー――⁵⁾覧」に略歴、持株等の判明情報を掲載し、④人名索引の機能を持たせるため五十音順とした。なお松島との関係は一見濃密ではないものの、著者には何らかの「虚業家」的要素を感じさせるような登場人物については適宜注記を行った。いずれこの種の人物についても詳しく言及し、焦点を当てる機会を得たいと考えている。

- 1) 日本銀行調査局『本邦財界動揺史』『日本金融史資料 明治大正編』第22巻、P 728所収
- 2) 本書執筆の学内締切である平成17年9月末時点の著者なりの認識である。その後初校（直前）の18年1月16日以降事態の急変を見たが、あえて訂正を加えないこととした。（平成18年2月10日追記）
- 3) 松島肇にはほぼ同時期に駐ポーランド公使、外務省欧米局長、イタリー大使等を歴任した比較的著名な同姓同名の外交官（国会図書館憲政資料室等に複数の関係文書あり）が存在するため混同されやすいが、全くの別人である。
- 4) （新聞）中外…中外商業新報、時事…時事新報、東日…東京日日新聞、東朝…東

京朝日新聞、読売…読売新聞、国民…国民新聞、報知…報知新聞、朝野…朝野新聞、萬…萬朝報、大毎…大阪毎日新聞、大朝…大阪朝日新聞、大阪日日…大阪日日新聞、徳日…徳島日日新報、徳毎…徳島毎日新聞、日出…京都日出新聞、中国…中国新聞、門司…門司新報、福日…福岡日日新聞、佐賀…佐賀新聞、北海…北海タイムス、岩毎…岩手毎日新聞、岩日…岩手日報、法律…法律新聞、鉱業…日本鉱業新聞、保銀…保険銀行時報、内報…帝国興信所内報、

(雑誌) K…『東京経済雑誌』、D…『ダイヤモンド』、T…『東洋経済新報』、E…『エコノミスト』、藤本…『藤本ビルブローカー銀行週報』、増田…『増田ビルブローカー銀行旬報』、B…『銀行通信録』、R…『鉄道時報』

(会社録) 株…『株式名鑑』野村、大阪屋、諸…牧野元良編『日本全国諸会社役員録』商業興信所、帝…『帝国銀行会社要録』帝国興信所、商…『日本全国商工人名録』、要録…『銀行会社要録』、紳…交詢社『日本紳士録』交詢社、人…『人事興信録』、帝信…帝国興信所『帝国信用録』、商工…『商工信用録』東京興信所、通覧…農商務省編『会社通覧』大正8年12月末現在

(頻出資料) 松島…「松島肇氏と昌栄貯蓄銀行」大正7年10月23日『帝国興信所内報』、内容…「日本緬羊毛織会社の内容」大正9年7月10日『帝国興信所内報 号外129』

大審民…『大審院民事判例集』、大審刑…『大審院刑事判例集』、名鑑…『日本鉱業名鑑』大正7年、名鑑13…『日本鉱業名鑑』大正13年改訂版、「栄華物語」…大阪今日新聞「松島肇栄華物語 上下」(T13.12.21-22徳毎転載)、徳島市史…『徳島市史』第三巻産業経済・交通通信編、昭和58年

なお『銀行会社要録』の記載内容と、同書の巻末索引である「役員録」の記載内容に差異がある場合があるが、誤植・疎漏等のほか「役員録」の「原稿ハ大正九年三月二十日ヨリ『イロハ順』ニ依り順次締切り、本文会社要録ノ原稿締切ト其時日ヲ異ニスル」(要録T9役上P1)ためと説明されている。よって本文がその後の変更内容を織り込んでいる場合には「役員録」は変更前の状態を示すものと考えらる。

5) 筆頭株主は①のように、持株の順位を○内に示した。

目 次

はじめに

序 章 「虚業家」等の研究史	1
1 「政商」等に関する文献・先行研究	2
2 「相場師」等に関する文献・先行研究	3
3 「虚業家」「会社屋」等に関する研究	6
4 「虚業家」研究の意義と今後の課題	11
第1章 大正バブル期の新興企業と松島肇	19
第2章 松島肇の経歴	27
1 松島肇の略歴	27
2 松島肇の資産形成	30
3 実弟の西条教部	32
4 政治家としての松島	32
第3章 門司築港事件	37
1 西舞子企業	37
2 門司築港プロジェクト	38
3 門司築港㈱	43
4 門築事件	46
第4章 前半期の諸企業関与	53
1 城東木材工業	53
2 東京リベット製造	54

3	安全印刷	54
4	大阪計器製造→大阪計器製作所	55
5	日本絹硝子	56
6	摂津煉瓦	57
7	日本鋼管シャフト	58
8	市岡電気工業	58
9	黒崎電機製作所	59
10	生駒土地	63
11	自動車興業	64
12	日下温泉土地	64
第5章 糸崎船渠事件		69
1	糸崎船渠	69
2	糸崎船渠事件	73
3	海運興業	75
第6章 「幽霊炭坑」事件		79
1	三池炭砒会社	79
2	九州炭砒	84
3	唐津炭砒	87
第7章 日本緬羊毛織事件		95
1	帝国毛織紡績	95
2	大日本原毛紡績	100
3	紡績木管→三光木材工業	102
4	日本緬羊毛織	103

第8章 熱海宝塚土地事件	117
1 熱海偕楽園→伊豆偕楽園	117
2 熱海宝塚土地	119
3 日洋土地興業	124
4 日本土地	125
5 関西計器製作所→大阪計器	127
第9章 徳島県下の事業	133
1 徳島日日新報社	133
2 徳島無尽	139
3 美馬郡是製糸	140
4 第一倉庫	140
5 共正海運→糸崎船渠→海運興業→松島汽船→共正海運	141
6 徳島自動車	142
7 関西土地建物	143
8 徳島木工製作→関西木工	144
9 その他	146
第10章 松島肇のパートナー	153
1 戸水寛人	153
2 鈴木錠蔵	156
3 鈴木久次郎	157
4 松島のパートナー	158
終章 松島肇の功罪	165
1 松島肇の論難	165
2 松島肇の特色	169
3 松島肇の評価	173

〔表―1〕 松島派の黒崎電機製作所持株推移……………	61
〔表―2〕 松島肇・昌栄貯蓄銀行・関係企業年表 ……	181
〔表―3〕 松島肇の兼務先一覧（大正9年～15年） ……	192
〔表―4〕 松島一派の兼務先一覧（上記以外） ……	195
〔表―5〕 戸水寛人の兼務先一覧（上記以外） ……	197
〔参考資料1〕 松島肇のパートナー一覧 ……	198
〔参考資料2〕 「虚業家」とその類語に関連する参考文献・先行研究……………	221

序 章 「虚業家」等の研究史

著者は昭和61年の日本保険学会大会で大阪生命の破綻事例を報告し、主な経営者である岡部廣を「実業家というよりは虚業家であり…天才的詐欺師に近い存在¹⁾」であると結論付けた。もちろん「虚業家」という用語を破綻経営者等の性格を形容する言葉として使用するのは著者のみではなく、遅くとも明治20年代にまで遡ることが可能である。²⁾

著者が最初に「虚業家」の概念を構築するにあたって着目した人物評は「彼の言動は一も信を置くに足らず既往の事蹟を聞くに殆んど皆失敗に終り負債は一時数百万円の巨額に上り今猶数十万円を有し実業界の一大怪物を以て目せらるるの人」「人物真価が不明…実に不可思議千万な人物³⁾」という人物形容であった。

一方で金子直吉、久原房之助など二流以下の財閥・商社等の経営者などの中には、旺盛な企業家精神に押されて、リスク管理能力が相当疑問視される企業家も存在するように思われる。たとえば郷誠之助は金子直吉を「稀に見る天才肌の実業家…惜しいことには、本当の締めくくりが付かない…纏った統制⁴⁾が付いて居ない」と評して「金子の頭の欠陥は、直ちに鈴木商店の致命傷」と看破した。郷の指摘するように、企業家精神を大いに発揮しつつも企業家として最終的に成功するためには、次々に遭遇する危機を回避・突破するリスク管理能力をも同時に兼ね備えていることが当然に要求される。もしリスク管理能力に乏しい企業家が事業に成功したとしても、それは単なる偶然、僥倖の所産なのであろうか？もし成功と失敗とを分ける要素が単なる偶然の産物でしかないと仮定すると、健全な「企業家精神」と、万一の僥倖のみを当てにする「投機」とを区別する意味はなくなり、ひいては「企業家」と「投機家」とは全く同義語ということにもなりかねない。やはり「企業家精神」には、おのづから限度、許容範囲というべきものが存在して、「企業家精神」の度を越した過剰は無謀な「投機」との区別がなくなると考えるべきではなかろうか。

著者の見るところでは破綻した銀行や金融機関の中には経営者が「企業家」と「虚業家」の中間的存在というよりはむしろ「虚業家」に限りなく近い、抑制因子が機能しなくなると即座に「虚業家」症状を発症するようないわば「境界型」であった事例も『銀行事故調・全』に見るごとく決して僅少ではないように思われる。そこで著者は明治以来の「虚業家」等の用例を調査した上、「虚業家」の共通性として、①虚飾性、②モラルの欠落、③リスク管理能力の欠如、④「策士」的要素、⑤「相場師」的要素、⑥誇大妄想傾向、⑦「成金」性など非「企業家」的諸要素群に集約できるのではないかと考えた。

しかし明確に「虚業家」と銘打った文献や学術研究は研究史をひもとくにはあまりにも数が少なすぎる。そこで主に「実業家」「企業家」等の反意語として使用される「虚業家」を、類義語・周辺語と考えられる「山師」「相場師」「買占屋」「会社屋」「総会屋」「成金」「策士」「政商」等とともに、可能な限り広範囲にとらえて、これらを研究課題とした著書・論文等を刊行順に列挙すれば、巻末の〔参考資料2〕の通りである。以下本章でとりあげる著書・論文等の書誌情報は巻末の通りで、個々の注記は省略した。なお金融危機・金融恐慌等に関する研究動向、⁵⁾「虚業家」やその類義語・周辺語に関する用例・書誌⁶⁾に関しては著者は別に詳述しているのでここでは繰り返さない。

1 「政商」等に関する文献・先行研究

〔参考資料2〕のうちまず「政商」に関しては山路愛山が『現代金権史』の中で「政府が自ら干渉して民業の発達を計るに連れて自ら出来たる人民の一階級」と定義したのをはじめ、「政商」の定義を巡り様々な議論が展開されてきた。岩下清周ら「政商」の人物を多数取り上げた列伝としては三木幾太郎『疑問の人』などがある。

「政商」に関して代表的な学術書として土屋喬雄氏の『日本の政商』がある。土屋氏は政商を「政府者との個人的関係よりして、政府の保護又は御用を受けたもの⁷⁾」と意義付け、「その関係に不公正なものが伏在する必然であり、そこから奇利とか暴富とかいわれるものが生れる⁸⁾」とした上で、客観化しえない「あ

まりに生々しい、新しい『政商』については、省略⁹⁾して近世から明治期までの10名の日本の政商列伝を著した。ほかにも小林正彬『政商の誕生』など多数の先行研究がある。

次に「策士」については古くは鶴崎鷺城『当世策士伝』、近年では小島直記『日本策士伝』等が散見される程度で、歴史的ないし学術的用語ではないためか、管見の限りでは纏まった先行研究は乏しいように思われる。「成金」を冠する文献も『明治大正成金没落史』、成金で買占め本人の千原猪之吉の自著『成金物語』など極めて数多い。近年では邦光史郎「成金列伝」、梅津和郎『成金時代』などもある。

2 「相場師」等に関する文献・先行研究

「相場師」「買占屋」等に関しては日本証券経済研究所で小林和子氏らが編集した『日本証券史資料 戦後編別巻一 証券関係文献目録』に多数収録されている。まず株式仲買人等の評伝としては『兜街繁昌記』明治45年、p174以下の「株式仲買人総評」、奥村千太郎（元相場記者）の『株式放資と売買術』、米穀、三品を含む大阪の仲買人全般は大阪毎夕新聞記者の岡村周量（蒼天）自身による記事や、「毎夕在社中、閑を偷んで書き集めたもの」（『黄金の渦巻へ』序）を退社を機に独自出版した『黄金の渦巻へ』等に詳しい。相場師の回顧談を収録した『相場実話』、『相場今昔物語』、個別の相場師の伝記としては『風雲六十三年・神田鋪蔵翁』など多数ある。

奥村千太郎（元相場記者）の『株式放資と売買術』は株式仲買人はもちろん石井定七、「成金」千原猪之吉といった著名な投資家・投機家まで多数取り上げて彼らの放資・売買術を議論しており、虚業家列伝に近い著作の一つと位置付けられる。また代表的な『北浜盛衰記』、『兜町盛衰記』などをはじめとして多数存在し、近年でも『相場師異聞』『東京の米穀取引所 戦前の理事長』のような相場師列伝がいくつか出版されている。もちろん明治26年刊行の瀬川光行¹⁰⁾『商海英傑伝』をはじめ、『大阪財界一百人』のような人物列伝には必ず相場師や投機家（例えば『財界物故傑物伝』には松谷元三郎ら）が収録されているが、こ

ここでは省略する。

買占め、乗取りに関わった「相場師」投機家らを主な対象とした著作には新聞記者等がジャーナリスティックな関心から調査したもの¹¹⁾が少なくない。買占めについては安田与四郎『株式市場の裏表』など通俗的な解説書・入門書の類にも必ず記述があるほか、今村・井上などによる九州、関西、参宮鉄道等の買占めについては野城久吉『商機』に詳しい。買占事件の事例集成では銀行問題研究会から刊行された『買占物語』が類書に先行している。さらに近年では森川哲郎『乗取り百年』、奥村宏『買占め乗取り・TOB』等がある。

証券市場に関係する島徳蔵、野村徳七、神田鑄蔵らに関連する先行研究には相当の蓄積がある。証券業者全般については野田正穂、森泰博、小林和子、二上季代司らの各氏による証券史研究成果の多年の蓄積があるが、代表的な一部分だけを巻末に掲げた。北浜の証券業者に関してはまず宮本又次氏が『大阪商人太平記』等において多数の列伝を取り上げた。証券界以外でも藤田伝三郎のパートナーである中野悟一¹³⁾という人物の不可解さは「虚業家」的要素との重複が認められる。

菅野和太郎氏は島徳蔵を「会社屋」と規定した上で、「彼は多くの会社を発起した際に、少からぬ不正行為をなしたかも知れないが、同時に彼の活動が、延いて会社企業心及び株式会社知識を世人に扶殖したことは、何人も否定し得ない¹⁴⁾」として「彼の功罪は相半す¹⁵⁾」と断じた。また「虚業家」という用語を論文の中で初期に使用した三島康雄氏は昭和40年4月の論文の中で島徳蔵を、「真似ることのできない一種の天才的な才能を持って…怪腕を揮って大阪財界を引ずり回し、株式界の王者として君臨した一代の梟雄であり、不世出の虚業家¹⁶⁾」と評した。湯沢威氏執筆の『阪神電気鉄道八十年史』も「奔放な言動がしばしば世間の注目を集めた」社長島徳蔵を、「天性、相場師のひらめきを持っていた」「当社の最高経営者の中では異色の個性¹⁷⁾」と評した。

三島康雄氏は『阪神財閥』において「強気の勝負師としての野村徳七を冷静に抑制する参謀役であった弟の実三郎¹⁸⁾」と兄弟を対比するとともに、「前半生を投機的な相場師として生きてきた徳七」が「南洋狂」と呼ばれたほど「海外事

業に対する異常なまでの熱意と執着¹⁹⁾」を死の直前まで持ち続けたとしている。

露見誠良氏は「証券財閥」の分析の中で証券業者を①鈴木久五郎、高倉藤平ら「取引所の定期取引を利用して一獲千金を夢みる」「投機に生きる人々²⁰⁾」すなわち「相場師」タイプと、②小池國三、野村実三郎、遠山元一ら「取引も現物か当先の値鞆稼ぎに終始し、顧客の信用を重んずる堅実路線を志向する人々²¹⁾」すなわち相場師気質を嫌うタイプとに二分する。そして今村清之助、小池國三、野村徳七らは「信用を重んじる堅実な資質と投機家業との矛盾、株屋という蔑視を逃れたいという一念²²⁾」から、いずれも証券業者から投資銀行への転身を志向したとする。そして野村の成長は「果敢な徳七と慎重な実三郎²³⁾」という絶妙なりスク・バランスで可能となったと見る。

神田鍾蔵について野田正穂氏は本業で大きなリスクを伴う公社債の「買戻保証」の開発などに加え、『金融財閥化』を夢みてその事業を急速に拡大²⁴⁾する不健全な傾向を指摘した。

また麻島昭一氏も消滅信託の研究の中で「諸欲の強い野心家²⁵⁾」で「積極かつ放漫な経営のためいろいろな批判のある証券業者²⁶⁾」の神田鍾蔵や増田信一などを含む日米信託の経営陣全般に対して「金融機関を堅実に運営していく能力と経験²⁷⁾を有する者は少なく、日米信託の暴走をコントロールできなかった」と判断し、「いずれものちに主宰事業が破綻する悲運を背負った人物²⁸⁾」との評を与えている。麻島氏のいう「多くの金融機関が尻込みする…敢えて人のやらない危険な金融に乗り出し²⁹⁾」た日米信託の積極、放漫、暴走、破綻の「悲運を背負った人物」たちは、用語は異なるものの著者の想定する「虚業家」的要素と相当に重複する領域があるように感じる。なお大阪の現物団・証券業者について早くから着目された森泰博氏は「晩年の藤本清兵衛は、もはや企業家とはいえない³⁰⁾」として藤本ビルブローカー退任後の藤本清兵衛の「虚業家」的行動には関心を払わない姿勢をとる。また小林和子氏も最近東洋精糖買占事件の主人公・横井英樹などについて論文を発表している。

3 「虚業家」「会社屋」等に関する研究

「虚業家」および比較的近い語感の「会社屋」等に関する研究史について概観を試みたい。まず「虚業」そのものに関しては水沼知一氏によれば「虚業」は当時『実業』の反対概念としてかなり広く通用³¹⁾したとされ、国家的事業と位置付けられた「実業」に対し「虚業」は『私』的利害のみを専ら関心事とする³²⁾と捉えられる。しかし背景にある経済思想により企業家と虚業家とを判別するとの水沼説は、渋沢栄一自身も当時において国益的事业とそれ以外との判別は困難だと断じたのと同様に無理があり、現時点で著者としてはむしろリスク選好度・リスク管理能力如何に求めるべきではないかと考えている。

その後、岩田龍子氏は主に昭和期の関係文献を利用して『虚業の研究』を刊行、「虚業」に関する唯一に近い単行本の研究書となっている。『中野金次郎伝』の著者の村田弘は中野金次郎と交流のあった“虎大尽”山本唯三郎について「日本虚業家列伝でも編纂されるようなことがあれば、彼など、さしずめその第一ページを飾る存在³³⁾と評しているが、『日本虚業家列伝』といった著作の存在は寡聞にして知らない。

「会社屋」という用語を使った論文としては菅野和太郎氏の前述「会社屋」という短編があるほか、「虚業家」、「会社屋」等という用語そのものに関して学術的な関心から遡及して検討した先行研究や文献は管見の限りでは数少ないように思われる。そこで「虚業家」という特定語を使用した研究ではないが、著者の目から観察して、多分に上記のような「虚業家」的要素をも兼ね備えた経営者の個別研究の例としてまず金子直吉を挙げておきたい。

金子直吉に関する先行研究は膨大なものがあるが、桂芳男氏は『関西系総合商社の原像』の補論に「鈴木商店と金子直吉の人間像」を収めている。桂氏は金子に対する「山師とかペテン師か…天才か狂人か」「事業魔とか借金魔」「世界一の借金王」「政商」などの世評を列举した上、彼の人間像を15項目に整理した結論として「事業の鬼³⁵⁾としての金子「直吉さんの旺盛過ぎる事業欲が、不況の深刻化とともに関連企業への膨大な投資資金の固定化を累積³⁶⁾」させたもの

の、真の姿は「卓越した独創的で革新的な企業家」³⁷⁾と高評価する。辻節雄氏も金子直吉に関して①独断専行、②経営の近代化を回避、③資金の固定化…柔軟さを欠く、④国益志向を盾とした拡張第一主義、⑤政商的などを鈴木破綻の要因として列挙している。³⁸⁾

浅野総一郎、金子直吉、久原房之助、茂木惣兵衛、野口遵などの企業家精神の旺盛な経営者に共通する原因は未経験者主導の組織にありがちな攻撃一方で守備を欠く、内部管理・リスク管理の不在にあった。三井をモデルとした古河、浅野などの二流財閥は商社、銀行への進出を果たしたものの、後始末に追われ一流財閥になれなかった。貿易、海運、造船、製鉄などの分野で大战ブームに便乗して貿易、銀行を含め多角化した藤田、久原、川崎=松方、鈴木、高田、渡辺、若尾などの中堅財閥・資産家も相場暴落で傘下事業に甚大な打撃を受け崩壊ないし衰退した。商社でも茂木商店を始め、古河商事、久原商事、湯浅貿易、渡辺商事、安部幸兵衛商店、増田貿易などの京浜所在の準総合商社・貿易商などが多数整理を発表し、震災後も高田商会などがこれに続いた。久原房之助の久原商事は新進学卒者を幹部に登用して世界中に商圏を急拡張したものの、現場の裁量に一任した暴走型商社の典型であると評価できる。20歳で茂木商店を継いだ三代茂木惣兵衛に関しては茂木合名を設立、1916年頃から貿易業務を拡張、茂木合名に製糸、呉服、地所、鉱業、商工、船舶、企業の各部を置いて多角経営を展開した。破綻時の総損失は1億円近くに達し、融資した銀行は約一割しか回収できず、茂木に必要な資金を供給したため同系七十四銀行も破綻した。³⁹⁾

前述した金子直吉（鈴木商店）の場合と同様に、浅野総一郎（浅野財閥）、久原房之助（久原鉱業）、茂木惣兵衛（茂木商店）などに代表される二流財閥・商社等の研究も、ある面では「虚業家」研究と重なり合う部分があると考えが、あまりに膨大なためにここでは言及を割愛する。ここでは数名の研究者の研究の中から、著者に「虚業家」的側面を感じさせた経営者の例を示すこととした。

まず大塩武氏による日窒コンツェルン創業者の野口遵の研究によれば、「野口の企業者活動は、決して場当りのなものではなく…企業家としての広い視野の

下に展開された⁴⁰⁾として通説の場当り的な経営説を否定される一方で、「野口の決断は通常想像しうる経営意思決定形成の論理の枠からはみ出したレベル⁴¹⁾」とも指摘されている。たとえば野口は水俣工場を建設するに際して「成功するかしないかはわからないが、生命をかけて努力してみる。もしいけなかったら、アメリカへでも逃げて、皿洗いでもして再び働く⁴²⁾」と親密なパートナーである市川誠次に巨大リスクに挑戦する不退転の決意のほどを告げたという。

また石井寛治氏は近江銀行に合併された旧東京銀行の分析過程で、不良債権となった大東鉱業、南日本製糖両社の創業に関わった「彗星的人物」山本久顕らの素乱経営ぶりに鑑み、「山本なる人物の正体が窺えよう⁴³⁾」と指摘した。そして同行頭取の前川太兵衛についても山本ら「危険の多い新規事業に乗り出した企業家に対する派手な融資に傾斜⁴⁴⁾」する性癖を鋭く摘出した。山本らは「番頭達の心痛をよそに各種企業に関係⁴⁵⁾」する田中四郎左衛門、大葉久吉らの「大口固定貸付先」ともども、その正体は（石井氏は使用されないが）著者の目には「虚業家」の人物とも解される。

また麻島昭一氏も極めて数多くの著作の中で当然ながら「虚業家」的な要素を有する問題経営者にも多く言及する。典型的な一例のみを挙げると、昭電疑獄事件の立役者である日野原節三（菅原通済の義弟）という「策士」とか、「ボロ会社たて直しの名人⁴⁶⁾」ともいわれた毀誉褒貶の定まらぬ人物の極めて特異な性向を GHQ 文書の「聴取書」等を駆使して実にリアルに描出した上で、結果的に肥料増産に貢献したとはいえ、「身体頑健、仕事が趣味のような日野原は…財界人としてのモラルや識見が不足し、いくら裏工作が当然視される環境でも、非常識な積極さであった⁴⁷⁾」と彼のすざまじいばかりの強引さを指摘する。麻島氏の指摘した独裁者・日野原の特徴は、以下本書で主人公としてとりあげる松島肇など著者の想定する「虚業家」像とも概ね一致するように思われる。

最後に著者も関心ある鉄道史研究の領域でも相当多数あるが、やはり一例のみを挙げれば西藤二郎氏は京都府、奈良県などの挫折した未成鉄道各社の発起人の悉皆調査や、困窮私鉄に多額の融資を敢行した中村準策などの金融業者の解明にも努めたが、その中で太田雪松という関係者から危険視され、当局から

も「鉄道ゴロ」と見做されるなど「逸脱的性格があった」⁴⁸⁾不可解な辣腕経営者に着目して資質分析を試みている。これは著者に「虚業家」という類型を想定させる契機ともなった先行研究であるので特に掲げておきたい。

このように大塩、石井、麻島、西藤らの各氏の特異な経営者等に関する研究のように、執筆者ご本人が意識して「虚業家」という言葉を使用されているわけではないが、おそらく「虚業家」という領域でも議論可能な企業家研究は上述した例以外にも多数存在するものと思われるが、ここではほんの一例を例示するにとどめたい。

既に著書・論文になったものに続き、関係学会での「虚業家」に関連する学会報告等を管見の限りで紹介すれば次の通りである。

共通論題としてはまず平成11年8月1日経営史学会関西西部会大会（於千里ライフサイエンスセンター）ではオルガナイザーの柴孝夫氏の問題提起により共通論題として「経営史における企業破綻」が取り上げられ、柴氏が「明治期の日本に於ける企業破綻の概観と原因論」、日夏嘉寿雄氏が「安宅産業の破綻」、佐藤英達氏が「藤田銀行の『収束』」、著者が「大地主系企業集団の分裂破綻と投機的経営者」をそれぞれ報告した。

平成15年11月9日の経営史学会第39回全国大会（於京都大学）で柴孝夫、橋川武郎、宇田川勝、四宮正親らの各氏によるパネル報告『経営史における「失敗」と「再生」』が開催され、著者も「事業の失敗と経営者の資質」を報告した。この宇田川氏らの共同研究の成果の中では生島淳氏はそごうのワンマン経営者である水島廣雄を事例に取り上げたり、久保文克氏も「大日本製糖の破綻と再生」⁴⁹⁾の中で藤山雷太登場の前提としての日糖旧重役陣の急進主義を取り上げるが、疑獄事件の主役・磯村音介、秋山一裕、伊藤茂七らは古くは山路愛山により「日本製糖会社旧重役の仕打を見るに是亦大仕掛にて虚声⁵⁰⁾を釣⁵¹⁾り、此虚声⁵¹⁾を以て世を欺き、上手に世を渡らんとしたるもの」「いかさま物」と評されるなど「虚業家」的色彩が濃厚な経営者の好例と考えられる。

平成16年8月2日経営史学会関西西部会大会・夏期シンポジウム（於大阪市立大学国際交流センター）での共通論題「企業家精神の発揚とリスク管理」では

著者もオルガナイザーとして問題提起を行った。企業家精神を発揮して企業を急速に成長させるとともに、経営の多角化等業務範囲も拡大させた経営者（たとえば二流財閥、中堅財閥等の創始者など）を彼の親密なパートナー（ナンバー2、いわゆる「女房役」等を含む）ともども日本、外国から何人かとりあげて、「企業家精神の発揮とリスク管理」がどのように併存し得たのか（安田・浅野、野村など成功の事例）、あるいは併存できなかったのか（川崎・松方など失敗・破綻等の事例）などを対比・検証してみたいと考え、関係する研究者に報告を依頼した次第である。

このシンポジウムでは西牟田祐二氏はグイムラー社にみるコーポレート・アイデンティティの危機とそれへの対応を報告した。佐藤英達氏は北浜銀行破綻の際に、日銀特融への保証を要求された藤田組の対応を中心にリスク管理の脆弱性を検討した。佐藤氏はすでに平成7年の論文の中で収益性志向の藤田伝三郎に対して「実業家というより、いわば『虚業家』の色彩がかなり強い⁵²⁾」と指摘するなど、「かなり早くから証券投資(投機?)⁵³⁾を行⁵³⁾って破局的な損失を被った「虚業家」的なパーソナリティにも着目している。

小早川洋一氏は浅野財閥の創始者・浅野総一郎を中心に、彼が企業家精神を発揮するのを支援・推進した渋沢栄一、安田善次郎らとの「企業家間における多面的な協力関係…双方向の関係⁵⁴⁾」すなわち“ネットワーク”の機能を検討した。浅野総一郎は彼の伝記で明らかかなように若い時、各種の投機的な泡沫会社⁵⁵⁾に手を出して失敗を重ね、「金貸お熊に追はれて、遂に江戸へ夜逃げ⁵⁵⁾」するなど、「失敗、失敗、又失敗で、世の人は『彼は惣一郎に非ず、損一郎だ』⁵⁶⁾」と嘲笑され、上京して「郷里の債鬼共を憚る偽名⁵⁷⁾」で幾多の商売を転々とした後半生でも「事業を企てるのが三度の飯よりも好きで、殆んど手当たり次第に仕事を始め⁵⁸⁾」、浅野昼夜銀行や炭鉱業など失敗例は少なくないなど、「七転び八起き的な曲折があった⁵⁹⁾」「徹頭徹尾事業家⁵⁹⁾」であった。斎藤憲氏は浅野の伝記を検討し、事業狂と呼ばれた彼の事業拡張欲を感じつつも「同じような人間は多数いた⁶⁰⁾」とされるが、著者は前半生などは明らかに「虚業家」的要素を兼ね備えた人物ではなかったかと推測している。後半生の浅野は小早川氏の主張されるように後見人

ともいうべき安田善次郎らのガバナンスがリスク回避上で有効に機能したのではなかろうか。

三島康雄氏は野村財閥の創業者・野村徳七兄弟の成功例と、川崎の創業者・川崎正蔵の場合の失敗例を対比させて、財閥化の条件としてのリスク管理を論じた。すでに三島氏は「私が最も熱中した作品⁶¹⁾」とする伝記『造船王川崎正蔵の生涯』の中で、川崎正蔵を「政商」から「革新的企業家⁶²⁾」へ転成したとするが、山本実彦は「余りに執着心に囚はれ」た結果、薩南の大谷鉾山で「意外の失策⁶³⁾」をしたとし、高木兼寛も主治医の立場から「失敗に失敗を重ねても活躍の手を緩めぬ」「一種の熱狂家⁶⁴⁾」と自己の患者を診断している。川崎に「造船王」の称号を呈した三島氏自身が意識的に、この種の企業家群を取り上げられたのか否かは別として、著者から見れば経済合理性を超越した「南洋狂」の野村徳七ともども、このような「狂」とまで呼ばれる異常性は三島氏自身が判定した「虚業家⁶⁵⁾」島徳蔵とも重複・共通する性向ではないかと考えている。したがって、ご本人は否定されるかも知れないが、三島氏の一連の研究を「虚業家」等の先行研究として掲げ、かつ報告をお願いした次第である。

4 「虚業家」研究の意義と今後の課題

同一条件での完全な再現による検証を必要とする自然科学の実験ではないため、当然ながら個別企業の失敗と成功の分析が100%客観的であるということはいえない。しかし現在の経営学ないし経営史学の主流が勝者（成功や発展）の分析に偏重しているのではと感じる者として、人間行動の実態に即して敗者（失敗や再生）の分析にもある程度の資源を配分するのが妥当であるとするものである。最近の宇田川勝氏らによる『失敗と再生の経営史』（有斐閣、平成17年）などはこうした失敗の研究の成果の一つであろう。

とくに企業のマイナス側面である失敗、衰退、破綻、再建等の領域研究においては、当該経営主体だけでなく、リスク要因を増幅させる利害関係者としてもしばしば登場する人物の類型の一つとしてたとえば「虚業家」といった特定の概念を利用することが分析、整理、知見の共有化に役立つのではなかろうか

という問題提起を行うとともに、十名余の「虚業家」の具体的例示を順次試みつつある。〔参考資料2〕(C)参照)

すなわちこれまでも多くの研究者によって個々に企業のマイナス側面の経営史研究、企業者史研究が蓄積されてきた。しかしこれまで個別業界ごとの経済史・経営史分野で仮に取り上げられたとしても、通常の資本家・投資家等との差異が大きく、ともすれば一律に“規格外”の「逸脱者」⁶⁷⁾「異常者」「破落戸」などとして、十分に経営者・企業者の研究対象に取り上げることなく、簡単に切り捨てられていたのではなかろうか。相場界のように、相場師研究が一応の市民権を得ている分野を別にすれば、著者が今回先行研究として〔参考資料2〕に取り上げたものは感受性の高い研究者により着目され、その資質・性向を分析、論述された極めて少数派の幸運児ということになろうか。

ただし三島氏や麻島氏などのように著者の目から見て、“立派に”「虚業家」の先行研究者である諸先輩方でさえも、恐らくご本人はその旨を言下に否定されるかも知れない。それはもっと別の視点から数多くの経営者・企業者を研究されている過程でのいわば副産物のひとつにすぎず、強く意識されるほどのことではなかったからであろう。

このように個別の研究者により、部分的には相当程度までに的確な分析までなされた個々の研究成果がかならずしも、学界の共通財産として我々後進者の即時利用な状態に整理されているとはかぎらない。そこで著者としては、それらの特異性格者のある部分はたとえば整理・集大成するツールとして、仮に(名称は問わず)「虚業家」というような特定のカテゴリーで、掘り上げれば、一元的に観察・分析・相互比較・体系化することが可能になるものと思われる。ここに著者のいう「虚業家」研究という新しい一つの学問エリアの設定により、リスク研究、破綻研究、衰退研究、失敗研究、…その他様々な名称で呼ばれつつある企業・経営活動のマイナス側面に着目した学問研究の領域(もちろん経営史学や企業者史学に限定することなく広く学際的領域として)に寄与する道がひかれるのではないかと考えている。これが現時点で著者なりに考えつつある「虚業家」研究の意義の一端である。少なくとも著者の所属機関では上記の

ような観点から大学内にリスク研究センターを設立し、「虚業家」研究をリスク用語で言い換えた「ハイリスク分野のリスク・テーカーの研究」等を含む金融破綻リスク研究等を推進中で、著者も同センターの一員として金融リスク、証券市場リスクその他の学内外の研究者との共同研究を行っている。⁶⁸⁾

そこで著者の一連の研究は「虚業家」ないし「虚業家」的要素を有すると推測される経営者、資本家、投資家等を、年代をこえ、全国レベルで可能な限り多数抽出して、相互に比較検討し、単なる仮説にとどまっている「虚業家」概念の段階的な精緻化を志向するものである。(本書は四国地方の事例をはじめてカバーした。)このような意義を認識しつつ、破綻研究から派生した著者らの「虚業家」研究はまだ緒についたばかりの初期段階にすぎず、広く関係学会等での認知はまだまだこれからの課題であるが、今後の展望としては次のようなことが考えられる。

株式仲買人、米穀仲買人等のいわゆる相場界で蓄積された「相場師」等の概念を、金融界全般に押し広げ、さらに鉱業界、⁶⁹⁾海運界、不動産業界などのハイ・リスク分野全般に順次拡張して、「山師」「地面師」など個々の名称を統合して、各業界に共通するハイ・リスク・テーカーとしての概念を再構築することであろう。そのためには当面は金融界など特定の限定された領域に閉じ籠ることなく、広くハイ・リスク分野全般で「虚業家」的要素を認められる人物を検出し、可能な限り数多くの事例研究を積み上げることが必要と考えている。

今回の本書もそうした典型的な(あるいは極端なというべきか)「虚業家」の事例研究を意図したものであり、こうした個別の事例研究の蓄積の成就如何では、可能ならばいづれ土屋喬雄氏が近代の「政商」に関する列伝を著された先例に倣って、村田弘氏が予言したような「日本虚業家列伝」などといったものを構想したいと念じている。

次に破綻や失敗を回避できた「虚業家」の条件を探る必要がある。「破綻経営者」の中にはハイリスクを選好し、リスク管理が甘い「虚業家」的体質を持つものが少なくないが、「虚業家」がそのまま「破綻経営者」を意味するものではない。個人の性向として「虚業家」的体質を色濃く有する人物ではあっても、

部下の補佐、大株主等のガバナンス機能の効果的発揮等の条件が具備すれば、起りうべき破綻や失敗を回避できる場合もあると思われるからである。しかし「破綻経営者」の中には部下によるチェック機能の発揮やガバナンスを回避すべく人選し、結果として自己に都合のよいタイプのいわゆる「ナンバー 2」を据える傾向が見られるのではないか。その結果、さらにリスクが増幅する作用が働くのではないかとの仮説が考えられよう。そこで「ナンバー 2」としてトップを補佐する人物の資質いかに探る必要がある。⁷¹⁾

今ひとつの課題は「虚業家」と似て非なる「再建型資本家」概念の深化である。この類型に属すると考えている根津嘉一郎、河崎助太郎をはじめ今後はさらに堤康次郎、原安三郎、谷口房藏、高倉藤平らの個別事例の収集・分析が必要となろう。「再建型資本家」はハイリスクの困窮ないし破綻企業等の再建に多く従事しながら、財を成すことができた特異な類型である。こうした再建型資本家は反骨精神が旺盛で地域の慣習、世評や時流に流されず独自路線を貫徹したユニークで存在で、⁷²⁾ 原安三郎に見られるようにリスク管理能力も抜群に優秀であったと考えられる。「再建型資本家」は主として「虚業家」タイプの経営者が破綻させた企業の再建に関わることを通じて資本を蓄積させていったものの仮説が導かれそうに思われる。「煽動者」=「高利金融業者」=「再建型資本家」という、ある種の連携プレーが機能すれば、最終的に「再建型資本家」による破綻企業の低廉な買収行為（いわゆる「ボロ買い」）が完結すると想像されるが、こうした図式に沿って全体像を提示できる事例の発掘はこれからの課題である。

- 1) 拙稿「大阪生命の生保乗取りと日本生命の対応—鴻池財閥から山口財閥への移動説の吟味—」『保険学雑誌』516号、昭和62年3月
- 2) 6) 「虚業家」という用語を使用した明治・大正期の文献については拙稿「企業家と虚業家」『企業家研究』第2号、企業家研究フォーラム、有斐閣、平成17年6月参照。
- 3) 九州生命取締役野守嘉猷による小山田信藏の評価（明治38年11月14日『保険銀行

時報』)と同郷の飯村丈三郎による小山田評

- 4) 昭和2年7月『実業之世界』24巻7号、P98
- 5) 拙稿「日本における金融危機・金融恐慌研究の方向と課題」『経営史学』第37巻4号、平成15年3月
- 7) 8) 土屋喬雄『日本の政商』、P21。なお赤松啓介氏は『神戸財界開拓者伝』の中で「虚業家」を「政治家が利権媒介屋に堕し、かれらを駆使することによって暴利を擷もうとする虚業家」(同書、P402)と「政商」に近い把握をしている。
- 9) 土屋前掲書、P27
- 10) 瀬川光行(四谷区新宿)は書籍出版、四谷区選出市会議員のほか、岩手鉱業監査役、最上採炭清算人②200株主など現実に鉱業分野でも活動した。
- 11) たとえば朝比奈知泉が編纂した『財界名士失敗談 上巻』は毎夕新聞社記者による財界名士の訪問記であり、『買占物語』の著者狩野雅郎は大阪朝日新聞経済部記者、『銀行罪惡史』の著者遠藤樓外樓は大阪朝日新聞記者、『株屋町五十年と算盤哲学』の著者佐藤善郎は大阪毎日新聞記者、東京日日新聞経済部副部長、『黄金の渦巻へ』の著者岡村周量(蒼天)は大阪毎夕新聞記者、『株式放資と売買術』の著者奥村千太郎は大阪朝日新聞の相場記者、戦後の『兜町盛衰記』の著者長谷川光太郎も報知新聞、萬朝報、国民新聞等の経済部長を歴任したといった具合である。また地方財界人を取り上げた著作でも、「会社屋」をも包含した『神戸権勢史』の著者本郷直彦は神戸の新聞記者であるなど、戦前期には当該分野の著作物は専門知識と当事者への面談に強味を持つ経済記者あるいは実務家の独壇場であったといっても過言ではなかろう。
- 12) 大阪の銀行問題研究会は月刊雑誌『銀行論叢』の出版元であるが、『内国為替実務』等の著書もある三重県出身の伊藤由三郎が主宰し、昭和11年には『銀行犯罪史 附予防法』を刊行している。(伊藤由三郎の事跡に関しては孫の村地博氏のご教示を得た。)
- 13) 宮本又次『大阪商人太平記』明治維新篇、創元社、昭和35年、P210、294
- 14) 15) 菅野和太郎「会社屋」
- 16) 三島康雄「島徳蔵と日魯漁業株式会社」
- 17) 『阪神電気鉄道八十年史』、P183～4。著者も島徳蔵に関しては『大和証券百年史』(P143～155)、『阪神電気鉄道百年史』(平成17年12月刊行)第3章において言及している。
- 18) 三島康雄『阪神財閥』、P61

- 19) 三島前掲書、P 91
- 20) 誠良「証券財閥」渋谷隆一・加藤隆・岡田和喜『地方財閥の展開と銀行』日本評論社、平成元年、P 495
- 21) 鶴見前掲書、P 496
- 22) 鶴見前掲書、P 498
- 23) 鶴見前掲書、P 504
- 24) 野田正穂「1920年代の担保付き社債」、P 11
- 25) 麻島昭一『本邦信託会社の史的研究』日本経済評論社、平成13年、P 326
- 26)27)28) 麻島前掲書、P 140
- 29) 麻島前掲書、P 148～9
- 30) 森泰博「大阪における証券業者の抬頭」作道洋太郎編『近代大阪の企業者活動』思文閣出版、平成9年、P 299
- 31) 水沼、昭和44年、P 165
- 32) 水沼、昭和44年、P 179
- 33) 村田弘『中野金次郎伝』、P 89
- 34) 『金子直吉伝』をはじめ本郷直彦『神戸権勢史』大正2年、池田成彬『財界回顧』昭和24年など多数。赤松啓介『神戸財界開拓者伝』P 640、桂芳男『関西系総合商社の原像』P 200以下の参考資料に詳しい。
- 35) 桂芳男『関西系総合商社の原像』P 287
- 36) 桂前掲書、P 274
- 37) 桂前掲書、P 285
- 38) 辻節雄『新版 関西系総合商社』晃洋書房、P 93
- 39) 石井寛治『日本流通史』
- 40) 大塩武『日窒コンツェルンの研究』日本経済評論社、平成元年、P 4
- 41) 大塩前掲書、P 71
- 42) 大塩前掲書、P 35
- 43)44) 石井寛治「近江銀行の救済と破綻」『地方金融史研究』31号、平成12年3月、P 6
- 45) 石井前掲稿、P 20。大葉久吉は本書P 114参照。
- 46) 菅原通済『瓢たんなまづ』昭和25年、P 81
- 47) 麻島昭一「戦後復興期における昭和電工の経営体制」、P 135～6
- 48) 西藤二郎「摂丹鉄道の計画と挫折」、P 179

- 49) 宇田川勝『失敗と再生の経営史』有斐閣、平成17年、P10以下
- 50) 山路愛山『現代富豪論』大正3年、P61～2
- 52) 佐藤英達「藤田伝三郎小伝(下)」、P111。同様の指摘は同「ビジネスリーダーとしての藤田傳三郎」P79にもある。
- 54) 小早川洋一「浅野総一郎と明治期における浅野セメントの考察」、P25
- 55) 北林惣吉『浅野総一郎伝』昭和5年、P3
- 57) 後藤武夫『財閥研究 第一輯』帝国興信所、昭和5年、P180
- 58) 前掲『財閥研究』、P208
- 59) 前掲『財閥研究』、P211～2
- 60) 斎藤憲『稼ぐに迫りつく貧乏なし—浅野総一郎と浅野財閥』P265
- 61) 三島康雄『造船王川崎正蔵の生涯』、P418。川崎正蔵、松方幸次郎らに関する文献・先行研究は巻末の参考文献に詳しい。
- 62) 三島前掲書、P190
- 63) 山本実彦『川崎正蔵』大正7年、P187
- 64) 山本前掲書、P120～1
- 65) 三島康雄「島徳蔵と日魯漁業株式会社」、P41
- 66) 拙著『企業破綻と金融破綻』、P513以下の仮説
- 67) 西藤前掲稿「摂丹鉄道の計画と挫折」は「逸脱の性格があった」挫折した人物に敢えて焦点をあてた先行研究として注目される。
- 68) 滋賀大学リスク研究センター『活動報告 No.1』平成17年8月
- 69) 著者による鉱業リスクの研究の端緒としては拙稿「証券業者による鉱山経営とリスク管理—八溝金山事件を中心として—」『彦根論叢』第354号、平成17年5月、同「鉱業投資とリスク管理(序説)—鉱業リスクの諸態様を中心として—」『彦根論叢』第355号、平成17年9月。
- 70) 著者による海外不動産リスクの研究の端緒としては拙稿「邦人向“海外不動産投資ファンド”の創始者のリスク選好—紐育土地建物社長・岡本米蔵の前半生—」『彦根論叢』第357号、平成18年2月、同「ハイリスクの海外不動産投資ファンドの内地販売戦略—大正期紐育土地建物会社のビジネス・モデルの虚構—」『彦根論叢』第358号、平成18年3月
- 71) たとえば浅沢栄一は金子直吉について「自分の力に過ぎた荷物を背負ふのも悪いが、周囲の人が居てそうさせるのも悪い。ああ言ふ人に申分の無い女房役が付いて居て、あの人の欠点を補って行ったら、実に天下無敵」(昭和2年7月『実業之

世界』24巻7号、P94)と批評した。この「いわゆるナンバー2」の資質問題もいずれ改めて論じたい。

- 72) 原安三郎に関しては平成15年11月9日の経営史学会第39回全国大会（於京都大学）で柴孝夫、橘川武郎、宇田川勝、四宮正親らの各氏とパネル報告『経営史における「失敗」と「再生」』を主宰し、著者も「事業の失敗と経営者の資質」を報告した中で、「再建型資本家」原安三郎に言及した。いずれ改めて論じたい。

第1章 大正バブル期の新興企業と松島肇

日本銀行調査局編纂の『本邦財界動揺史』は大正6年以降の企業熱の勃興について「企業熱ハ空前ノ勃興ヲ来シ計画資本ハ巨額ニ上リシト雖モ、其大部分ハ単ニ紙上ノ計画ニ止マリ、水泡ノ如ク消滅スルノ運命ニアリ…企業熱沸騰ノ結果無成算ナル新設会社ノ濫興ヲ語ルニ外ナラス」¹⁾「各種企業計画ハ多クハ一時ノ熱狂的氣勢ニ驅ラレテ簇生セルモノニシテ、其目論見ハ頗ル杜撰何等成算ナクシテ、単ニ既存ノ有利事業ヲ模倣シ、或ハプレミアム権利株ヲ得ル目的ヲ以テ計画セラレシモノ」²⁾と述べている。大正8年3月日銀総裁に就任した井上準之助は12月3日の演説で「昔日ノ如ク銀行ノ主腦者カ自ラ進ンテ新会社ノ發起人トナリ新株ノ募集ニ努ムル様ナ向ハ近頃余リ見受ケマセヌカ…銀行業者ハ如何ハシキ会社ノ發起人ナトニ名義ヲ用キラルルコトハ絶対ニ謝絶スルヤウニ願ヒタイ」³⁾と銀行家に警告した。しかし井上総裁の演説にもかかわらず、現実には盛んに「如何ハシキ会社ノ發起人」となった銀行主腦者が少なからず存在した。『本邦財界動揺史』も「銀行重役カ他ノ事業ニ直接ノ関係ヲ有シ、又ハ自ラ投機ヲ行ヒ、自然銀行ヲシテ此等重役ノ投機又ハ事業ノ金融機関タラシムル」⁴⁾など「銀行経営上戦慄スヘキ事態」の横行を指摘している。『本邦財界動揺史』第三編第二章は一私人の破綻に特に一節を割き、第十一節「石井定七ノ破綻」を設けて、「甚シク銀行業者ヲ脅カシ財界不安ノ念ヲ助長セシメタル」⁵⁾石井定七事件の概要を叙述している。

本書では大正バブルの象徴・石井定七ほど悪名高い存在ではないが、「如何ハシキ会社ノ發起人」となった銀行主腦者の典型例として松島肇という現在ではほとんど無名に近い人物を取り上げたい。大正6年9月ある信用調査機関は日刊の機関紙上で加盟会員に対して次のような「会社熱勃興に対する警告」を発した。「時局発生以来、本邦事業界の振興は真に驚異に値するもの有之、新設会社の勃興、既設会社の拡張等…然るに所謂会社屋連、虚業家連の暗中飛躍も亦之を機として随所に起り、不真面目極れる計画を樹てて之を誇大に吹聴し以て

投資家を誘惑せんとする者不尠」(T 6.9.7内報)

そして同機関紙は上記警告の具体例として大正7年10月23日には特定顧客向けの秘密情報である『特報』の一部を摘採する形で「松島肇氏と昌栄貯蓄銀行」なる「財界廓清の血祭りとして虚業家松島氏を弾劾する」(松島)特集記事を一面に掲げた。

また『ダイヤモンド』誌は反動恐慌直後の大正9年5月に「新会社解散号」という特集を組んだが、その中で東亜証券商品信託、岡本洋行、国際信託、中華商事、大阪現株取引、阪神住宅土地、門司築港(第3章)、大連郊外土地、帝国キネマ演芸、*熱海宝塚土地(第8章)など多数の新設会社を具体的に列挙し、「此他百万円以上五百万円程度のものは一々挙ぐるに堪へない程ある…一見して所謂会社屋の目論見に非ざるかを思はしむるもの決して少くは無い」(T 9.5.11D)として、「所謂会社屋」の暗躍に着目している。そして結論として「最も戒めざるべからざるは事業の濫興である。企業家殊に所謂会社屋と称する徒輩は事業の計画に際し不当の利益を獲得し、又は権利株の売買を目的とする者少くない。財界繁栄の末期に際し泡沫会社の踵を接して蜂起する所以実に茲に在る」(T 9.5.11D)として、いち早く「新会社解散せよ」と主張した。

『ダイヤモンド』誌上で「所謂会社屋の目論見」として列挙された門司築港は序章で述べたように「会社屋」としても定評ある島徳蔵⁶⁾という人物の目論見であった。その門司築港事件で島徳蔵らが結局のところ「ある策士にかつがれ…海へカネを捨てた⁷⁾」とされ、その「策士」が、同じく列挙された中の熱海宝塚土地を目論んだ「会社魔」と称された松島肇という本書の主人公であった。

大正末期から昭和初期には新聞記事等で「○○魔」という称号が多く使用され、例えば金子直吉を「事業魔⁸⁾」、高柳淳之助を「貯金魔」、疑獄事件の津下某を「印紙魔」(T10.6.5東日)等と呼びならした。「会社魔」という称号の意味を「会社屋⁹⁾」の中の「会社屋」、通常を遙かに超越したスーパー「会社屋」という意味だと解すると、三島康雄氏によって「不世出の虚業家¹⁰⁾」と評された上記門司築港のプロモーター・島徳蔵を出し抜いた松島肇に献上された類稀な称号としての位置付けが理解出来る。帝国興信所は松島肇を「自から

財界の花形を気取り、大戦勃発以来企業熱旺盛の機運に乗じて新設会社の重役たり若くは発起人たる事無慮数十社、三面六臂を有するも尚及ばざるかの観あり」(松島)と評した。

『実業之日本』誌が大正11年に調査した「日本重役肩書数番付」¹¹⁾によれば松島のダミーの一人にすぎない実弟・西条教部(徳島)の兼務会社数は19の「前頭」で、仙台の藤崎三郎助、福島の吉野周太郎、静岡の*芹沢多根、豊橋の高橋小十郎、福岡の太田清蔵らと同格、兼務会社数18の島徳蔵、福沢桃介、藤山雷太、星野錫、伊藤長次郎¹²⁾らの有名財界人の水準を上回っていた。松島は名前だけの「並び大名」の関与はすくなく、表面上は相談役名義でも実は実質的な発起者である場合もあった。もし単に発起会社数のみで、起業家の起業意欲を評価するなら、松島は多数会社の発起に関わった起業家として並外れた起業家精神の持主であると評価できよう。今日の日本では失敗しても何度も繰り返し、起業に挑戦するというようなベンチャー精神が必要とされ、大学教師にさえも起業実績が数値目標化されつつある昨今、典型的な起業家としての松島の事例を掘り起こす反面教師の意味もあろう。

本書では次のような課題や疑問に応えようと考えている。

- ①日本有数の起業家たる松島はなぜ短期間にこれほど多数の会社の発起に関わることができたのか。
- ②彼の特異な起業能力の秘訣はなにか。
- ③どうして数万人もの多くの投資家を巻き込むことが可能となったのか。
- ④異常な起業の背後に隠された虚構のメカニズム。
- ⑤機関銀行と目される昌栄貯蓄銀行の果たした役割は何か。

さらに彼の過去の経歴、宗教家としての修行を積んだこと、保険会社で代理店の督励を業務としたことなどと関係があるのかどうか…などを解明しようと試みた。(⑤以下については本書では一部の指摘のみにとどめた。)

上記の『ダイヤモンド』誌は大戦景気の時期に「新事業評」欄を特設して、多くは辛口の評価を下した。『ダイヤモンド』の「記者は強ち一々此等新企業を攻撃するの意ではないが」(T 8.11.1 D)と断りつつも「近頃新企業の発表さ

れるもの…何れも五十歩百歩で、堅実と認むべきものは極めて寥寥、その多くは唯だ唯だ応募を盛んにし、権利価格を釣り上げ、其間に利益を占めやうとするもののみ」(T 8.11.1 D)との概して批判的ないし否定的な立場を採っていた。例えば証券交換所を取り上げた「新事業評」欄では「此会社の筋書は一種の策士として知られて居る松谷天一坊が之を作り」(T 8.11.1 D)と見抜いて、「証券交換所に至っては疑問中の疑問で、此会社の経営者が松谷天一と云ふだけでも先づ疑問を一つ付ける価値がある」(T 8.11.21 D)と、新会社の筋書を書く人物の資質にも注目した。『ダイヤモンド』誌の「放言子」は「新会社製造法」なるコラムで、「経済相場の記者には証拠金不用の発起株を分配すべし、左すれば…此株の煽りに畢生の筆力を揮ふべきは当然の事なりとす。新聞社の幹部が斯る〈提灯〉記事に対して多少の顰蹙を催す事あらんも、之なくしては大広告の依頼来らざるべしとの一言能く其幹部を閉口せしむべし」(T 8.10.21 D)と、新会社株の公募広告で潤う大新聞社には提灯記事の続出が不可避であるとの新聞社の台所事情を皮肉っている。

大正11年「昨今経済界の不況から各種の泡沫会社と覚しきものが種々あって警視庁に向っても様々な投書や嘆願書が来て居る」(T12. 1.25法律新聞)が、その内容は「株金の払込を強請する等、株主も困って居て、株主から此れを会社に抗議すると法文に依って払込を要するとて不遜の態度をとる」(T12. 1.25法律)といった苦情であった。

『ダイヤモンド』誌の大正9年5月「新会社解散号」特集の中で主筆の「白頭若人」は「今回の泡沫会社には其中心に財界の有力者が多い。従って責任觀念も薄く、又名誉心も薄い。昨日出来た会社を今日直ちに解散して左程恥辱を感じぬ」「今日迄泡沫会社の重役で巨利を占めた者あるを聞かない。全く骨折損の草臥れ儲けである。従って泡沫会社の重役も株主も毫も其会社に未練がなく、何時でも解散を断行し得る」(T 9. 5.11 D)はずなので解散させれば問題が解決するものと単純に解していた。しかしさすがの『ダイヤモンド』誌も大正9年5月の段階では「泡沫会社の重役」が仮りに解散しても「骨折損」にならず「巨利を占める」収奪のメカニズム、なぜ彼らが自ら進んで解散を断行するか

の真意を看破することまではできなかったのである。

大正12年8月8日の『法律新聞』に長崎の弁護士斉藤巖は「いかさま会社の法鎖を整正し、関係者の權益を保護する」(T12.8.8法律)観点から「株金を払込まざる株式引受人も他のものと等しく権利を行使することを得るや」との極めて実務的な論説を発表した。斉藤弁護士が問題提起した「いかさま会社」の「横着なる発起人」の悪辣極まりない解散の実態はつぎのように「一流経済誌」主筆の理解を超えるほど極めて深刻なものであった。

「他人の氏名を冒用し、其印鑑を偽造して発起引受書を作製し、恰も真実の発起人の如く言ひ做して株式を募集し株金を集め、自分等は一文の払込もなさずして他の払込金の殆んど半分は創立費として着服しながら、創立総会を開きて全部払込のあるが如く欺罔し、裁判所に発起申請して其受理を得、会社の成立を公唱して取引し、同腹者のみ集って解散を決議し、多額の報酬を約して同腹の清算人を選任し…会社は事業不能の爲め支出したる金員を損失す、其損失は…創立総会に於て選任せられたる重役に於て賠償せざるべからずと、欺まされて株主となり、煽てられて重役となりたるお百姓、金は取られて取戻すこと能はず、更に一万円の損害賠償を吹っ懸けられて、青息を吐いて居る」(T12.8.8法律)

大正12年8月17日の『徳島毎日新聞』紙上で徳島地裁の平井検事正は*関西木工という「只今取調中の会社」(T12.8.17徳毎)を念頭に置きつつ、「会社ゴロが…失権株を取得して会社を食ひ物にする弊害」(T.12.8.17徳毎)を次のように社会全体に警告した。「会社ゴロと云ふやうな者が跋扈して会社を食ひ荒らし居る…ゴロの遣り方を観るに…先づ悲況会社を見付け出し、有資力の株主のある会社を見出し、これを乗取らんとするものである…過半数を取込んで了ふ。そして株主総会を開くと称し…会社を食ひ物にするに尤も便宜な方法に…定款の変更を為したる後、株券に対して二回三回の払込を請求し…払込として取立てた大金は何等会社の整理も為さず、自分の家族名義で銀行へ預金」(T12.8.17徳毎)する手口を細かく解説した。

また東京の弁護士中野義定も大正15年1月10日の『法律新聞』に「重役の抱

株不許可と少数株主の保護」と題する談話を発表した。中野弁護士は「幽霊会社、泡沫会社と称せらるるもの等基礎極めて不安全なる会社続々として起り」(T15. 1. 10法律)、「近年商事会社創立總會又は株主總會で発表した発起人若は取締役が引受くる株数は、大概有名無実の抱株にて、現実の株金は、之を発起人若は取締役以外の人より払込ましむるを以て、其不足資金調達のため敢て無理なる工夫を為し、甚しきは則ち高利貸から流用して其不正を蔽ふもの尠しとしない」(T15. 1. 10法律)と語った。そして「少数株主は多数株主の犠牲者たる観がある」(T15. 1. 10法律)として、「発起人、取締役の責任を厳定し、大に当事者を保護」(T15. 1. 10法律)すべきことを強調した。

斉藤、中野両弁護士の挙げた「幽霊会社、泡沫会社と称せらるる」(T15. 1. 10法律)「斯様な事例」(T12. 8. 8 法律)には、相当程度までに松島肇の関与した関係企業に酷似するパターンがあるように感じられる。「幽霊会社」の定義として商学士の池島民理は「形式丈けは立派に出来て居るが、内実一厘の資本無き会社である、換言すれば全資本を幽霊株にして居るものである。今其貸借対照表を見ると、財産は貸し金、預け金、仮出金等の科目を以て全部社外に出て居る、其借手、預り手は、実は株主であるのだ¹⁴⁾」とする。池島のいう「幽霊会社」のメルクマールとしては①特定の個人・法人が、②「金融ノ目的」など特定の目的に限定して設立するも、③名分とした「設立目的ニ副フ事業ヲ…遂行セ」ず、④「重役ハ全部…縁故ノモノ」を充て、⑤一味の機関「銀行ニ払込ミ同時ニ同行ヨリ同額ヲ借入レ」という実質「空株」で、⑥「獲得セル株式ヲ担保」として借入れ、⑦「保証」機関としても活用するという虚構のビジネス・モデルである。

『東京朝日新聞』も大正14年に連載した「経営百態」シリーズで「不正金融業」を取り上げ、「違法行為を敢てするばかりか、大なる背徳行為に依って、多数善男善女の生血を吸ひ、巨万の富を得、又は他人の資産を我物顔にふるまひ、各種事業に手を出し、地位名望を得んとし、又蓄妾、放蕩の贅沢三昧に世を送りつつある¹⁵⁾」と警告を発した。『東京経済雑誌』も「調査もせず、新聞広告を見て儲かりさうな新会社の株式募集に乗って喜」ぶ地方人から、「棚から牡丹餅式

の甘言尽しを並べ立てて、シコタマ吸ひ取った」¹⁶⁾「地方人を食った事業屋」を非難した。

こうした当時の弁護士やマスコミらが告発したような「横着なる発起人」・「多数株主」・「事業屋」・「不正金融業者」・「会社ゴロ」が、「欺まされて株主となり、煽てられて重役となりたるお百姓」・「少数株主」・「地方人」・「善男善女」をいかに欺罔・収奪したのかという構図は大正期に限定されるものではなく、我々も今日22万人もの多数零細株主を泣かせた市場原理主義者による株主リスク啓蒙の芝居を見せられているのである。本書では以下の各章において、冒頭に挙げた「会社魔」松島肇と「同腹者」らが関与した数々の「幽霊会社、泡沫会社」の実例を挙げて、現時点までに入手し得た断片的な材料を駆使して、可能な限り具体的な解析を試みるものである。これによって現代社会にも出沒する「虚業家」の実態を少しでも解明することに役立つものと考えからである。

なお本書の執筆にあたって、麻島昭一氏には全般にわたって懇篤なるご教示を賜ったほか、地方金融史研究会の合宿で一部分を報告した際に石井寛治氏をはじめ会員各位から数多くの有益なご指摘を頂戴した。また門司築港に関して畠中茂朗氏から、養神亭に関して加藤亮太郎氏からご親切なお教えを賜ったほか、お名前は割愛させて頂いたが多数の方々や機関から資料面で多くのご教示・ご配慮を頂戴した。いずれも厚く御礼申し上げたい。

- 1) 2) 3) 4) 5) 日本銀行調査局『本邦財界動揺史』『日本金融史資料 明治大正編』第22巻、P465～6、532、488、548、702～所収
- 6) 島徳蔵については、とりあえず『大和証券百年史』（平成15年5月、第六章）および『阪神電気鉄道百年史』（平成17年12月、第三章）の著者執筆部分を参照のこと。
- 7) 松永定一『北浜盛衰記』昭和34年、P187
- 8) 昭和2年7月『実業之世界』24巻7号、P99
- 9) 「会社屋」については拙稿「企業家と虚業家」『企業家研究』第2号、企業家研究フォーラム、平成17年6月、P62以下参照
- 10) 三島康雄「島徳蔵と日魯漁業株式会社」『漁業経済研究』13巻4号、1965年4月、

p22、41

- 11) 大正12年1月15日『実業之日本』、p80
- 12) 伊藤長次郎は拙著『地方企業集団の財務破綻と投機的経営者—大正期「播州長者」分家の暴走と金融構造の病弊—』平成12年2月、滋賀大学経済学部研究叢書第32号、p1以下
- 13) 「会社ゴロ」は一般には「活劇党」「会社荒し」「総会荒し」などとともに「総会屋」の類語と考えられるが（前掲拙稿「企業家と虚業家」、p62）、大正8年『株式会社の裏面』の著者・池島民理は「活劇党一名総会屋」の「前身は会社荒し…会社ゴロとも謂ふ」（池島民理『株式会社の裏面』大正8年、p38～9）と旧称としている。
- 14) 池島民理『株式会社の裏面』精禾堂、大正8年、p111
- 15) 東京朝日新聞編『経営百態』大正15年、p82
- 16) 「地方人を食った事業屋」大正9年2月20日『東京経済雑誌』

第2章 松島肇の経歴

1 松島肇の略歴

松島肇は明治14年5月15日「徳島県阿波郡の真宗坊主のむすこ」¹⁾に生れ、「京都普通学寮を出て」²⁾、「明治二十八年京都市で僧侶生活を振出しに…元丸山名政³⁾氏の書生」⁴⁾を経て、明治34年明治大学⁵⁾法科で法学を学び、37年卒業と同時に生徒監督の任に当たった。(彼の詳しい年表は巻末〔表—2〕参照)

徳島新聞社編『徳島県百科事典』では「卒業後は経済・国法兩科を専攻して高等研究科に学び」⁶⁾とあるが、本人申告資料に基く『衆議院要覧』では「明治大学法科、早稲田大学政治科修業」⁷⁾とある。大阪の夕刊紙・大阪今日新聞⁸⁾連載の「栄華物語—松島肇」(以下単に「栄華物語」)は「松島は元某保険会社の勧誘員から身を起した」(T13.12.21徳毎)とするが、事実は異なり、明治39年共同火災保険の創立時に入社し、営業主任にまでなった後、姉妹会社の共同生命に転じて主事外務課長に就任するなど幹部候補生の一人であった。当時の業界紙は「松島肇氏は同社創業以来其の独特の敏腕を揮ひ常に同社の重鎮として人の耳目を惹きつつありたるのみならず、実に我火災保険界の瑚器として其の名声を博しつつありたる人」(T2.10.27保銀)と激賞している。

大正2年5月共同火災の重役陣が国民生命を買収し、頼鷹⁹⁾二郎社長を除く、豊田実顕、松坂昭二(竹原銀行取締役)ら旧重役が辞任、共同火災の姉妹会社として大正2年6月本店を東京市京橋区の共同火災の旧営業所内に移転(T2.7.1中外)、社名も「共同火災の弟分たる関係より共同生命保険株式会社と称するに至り」¹⁰⁾、資本金も50万円に増資した。留任した頼鷹二郎に加え、共同火災専務の村上定¹¹⁾をはじめ、岩崎一¹²⁾、田辺壮吉、渡辺義一¹³⁾が取締役、岩崎清七、伊藤保平、安富衆輔が監査役に就任、内国貯金銀行＝日本徴兵＝東京信託＝玉電の資本系統¹⁴⁾に連なるメンバーで重役陣をしめた。

松島も大正2年10月中旬「共同火災の姉妹会社と為りたる共同生命が宛も創

業にも等しき状態にて、其の経営上殊に幹部に有力者を要する事情より今回新に共同生命に入り、重要な外務主任の椅子に憑ることとなり」(T 2 .10.27保銀)、主事外務課長に就任した。

火災保険には通じていたものの「未だ生命保険の外務に経験なき」(T 2 .11.13保銀) 松島は「其の任を辱しめざらんことを思ひ…他の将卒と伍し陣頭に立て奮闘を試み」(T 2 .11.13保銀)、生保募集の実績で10余日で保険金額5.3万円という「斯界に新レコードを作」(T 2 .11.13保銀)った。「栄華物語」が「松島程保険勧誘の上手なものはなかったと言はれた」(T13.12.21徳毎)とするのは、後年松島自身が折にふれて共同生命外務課長時代の優績の自慢話でもしたことによるものであろう。松島は「尚ほ一二回の募集を試みたる後、専ら課長の事務に就き機を見て地方に出動し募集上の督励に怠らざる意嚮」(T 2 .11.13保銀)と報道された。しかし、わずか1～2カ月の在任の直後「外務課長に就きて敏腕を揮ひ共同生命発展の氣勢を昂上せしめつつありたる松島肇氏は今回都合に依り同社を辞することとなり」(T 3 . 1 .27保銀)、松島の後任の外務課長には大島豊三郎が就任した。(T 3 . 1 . 1 保銀広告)

地元徳島県における一般的な評価では松島肇の勤務歴の記述を、わずか2カ月のみ在籍しただけの「大正二年十月共同生命に転じ¹⁵⁾」、「大正2年共同生命に転じ、主事外務課長として才腕をふるった¹⁶⁾」までで止め、それ以降は一言も言及しない傾向が見られる。これらは原典の『阿波人物鑑』に依拠したとはいえ、結果的に松島の本領を発揮した後半生を全面的に隠蔽する結果となっている。

大正2年12月12日松島の転職先となる帝国済美独立資金¹⁷⁾が資本金50万円(払込12.5万円)で東京市京橋区日吉町12番地に設立された。同社の目的は「壯年男女ノ独立自営ヲ奨励シ、及老年衰境ノ生活ヲ容易ナラシメンカ為メ、広ク会員ヲ募集シ、一定ノ年限間、資金ヲ寄託セシメ、之カ利殖ヲ図リ、年限後其会員ニ、版權登録第三〇四号独立及済美資金預託割戻計算法ニ依リ所定ノ金額ヲ払戻スコトヲ目的トス。但会員間ニ低利資金貸付事業ヲ営ムコトアルヘシ¹⁸⁾」であった。同社は「社会政策に最熱心なる」(T 3 . 2 . 6 保銀) 伯爵板垣退助を顧問に戴き、会長に伯爵中川久任(T 3 . 2 . 6 保銀)、取締役¹⁸⁾に長森藤吉郎、角

谷和市、木青松珍麿、佐川勝造、監査役中根正三郎、津久井平八が就任した。¹⁹⁾

こうした体制の下に大正3年1月30日帝国済美独立資金憐が開業した。同社は「壮年男女をして容易に自営せしむる独立資金、老年衰境に至り生活を安全ならしむる済美資金を信託する会員組織」(T3.2.6保銀広告)を標榜した。同社の『営業案内』は「社会政策実施方法の一大福音にして日本に於ける創始の事業なり」「本社の業務は長命をした者が最も多くの利益を得るといふ信託積金の法で…積金は一口一円…満七十歳に至って一千二百九十円と云ふ巨額の金を受取る事が出来る」(T3.2.6保銀)ことを謳っていた。共同生命を離れた松島は同社の主宰者から総支配人に招致され、「積立金に対する払戻金の計算方法は松島氏等の新発明に成り版權を登録」(T3.2.6保銀)するなど「縦横の敏腕を揮ふ」²⁰⁾はずのところ、ビジネス・モデルが不完全であったのか大正3年同社解散で失職を余儀なくされた。失職前後の大正3年4月時点の信用調査では松島は牛込区南町13、会社員、正味身代「未詳」、収入「未詳」、信用の程度「普通」、所得税「空欄」²¹⁾の判定であった。松島はこの時期「一時閑散の地位に在」(T3.12.6保銀)り、「忽然として其姿を数寄屋橋畔に消し、爾来半歳杳として其消息を知るものなし」²²⁾という窮境にあった。

しかしこのあとの松島の経歴は巻末の〔表一2〕の通り、表面上は極めて順調な進展を見せる。すなわち大正5年時点では牛込区南町、昌栄貯蓄銀行取締役、日本資金信託取締役(帝要、T5職P191)であった。大正6年時点では「徳島県選出、新政会所属、平民、銀行重役…現ニ*昌栄貯蓄銀行頭取、*第一倉庫株式会社社長タリ」²³⁾、*常盤商工、*日本資金信託各代表取締役、*日本絹硝子、*大阪計器製作所、*西舞子企業、*摂津煉瓦、*安全印刷、*大日本蚕種、*東洋調帯各取締役(人、T7、まP69)*昌栄貯蓄銀行専務、明治大学評議員を兼ねる代議士²⁴⁾であった。

松島は「百個会社の重役就任」(T7.10.23内報)を期待して、「最近創立計画を発表せる新設会社に対して氏は常に発起人たることを承諾し、会社設立登記に要する払込株金の証明書作製の報酬として重役の椅子を占め」(T7.10.23内報)たため、すでに大正7年10月時点で「大戦勃発以来企業熱旺盛の機運に

乗じて新設会社の重役たり若くは発起人たる事無慮数十社」(T 7.10.23内報)といわれ、「松島氏関係の会社は東京、大阪、山陰、中国、四国、九州に亘り約三十八会社であって、総資本金一億円に達する」(T 9.11.30東朝)とされた。判明した関与企業は巻末の〔表-3〕以下の通りである。そして「彼の有名な松島肇…が幾多の会社を発起し、或は紡績会社に、或は炭砒会社に、或は土地会社に、船渠事業に、殆んど八面六臂の活躍をした²⁶⁾」と喧伝された。松島が自ら買収し社長に就任した『徳島日日新報』は、紙面で自社の松島社長のことを「快男子」「快傑」(徳島市史、P 420)、「機才俊敏、画策縦横、手腕亦快捷にして其事を成す疾風の如く…斯界の一異彩…剛猛果断の勇²⁵⁾」などと盛んに称賛した。

しかし、反面では重要企業の株式を300株以上所有する投資家のリストである『全国株主要覧』(大正9年版)に該当なく、堅実な投資銘柄には縁遠い人物と考えられる。

2 松島肇の資産形成

こうして松島は「曖昧なる数十の会社に依って得る…年収入は十五万三千余円に上る²⁷⁾」結果、「従って巨万の富を蓄積したりと称せらる」(T 9.3.14大朝)に至った。松島の具体的な個人財産としてはまず牛込区南町に「御殿風の堂々たる建築物であり、その庭園の美しさは何人も羨望する²⁸⁾」ほどの豪邸を構えた(T 11.3.16徳毎)ほか、郷里・徳島市「寺島町なる松島社長別邸」(T 10.4.10徳日)すなわち滝跳橋畔の「旧蜂須賀侯の邸宅跡を買収して、宏壮なる別荘」(栄華物語)を所有、日頃は実弟の西条教部に住ませた。「個人として資金を投じ」(T 10.4.14徳日)、徳島日日新報社の本社隣地500坪を購入して大正10年4月13日登記したほか、徳島駅前用地、徳島市秋田町(繁華街)の著名な劇場である新富座、稲荷座なども所有していた。松島自身の申告によれば「一時資産は土地家屋動産を合して約五百十三万円あった³¹⁾」という。

このほか徳日が「怪傑」「怪男子」と称して推戴した通り、「彼れは確に一種の英雄的性格を備へ」(T 13.12.22徳毎)でいたため、以下のような英雄的伝説

が流布されている。「栄華物語」は「当時彼れは…至る所の料亭に豪遊して松島の御前と称せられて大得意となり、現金を座敷に蒔き散らして、女共に拾はしたり、豪奢一世を驚かして居た」(T13.12.21徳毎)とする。松島所有の「沼津別荘」は実弟の西条教部が大正13年7月24日死亡した場所(T11.9.6徳毎)であり、「栄華物語」によれば松島には大阪にも別宅があったとされ「紅葉館の女中頭戸田ノブをして熱海翠光園を経営せしむるを初め、各所に愛妾を蓄へ」(T11.3.16徳毎)、「熱海には翠光園、逗子には養神亭³³⁾、沼津には三島館等の立派な別荘や旅館を持って居て…故桂公の愛妾お鯉も³⁴⁾、やはり彼れの妾になって居たとの噂³²⁾」とされた。これら物件のうち例えば逗子の鑑摺(あぶずり)にある「養神亭」は明治22年開業の「同地第一の旅館」(T8.11.18内報①)で、大正7年の来客人員1.8万人、一日平均29人(T8.11.18内報①)、「三崎街道に進めて軍見山に登らんとする路の左側に一宏楼在り、之が日陰茶屋と称ふる旅館で、松島肇氏の経営せる養神亭と対峙する旅亭³⁵⁾」と、逗子の名勝の一つとして紹介された「旧くより天下に知られた」旅館である。一方の日陰茶屋は大杉栄が原稿を書くという名目で逗留したことから「日陰茶屋事件³⁷⁾」の現場としても有名な葉山町堀内の旅館で館主は角田庄右衛門であった。

逗子の老舗旅館・養神亭(新宿原252番地)は大正8年11月「継承し之を基礎とする」(T8.11.18内報①)湘南ホテル(資本金200万円)の設立が桂公の女婿・長島弘らの主唱で企画され、「目下発起人の糾合中」(T8.11.18内報①)と報じられた。大正14年夏の段階で荒木弁護士は養神亭を「松島肇氏の経営³⁹⁾」と記している。大正15年12月末には逗子の養神亭は大臣の合宿所に充られ(T15.12.30法律)、片岡蔵相、幣原外相、岡田文相ら「若槻内閣の全大臣此処に宿泊して、大正天皇に奉仕せるより、益々世に現はれたり⁴⁰⁾」と名声を高めた。この養神亭の経営者の*中川豊は大正13年6月30日*伊豆山偕楽園代表取締役⁴¹⁾に就任⁴²⁾、大正15年時点では株式会社*熱海偕楽園代表取締役(要録、T15P20)であり、大正13年時点では松島肇と同住所(牛込区南町)であり、何らかの個人的接点の存在が推測される。

3 実弟の西条教部

西条教部<さいじょう・きょうぶ>は明治18年6月「松島肇氏の次弟」(T9.3.15読売)として生れ、西条家の養子となった。西条は巻末の〔表一3〕〔表一4〕の通り*昌栄貯蓄銀行取締役(要録T9役下、p93)、*九州炭砒、*糸崎船渠各取締役(要録T9役下、p93)、*第一倉庫(要録T9徳島、p4)、*日洋土地興業、*東亜フェルト、*龍山石灰(T11.3.20徳毎)各取締役、*唐津炭砒監査役(要録T11、p128)、*徳島日日新報社取締役(T11.9.6徳毎)などを兼務した。

糸崎船渠事件発生した際、肝付兼行社長は重要事項を「松島肇氏の次弟西条教部外一二氏と会見、善後策の打合せをなし」(T9.3.15読売)、九州炭砒の紛議の際には大正9年8月1日大阪で総会を開き、「別室に於て重役と前記調査委員及び松島氏の意を受けて来阪せる同氏実弟西条教部氏との間に種々折衝を重ね、略右の条件に近き程度迄の打合を得た」(T9.8.2読売)とされた。このように折にふれて「松島氏の意を受け」た西条は、松島の分身として、腹心中の腹心として極めて重要な役割を果たしていたが、大正13年7月24日松島所有の「沼津別荘」で死亡した。(T13.9.6徳毎)

4 政治家としての松島

これより先松島は明治45年郷里の徳島県より、「盲目選挙人に担がれて」(T7.10.23内報)、おそらく昌栄貯蓄銀行、日本資金信託両社の徳島県在住の役員等からの勧奨により、「総選挙に打って出で」(T4.4.6保銀)代議士候補となるも辞退した。また大正4年4月の総選挙でも「郷里徳島県下に於いて多数有力者の熱心なる推薦を受けたる結果…立候補を発表」(T4.4.6保銀)したもの、「同行の業務を執筆しつつある」(T4.4.6保銀)松島としては「時期尚早なりと固辞⁴³⁾」し、「地方政界の平和の爲め…先輩に譲歩」(T4.4.6保銀)して再度立候補を辞退した。大正6年4月満を持していた松島は徳島県第4区より、「寺内内閣の擁護派として最高点を以て当選⁴⁴⁾」し、清和倶楽部に属し

た。(人、T7、まP69)同時期に茨城県第7区から代議士当選した鈴木錠蔵とは共同火災時代の同僚でもあり、事業経営を共にした親密な仲間であった。以後大正13年5月まで連続当選、新政会に属した。⁴⁵⁾「栄華物語」は「当時彼れは代議士として後藤新平子の部下に属し」たとする。以下、松島の経歴は巻末〔表一2〕の年表を参照されたい。

- 1) 大阪今日新聞「松島肇栄華物語 下」(T13.12.22徳毎が転載)、『徳島新聞五十年史』P73
- 2) 『別冊徳島県歴史人物鑑』平成6年、徳島新聞社、P293
- 3) 丸山名政(日本橋区中洲町)は弁護士(紳M32、P380)、御岳貯蓄銀行監査役(要録M34、役P281)
- 4) 大正10年12月5日広島地裁第一回公判での自己経歴の陳述(T10.12.13法律)
- 5) 明治大学との縁は明治大学幹事の田島義方が「明治大学及び市内諸学校の講義録其他印刷物の引受をなす方針」(T6.11.21内報)のもとに大正6年11月*安全印刷を発起した際に、松島も参画した例がある。後に同社は松島側が引取り、関係した新設会社の目論見書、株券印刷に活用した。
- 6) 『徳島県百科事典』昭和56年、P905
- 7) 『衆議院要覧』大正6年11月、P260
- 8) 大阪今日新聞(大阪市東区大川町47)は大正12年2月創刊の四頁の夕刊紙で社長兼編輯長藤浪健二、主筆松森鶴吉、専務山本虎一(『大正14年毎日年鑑』大阪毎日新聞社、大正13年版、P519、『新聞総覧』日本電報通信社、大正12年版、P140)、のちに天王寺区東上町39番地、発行兼編輯印刷人村井庄之助、記者は寅吉で、「同新聞紙一万五六千部を大阪市内其の他の購買者に配布」(事実、『大審院刑事判例集』第10巻、P528)する地域新聞であり、たとえば昭和5年8月23日第2715号夕刊2面に「弁護士罪惡記」なる一松定吉を誹謗する攻撃記事を掲載して、名誉毀損事件を起こしている。二審判決では「大阪今日新聞ハ大阪ニ発行セラレ居ル数多キ新聞中硬骨ヲ以テ名高キ新聞」(理由、『大審院刑事判例集』第10巻、P532)として当該記事を「惡意ニ出テス専ラ公益ノ為ニ掲載シタルモノ」(P531)と大審院とは異なる評価を示した。『徳島毎日新聞』は大正13年12月21日、22日の2回にわたり、『大阪今日新聞』の記事を転載した。
- 9) 頼鷹二郎は頼山陽の末裔、竹原製塩合名代表社員

- 10) 『大日本銀行会社沿革史』 P 353
- 11) 村上定は広島県竹原町の素封家出身の新聞記者で、熊本新聞社、東肥新聞、同盟新聞、下野新聞、神戸又新日報を歴任後（『京浜実業家名鑑』明治40年、P 406）、山陽鉄道を経て三井銀行調査係長（要録M31、役P 214）、前橋、長崎、兵庫、名古屋各支店長を歴任（手島益雄『芸備人物評論』大正11年、P 240）、39年5月「期する所ありて三井銀行を辞し共同火災保険会社を起し専務取締役」（『京浜実業家名鑑』明治40年、P 406）となり、内国貯金銀行社長、南武鉄道、目黒玉川電鉄、日本絹糸紡績各取締役、玉川電気鉄道、加富登麦酒各監査役等を兼務した。
- 12) 岩崎一は三井銀行地所部長を経て東京信託専務、内国貯金銀行取締役、玉川電気鉄道監査役等を兼務
- 13) 渡辺義一は支配人兼務。共同火災神戸支店長（T 3 . 1 . 1 保銀）
- 14) 前山久吉（東京信託会長、日本徴兵保険取締役、浜松銀行頭取）の主宰する内国貯金銀行は明治45年10月東京信託一派で設立開業、会長は村上定
- 15) 藤井喬著『阿波人物志』昭和48年、P 214
- 16) 徳島新聞社編『徳島県百科事典』昭和56年、P 905
- 17) 原典の『阿波人物鑑』は腹心の市原狸之の筆になるものである。しかし刊行された昭和3年には松島を巡る司法的環境が極めて厳しく、差障りある彼の経歴（昌栄貯蓄銀行創立以降）は全面削除せざるをえなかったためと推測される。
- 18) 19) 大正2年12月26日登記 東京区裁判所 大正2年12月29日官報第427号、P 786
- 20) 22) 25) 『徳島名鑑』徳島日日新報社、大正4年、まP 1～2
- 21) 『商工信用録』T 3、P 358
- 23) 『衆議院要覧』大正6年11月、P 260
- 24) 『大正人名辞典』大正7年、P 861
- 26) 家村五郎『投資之研究』昭和5年、投資研究社、P 52。なお「栄華物語—松島肇」は「彼れの発起した泡沫会社の数は殆ど百にも達したであらう」（T 13. 12. 21 徳毎）と、やや大袈裟に記述するが、『徳島市史』も「泡沫会社を一〇〇社近くも設立した」（『徳島市史 第三巻産業経済・交通通信編』昭和58年、P 420）と「栄華物語」と同じ数字を掲げる。徳島毎日も大正11年には「株式会社昌栄銀行を根拠とし糸崎船渠、帝国毛織、日洋土地、大日本原毛、紡績木管其他合計十八会社の設立に関係」（T 11. 3 . 16 徳毎）したとする。『徳島新聞五十年史』も「大小四十数社の会社を買収、経営し、会社王、会社魔と言われるようになった」（『徳島新聞五十年史』P

- 73) と、「会社魔」との呼称を紹介している。
- 27) 広島地裁公判での宮重検事の論告によれば (T11.5.14大朝)
- 28) 前掲『百鬼横行』、P113
- 29) 『徳島新聞五十年史』P73。徳島市寺島町本町は松島が大正10年2月直系の徳島民報社を設立した場所 (帝T11、P5)
- 30) 大正12年11月ころ「松島が横領金で買入れた新富座を担保に入れてく阿波農工銀行から」借入れた金まで注ぎ込み、松島自ら同選挙区に乗り込、小室氏を援助」(T13.5.14徳毎)したが、大正14年3月松島所有の新富座 (債権者の阿波農工銀行が競売)を徳島市堀裏町の宇野岩三郎ほか12名が買取 (T14.3.3徳毎)したが、昭和11年焼失した (徳島年鑑H8、P471)
- 31) 大正10年12月5日広島地裁第一回公判での陳述 (T10.12.13法律)
- 32) 『百鬼横行』、P114～5
- 33) 熱海翠光園は『名勝案内全国著名旅館名録』昭和3年12月に該当なし
- 34) 「お鯉」は「桂」公が生前熱愛した女であり、黒幕には新喜楽の婆さんもみる」(T2.12.16東日)ため、桂公の死後「先づ公の遺産を整理する時になるとお鯉は長島隆二氏へ金五万円の分与を迫った」(T2.12.16東日)ため、「お鯉は此五万円でどうして暮して行くか之れが又一つの謎」(T2.12.16東日)とされた。
- 35) 39) 荒木桜洲「銷夏漫筆」(T14.9.20法律)。大正8年11月には逗子の養神亭を「継承し之を基礎とする」(T8.11.18内報①)湘南ホテルの設立が長島弘 (桂公の女婿で、前記長島隆二の実兄)らの主唱で企画され、「目下発起人の糾合中」(T8.11.18内報①)と報じられた。
- 36) 40) 『逗子町誌』昭和3年、逗子町役場、P324
- 37) 森長英三郎「葉山日陰茶屋事件 史談裁判第四集13」『法学セミナー』215号、1973年10月。『名勝案内全国著名旅館名録』昭和3年12月、P113。なお日陰茶屋 (三浦郡葉山町堀内、客室数25、客室畳数285、宿泊料5.0円～8.0円)は葉山町最大の旅館で、館主名は角田庄右衛門 (『全国都市名勝温泉旅館名鑑』日本遊覧旅行社、昭和5年8月、P43)
- 38) 湘南ホテルは大正9年11月資本金300万円、払込75万円で神奈川県三浦郡逗子町小坪に設立された。役員は代表取締役華岡知爾、金子悦郎、取締役*小野安太郎、小路春夫、半田福平、*三溝誠一郎、小沢四郎、監査役*佐藤馨、左手右一、加瀬和三郎であった。(帝T11、神奈川P52)
- また逗子土地は大正7年8月資本金80万円、払込20万円で設立され、本店麴町区

麴町3-4、取締役は*清水獎、*堀内胖治郎らであった。(帝T14、P236) 大正12年9月逗子土地は東京金属工業[大正8年1月資本金30万円で麴町区飯田町に設立され、監査役は*高橋憲治(帝T11、P124)]を合併、30万円増資した。(帝T14、P236)

- 41) 『名勝案内全国著名旅館名録』昭和3年12月では三浦郡逗子町新宿原252番地の旅館「養神亭」の館主は中川豊(同書、P99)、昭和5年版『日本案内記』の逗子海水浴場、鐙摺城址近隣の旅館として「逗子ホテル、養神亭、日陰茶屋外数軒」(P185)が紹介されている。昭和5年版『全国都市名勝温泉旅館名鑑』(日本遊覧旅行社、昭和5年8月、P43)では逗子町最大の旅館で、館主名中川豊、所在地三浦郡逗子町新宿原、客室数30、客室畳数360、宿泊料4.0円～6.0円、養神亭支店は館主名丸熊太郎、所在地三浦郡逗子町逗子、客室数10、客室畳数78、宿泊料3.0円～5.0円となっている。
- 42) 大正13年10月4日官報第3636号、付録P5。
- 43) 『徳島名鑑』徳島日日新報社、大正4年、まP2
- 44) 『大正人名辞典』P861
- 45) 『徳島市史 第三巻産業経済・交通通信編』昭和58年、P420、『徳島新聞五十年史』P73

第3章 門司築港事件

松島は代議士の肩書きにものをいわせて大規模な土地取引（特に開発前の素地の先行取得と転売）に深く関与した。この章ではそうした“政商”的行動の初期例を西舞子企業で見た上で、彼が石井貯蓄銀行整理の過程で関わった最大のプロジェクトと推定される門司興業・門司築港でのほとんど表面には出ることのなかった影の役割の解明に可能な限り迫りたい。門司築港事件は第5章以下で取り上げる他の事件とは異なり、関係者全員が不起訴となり真相は未解明に終わったため松島の活動も残念ながら司法的な情報でも十分には捕捉できなかったが、かかる大仕掛な舞台装置を背景として政治家でもある松島の面目躍如たる当該事件をあえて事例研究の最初に置くことで彼の特異な性向の一端が理解できると思うからである。

1 西舞子企業（大正6年9月ころ設立）

西舞子企業（神戸市川崎町7丁目）は前田二一六²⁾、松島肇、加古郡の上月らが発起人となり、前田が所有する西舞子の「山陽鉄道線路の北方数丁を隔てたる山地」（T6.10.10内報）4万坪を坪3～4円で買収する計画であった。（T6.9.22内報）「株式の引受を為すもの意外に多く、すでに満株以上の盛況を呈したるも、同社は成可く広く株主を網羅せん計画なれば、一万株の内二千株を神戸現物団若くは株友会の手により、近くプレミアム付を以て公募する筈」（T6.9.22内報）と報じられた。西舞子企業の所有地は8年では約1万坪で、煉瓦原料として「土地上層を掩ふバラストを採取…後は更に土地経営の用途につる方針」（T8.4.1内報）とされた。

一方、製々舎耐火煉瓦は大正7年10月大阪市南区木津北島町1-5に資本金100万円で設立された。大正8年3月1日「製々舎耐火煉瓦株式会社と西舞子所在資本金五十万円の西舞子企業株式会社とが合併して資本総額を一百五十万円しして社名を舞子住宅土地株式会社と改称³⁾」した。舞子住宅土地の賛成人・発

起人は「島津久賢、前島弥、安場末喜の三男爵、今西林三郎、藏内次郎作、片岡直温、渡辺修、松浦五兵衛、*鈴木久次郎、川村惇、友常穀三郎、鹿島秀磨の新旧代議士及金沢利助、中谷徳恭、三宅熊五郎、橘善治、土井高⁴⁾一郎、榊矢太一、尾崎為吉外数名の主として東京大阪神戸に於ける実業家」で、「其経営者は…財界の重鎮を、相談役若くは社長とし…各自独特の技能を有する優秀なる数多の社員を最高学府出身の新智識が然も二名日々指揮督励して奮闘し、其周囲には川村惇、小西松太郎、三宅熊五郎、谷向喜一郎、尾崎為吉の諸氏平取に、羽田彦四郎⁶⁾、榊矢太一氏等平監査役として枢機に参与せるが…諸会社の重役若くは銀行頭取として実業界に重きを為し、或は代議士として政府要路の各位と親友ある人々なれば、其信用の厚きは謂ふ迄もなく⁷⁾」と宣伝した。

舞子住宅土地は旧製タ舍耐火煉瓦の本業であった「優秀なる耐火原料の欠乏、販路の狭小其他各種の情勢より打算して耐火煉瓦の製造は将来有利に非ずと推断したる同社は断乎として其製造を廃止し、専ら別荘地及住宅の経営を為し、副業として一般信託業を兼営することに方針を一変⁸⁾」し、松島が関与していた旧西舞子企業側の本業であった別荘地経営に転換した。舞子住宅土地は、大正8年では本店を大阪市南区木津北島町1に置き、土地売買住宅経営、資本金150万円、払込3257万円、大正8年の積立金19,756円、利益18,637円、配当率…%であった。(通覧、P272)

舞子住宅土地はその後阪神商事信託、阪神商事と相次いで改称し純然たる貸金業に転換した。大正10年では資本金150万円、うち払込37.5万円、舞子出張所(兵庫県明石郡垂水村)、取締役橘善四郎、橘善治、川村惇、三宅熊五郎、小西松太郎、尾崎留吉(旧西舞子企業)、谷向喜一郎、監査役榊矢太一(旧西舞子企業)、羽田彦四郎、土井高一郎であった。(要録T10 P117) 阪神商事は大正12年10月20日減資により資本総額を25万円に変更した。⁹⁾

2 門司築港プロジェクト

松永定一は門司築港事件を総括して、「応募高三千倍の盛況だったが、この事業は、実は島がある策士にかつがれたわけで、海へカネを捨てたようなことに

なった¹⁰⁾」としている。門司築港㈱は「政党内閣の成立と同時に一瀉千里で成立した此会社に潜む秘密は奇々怪々」(T10.9.21東朝)とされるように全貌は明らかではないが、どうやら島徳蔵がかつがれた「策士」こそ本書の主人公である松島肇その人であったと推定される。

門司築港プロジェクトは単に門司築港㈱(大正9年3月設立)だけではなく少なくとも①門司築港(明治22年設立)、②田野浦築港(明治27年発起)、③所在地の門司市大久保町に因む大久保船渠(明治39年設立)、または「大久保シンデケート」、④門司船渠→門司興業(明治40年7月設立)、⑤門司築港鉄道(大正2年継承)など数段階にも及ぶ先行する構想・机上計画類が存在した。(T10.9.21東朝)③と④は一体の計画を別の名で呼んだ可能性もあろう。

①門司築港(初代)

明治22年3月「門司港湾開築」(諸M31、P420)を目的として門司町に設立され、専務豊永長吉、取締役斉藤美知彦¹¹⁾、守永勝助、監査役熊谷直候、桂弥市であった。(諸M31、P420)

②田野浦築港

明治27年福江角太郎、青柳四郎など8名が豊州鉄道の門司裏線延長計画に伴う田野浦築港を発起し、29年1月ころ出願、29年11月認可された。31年2月「港湾ヲ改良シ海面ヲ埋メ貸付又ハ売却」(諸M31、P420)することを目的として小倉町に設立され、社長福江角太郎、取締役吉沢直行、藤金作、斉藤美知彦(門司築港取締役)、中村利貞、植村治三郎、監査役中村種之助、葛谷八郎、相談役青柳四郎、技師三上章であった。(諸M31、P420)35年2月認可期限が到来して解散した。¹²⁾

③大久保船渠、「大久保シンデケート」

明治39年末～40年初ころ野村恒蔵、中村為弘らがまず出願し、政友会代議士野田卯太郎、佐々木正蔵ら4名が追加発起人となって②田野浦築港を継承する形で大久保船渠を設立した。¹³⁾この「大久保シンデケート」(T10.9.21東朝)は彦根藩出身の弁護士¹⁴⁾「増島六一郎、仏人ルウネン氏等の外資輸入に由る」¹⁵⁾ものであった。この種の大規模な埋立例として小山田信蔵の横浜港埋立のケースが¹⁶⁾

あり、小山田は「横浜港南沿岸数万坪の埋立を出願し先輩星亨氏を介して其許可を得た¹⁷⁾」とされるが、増島六一郎弁護士を表面に立てた「大久保シンヂケート」の場合も横浜港埋立と同様に星亨などの政治家をバックにしていた可能性もあろう。そのカギを握る人物が増島六一郎と星亨とともに領袖に戴く横田千之助¹⁸⁾の存在であろう。横田千之助の伝記にも「横田氏は、一時政界の一部からは、恰かも利権屋のやうに見られてゐた¹⁹⁾」との世評に言及しているほど、「恰かも目から鼻に抜けるやうに機敏に働いた²⁰⁾」政治家であった。

後年の門司築港会社の「設立趣意書」ではフランス人ロバート・ルーネンらの計画は「当時仏国ニ於テハ銀行ノ破綻続出シ…遂ニ此事業ヲ中止スル²¹⁾」に至ったとするが、「星亨の知遇を受け其家に寄食して東京法学院に学ひ」（人T 7、よP 15）、「星氏の事務所に在りて、氏の寵遇を受く」（T14. 2.15法律）とされた星亨直系の横田千之助自身の回想によれば「増島〈六一郎〉氏が仏国人ルーネン氏と共同事業として門築の埋立を始められた当時、増島氏は当初ルーネンが事業資金を持って居ると期待して居たのに反して、〈ルーネンは〉資金を持たなかったために事業は遂に其整理をなすの余儀なきに至」（T12. 3.15法律）って、計画は挫折したのであった。

④門司船渠→門司興業

門司船渠は明治40年5月1日海面埋立の免許を得て、40年7月19日新藤保太郎、増島六一郎、福島保三郎らの発起で、海面埋立と船渠の経営を目的として満期100年で設立された²²⁾。福島保三郎は増島法律事務所員となって弁護士に合格した増島門下の法曹人であり、増島の主導下に発起人になったものと考えられる。明治41年8月10日仮起工式を挙げた²³⁾。明治41年時点では本店麴町区内幸町1、資本金70万円（払込済）、役員は取締役ロバート・ルウネン、E. C. デヴィス²⁴⁾、J. D. キュル・デ・コゴリン²⁵⁾、中山佐市²⁶⁾、監査役ジョージ・バラン・クロージャー²⁷⁾、福島保三郎²⁸⁾、別府三穂三郎²⁹⁾、門司支店は門司市大久保町であった³⁰⁾。

門司船渠は明治42年12月20日門司興業と改称した。明治45年時点では東株仲買人の石井直³¹⁾が鹿毛甲（門司）、山本助一³²⁾と門司興業監査役を兼ねていた。（諸M45上P 211）石井直は本郷区富士前町で有価証券売買仲立業を開始し、明治45

年3月東株仲買人免許を受けるなど、「異数の経歴ある紳士³³⁾」というよりもむしろ、多分に「虚業家」的な人物と考えられる。このうち常務となった日本養魚は資本金100万円で横山一平らと計画されたが、「新事業熱は漸次冷却³⁴⁾し」、50万円に減資決定、40年11月大師河原に設立された。石井貯蓄銀行は神奈川県に本店を置き、資本金10万円（払込67,500円）、積立金1,700円、預金高71,231円、親銀行は横浜実業銀行「本行貸付金中回収ノ見込ナキモノ一万五千円内外アリト認メラル³⁵⁾」のような状態で、明治45年4月29日臨時休業した理由は「党派ノ関係ヨリ石井直ノ私有銀行ニ等シキ本行振出ニ係ル手形ノ保証ヲ親銀行タル横浜実業銀行ヨリ謝絶セラルルニ至リ、資金ノ運転絶ヘタル為³⁶⁾」であった。石井直は大正2年8月調査で合資会社二葉屋商店社員、正味身代債務超過、商内高未詳、取引先の信用の程度は明治44年12月以降に銀行取引停止中であるため、5段階の最下位のさらに下の「銀行取引停止処分」Fa、所得税…円で、6年1月調査でも同様の低迷状態であった³⁷⁾。

大正5年時点では門司興業は本店を麴町区内幸町1丁目3に置き、資本金は105万円になり、払込78.75万円、取締役福島保三郎、W. P. マクノートン（赤坂区桜町）、C. スタントン（横浜市山下町、アングロ・ジャパニーズ銀行）、監査役中山佐市（前出）（諸T5、上P294）、門司支店は門司市大久保町2646であった。（帝T5、東京P270、福岡P45）

この頃、「石炭港としての繁盛を若松に奪はれたる門司⁴⁰⁾」を訪れた『九州の現在及将来』の編纂主任の栗山芳太郎は「門司市民は田ノ浦を築港すると云って居るが、之もまだ煮え切らぬやうだ⁴¹⁾」として「門司門司して居ては馬関にされる⁴²⁾」と結論付けた。『九州の現在及将来』は別項でも「博多湾に完全な築港が出来たならば之も門司の頸敵となるであらう⁴³⁾」、「他人の銭勘定を袖手傍観するのみ…平家一門の没落せる壇の浦は、それ指呼の間に有りと知らずや⁴⁴⁾」と門司市民に警告している。

門司築港「設立趣意書」では「大久保、田野浦ノ沿岸ニ於テ曩ニ門司興業株式会社ノ所有シタル約六万坪ノ土地ヲ買収⁴⁵⁾」する計画で、土地買収費200万円を計上、大正10年5月31日現在の門司築港の土地勘定は計画通りの200万円であっ

⁴⁶⁾
た。

島徳藏、宮崎敬介ら門司築港発起人は大正9年3月25日物価高騰のため計画途上で挫折していた門司興業（増島六一郎）所有の「福岡県門司市大久保田野浦沿岸の土地約六万坪」（T11.9.23法律）を「〈門司〉興業会社から七十五万円で買収」（T10.9.21東朝）し、「増島〈六一郎〉氏の〈門司〉興業会社は七十五万金を以て、その権利を島、宮崎氏に譲り、島、宮崎氏はまた二百万円を以て門司築港株式会社に譲り⁴⁷⁾たり」とされた。横田千之助の回想では「〈門司興業〉の事業は遂に其整理をなすの余儀なきに至って、同じく〈増島の〉門下生であった岸清一博士に右整理方を委嘱せられたのである。然るに其進捗が思はしく行かぬ所から、其後岸博士は自分に協力を求めて来られたので、自分は…増島氏との関係から義侠的に助力を為すことに決心し、爾後約三ヶ年間尽力して来た…岸博士も右整理の為に約三万円の自費を投ぜられた由であるが、自分も当時の協力者の一人であった鳩山一郎氏とも協商して六万円の保証の地位に立った事もある」（T12.3.15法律）とされる。

門司興業会社からの土地買収に関して宮崎敬介の元秘書の高橋は大正7年「当時は松島肇氏等が経営して居たものですが、財政困難な為、片岡彦治氏⁴⁸⁾を介して宮崎〈敬介〉氏へ其後再三〈売却の〉交渉」（T10.9.21東朝）があったとして整理中の門司興業の経営主体が「松島肇氏等」だったと証言している。この頃松島は18万円の「債権の過半は回収の見込なき」（松島）といわれた石井貯蓄銀行の「委嘱を受けて根本的の整理を行」（T3.12.6保銀）になっていた。松島は石井貯蓄銀行の前経営者で破産状態にある石井直（東株仲買人）の兼務先であり、恐らく同行大口融資先である門司興業の整理をも担当し、宮崎への売却話を進めたものと思われる。また佐野茂の告発内容では宮崎敬介は「自分と自分の倅が個人として門司興業の福島氏から七十五万円で買入れたものを更に門築の方へ売った」（T10.9.27大毎）となっている。「あの土地の買入の時も最初は宮崎〈敬介〉氏が個人で買ったので、私は単に宮崎氏の為にのみ買入の運動をし」（T11.4.8大毎）⁴⁹⁾た傍士定治は「私もいろいろ土地会社などにも関係してゐますが、個人が買った土地を会社へ売るのに其間多少の利益を得る

のは当然の事で、決して不法でも何でもありませんまい」(T11. 4. 8大毎)と記者に語った。

⑤門司築港鉄道（門司興業自体の兼営する鉄道）

明治44年門司市～曾根村間に豊州電気軌道を発起した若木栄助⁵⁰⁾など門司市および沿線地方の資産家のほか、徳島県在住の川野直太郎⁵¹⁾ほか6名を発起人として、門司築港鉄道が計画された。発起人総代の川野直太郎は後の門司築港の許可を巡る政治家の暗躍に関して克明に日記を残した人物で、宮崎敬介は買値を「高値に見積らしめる為、故川野直太郎に依頼し二百円を〈商業興信所門司支〉所長に贈⁵²⁾った」とされるが、大正10年9月現在既に死亡していた。(T10. 9. 21東朝)

谷口良忠氏によれば「港湾の造成や、棧橋・鉄工場など関連事業の経営を行う目的のもので…鉄道の経営は、これらの事業を補完するための手段⁵³⁾」であったとする。資本金は200万円、大久保付近で約70万円をかけて岸壁工事を行ったが、「欧州戦乱の余波を受けて諸物価が高騰し、資金の調達がままならず、計画は…挫折し…未完成の施設などは、後発の門司築港…会社⁵⁴⁾が引受」けた。大正2年に門司築港鉄道は破産した「門司興業会社の営業を継承」(T2. 8. 14大毎)したと報道されたが、谷口氏は門司築港鉄道の起業者は正式の商号として「門司興業会社と称⁵⁵⁾していた」として、両者を同一視している。

3 門 司 築 港 (株)

門司築港(株)の事業内容は海峡の急流に左右されず、波おだやかな裏門司・田野浦海岸6万坪を埋立てて、3千トン接岸可能な港湾を築港して石炭を積み出し、鉄道、電車を引込み、住宅、工場を建設するという壮大な計画であった。資本金1,000万円に対して応募が3,000倍に達したという驚くべき人気株となった。同社の「設立趣意書」には地図等とともに商業興信所による「土地評価書」写が麗々しく添付されている。これは75万円で買取った海面埋立権・未成設備を「買入土地の坪数を実際以上に報告し…商業興信所門司支所員等を買収して不当の地価評価をなさしめ」(T11. 9. 23法律)、200万円で売付けた行為を合理

化するものとされた。大正9年3月25日「公有水面ノ埋立、埠頭ノ築造及市街宅地ノ開設、棧橋及倉庫ノ建設、貯炭場設備其他経営」(T9.5.29藤本)を目的とする資本金1000万円、20万株の門司築港を大阪市北区曾根崎新地三丁目53番地に設立、俵孫一らが取締役に就任した。大正9年4月28日門司築港(株)は門司～企救14哩32鎖、霧岳～曾根0哩48鎖、計15哩の軌間3呎6吋の蒸気鉄道の免許を得た。⁵⁶⁾大正11年9月門司築港は門司東本町～日ノ出町九丁目～田ノ浦2.6kmの電気軌道の特許を得て、大正12年12月20日開業した。⁵⁷⁾大正13年11月門司築港は本店を大阪から門司市大字2699番地に移転、昭和4年2月13日門司～門築大久保1.5kmを蒸気で貨物線として開業した。⁵⁸⁾

門司築港は「政党内閣の成立と同時に一瀉千里で成立した此会社に潜む秘密は奇々怪々」(T10.9.21東朝)とされる。報知新聞によればある事情通の談話として「門司興業会社が福岡県から他人に譲渡するを得ずとの指令を与へられて居たものを、宮崎氏等が政友会の某巨頭に運動して、右指令を取消さしめ、以て巨利を博し、其の報酬として右巨頭に二十万円を贈与した」(T11.9.23法律)と伝える。東朝によれば75万円で買取って、200万円で売った差益125万円の内訳としては「四十万円を宮崎氏等数名の幹部で分配し、又四十万円は某々株屋連中に同会社株引揚の謝礼として贈り、残り四十五万円が某々政党の手に入ったもの」(T10.9.21東朝)とされる。この点について「内容を知り抜いて居る岡山某氏」(T10.9.21東朝)は「事實は三十万円渡し、残りは関係者の手に分配したと聞いて居るが、此三十万円を受渡された政党は其頭株三名が殆ど懐中に入れたらしく、是は田浦海面埋立それから曾根に通ずる鉄道線路の敷設許可の謝礼と言はれて居るが、是は前記〈門司〉興業会社当時既に許可されて居たものだ⁵⁹⁾」と記者に語った。「此間に伏在する秘密の鍵は死んだ川野直太郎が握って居る。是は川野〈直太郎〉氏の日記は全部記されて居る筈⁶⁰⁾」と、松島と同じ徳島県人で大久保軽便鉄道(大正2年却下)・門司築港鉄道发起人総代だった川野直太郎が鍵を握る人物とする。岡山の談話に対して宮崎敬介の元秘書の高橋は「余りに暴利のやうに思はれませうが、是等の権利を得る為めには相当に金も費して居りますから、別に不審はない筈⁶¹⁾」と開き直った。

高橋元秘書は「〈大正7年〉当時は松島肇氏等が経営して居たものですが、財政困難な為、片岡彦治氏を介して宮崎〈敬介〉氏へ其後再三〈売却の〉交渉」(T10.9.21東朝)があったと証言している。また「〈石井の〉委嘱を受けて根本的の整理を行」(T3.12.6保銀)なった松島自身も公判で「昌栄貯蓄を買収した当時は損失が続いて百万円欠損した」⁶²⁾が、大正9年上期には「整理もつき…五朱の配当」⁶³⁾を開始し、「基礎も確實となった」⁶⁴⁾と陳述している。こうした報道を総合して勘案すると、大正9年3月の門司築港創立直前に「松島肇氏等が経営して居た」(T10.9.21東朝)旧門司興業の権利が宮崎敬介ら門築発起人に75万円で売却できた結果、昌栄貯蓄銀行の大口不良債権が回収できて、大正9年上期に整理がついたと考えるのが最も自然なように思われる。告訴人の佐野茂は「昨〈11〉年の五月頃時事新報に横田氏の談として『宮崎が金を持って来たが後から返した』といふことが載ってゐた」(T12.3.15法律)と語ったが、大正12年3月9日政友会の代議士会で疑惑の主である横田千之助本人は「其後、増島博士の書生がやって来て自分〈横田〉に紹介の添書をくれとの依頼があったので、渡した事を覚えて居る。然し其〈法制局長官になった7年9月〉後の事は自分の役人時代(法制局長官)の事であるから、自分は全然与り知らぬのみならず、同問題が都合よく解決が出来たとの事で、先方から金千円の謝金を持って来たが、元来自分は義侠的にやった事で謝金を受ける意思がなかった故、一時返却し度いと考へたけれど、千円位の金を左様に角を立てて受取らぬなどと云ふのも如何と存じ、余は前田法律事務所に受け入れた次第である」(T12.3.15法律)と弁明した。横田の「同問題が都合よく解決が出来た」(T12.3.15法律)という表現に、旧門司興業に出資、保証、融資ないし尽力していた利害関係者に75万円と125万円とが均霑されて、松島や横田千之助らが大いに潤ったことを示唆しているのではなかろうか。鈴木検事総長も東京朝日記者に「百二十五万円の利益もそれに関連した四五人が分配するのは、別に他から干渉するわけにはゆかない」(T11.9.23法律)と不起訴の理由を漏らしている。

大正9年3月25日「門司築港株式会社資本金一千万円は二十五日創立総会を開き、左の役員を選挙せり。取締役社長俵孫一、取締役島徳蔵、同志方勢七、

監査役今西林三郎、太田光熙」(T 9.3 増田 5-10) が就任した。

社長の俵孫一(庚申銀行顧問)は島徳蔵が「一時は門築にも」「役人…の古手を…使った」「俵“殺”一」⁶⁵⁾と同一人と考えられる。

大正11年時点では門司築港は本店を大阪市東区北浜 4 丁目21に、門司支店を門司市門司2580に置き(帝T11、P59)、資本金1000万円、払込250万円、役員は取締役宮崎敬介(上海取引所取締役)、島徳蔵、志方勢七(上海取引所取締役)、長谷川銑五郎、小曾根喜一郎、監査役今西林三郎、太田光熙、支配人渋谷元良、門司支店長賀山正雄(後に取締役)であった。(諸T10、上P531)

4 門 築 事 件

鉄道省を退官直後の五島慶太を京阪の太田光熙を介して役員に引っ張りこんで、五島の辣腕で九州電気軌道を説得して両社の提携により短距離の軌道を建設してお茶を濁した。門司築港は門司日ノ出町～田野浦間等の経営も行った築港会社で五島慶太も取締役に就任し軌道線建設に尽力したが、五島の出馬は実は「太田から彼に依頼があった」⁶⁶⁾ためと言われ、当時はまだ駆け出しの後輩に活躍の場を与えるほど太田には“フィクサー”的才能も豊かであったと思われる。

しかし石炭積出し計画にもともと無理があって、経済性を欠いていたため事業化は一向に進展せず、僅かに埋立地のごく一部を農林省の倉庫用地に売却した程度にとどまった。大正10年9月「中旬末偶々門司築港出訴説に大株の惨落⁶⁷⁾を演」ずる契機となった。

結局は冒頭に述べたように島徳蔵らは「策士にかつがれたわけで、海へカネを捨てるような」⁶⁸⁾悲劇的な結末を迎えることになった。土地買収費200万円計上するも実際は75万円しか払っていないとして、12.5円払込の株価が2～3円に惨落した株主が騒ぎ出した。「会社を作っては…逃げる」⁶⁹⁾という「島徳一流の凄味が遺憾なく発揮され」⁷⁰⁾たことへの反発を受けた。大正10年10月には、はやくも「元島徳蔵の関係ある某石炭会社の専務をしていた」(T12.3.15法律)門司築港株主の佐野武が島徳蔵、宮崎敬介を告訴(T10.10.21大朝)、「島徳蔵、宮

崎敬介両氏を中心とし疑惑の雲に包まれてゐる門司築港の如きも、大正七、八年土地熱の余燼である」(T11. 1. 6 大朝)と評している。

しかし「門司築港不正事件は其の関係者中に政友会代議士の少からざるがために不起訴となるべく期待され」(T11. 4. 20法律)、「門築事件も宮崎敬介君の召喚で取調べも一段落…島徳、宮敬の両君と来ては近來四方八方から告訴ばかりされてる関西財界の名物男で、然も一回も起訴された事を聞かないヘンな連中だ」(T11. 5. 20法律)と報じられたように、結局不起訴に終り、真相は闇の中に消えたままである。

報知新聞も門築事件不起訴の際の最高司法当局の説明として「時偶経済界の不況に立ち至ったために、工事着工が出来なかったので…徳義上から見れば問題となるが、法律上の問題ではない」(T11. 9. 23法律)とする。不起訴の報に接した際に、疑惑の渦中にあった島徳蔵は「それはあり難い。曇った空から天日を拝する気が致します」(T11. 9. 23法律)と語った。

こうして気宇壮大な民営形態での一大港湾プロジェクトも全くの龍頭蛇尾に終り、大正14年には大幅減資、鉄道免許も30年間も棚晒し同然となった。

- 1) この章の記述にあたっては畠中茂朗氏のご教示を頂いたほか、主に『門司港誌』(吉永禹山・中山主膳編『門司郷土叢書』第5巻、国書刊行会、昭和56年、P155～163所収)等に準拠した。門司築港に関しては拙稿「昭和初期における阪神電気鉄道の積極拡大策」『鉄道ビクトリアル』452号、昭和60年参照
- 2) 前田二一六(神戸市兵庫下沢通)は神栄土地代表取締役、神戸商事信託、偕楽座各取締役、内外印刷監査役(要録T10役中P273)。上月は大志銀行頭取、大正9年11月創立「不動産有価証券売買」の上月合名会社(神戸市兵庫区富屋町)代表社員の上月安重郎か。
- 3) 5) 7) 8) 『土地会社総覧』大正9年、P123
- 4) 土井高一郎は東京明大経済科卒、破産専門の大物計理士で、裁判所から破産管財人に選任(S5.10.25総、文、播電)され、製々舎窯業、舞子住宅土地、播電社長、播磨電気鉄道、九州肥筑鉄道各副社長、播丹、構内自動車、阪神商事各監査役、関西土地興業、日本ユニオン硝子、中国石材、浪速信託、加古川製紙、関西自転車、

神国製茶各相談役（前掲『大衆人事録』S 5、P 10）

- 6) 羽田彦四郎は大分県出身の弁護士、大正10年時点で舞子住宅土地監査役(T 10銀 P 117)、大正13年時点の阪神商事信託監査役、「明敏の才、論弁の妙、忽ち同業に頭角を抜く。嘗て東京組合弁護士会常議員、同副会長に上げられしが、弁護事務の傍ら実業界に飛躍を試み、中央鉄道会社社長外二三会社重役に選せらる。東電三銭均一の改定、氏の力に負ふところ多し」（小俣慇編『大分県人名辞書』大正6年、P 53）
- 9) 大正13年5月24日『官報』第3524号付録、P 3。その後、伊藤英一の債権者たる阪神商事に関しては拙稿「地方零細企業の破綻処理と“救済者”集団—播州水力電気鉄道とその競落を中心に—」『滋賀大学経済学部研究年報』第6巻、平成11年12月参照
- 10) 『北浜盛衰記』昭和34年、P 187
- 11) 斉藤美知彦（小倉）は豊州鉄道監査役、豊州炭鉱監査役、34年4月30日金辺鉄道監査役就任。金辺鉄道は拙著『企業破綻と金融破綻—負の連鎖とリスク増幅のメカニズム—』九州大学出版会、平成14年、P 197以下参照
- 12) 13) 『北九州市産業史』平成10年、北九州市、P 67、中野金次郎『海峡大観』大正14年、P 39
- 14) 増島六一郎（東京麻布区材木町55）は安政4年6月生、彦根藩士増島大右衛門の子（現P 47）、「彦根藩士増島團右衛門の二男にして…先代余平の養子」（人S 3、マP 45）、開成学校、12帝大卒業、法学士、13攻法館を設け、代言従事、英米留学後帝大講師、英吉利法律学校（「東京法学校」を経て現中央大学）、東京英学校を創立し校長（現P 47、人S 3、マP 45）、20.3馬場宛に関西鉄道創立を問合せ（馬場31-128）、関鉄22年100株主、岩越鉄道200株主。「東京女学館の創立にも尽力渺ならず」（人S 3、マP 45）、弁護士、31税308円76銭、東京代言人組合会長、弁護士組合会長に就任（人S 3、マP 45）、法律事務所員出身者には門司船渠監査役の福島保三郎、横田千之助、岸清一、鳩山一郎ら（T 12. 3 .15法律）大物弁護士多数を輩出した。
- 15) 中野金次郎『海峡大観』大正14年、P 40
- 16) 明治33年11月小山田信蔵は星亨をバックにして横浜市山手町の横浜港南沿岸数万坪の埋立許可、帝国生命は埋立権を見返りに豆相社債・株式等を添担保として40万円融資した。横浜埋立事業への関与は『朝日生命百年史上巻』（平成2年、P 116～）

- 17) 『大日本重役大観』大正7年、P51
- 18) 横田千之助は明治3年8月22日栃木県足利郡足利町の横田市太郎の次男に生れ(T14.2.15法律)、「二十年意を決して上京、雇吏、新聞配達等となりて苦学す。偶々星亨氏夫人綱子に嘱望されて同家の書生となり中央大学の前身たる東京法学校に学び」(T14.2.15法律)、22年7月東京法学院(現中央大学)卒、22年7月弁護士登録(秦郁彦『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』1981年、東京大学出版会、P253)、弁護士として中央移民合資会社等に関与、明治29年ころ「ホンの駈出し」「未だ二十四五の小僧」(川原茂輔の回顧T11.8.10法律)の弁護士として岸清一弁護士の代理として株式市場関係の訴訟を担当、初報酬の800円を川原茂輔から受け取った。明治33年8月時点で京浜銀行監査役50株主(諸M34、P18、36年3月頃まで在任、木村論文)、38年10月時点では九生の依頼で真宗株事件に関与、高倉藤平は有隣生命を「横田千之助…諸氏を介して買収」(『高倉藤平伝』T10、P239)した。東京市麻布区市兵衛町、45年5月代議士に当選、栃木県七区選出、立憲政友会代議士。「多年弁護士業ニ従事ス、法制局長官…現ニ司法大臣」(『衆議院要覧』大正13年、P74)大正元年9月10日先発4社を統合して設立された日本活動写真の初代監査役に就任したが、高倉藤平も同時に初代取締役就任(大正元年9月11日時事)しており、その後高倉藤平が支配した有隣生命監査役(帝T5、P247)、T5/3有隣生命50株主(#22営)であった。大正7年9月～11年3月法制局長官、大正7年9月～9年9月内閣恩給局長を兼任、11年3月～立憲政友会幹事長、13年6月～司法大臣。大正14年2月5日死亡。(秦郁彦、P253)
- 19) 石田秀人『快男児横田千之助』新気運社、昭和5年、P342
- 20) 前田米蔵の評、前掲『快男児横田千之助』、P414
- 21) 門司築港「設立趣意書」大正9年1月、P2
- 22) 『帝国鉄道年鑑』昭和3年、P544、前掲『海峡大観』P40。なお『北九州市史産業経済Ⅰ』(平成3年、P771)は門司興業(株)の設立を明治45年とし、前掲『北九州市産業史』は④門司船渠が「09年には門司興業(株)と改称した」(P93)と見る。
- 23) 『北九州市産業史』平成10年、北九州市、P66
- 24) ロバート・ルウェンは中山佐市とともに東洋製材、東洋硝子製造(要録M40、P203、P208)、東洋コンプレッサー、イングラム・ラバー各取締役(要録M44、役P576)
- 25) E. C. デヴィス(横浜市山下町27)はサミュエル・サミュエル商会代表者(紳M41、P24)、牟田部炭鉱、イングラム・ラバー各取締役(要録M44、役P572)

- 26) J. D. クェルス・デ・コゴリン（横浜市山下町72）はエンガート・キュルス・ブラデー〈社〉員（紳M41、P22）
- 27) 中山佐市はルウネンらと東洋製材取締役（要録M40、P208）、東京府農工銀行頭取、農工貯蓄銀行取締役、横浜電気鉄道監査役（帝T5、職P142）、大正7年時点では門司興業取締役、横浜電気鉄道監査役のみ（『大日本重役大観』大正7年、P57）。なお拙稿「大正期の泡沫会社発起とリスク管理—河野英良と彼のパートナーを中心として—」『滋賀大学経済学部研究年報』第12号、平成17年12月参照
- 28) 福島保三郎（赤坂区青山高樹町）は明治24年増島六一郎の法律事務所員、明治30年弁護士試験合格（『一九二四年に於ける大日本人物史』大正13年、ふP20）、門司興業発起人、大正7年では門司興業取締役のみ（『大日本重役大観』大正7年、P83）、帝T5、職なし、紳M41なし
- 29) 別府三穂三郎（門司市本川2）は紳M41、東京なし、『大日本重役大観』大正7年、東京、神奈川なし
- 30) 『日韓商工人名録』明治41年、P59
- 31) 石井直（横浜市神奈川町／南茅場町48）は明治7年5月15日横浜の石井直方長男に生れ、34年7月東京帝国大学文科を卒業した文学士、日清製粉監査役（紳M41、P7）、明治45年3月東株仲買人の免許を受けた。（『兜街繁昌記』明治45年、P236）門司築港前身の門司興業の主宰者であるほか石井貯蓄銀行頭取、日本養魚常務、日本製菓取締役、日清製粉監査役等を兼ねた。石井貯蓄銀行頭取、横浜貯蔵銀行各取締役（人事興信録、T4、いP130）、日本養魚常務、『大日本重役大観』大正7年、神奈川なし
- 32) 山本助一（芝区愛宕下）は大正3年4月調査で7年前に電気機械及工事請負開業（東京興信所『商工信用録31版』大正3年、P345）
- 33)34) 『兜街繁昌記』明治45年、P236、237
- 35) 明治40年9月28日『東京経済雑誌』
- 36) 横浜実業銀行は明治33年3月横浜に設立され、頭取石川徳右衛門、専務石川半徳右衛門ら、大正10年2月豊山銀行に合併（前掲『本邦銀行変遷史』P831）
- 37)38) 前掲『銀行事故調』P57
- 39) 東京興信所『商工信用録31版』大正3年、P38、同『商工信用録38版』大正7年、P44
- 40)41)42) 「九州巡遊記」『九州の現在及将来』大正5年、P370、372、37343)「福岡県貿易論」前掲『九州の現在及将来』、P163

- 44) 「都市評論」前掲『九州の現在及将来』、P711
- 45) 門司築港㈱「設立趣意書」大正9年1月、P2
- 46) 門司築港㈱『第三回営業報告書』、P3
- 47) 前掲『海峡大観』、P43
- 48) 片岡彦治(西区江戸堀通一丁目)は傍士定治らとともに「島、宮崎両氏の意を受けて専ら同社創立に奔走した」(大毎T11.9.23法律に転載)人物で、一字違いの片岡彦次は大正10年5月31日現在の門司築港2,845株主(『第三回営業報告書』、P15)、大正11年5月31日現在の門司築港⑨2,205株主
- 49) 傍士定治は明治8年4月高知県に生れ、高知県議、大阪市主事、東区長を経て(『衆議院要覧』大正13年、P33)大正10年5月31日現在の門司築港600株主(『第三回営業報告書』、P11)、東大阪土地建物監査役(株式年鑑T10、P715)、四ッ橋建物監査役(株式年鑑T10、P715)を兼ねる藤本清兵衛に近い人物で、門司築港「創立当時の黒幕」(T11.4.8大毎)とされた。他に鶏林鉱業、日本ゼラチン各取締役、ライト商会監査役、高知県三区より代議士当選(『衆議院要覧』大正13年、P33)、大正13年8月29日死亡、享年…(『大正14年毎日年鑑』大阪毎日新聞社、大正13年、P706)
- 50) 若木栄助(門司市幸町)は九州建築取締役(『大日本重役大観』大正7年、P488)、後に門司築港監査役(谷口良忠「門司築港(鉄軌道線)・門築土地鉄道沿革史(後編)」『鉄道ビクトリアル』503号、1988年11月、P108)
- 51) 川野直太郎は明治44年出願した大久保軽便鉄道(大正2年却下)発起人総代、谷口良忠氏は「縁故は不明、手続き関係に明るい人物か」と推測(前掲谷口良忠・沿革史(後編)、P109)する。徳島県人として松島との接点の可能性もあろう。
- 52) 佐野茂の告発内容(T10.9.27大毎)
- 53)54)55) 前掲谷口良忠・沿革史(後編)、P109
- 56) 『大正九年度鉄道省鉄道統計資料』監督、P2、18
- 57) 『地方鉄道軌道一覧』昭和7年、P99
- 58) 『地方鉄道軌道一覧』昭和7年、P170
- 59)60) 岡山氏の談話(T10.9.21東朝)。なお前掲『北九州市産業史』では「09年3月大阪の島徳蔵と宮崎敬介は田野浦～曾根の軽便鉄道敷設(豊州軽便鉄道)を出願した」(P93)とする。
- 61) 高橋元秘書の談話(T10.9.21東朝)
- 62)63)64) 大正10年12月5日広島地裁第一回公判での審理(T10.12.13法律)

- 65)69)70) 「問題の人島徳蔵氏」大正9年9月5日東京経済雑誌
- 66) 三鬼陽之助『五島慶太伝』昭和29年、p225
- 67) 『株界五十年史』、p391
- 68) 前掲『北浜盛衰記』p180、大阪屋『株式年鑑』昭和2年度、p526
- 71) 宮崎敬介の元秘書の高橋は「尚今度告訴しようとする佐野某は先月末〈門司築港〉会社の株を確か五株手に入れた人（T10.9.21東朝）と証言している。

第4章 前半期の諸企業関与

百社近くにも及ぶ松島の夥しい企業関与のうち、第4章では比較的初期の事例を取り上げる。公判等で彼の果たした主体的な役割が暴かれた後半の松島系「五大会社」等（第5～8章）に見られるほど松島自身の強烈的な関与は明確にはなっていない。しかし彼がおとなしく単なる並び大名の地位に甘んじていたとも思われず、単に情報が乏しいという理由だけで分析対象から除外することは適当ではない。¹⁾ここでは後半期の企業関与と比較する見地から、資料的に松島の関与に関して若干の情報が得られた12事例のみを採用した。この中に在阪企業が多いのは昌栄貯蓄銀行大阪総代理店との関係であろう。他の相当数の兼務企業の名称は巻末の一覧表、年表を参照されたい。

1 城東木材工業（大正5年8月設立）

城東木材工業は大正5年8月資本金15万円、3,000株、払込7.5万円で設立された。松島系の企業としては松島の機関銀行たる昌栄貯蓄銀行、日本資金信託等に次ぎ、太陽商事等と並ぶ古参企業であった。本店を置いた日本資金信託本店（麴町区麴町4-1）内には*日洋土地興業、*伊豆山偕楽園、*木材倉庫等多くの松島系企業の本店も置かれ、松島グループの一大拠点であったことがうかがえる。取締役は*佐藤松垂（*黒崎電機製作所T8/11②100株主）、*高橋憲次（黒崎電機製作所T8/11 100株主）、*平松茂夫、監査役*金沢周太郎であった。（帝T11、P359）大正13年には代表取締役*戸水寛人、取締役*佐藤松垂、*関良太郎、*清水燮、監査役*田辺二郎、*金沢周太郎とすべて松島の側近で固めていた。（帝T13、P399）

松島らは「松島経営の城東木材〈工業〉会社の無価値の株券を二十五万円で日本土地に売り込み」（S2.10.2東朝）、「大阪計器製作所へ無価値な城東木材工業株式会社の株券一万株（二十五万円）を売り付」（S3.2.25東朝）けた結果、同系の*日本土地（25万円）や*大阪計器製作所1万株（25万円）が城東

木材工業の大株主となっていた。こうした甲社の株式を乙社に持たせ、乙社の株式をさらに丙社に持たせるといった関係会社相互間の一種の「株式持ち合い」が「松島式」と呼ばれる特異な多数会社設立の手法であった。

大正11年7月城東木材工業は*三光木材工業（大正8年12月設立の*紡績木管が改称）を合併し、150万円に増資した。（帝T13、P399）さらに城東木材工業は大正12年3月*木材倉庫会社を合併し、48.5万円に増資した。（帝T13、P399）こうして紡績木管、木材倉庫等複数の関係会社を統合した後に城東木材工業は大正13年3月9日株主総会の決議により解散した。²⁾代表清算人は*戸水寛人（前社長）、清算人は*清水奨（前取締役）であった。規模は小さいが、第8章で後述する日本土地と同様に、多くの関係会社を1社に統合した後に松島の腹心が清算人となって私利を図るという「松島式」の清算パターンがこの城東木材工業の場合もきっちりと踏襲されている。

2 東京リベット製造（大正6年12月設立）

東京リベット製造は*赤松範一、*鈴木錠蔵（第10章2）が発起人となり、合名会社日本製作所（大正4年9月設立）の工場等を5万円で買収し（T6.9.16内報）、造船材料のリベット、ボルト製造を目的として大正6年12月資本金60万円で設立された。大正8年末では本店を南葛飾郡吾嬬町大字小村井511番地に置き、払込44.7万円、積立金4,600円、利益25,056円、配当率12%（通覧P32）、借入金20.4万円であった。³⁾

役員は社長*赤松範一500株、専務*滝野覚400株、取締役*鈴木錠蔵200株、川崎友之介⁴⁾2700株、山田進200株、監査役尾崎元次郎200株、松島肇200株、非役員大株主①加藤市蔵860、榎本武憲⁵⁾500株であった。大正9年では工場（吾嬬町小村井）の製品は「リベット、ボルト」、職工男60、女0、55馬力であった。⁶⁾

3 安全印刷（大正6年12月設立）

安全印刷は明治大学幹事の田島義方が「明治大学及び市内諸学校の講義録其

他印刷物の引受をなす方針」(T 6 .11.21内報)のもとに大正 6 年12月資本金50万円、払込12.5万円で当初は大学系企業として設立された。明治34年明治大学法科で法学を学び、37年卒業した松島も明治大学との縁で田島義方とともに発起人に加わった。その他の発起人は*鈴木錠蔵、萩亮、手塚忠志、吉田長敬、坪田十郎、賛成人は早川千吉郎、若尾璋八、尾崎敬義、橋本久太郎、岩崎惣十郎、野添宗三らであった。(T 6 .11.21内報) 帝国興信所も「相当堅実なる根底有するものの如し」(T 6 .11.21内報)とみたが、「予定印刷工場の買収に齟齬を来して操業に着手する事能ず」(T 8 . 5 .16内報)、内部の革新に迫られた。7 年 4 月*日能喜三郎が明治38年創設した個人経営の日能印刷工場が経営不振で不渡りを出した(商、P 604)のを機に、さらに7 年 4 月*赤松範一が経営する公木社の印刷工場を相次いで買収し、印刷を本格的に開始した。(T 8 . 5 .16内報) 8 年 9 月期には多数の泡沫会社設立中の松島など「重役関係にて会社目論見書、株券等の印刷輻輳し、請負高多額に上り…相当の利益を見込」(T 8 . 5 .16内報)むほどであった。しかし、好事魔多しの譬え通り、買収後、経営が軌道に乗りかけた8 年 7 月27日安全印刷の「職工百余名待遇改善要求⁷⁾」して労働争議が起こり、結果として労働者の要求は「半成功⁸⁾」したとされる。

9 年では麴町区麴町 4-1 (日本資金信託内)、代表取締役松島肇、常務*後藤正基、常務・技術部主任*日能喜三郎(前出)、取締役手塚忠志、柏野孝太、佐藤正次郎、山口圀太郎、監査役*鈴木錠蔵、村上善兵衛(要録T 9、P 248)など松島系役員に一新されており、田島義方の名はない。泡沫会社設立のための道具として直系の印刷会社を確保したものとみられる。その後役員はさらに松島色を強めて*赤松範一、*西条教部、*松永孫七郎、*中村定、監査役*鈴木錠蔵となった。大正13年7月5日「株主總會ノ決議ニヨリ同日解散、清算人の氏名住所*松永孫七郎…*中村定⁹⁾」であり、ここでも「松島式」に解散した。

4 大阪計器製造→大阪計器製作所(大正7年4月設立)

大阪計器製作所(大阪市西区市岡町543)は大正2年3月個人で創業した後、¹⁰⁾

大正7年4月計器製作を目的に資本金50万円、払込12.5万円で設立、大正8年の積立金…円、利益440円、配当率…%であった。(通覧P205)大正9年には払込17.5万円、代表取締役松島肇、取締役*徳永賦、玉田主一、広岡建治、*阪井造酒松、神谷宗八、高田正一、監査役*山本文作、*大久保彦四郎であった。

(要録T9、P48)製品は「圧力機、羅針儀、伝令機及操舵機、熱度計¹¹⁾」、職工男55、女0、6馬力であった。大正10年までに大阪計器製作所と改称、払込30万円、社長大芦義宣(西成郡今宮町)、取締役*戸水寛人(第10章)、*松永隆一、*三島正吉、監査役*山本文作①4,240株42.4%、非役員大株主②松島望660株であった。(要録T11、P47)

この間に同社重役陣は「大阪計器製作所へ無価値な*城東木材工業株式会社の株券一万株(二十五万円)を売り付」(S3.2.25東朝)けるなど、自己の支配する「ボロ会社を種に大阪計器株式会社から約百万円」(S3.2.25東日)を流用したと報じられた。

この大阪計器製作所(資本金50万円)はまず*糸崎船渠(資本金1000万円)が改称した*海運興業を「十一年三月海運興業株式会社を合併、資本金四百万円に増加」(要録T11、大阪P47)したほか、*帝国毛織紡績(資本金1000万円)、*大日本原毛紡績(資本金1000万円)、*日洋土地興業(資本金3000万円)、*九州炭礦(資本金500万円)を順次、大正13年6月(T13.11.11読売)合併して、大正13年6月5日大阪計器製作所は*日本土地¹²⁾と改称し、資本金6500万円(T13.11.11読売)に増加した。この間、*帝国毛織紡績を承継した大阪計器製作所取締役社長戸水寛人に対して帝国毛織紡績株主岡岡静子から「株式引受無効確認並株金交換請求訴訟」(T14.9.18法律)が提起されたが、東京控訴院で控訴棄却となった。

5 日本絹硝子(大正7年4月設立)

日本絹硝子は木村義一、早川兎三郎の共同経営の絹硝子工場(大阪市西区)の「種々研究改良を加ふる必要あり、之れが資金調達策として…組織を変更」(T8.9.27内報)すべく、大正7年4月「絹硝子及硝子製造」(通覧P211)

を目的として資本金50万円、払込12.5万円で大阪市西区七条通3丁目20に設立された。元の経営者の木村が専務、早川らが取締役役に就任した。改組時にプロモーターとして関与した松島も取締役となった。工場を6.5万円で買収し、増産のためさらに200坪の工場を増設したが、休戦講和以来欠損を出し、幹部4名が退社したため、新たに社長に神谷宗八を推し、神谷から2.2万円を借入れ、「目下今後の方策に関し種々苦心中」(T8.9.27内報)であったが、「絹硝子製造事業の前途に関し多少社会の疑惑を招ける模様」(T8.12.23内報③)と報じられた。大正9年では積立金…、利益510円、配当…(通覧P211)と成績不良、製品は「絹硝子板、電灯用カバー及其他加工品」¹³⁾、職工男13、女37、2馬力であった。松島は後に帝国絹硝子取締役¹⁴⁾となっているが、日本絹硝子が改称したものと見られる。

6 摂津煉瓦(大正7年4月設立)

摂津煉瓦は大正7年4月資本金50万円、払込12.5万円で大阪市西区堀江上通に設立された。(T7.7.21内報)代表取締役は松島肇であった。同社は当初大阪市内本庄黒崎町所在の経営難の中谷坩堝工場(同社重役の住山元茂所有)の買収を試みたが失敗、泉州佐野町の日の丸煉瓦工場(藤原猪之助経営)と今宮の山陽耐火坩堝製造合名会社を1.6万円で、紀州のクローム鉾山(田中元七¹⁵⁾所有)を9万円でそれぞれ買収し(T9.2.21内報③)、設備を改善して赤煉瓦月産30万円の生産能力をようやく確保した。大正7年8月から煉瓦製造開始の予定で、「製品の売出遅々たる現状に在れば」「新設の同社としては経営困難」(T7.7.21内報)と観測された。その後の財界不況に加え、耐火煉瓦、クローム煉瓦等「同社製品は何れも原料粗悪なる為製品の品質不良にして殆んど需要なき状態」(T9.2.21内報③)に陥った。松島が頭取の昌栄貯蓄銀行から「一時の融通を受け、局面糊塗し居たるが、其後同社の前途益々不安と見るや<昌栄>銀行は貸出しを拒絶」(T9.2.21内報③)した。「同社と密接の関係を有する」(T9.2.21内報③)松島側の撤退で「全く收拾す可らざる業態」(T9.2.21内報③)になった摂津煉瓦は買収したクローム鉾山主だった田中元七(前出)

らが債権者として整理の上、大正9年1月大正工業に改称した。

7 日本鋼管シャフト（大正7年9月設立）

大正7年9月5日岡野宗太郎個人経営のシャフト製造業、すなわち「岡野工場…機械器具は勿論、半製品及鉄材等に至る迄、全部の権利義務一切を継承¹⁶⁾」して、京橋区南佐柄木町3番地（直後に本店を京橋区惣十郎町12に移転）に資本金200万円、払込50万円で設立された¹⁷⁾。大正8年では積立金8,950円、利益65,845円、配当率10%であった。（通覧P31）

設立時の役員は社長町田豊千代¹⁸⁾②1,000株、専務*福島太明⑤600株、取締役*尾崎敬義⑩400株、三枝代三郎¹⁹⁾⑦500株、岡野宗太郎（旧オーナー）①6,800株、*皆川芳造⑦500株、監査役*倉知鉄吉200株、松島肇⑦500株、仁村清太郎⑦500株、*鈴木錠藏も50株を保有した²⁰⁾。前経営者の岡野は「本社重役にして技師長を兼ね、熱心なる鋼管製作方法の研究者²¹⁾」として働いた。

大阪市東区木野町24に大阪出張所、第一・第二工場を置き、大正7年11月末の預金18.4万円の預け先は「第一銀行、浪速銀行東京支店、*昌栄貯蓄銀行²²⁾」であった。大正9年時点の非役員大株主田部井芳兵衛②1,550、神山喜一郎③1,270、町田豊千代④1,100、寺岡礼三郎⑤870株（要録T9、P56）、大阪工場の製品は「引板鋼管、引抜シャフト、引抜六角棒²³⁾」、職工男63、女1、73馬力であった。大正10年では十五銀行が唯一の配当金支払場所に指定されていた。（株T10、P12）

8 市岡電気工業（大正7年9月設立）

市岡電気工業は「電機器製作の能力増加を刻下の急務」（T7.9.26内報）との見地から払込12.5万円中の7.5万円で大阪市西区市岡町764所在の松本信太郎経営の「松信工場の一切を買収継承して之れを基礎とし」（T8.9.3内報）、7年9月21日大阪商業会議所で創立総会を開催、資本金50万円、払込12.5万円で「電気機械器具の製造販売修理検定」（T7.9.26内報）のほか、「瓦斯部、通信機部、自動車部乃至製紙製糖用諸機械」（T7.9.26内報）など「聊妥当を

欠く」(T7.9.26内報)ほど「頗る広汎多岐に渉り」(T7.9.26内報)、虚飾的と思われるほど多種多様な目的を掲げて設立された。設立時には社長に松島肇が就任し、専務谷口直之、取締役松本信太郎(旧オーナー)、湯川八十吉、千田勘左衛門、山中福之助、監査役張崎素行、望月乙也、豊田輝雄であった。(T7.9.26内報)

同社は1年間に76.7万円を売上げ、8.4万円の純利益、年30%配当を目論んだが、「会社経営の手腕に於て幾分欠如せる傾なき能はざる」(T8.12.26内報③)と見た帝国興信所は「三割の好配を実現するや否やは多少疑問」(T7.9.26内報)と報じた。果して「創立当初より重役間意見の扞格を来し」(T8.12.26内報③)た上に休戦の影響を受け、重役間の対立から8年6月「重役の大更迭を敢行して」(T8.9.3内報)、松島が社長を退任、新たに社長に山中福之助、専務に千田勘左衛門、取締役に松本栄造らが就任した。8年8月の総会では反重役派の株主石井三二馬が新重役を厳しく追及、総会無効と決算否認を主張するなど前途が危惧された。(T8.9.3内報)業界不振の打撃を受け、前期決算で2.6万円の欠損を計上したため、株主間に「此の間不正事実の潜在するなきや」(T8.12.26内報③)の疑惑を招いたため千田専務、松本兄弟が引責辞任し、高工出身の阪本久五郎が専務に就任(T8.12.26内報③)するなど重役の更迭が頻発した。

9年では製品は「紡織機及電気機具」、職工男33、女0、7馬力²⁴⁾、代表取締役山中福之助、取締役松島肇、湯川八十吉、武田孟、監査役望月乙也、谷口直之(元専務)であった。(要録T9、p12)

9 黒崎電機製作所(大正7年12月設立)

黒崎元三は明治32年1月大阪市北区佐藤町9に黒崎電機製作所を資本金20万円で設立し、同所に工場を、大阪市西区靱の信濃橋電車道角に出張所を置いて、発電機、電動機、各種変圧器、配電盤、送風機、抵抗器などの電気機械器具の製造販売を開始し、「製品の優越…電機の信条を以て活動²⁵⁾を続け」た。黒崎元三の個人経営として明治34年12月大阪市東区紀伊国町で電機具を製作販売してい

たが、「従来の工場にては狭隘にして到底世の需要に應ずる能はざる」²⁶⁾ため、大正6年10月元横浜電線製造の工場（北区与力町二丁目411番地）を買収して移転した。黒崎元三の製品は直流電機を中心に各種発電機、電動機、変圧器、配電機、抵抗器、電気工事設計監督であった。東京の諏訪工業を特約代理店として関東方面に販売し、神戸の湯浅貿易²⁷⁾を特約代理店として中国、南洋等に輸出し、年産額80万円に達した。

大正7年12月18日資本金200万円（払込50万円）で「電気機械器具製造」（通覧P202）を目的に²⁸⁾黒崎電機製作所を北区与力町二丁目411番地に設立し、黒崎元三の個人経営を組織変更し、社長に松島肇、専務に黒崎元三が就任した。黒崎と松島の接点は未詳であるが、一般株主には草野姓を含む滋賀県在住者が目立つ。関係が判明した例としては30株主の村上米三郎は*草野儀左衛門（滋賀県浅井郡上草野村）の妹せきの夫の父（人T7、くP58）に当る。これは⑦500株主で草野川電気社長（帝要、T5職P169）の草野儀左衛門が「滋賀県及び外二県の多額納税者数名を重役に推選する予定なり」（T3.12.6保銀）との松島の方針で*昌栄貯蓄銀行監査役に就任したことに派生するものと考えられる。草野のような地方名望家にとっての同行の魅力は「五百株以上の株主に支店を、二百株以上の株主に出張所を委託し、放資権を与ふると共に、特約に依り損失負担の義務を附し、又た五十株以上、百株に至る株主は代理店たるの資格を有すべし」（T3.12.6保銀）との「放資権」付与であった。同行取締役の*篠野貫治（徳島県那賀郡富岡町）が「地方金融の為に尽さん」²⁸⁾と同行富岡代理店長となったのと同様に、草野も同行の代理店を引き受けていた確率が高い。もし草野あたりが「大阪市西区立売堀北通一丁目株式会社昌栄^{ママ}貯金銀行大阪総代理店」（T9.3.14大朝）にも関与していたと考えると、「地方資金を潤沢にし、其産業振興を目的とする」²⁹⁾ために草野が松島から与えられた「放資権」を黒崎電機製作所向に行使した可能性も考えられる。なぜなら黒崎元三の個人企業とは「当社の独特とする直流機」³⁰⁾製品のユーザーとして、草野川電気社長の草野はなんらかの接点を持つからである。あるいは大正7年ころ松島は払戻が困難となったため預金を新設会社への株券に振替えさせるように、預金者・

代理店主に働きかけていたので、黒崎電機株主には昌栄貯蓄銀行預金者が多数含まれている可能性もあろう。

大正8年時点で黒崎電機製作所の資本金200万円、払込80万円、積立金2,850円、利益50,585円、配当率5.3%であった。(通覧P202)大正8年11月時点では当社筋は「当期利益金約四万円…倍加の一割五分内外の配当可能」(T8.11.30内報③)との強気の見込みを盛んに宣伝した。製品は「陸海軍工廠を始め諸官省並に三菱、川北等」(T8.11.30内報③)向けの「電動機、発電機、配電盤及変圧器、モーターゼネレー」³¹⁾、職工男117、女18、100馬力であった。

大正9年時点では払込60万円、社長松島肇②9,042株、取締役黒崎元三①10,853株、*山口文右衛門⑤1,000株、藤本常治郎(大阪)⑦500株、*草野儀左衛門⑦500株、*五百木保義⑦500株、*西条教部⑦500株、*脇田豊吉④1,500株、*山本文作⑦500株、監査役深川重蔵(大阪)⑩350株、*堀内胖治郎⑥550株、*伊藤忍⑮379株³²⁾であった。なお大正11年には*三島正吉も加わっている。

〔表一1〕 松島派の黒崎電機製作所持株推移(単位 株)

期	昌栄貯蓄銀行	松島肇	山本文作	脇田	堀内	伊藤	西条	草野
T8/11	③ 3,000	②9,042	⑦ 500	④1,500	⑥550	⑮379	⑦500	⑦500
T9/11	① 6,400	③5,042	④3,500	⑤1,500	⑦550	⑰379	⑨500	⑨500
T10/5	①10,100	②5,042	③3,500	④1,500	⑧550	⑦699	⑩500	⑩500

(出典) 黒崎電機製作所『第二回営業報告書』、P1、第四回、P11、第五回、P12

株主名簿上の*昌栄貯蓄銀行、松島肇一派の黒崎電機持株の推移は〔表一1〕のように昌栄貯蓄銀行の持株が每期激増している。しかし松島肇の持株が4,000株減少するなど、単に松島派の間での名義書換えにすぎない。おそらく松島派の株主の大半は実質的には昌栄貯蓄銀行の持株の名義借りであろうと想像され

る。

T 8/11期の銀行預金（恐らく昌栄貯蓄銀行向）が23.7万円もある反面、借入金（恐らく昌栄貯蓄銀行より）も9.8万円あるという極めて非効率で不自然な財務体質が見られる。損益計算書には金利が内訳として表示されていないが、預金と借入金の極端な両建に伴う当社の金利負担が大きかったものと思われ、それだけ恐らく一行取引のメリットを昌栄貯蓄銀行が享受していたと想像される。元個人経営者の黒崎元三取締役を除けば役員は松島派が独占し、株主も4万株中の半数を松島派で確保していた中で、全権を委任された松島社長が昌栄貯蓄銀行側の利益を最大限に迫及した結果と思われる。こうした松島の独走を元オーナーの黒崎が黙認していたのは技術志向の人物ゆえか、はたまた全権を委任した松島と何らかの共謀関係にあったかのいずれかであろう。

しかし一般株主の森助治郎³³⁾による黒崎電機への会社設立無効の訴状によれば「会社創立までに一万二千三百二十七株払込ありたるのみにて、而も内金二万円は約束手形で払込の形式をとり…第一回払込総額五十万円の約七割五分弱は未済のまま…故意に無理な会社を設立したもので、会社は其の後事業を遂行することも出来ず…善良なる株主を苦しめて払込を強要」（T11. 5.11徳毎）したとされた。徳毎記事の見出しは「松島式で作り上げた黒崎電機訴へらる」（T11. 5.11徳毎）で、松島がオーナーを巧みに誘導して個人企業の法人化を行ない、同系銀行・企業・株主相互間の不明朗な架空取引により「無理な会社を設立」する手法を「松島式」と表現したものであった。＊昌栄貯蓄銀行、松島肇、＊山本文作、＊堀内胖治郎、＊伊藤忍、＊西条教部、＊草野儀右衛門ら松島派の持株約2万株分は森助治郎の告発した「約束手形で払込の形式」をとった空株に該当するものと見られる。訴状によれば「善良なる株主」による真性払込株は12,327株にすぎず、残りの27,673株は払込未済であるとされる。訴状内容が正しいと仮定すれば松島派約2万株を超過する元オーナーの黒崎持株10,853株も昌栄貯蓄銀行を駆使した空株の疑惑すなわち元オーナーと昌栄貯蓄銀行・松島側との共謀関係があったことになる。

その後の訴訟の経過を示す資料は未入手であるが、大正13年では取締役＊山

本文作（＊関西計器製作所代表取締役）、＊松永隆一、＊西条教部、＊内田守、監査役松浦守一、＊森依信（＊関西計器製作所監査役）の関西計器製作所（大正14年3月＊大阪計器と改称）と殆ど重複する松島派で占められていた役員陣（帝T13、P129）が大正13年には＊内田守を除き総退陣し、代表取締役内田守、取締役栗林慎二、監査役田原村一、松浦守一、牧村希一郎に交替した。（帝T14、P131）

さらに大正15年1月神戸で黒崎電機と「同種ノ営業ヲナセル」³⁴⁾中井関蔵が新たに社長に就任して、40万円もの松島時代を含む「前経営者時代歴大ナル繰越損失金ノ銷却」³⁵⁾のため「社長以下…白熱的努力ヲ以テ…新生面ノ展開ヲ企画」³⁶⁾した。大正15年5月末の黒崎電機の借入金30.2万円は中井社長からの新規借入8万円と従前分の22.2万円からなっていた。その大半は昌栄銀行と思われるが、後者の中の少なくとも「松島肇分五、二〇〇・〇〇〇、合資会社山本文商店分五、二五〇・〇〇〇ハ係争中ニ属スル債務」³⁷⁾であって、「前経営者時代」³⁸⁾からの負の遺産がなお清算されずに「係争中ニ属スル債務」として一部残っていた。大正15年5月末には「未決済勘定」34.9万円を整理し、同額の「未決済勘定整理損」を計上した。こうして昭和2年5月期には「漸ク大体ノ整理ヲ完了シ…初メテ利益ヲ収得」³⁹⁾した。その後、少なくとも昭和4年時点までは黒崎電機製作所（大阪市北区与力町）は電気機械製造業のうちのモーターを主力として操業を継続していたことが確認できる。⁴⁰⁾

10 生駒土地（大正8年9月設立）

生駒での「別墅若くは住宅経営を目的として」（T8.8.26内報）、井上千吉、⁴¹⁾上田治郎、池田与樹、「宮崎敬介、藤本清兵衛、＊福井甚三氏等発起に係る生駒土地会社（資本金百万円）は〈大正8年8月〉十八日発起人回を開き、一般公募せざるに決し、九月五日一株十二円五十銭の第一回払込徴収の上、創立総会を開く筈」（T8.8増田4-25）と報じられた。大正8年9月27日資本金100万円、払込25万円で設立、株主数は大正9年9月期で192名、大正10年3月期で190名（株T10、P733）、本店は大阪市東区北浜1-35、社長＊福井甚三、常務池田

与樹、取締役井上千吉、上田治郎、*小野寺道夫、監査役江森碌郎⁴²⁾、松島肇、西田藤吉であった。(要録T9、P15)予定経営地は奈良県生駒郡生駒町の大軌生駒駅約二丁の宝山寺付近の「大軌電車線路に副ひ、老樹鬱蒼として昼尚ほ暗く、谿川の流清く土地高燥にして…風光頗る絶佳」(T8.8.26内報)の15,755坪であった。大正10年3月期では払込金25万円、地所20.9万円、建物2.0万円、仮払金5.7万円、工事費0.8万円、借入金5万円、当期収入は僅かに0.1万円で、当期損失0.2万円の開店休業状態であった。(株T10、P733)大正10年6月6日3円払込を行ない、払込資本金は31万円となった。(株T10、P733)生駒土地は大正12年12月「借金のため行詰」(T15.4.5D)っていた摂津土地、四ツ橋建物と合併し、都土地を設立した。

11 自動車興業 (大正8年12月設立)

大正8年12月18日ガストン・ウキリアムス・エンド・ウキグモア社員の宮本茂実⁴³⁾を創立委員長として*梅原文次郎、*宮本巖、*栗山博、藤村万次郎、*高山襄坪、斉藤初太郎、稻茂登三郎⁴⁴⁾、野崎舜三⁴⁵⁾らが発起人となり、軽量小型の「自動車、軽便自動車、自動自転車ノ製造販売」(T9.1.31藤本)を目的とし、自動車を試作中の東京機械合資の工場設備一切を12万円で買収(T8.12.9内報①)、「小型自動車製造を目的とし資本金百万円を以て計画中なりし自動車興業会社にては創立総会を開き…取締役宮本茂実(社長)、専務藤村万次郎」(T9.1.5増田5-1)らが役員に就任した。

自動車興業は大正8年12月「自動車、自転車製造其他」(通覧P21)を目的として資本金100万円、払込25万円で深川区西町34に設立された。大正11年では本店神田区今川小路2-15、取締役宮本茂実、藤村万次郎、*高山襄坪、*宮本巖、池田重一、武樋長次、石崎栄蔵、監査役斉藤初太郎、内田清吉、*栗山博、*中村定、支配人*秋山貢であった。(帝T11、P355)

12 日下温泉土地 (大正9年1月設立)

日下温泉土地は大正9年1月30日大阪府中河内郡孔舎衙村大字日下の大阪電

気軌道日下停留場の北方約1丁の3.5万坪の山林を買収し、「土地建物ノ売買賃貸借、温泉浴場ノ経営」(T9.3.6 藤本)を目的として資本金150万円、3万株で設立された。⁴⁶⁾ 発起人の乾吉次郎らは「盛んに同経営地の風光明媚を誇」(T8.12.13内報③)るが、帝国興信所は「荒蕪なる山野と云ふの適切なる地点にして…同社の計画が全然真摯を欠けり」(T8.12.13内報③)と批判した。社長には松島肇、常務には福本藤太郎(京都市上京区)が就任した。後年の「予審決定書」によれば「大正九年一月資本金百五十万円(四分の一払込み)の日下温泉土地株式会社の創立計画に当って、株主を募ったが、僅かに六千株七万円しか払込がないので、親戚渡辺秀外二十四名の他人名義を冒用し、株式申込書三千九百五十枚を偽造し…創立総会に提出、検査役直江駒蔵等の検査に供し」(T14.4.26徳毎)たほか、大正9年2月から3月に「右株券を正式に払込んで有望な株だと欺き…古橋滝蔵に売却」(T14.4.26徳毎)したとされる。

大正9年6月時点で株主数172名、払込37.5万円(@12.5円)、84,990坪の土地勘定39.3万円(@4.62円/坪)、温泉勘定はわずか0.1万円、借入金4.9万円、役員は松島肇が退任済みで常務福本藤太郎、取締役理事竹村常五郎、佐野逸三、梅村鉄之助、藪内藤之助、山本辰雄、堂本繁十郎、監査役野崎舜三⁴⁷⁾、汐巻倉治、宮崎固作であった。(株T10、P736) 大正11年時点で払込48万円、役員は総退陣したため、代表取締役湯川義夫、取締役水垣愛造、高橋源七、上野実、西村末次郎、亀井菊太郎、浦井橘次郎、監査役北野泰、安田良作、福原金吉、若井藤吉、支配人花田長吉に変更されていた。(要録T11、P82)

日下温泉土地株主である小阪村の清水清は元社長の松島ほか13名を文書偽造行使等で告訴した。(T14.4.26徳毎)裁判に持ち込まれた結果、大正14年になって日下温泉土地は「幽霊会社と認められ設立無効の判決」(T14.4.26徳毎)が出された。

- 1) 松島は当初は当該企業での役職、肩書きの有無にかかわらず、実質的に企業プロモーターとして企業設立、創業過程、とりわけ土地、鉱区等の資産取得に深く関わり、多額の創業者利潤を獲得することを狙っていたと思われる。最終段階で“清算

人利潤”をも獲得・享受して、当該企業の全期間にわたって無機能資本家を収奪するシステムは彼が後に開発した経営革新の一つであろう。

- 2) 大正13年10月2日官報号外、P 47
- 3) 5) 東京リベット製造『第四回営業報告書』T 8/12、P 5、要録T 9、P 109
- 4) 尾崎元次郎(静岡県)は静岡銀行監査役ほか(帝T11職P118)
- 6) 『工場通覧』大正10年、P 727
- 7) 8) 『財界二十五年史』大正15年、P 448
- 9) 大正13年7月21日登記東京区裁判所(大正13年10月2日官報号外、P 45)
- 10) 11) 『工場通覧』大正10年、P 709。近隣の*市岡電気工業は市岡町764
- 12) T13. 9. 19官報第3624号、P 520
- 13) 『工場通覧』大正10年、P 788
- 14) 予審決定書(T 9. 12. 20法律)
- 15) 田中元七(大阪市南区)は「関西切つての利権師」(清水啓次郎『私鉄物語』昭和5年、P 191)と噂された「その道の強か者」で、東大阪電気鉄道发起人総代のほか生駒に至る沿線の土地を抱え込んだ城東土地の専務で、生駒聖天土地、大阪千日前土地建物、東洋羊毛各社長のほか大阪天王寺土地、六甲土地各取締役、有馬住宅土地監査役など多数の土地会社に関わった投機家であった。(田中の弟の胡四郎も九州新天地土地建物、城崎温泉土地建物などに関係)
- 16) 『大日本銀行会社沿革史』東都通信社、大正8年、P 96
- 17) 20) 22) 日本鋼管シャフト『第一期営業報告書』
- 18) 町田豊千代は日本鋼管シャフト創立総会の議長、大正2年2月設立の天塩炭硯合資無限責任社員(諸T 5、P 334)、浦賀船渠社長、日本皮革、東京毛織物、日本製靴各取締役、資産額50万円(渋谷隆一ほか「大正初期の大資産家名簿」『地方金融史研究』第14号、1983年4月、P 55)、東京鋳鎖製造社長、大正商船代表、日本皮革、日本製靴、東京煉瓦、東北電化、明治紡織、東洋電気各取締役(紳T11、中P131)、マスラ鉄工取締役
- 19) 三枝代三郎(銀座3)は洋小間物商(商工T 3、P 460)、*東亜織布200株(東亜織布『第二回営業報告書』T 7/11、P 16)
- 21) 『大日本銀行会社沿革史』、P 96
- 23) 『工場通覧』大正10年、P 744
- 24) 『工場通覧』大正10年、P 630
- 25) 『電気大観』大正5年、P 62

- 26)27) 『大日本実業家名鑑』大正8年、P76
- 28)29) 『徳島名鑑』徳島日日新報社、大正4年、さP17、まP2
- 30)32) 黒崎電機製作所『第二回営業報告書』T8/11、P1、株主名簿、要録T9、P82
- 31) 『工場通覧』大正10年、P637
- 33) 森助治郎（大阪）はT10/5⑨306株主（黒崎電機製作所『第五回営業報告書』、P12)
- 34)35)36)37)38)39) 黒崎電機製作所『第十二期営業報告書』昭和2年5月
- 40) 商工省の昭和4年工場調査（『全国工場通覧』昭和6年、P448)
- 41) 井上千吉は大阪市東区清水谷西、貿易商、日本家禽土地専務、城南土地、東大阪土地各社長、愛国貯金銀行、芦屋土地、日下住宅、生駒土地、台湾芋麻農産、伊丹住宅土地、生駒電気鉄道、有馬鉱泉土地、垂水土地、信貴生駒電鉄、新大阪土地、浪速自動車各取締役、四ッ橋建物、極東磁業各監査役ほか
- 42) 江森碌郎は明治40年10月3日設立の関西競馬倶楽部理事、北大阪電鉄の最初の発起人総代で初代北大阪電鉄監査役(帝T8P172)、浪速ビルブローカー銀行監査役、巴商事社長、大和索道、広島電灯各取締役(帝T8P172)、発動機製造監査役(株T8、P568)、大正5年1月秋田石油鉱業発起人・賛成人(T5.1.29読売広告)
- 43) 宮本茂実は大正8年7月坂田実（南九州採炭発起人）、*宮本巖らと北海採炭を設立、取締役。
- 44) 稲茂登三郎は帝国火災専務、群馬県の旧家木暮武太夫の子、東京信託取締役、内国貯金銀行監査役(帝T5職P15)、日本絹糸紡績取締役(要T15、P38)、大正6年3月岡本米蔵主宰の日米興業賛成人(T6.3.22読売)、昭和2年時点で播美鉄道監査役（『帝国鉄道年鑑』昭和3年、P454)
- 45)47) 野崎舜三は*日下温泉土地監査役(株T10、P736)、*自動車興業発起人(T8.12.13内報③)
- 46) 近傍の日下住宅（大正10年1月設立）は藤本清兵衛が監査役、井上千吉、円山兼吉（藤本商事取締役）らが取締役の藤本系企業であった。このほか藤本清兵衛が相談役となっていた生駒電気鉄道も藤本清兵衛兼務先の役員等が顔を揃えていたが、出願の時期が大正バブルの破裂直前で、株式の大暴落の後になって免許されたため、「一部の買収契約を終えたにとどまり、事業は殆んど休止状態」（『信貴生駒電鉄史』P16）となった。

第5章 糸崎船渠事件

糸崎船渠は広島県の小規模な船渠建設の企画にすぎないが、松島が自己の名を出さずグミーの著名資本家を担いで一流新聞の広告等を利用して幅広い投資家を呼び込んだ泡沫会社製造の事例である。糸崎船渠事件は松島が関与する一連の経済事件（次章以下）が次々に発覚する出発点・契機となった点で重要である。

1 糸 崎 船 渠

糸崎船渠は大正8年9月資本金350万円で設立されたが、この「糸崎船渠の總會に於て株主が〈松島の〉裏面を窺いたのに始まって」（T9.12.14大朝）松島が関与する一連の事件が発覚したのであった。同社が工場を立地しようと計画した広島県には古くから安芸国能地に能地船渠株式会社が存在しており、また糸崎地方にはすでに大正6年7月創業の木造汽船を製造する糸崎造船¹⁾の分工場が広島県豊田郡瀬戸町で操業するなど、中小造船・船渠業者が乱立していた。大正7年6月ころ絶頂期にあった造船界も第一次大戦の休戦とともに「造船所ノ活況ハ俄然消失ノ態ヲ呈シ、木造造船所ノ没落ヲ始メトシテ新設造船所ハ殆ント全滅セントスルノ悲運ニ²⁾陥」³⁾った。

こうした造船界逆境の中であって大正8年4月「東京の肝付男、黒川工学博士、十川工学士、当市の藤野正年、*阪井造酒松、小西信七郎氏等の諸氏主となり、資本金二百万円（全額払込済）にて糸崎に船渠経営をなすべき筈の処、時局変化のため当初の計画を縮小し資本金を五百万円とし、四分の一払込のみにて一千噸級の修繕をなし得る設備をなす事としたり」（T8.4増田4-11）と報じられた。船渠建設は「米国技師ゴーハム氏、工学士増田知藏氏等設計監督の任に当り」（T8.7.27内報）、「工場工事は着々進行し、目下第一回埋立認可面積約一万七千坪内外の土工中にて、今回同社成立と共に在来発起人の個人事業たりし工場全部を移して会社の事業」（T8.10.3内報）とするとした。8年

5月16日糸崎船渠創立委員長肝付兼行（後述）、発起人・相談役黒川勇熊（大阪、工学博士）の株式募集広告が読売、東京朝日等に掲載された。資本金1000万円、2万株募集、第一回払込金12.5円、払込期限は大正8年6月5日であった。創立事務所（創立後の本社）は大阪市南区鰻谷西之町12に置かれた。⁴⁾

募集広告には「吾人が…真面目に船渠即ち船舶の修繕事業を経営せんとする所以…糸崎は…瀬戸内海の中枢に位し、海陸の交通至便…岸壁の水深五十呎、地盤堅牢にして自ら天然の一大船渠たり…当会社は…本邦有数の技術家を網羅し、東洋唯一の模範船渠たらしむると同時に、無線電信を設置し最も進歩せる救難事業を兼営すべし。…会社成立後日ならずして収益を挙げ得べく、設備完成の上は優に二割五分以上の…第二期以後は最低年一割二分の配当を保証⁵⁾し得、所謂時局会社等と全然其の選を異にせり。是れ最も安全有利なる世襲財産として江湖に推薦する所以也」（T 8.5.16読売）と謳った。糸崎船渠は「船渠及救難事業⁶⁾、船舶、汽機、汽缶、機械類の新造修理及売買、之に付帯する一切の業務」（T 9.3.10大朝）を営むことを目的とした。糸崎船渠発起人には増田信一⁷⁾、⑬星野錫、*横山一平、蔵内次郎作、*山口文右衛門、⑯*加島安次郎、*堀内胖治郎、南郷三郎⁹⁾、*原真一¹⁰⁾、⑰宮崎敬介など「虚業家」の要素を感じさせる人物の名が並んだ。また賛成人にも松方正雄¹¹⁾、納富陳平¹²⁾、⑱島徳蔵（前出）などの名が並んでいる。（○数字は『実業之日本』誌調査の「日本重役肩書数番付」¹³⁾による兼務会社数）

池島民理は当時の「発起人共は…実業家を勝手に発起人の顔触れ中に加へ¹⁴⁾」る悪弊も散見されたとするから、上記の発起人・賛成人が真実糸崎船渠に賛同していたかは保証の限りでない。公募した2万株には「約五倍内外の応募あり、好況裡に締切を了」（T 8.7.27内報）したとの発表とは裏腹に、松島は公判で「株式総額二十万株中発起人が引受ける十八万株は中途発起人が脱退したため、十一万株の引受人がなくなり…¹⁵⁾」と供述しており、やはり発起人は名目的なものが大半であった可能性もあろう。

阪井造酒松（大阪市西区三条通）は「斯業の経験に富める」（T 8.10.3内報）糸崎船渠の「糸崎駐在の専務」（T 9.3.11大朝）として「糸崎工場経営…自ら

これに当」(T 8.10.3 内報)った人物であるが、後年の公判では「私は資産なく…創立總會終了後入社した…私が引受けた〈糸崎船渠〉一千七百株は某発起人が引受ないのを譲り受けたもの¹⁶⁾」と供述した。

前述の池島民理は「先づ顧問相談役などとして休職の老大官、老学者連中を麗々しく挙げ¹⁷⁾」るのが通例とするが、糸崎船渠の場合は創立委員長肝付兼行の名を麗々しく掲げた。肝付兼行は嘉永6年3月鹿児島藩士肝付兼武の長男に生れ、海軍で明治33年ダンソン著『将来の海軍と商業』を翻訳するなど著作活動も行ない、海軍中将、日露戦争の功により明治40年男爵、大阪市長、貴族院議員(T 9.3.15読売)、日本公債社長(諸T 5、上P 91)、日本軽銀製造取締役(諸T 5職P 255)、大正5年1月秋田石油鉱業創立委員長(T 5.1.29読売広告)、大正5年4月13日創立の秋田石油鉱業相談役¹⁹⁾、8年11月*梅原文次郎を創立委員長、蔵内次郎作を相談役とする勝浦炭砒賛成人(T 8.11.26内報③)、8年11月大野炭砒発起人(T 8.11.30内報①)、大正11年死亡し、長男の肝付兼英が家督を相続した²⁰⁾。

さらに池島民理は「次に創立委員として名も無き三四の連中をこそと掲げ…経営の主脳たるべき発起人の名は只の一人、夫も隅の方へ小さく御義理に載せて居る²¹⁾」と述べるが、しかし不思議なことに松島自身は「発起人とならず²²⁾」、昌栄貯蓄銀行の関係者すら只の一人も発起人・賛成人には含まれておらず、糸崎船渠の株式申込所の中にも大正6年「貯蓄事務の外、一般銀行業務を開始」(T 6.1.19読売)した昌栄貯蓄銀行の名はない²³⁾。しかし糸崎船渠の創立過程では「肝付兼行氏を創立委員長に推し、松島肇氏を中心として…創立計画あり」(T 7.10.15内報)と中心人物とされ、糸崎船渠事件発覚の当初から「同会社の実権を掌握せりと噂さるる」(T 9.3.10大朝)「松島氏は糸崎船渠の相談役なれど、創立には大に奔走し、此外多数の会社の重役たり。尚事件は糸崎船渠意外に進展すべし」(T 9.3.10大朝)と観測されていた。これは大正8年ごろ昌栄貯蓄銀行が破産寸前に追い込まれた時、「東京地方裁判所検事局で、今後は会社事業に絶対に関係せぬとの証言によって不起訴となった²⁴⁾」ため、少なくとも表立って堂々と発起人に名を連ねられない事情にあったものと思われる。株

式申込所の中の大野銀行（東京支店、京都支店）は大野伝兵衛が経営する同族銀行であったが、「松島より糸崎船渠の空株補填の情を打明け、八十万円の割引手形を発行せず、松島に対し行用を以て貸与へた²⁵⁾」とされるほど親密な銀行で、松島自身も「大野銀行、昌栄貯蓄から八十五万円の為替手形を作って割引貸付を受けることは創立委員長の肝付男爵と相談した」（T10.12.13法律）と供述している。松島は九州炭礦の場合でも「自分は九州炭礦の創立者でもなければ重役でもない」（T9.7.27東日）と記者に語ったが、糸崎船渠の公判でも「発起人とならずして同会社を統括せし事実を否認」（T10.12.13法律）し、「創立者でもなければ重役でもない」態度に終始した。

糸崎船渠の役員は社長肝付兼行、常務取締役*阪井造酒松、*西条教部、*福井甚三、監査役*日能喜三郎、相談役松島肇であった。糸崎船渠は「創立以来株の募集思はしからず、従って株金払込十分ならずして、未だ事業に着手せず」（T9.3.10大朝）とされた。糸崎船渠は2月20日付で次のような「起工式挙行広告」を出稿する陽動作戦を展開した。「当会社事業進捗に付本月二十五日午前十時広島県豊田郡小佐木島現場に於て起工式挙行候…追て過般当社に関する新聞記事は事実相違の点頗る多く、世間の誤解を招き迷惑尠からず候に就ては進んで帳簿其他の書類を提出し当局の査閲を受けたるに何等の欠陥なきことを認められ候間、何卒御安意被下度為念申添候」（T9.2.24内報④）

「糸崎の対岸」（T9.3.11大朝）にある広島県豊田郡小佐木島の工場建設に関与する糸崎船渠の現地糸崎事務所員は記者の質問に対して「坪三円位のもの、五十円にも暴騰する有様で、土地買取には尠からず困難を感じました。それに従来工場の請負人たりしもの〈田中組〉を或る事情の為に他の請負業者〈水野組〉に変更しましたので、種々中傷を受けた模様で、先月にも一度其筋の取調を受けました。然し、同く2月二十五日には起業式を挙行し、目下着々事業に着手の段取」（T9.3.10大朝）と答えた。しかし翌日の大朝（尾道電話）は「二月二十五日起工式を挙げたるも、工事は殆んど進捗せざる模様」（T9.3.11大朝）と社員証言を打ち消した。

2 糸崎船渠事件

前掲「栄華物語」は糸崎船渠事件について「*糸崎船渠、*日本緬羊、*帝國毛織、*大日本原毛、南洋製糖^{ママ 27)}の会社騒動は今尚世人の記憶に新なものである…若しあの景気がもう少し長く続いたら、彼れ〈松島〉の悪辣手段は何処まで増長するか知れなかったらう。然も天は遂に之れを許さず、端なく広島で糸崎船渠事件の為に訴へられ、其内容が暴露し…世の耳目を聳動した」(T13.12.21徳毎)とする。

糸崎船渠事件は大正9年3月9日「広島地方裁判所より一検事来阪と共に大活動の開始に着手したるが、予審判事一行は西区江戸堀北通り四梅原鉦業部大阪支店…の家宅搜索を為すと共に多数の証拠書類を押収し、秋山予審判事の一同行は大阪市南区鰻谷西一の糸崎船渠株式会社に至り…帳簿及書類を押収」(T9.3.11読売)したことからはじまった。そして「松島肇、*伊藤忍、*梅原文次郎、*今中富三郎の四名」(T9.3.12読売)ら同社重役から末端の会計係まで当局の取調を受けた。「自分は社長と云ふ名義ばかりで深い事は知らぬ」(T9.3.15読売)と名義貸をあっさり認めた肝付兼行は記者に対して松島の嫌疑は「糸崎船渠の外、阿波の運輸会社買収問題、梅原は九州の炭坑問題に就いてであらうと思ふ」(T9.3.15読売)と語った。当時新聞が報じた事件の核心部分の「株券払込金及重役持株払込金」(T9.3.11時事)の具体的内容は次のようなものであった。「梅原鉦業部大阪支店主人…梅原氏は九州其他に於て多数の炭坑を有せるものなるが、糸崎船渠株式会社の顧問たる松島肇の勧めに応じ、其所有に係る炭坑を抵当と為し、同社株券七万五千株を買入るる為め、其金員を松島氏の経営せる東京市麴町区*昌栄〈貯蓄〉銀行より借入れた。然るに右貸借は同銀行が目下経営難にて整理中なるを以て、単に帳簿面のみの貸出しと為せり…松島氏は其関係せる諸会社より巧に資金を融通し新会社を創立し…居るものの如し」(T9.3.11時事)

阪井元専務も公判で糸崎船渠は「定款を変更して、鉦区を買収し、梅原氏が鉦区を売払った金で糸崎船渠の七万五千株を持って入社した²⁸⁾」と上記記事を裏

付ける供述をした。また梅原自身も公判で「糸崎船渠の株式を七万五千株を持ったことを認め、全部松島氏を信用したことだから細かなことについて万事松島氏に委してをったから…〈糸崎船渠〉会社成立を援助しやうなどとのことは覚えがありません²⁹⁾」と供述した。

鉦区を買収した糸崎船渠は、同時に定款を変更して海運業経営をも計画、「四国共正海運会社³⁰⁾を買収するに当り、合併の形式をとり、代金支払には三株に一株の割にて〈糸崎船渠〉会社の株式を割当」(T 9. 3. 10大朝)てた結果、大正8年12月末現在、引き継いだ三福丸を所有していた。

事件発覚後の大正9年10月7日開催の糸崎船渠総会で松島系の重役側は「飽く迄内部の暴露を恐れ一気呵成に解散を決議せん」(T 9. 10. 8東朝)と解散に動いた。これに対して、一般株主の過半数は「内容の如何さへも説明せず、重役側が現在の儘解散し、自分等自ら清算委員となり、旧悪を闇々裡に葬らんとするは不当なり」(T 9. 10. 8東朝)との態度であった。結局「内容の精査を行ひ、然る上にて解散すべきや否やを考察し、若し解散すべしとならば、相当信任ある株主中より少くとも其の半数は清算委員として出すこと」(T 9. 10. 8東朝)を決議して散会した。

しかしその後も松島側は「重役会にて解散を執行せんと東京に総会を開」(T 9. 10. 15東朝)くなど解散を強行しようとしたが、「糸崎赤松哲二郎氏等³¹⁾一派の関西に於ける株主、専務取締役阪井造酒松氏等加はりて極力反対した」(T 9. 10. 15東朝)結果、糸崎船渠は「今や松島派對阪井派の争ひとなり、阪井派は…再び臨時総会を開くことを強要し、地方株主に対し…左の檄を飛」(T 9. 10. 15東朝)ばした。阪井派の要求事項は「一、松島肇外現任重役全部を解任する事。一、資本金一千万円を四分の一即ち二百五十万円に減し、従来³²⁾の四株を一株に合せて払込済と為す事」(T 9. 10. 15東朝)であった。こうした反松島の一環として大正10年9月大津の会社員である留岡武³²⁾は松島を相手どり「糸崎船渠株式会社の株式一百株主を自分に擱ませたが、右株式は価値がないもの」(T 10. 9. 23大毎)で、「法律上認めざる同会社の株式代金を返還せよ」(T 10. 9. 23読売)と1250円返還の付帯私訴を提起した。留岡は「資性剛直にして…如何なる難事

に遭遇するも敢て意に介せず奮闘する」³³⁾薩摩人であった。

3 海 運 興 業

糸崎船渠は大正11年にはすでに海運興業へ改称済み（要録T11、大阪P59）で、本店は大阪市北区中之島五丁目、資本金350万円、払込87.5万円、社長*戸水寛人、取締役*鈴木錠蔵、横田堅三郎、*松永隆一、監査役*日能喜三郎、*五百木保義、*山本文作であった。（要録T11、大阪P59）

海運興業は大正11年3月には*「大阪計器製作所へ合併解散」（要録T11、大阪P59）した。すなわち大阪計器製作所は「十一年三月海運興業株式会社を合併、資本金四百万円に増加」（要録T11、大阪P47）、大正11年4月「海運興業ト大阪計器製作所」³⁴⁾とが合同した。

- 1) 『日本船名録』明治38年、P542
- 2) 『工場通覧』大正10年、P693
- 3) 日本銀行調査局『本邦財界動揺史』『日本金融史資料 明治大正編』第22巻、P425所収
- 4) 大正9年時点では浪速土地、摂津土地、網島土地、阪北土地、沖縄炭砒、信越水電など、藤本清兵衛[松島が監査役の*城南土地社長]の関係事業多数がここに本店を置いた「四ッ橋建物会社内」(T9.3.10大朝)に置かれた。四ッ橋建物監査役は門司築港「創立当時の黒幕」(T11.4.8大毎)とされた傍士定治。創立事務出張所は東京市麴町区麴町四丁目4-1(*日本資金信託、*日洋土地興業、*伊豆山偕楽園の各本店に一致)
- 5) 「大阪には近年利益配当保証などの文字を標榜して麗々しく新聞に広告し、田舎人を釣込み不正を働く現物商少からず。心あるものは密に其筋の取締を希望せしが、本<大正10>年十一月に至り石井正忠商店なるもの検挙せられたり。其取込み金額数十万円に達し、被害範囲の広きと、詐欺手段の巧妙なるとは世人を一驚せしめたり」(『三十年之回顧』P408)
- 6) 海難救助事業は山科礼蔵らが³⁵⁾大正6年に日本海事工業(大阪、資本金500万円、払込300万円)を設立して以来注目された新規分野で、糸崎船渠も「当所近海が従来遭難事故の頻発に徴し可成り有利事業」(T8.3.13内報)と見たようだが、「常

時救助船…潜水夫等を用意して海難の来るのをまってる」(東京朝日新聞編『経営百態』大正15年、P136)ため、朝日新聞は「根が浮いた商売だから収入の割合にいつも貧乏で、会社の利益も常に浮動して見当が付かない」(前掲『経営百態』、P137)とする。

- 7) 増田信一は明治14年8月増田信之助の長男に生れ、明治14年創立の大阪製銅を増田信之から譲り受け、35年5月増田合名会社と改称(『大阪財界一百人』P310)、合名会社増田銀行業務担当社員、増田ビルブローカー銀行社長、買収した関西信託社長。実弟の増田政治は増田ビルブローカー銀行取締役、関西信託常務
- 8) 星野錫は*日東炭鉱発起人・相談役700株、東京選出代議士、東京米穀商品取引所理事、池上電気鉄道発起人・賛成人100株主
- 9) 南郷三郎は貴族院議員南郷茂光の次男に生まれ、明治33年東京高商卒、日本棉花入社、社長の田中市太郎に認められ、田中市兵衛の孫娘と結婚、日本棉花の幹部となり、大正5年時点では大阪莫大小紡織、神戸棧橋各社長、日本棉花、東洋製紙、大阪海上火災各監査役、日本薬品工業各取締役(帝T5、職P148)
- 10) 宮崎敬介は慶応3年11月大阪の角中某の子に生まれ、幼時に熊本県天草の宮崎某の養子となり、師範学校を卒業後、大阪の川口の三一神学校、東京築地の立教学校に入学、米国で神学を修め帰朝してから大きく方向転換し明治33年東株仲買人となるも失敗し36年廃業、大阪堂島米穀取引所に雇われ高倉藤平の手代となり、米穀取引所支配人から異常な出世をとげ、大正11年時点では大阪株式取引所常務理事、大阪電灯、大阪土地建物各社長、大同電力副社長、上海取引所理事、漢口取引所、キャバレーツパノン、大日本窯業各取締役、日本信託銀行、天津取引所、木津川土地運河、ヤマトブロック建材、日支食料、亜細亜興業、東華紡績各監査役。
- 11) 松方正雄は松方幸次郎実弟、生保証券9900株出資の福徳生命社長、豊川鉄道取、生保証券役員、大阪野球倶楽部初代会長
- 12) 納富陳平は元北浜銀行取締役支配人、播州鉄道社長の伊藤英一と組んで浪速信託、加古川製紙各取締役、播州鉄道監査役、稗島土地社長、垂水住宅土地各取締役、浪速信託土地取締役、木津川土地運河監査役、摂陽銀行400株、東洋毛糸紡績390株、播鉄1000株、計1780株所有(『全国株主要覧』T8、中P390)、福岡県郡部選出代議士として衆議院信託法案外四件委員会委員、九州軽便鉄道、北九州鉄道監査役(人T14、麻島昭一『日本信託業発展史』P114)
- 13) 大正12年1月15日『実業之日本』、P80
- 14) 17) 21) 池島民理『株式会社裏面』精禾堂、大正8年、P118、119、130

- 15)16) 大正10年12月5日広島地裁第一回公判（T10.12.13法律）
- 18)20) 『明治大正史 13巻』昭和5年、実業之世界社、キP36、ダンソン著、肝付兼行訳『将来の海軍と商業』明治33年、博文館
- 19) 日本石油編『日本石油史』
- 22) 「予審決定書」T10.12.13法律
- 23) 大阪の株式申込所の末尾に「昌栄銀行」の名があるのは昌栄貯蓄銀行大阪総代理店のことと思われる。昌栄貯蓄銀行大阪代理店員は「糸崎船渠の株式募集杯は私の店ではやりませず、すべてが本店の指揮を受ける有様故、少しも疾しい事はありません」（T9.3.14大朝）と記者に語っている。
- 24) 広島地裁公判で宮重検事諭告（T11.5.14大毎）
- 25) 大正11年5月12日広島地裁での糸崎船渠事件公判の証人として、糸崎船渠の株式申込所たる大野銀行東京支店長であった古谷豊三郎（浅草区永住町）の発言（T11.5.13徳毎）。なお大野伝兵衛〔千葉県山辺郡東金町／日本橋区、売薬商・一角丸本舗、大野合名社長、房総鉄道監査役・取締役、東金の「大野銀行社長」〕の経営する大野銀行（日本橋区、資本金100万円）は大正9年12月7日支払停止した。（T9.12.8東日）なお大正9年2月にも大野銀行預金に関して検事局の取調べがあった模様である。大正11年4月10日広島地裁公判で糸崎船渠の「大正九年二月検事局の取調べの際、丁酉銀行の預金を融通し居たのは、前く大野銀行の預金が仮装であるからとの杞憂からではなかったのか」（T11.4.10大朝）と訊問された松島は「左様ではありません」（T11.4.10大朝）と答えている。
- 26) 「阿波の運輸会社買収問題」とは国鉄による阿波電気軌道買収問題のことであろう。松島代議士は大正7年3月9日衆議院阿讃鉄道委員会で中村副総裁の答弁に対して憤慨し「政府が四国民を侮辱せるもの」「鉄道院役人の食逃」（T7.3.10読売）などと、「中村副総裁と松島氏との間に小抗論」（T7.3.10読売）あったほど熱心に取り組んでおり、同社との役員関係はないものの、当該買収問題にも当然に介入していた可能性があらう。
- 27) ＊南州製糖の誤りか。なお南洋製糖は瓜哇島スラバヤ州モジョオルト郡スメンコの製糖工場を原敬の乾兄・平岡定太郎が「該地に渡航し親しく実地を視察し、精査の結果之を買収」（『大日本銀行会社沿革史』、P292）し、6年11月28日創立総会を開き、社長平岡定太郎（後に相談役）、常務藤田重之助、取締役山本藤馬、原真一（後任社長）、秋本喜七、坪田十郎、松尾寛三、監査役西村惣四郎、吉野周太郎、伊藤長次郎を選任した。（T6.11.29読売）6年11月1万株を7.5円均一のプレミ

アムで売出した。(小沢福三郎『株界五十年史』昭和8年、P277)

28) 29) 大正10年12月5日広島地裁第一回公判 (T10.12.13法律)

30) 共正海運は第9章(5)参照。三福丸は鉄製、総トン数66トン、船籍港大阪(『日本船名録』大正9年、P119)

31) 赤松哲治郎は大阪堂島の弁護士西田四郎とともに「糸崎船渠株主ニ告グ。重役ハ不当ナル定款変更ノ為メ十二月二十七日ヲ以テ総会ヲ開ク。右変更ニ反対スル株主ハ即刻左ニ委任状ヲ送付スベシ」(T9.12.20大毎広告)との反対運動を展開した。

32) 留岡武は鹿児島出身、大正2年4月京都電灯入社、堀川営業所長、本社総務課集金係主任を経て、大正5年3月大津支社長(丹羽錠三郎『銀行会社と其幹部』大正7年、P87)、昭和6年5月時点で京都電灯大津支社支配人、比叡山鉄道取締役150株主。大正10年1月31日馬杉庄平(取締役就任)らとともに上之山炭鉱監査役に就任(T10.4.10鉱業)

33) 丹羽錠三郎『銀行会社と其幹部』大正7年、P87

34) 前掲『本邦財界動揺史』P661。この合併は「当局ニ於テハ鋭意事業ノ合同整理ヲ慫慂スル所アリ、民間当業者モ痛切ニ其必要ヲ感ジ財界動揺以来会社ノ合同整理セラルルモノ続出」(前掲『本邦財界動揺史』、P660)した主な事例として、大正9年6月「帝国石油ト出羽石油」…大正12年6月「上毛モスリント富士毛織、星製薬ト協同製薬」などとともに摘録されている。

第6章 「幽霊炭坑」事件

松島はリスクの高い炭鉱事業にも数多く関与したが、自ら一攫千金を夢見たというより、あくまで鉱山事業のハイリターンに魅惑されがちな地方投資家を効果的に吸引する手段としての起業であった。とりわけ彼の名を高めた「幽霊炭坑」事件の三池炭鉱会社（三井とは無関係）の創意に満ちた巧妙な仕掛けは彼の「虚業家」的革新性を顕著に示すものと考えられる。また松島は炭鉱事業でのパートナーである鉱山ブローカーなど「山師」として畏怖されたプロの鉱山専門家等をも心服させて自家薬籠中の物とするなど、人心籠絡能力にも卓抜していたことをうかがわせる。この章は三池炭鉱をはじめ九州炭鉱、唐津炭鉱など、著名産炭地の近傍で疑わしい鉱山事業多数に深く関わるなど、松島の資本家としての特異性の抽出が主題となる。

1 三池炭鉱会社

明治44年神戸正雄は「付近ニ有力ナル類似ノ鉱山アル新鉱山ノ株モ往々ニシテ危険ナリ¹⁾」とする。池島民理も炭田権利者の「農民等に交渉して安く買取る予約を為し…関係の深い銀行等と協議をして、会社創立に取掛り、効能を吹き立てて株式募集のをやる。愈々会社が成立すると…炭田を高く売付け、其間に大利益を貪る²⁾」「発起屋」を紹介するが、以下にみるように著名な三池炭坑の名を騙る新鉱山の三池炭鉱³⁾はこうした「発起屋」による危険な「山会社」の典型であろう。

三池炭鉱株式会社の当初の企画は地元八女郡の椿原乙蔵が「福岡県三池郡銀水村所在ノ石炭鉱業ニ関スル原田伊兵衛名義ノ二鉱区及坪内秀吉名義ノ一鉱区ヲ以テ採炭事業ヲ経営セン³⁾」としたことに起因する。三池郡の鉱業権者である原田伊兵衛（福岡県粕谷郡須恵村新原）は大正8年8月28日自己の福岡県下の鉱区87.4万坪を「十八万三千三百六十円で松島及び梅原両名に譲り渡すことに話纏り、松島は七万六千六百八十円を大正九年一月三十日までに支払ふ」(T13.

12.21徳毎) 旨の契約を締結した。しかし松島は期限までに支払わず、原田伊兵衛は大正13年12月違約金 5 万円のうち 1 万円の請求訴訟⁴⁾を福岡地裁に提起した。(T13.12.21徳毎)

椿原乙蔵は「骨董商小松登ナルモノノ紹介ニ依リ被告人〈梅原〉文次郎ニ対シ、其ノ出資ニ付尽力方ヲ依頼シ…之ニ基キ予テ知合ノ西条教部ニ諮リ、同人ト共ニ其ノ実兄ナル被告人〈松島〉肇ニ対シ右出資方ヲ勧誘シタルニ付、同被告人ニ於テ之ヲ承諾シ、進ンテ福岡県三池地方ニ散在セル石炭ノ諸鉱区ヲ買収シ之ヲ以テ石炭ノ鉱業経営ヲ目的トスル大規模ノ株式会社ヲ設立センコトヲ発意スルニ至リ⁶⁾」というのが設立までの発端であった。大正 8 年 8 月福岡市で松島、*梅原文次郎、*椿原乙蔵が会合し、「其ノ設立ヲ共同発起シ…文次郎及乙蔵ハ之ニ要スル右石炭鉱区ノ買収ヲ為ス旨ノ約定ヲ為シ…肇ハ右教部…〈中村〉定ヲシテ自己ニ代リテ其ノ設立計画実行ノ局ニ当ラ⁷⁾」せた。

松島の会談相手の梅原文次郎(西区江戸堀北通)は*糸崎船渠、*九州炭砒各取締役(要録T10役中、P186)、*三池炭砒株式会社取締役(要録、T11中P145)など松島系企業の役員を兼ねる「松島肇氏の乾分」(T14.2.19徳毎)、「松島肇氏の相棒として知られ」(T14.2.7徳毎)た「鉱山ブローカー」(T14.2.10徳毎)を営む「梅原鉱業部大阪支店主人」(T9.3.11時事)で「九州其他に於テ多数の炭坑を有せるもの」(T9.3.11時事)であった。また*中村定は「松島氏の親族」(T14.2.8徳毎)で、松島系企業10余社に幅広く役員となつて、「同人の参謀として活躍した人物」(T14.2.9徳毎)で、「自己ニ代リテ其ノ設立計画実行ノ局ニ当ラシムル⁸⁾」松島の腹心中の腹心と考えられる。

松島、梅原、椿原、西条の4名は会合を重ね、三池炭砒「会社設立ヲ熱望スルノ余リ単ニ其ノ設立ヲ容易ナラシメンカ為、其ノ株主募集ヲ為スニ方リテハ同会社ノ目的トスル石炭鉱業ニ付何等調査ノ結果ニ基クコトナク、之カ莫大ノ利益ヲ挙げ得ル見込アルモノノ如ク虚構シテ吹聴シ、以テ株主申込人ヲシテ其ノ鉱業カ相当ナル調査ノ結果ニ基キ、真実右ノ如キ見込アルモノナルカ如ク誤信シメ⁹⁾」ようと共謀したとされた。具体的手法としては「事業地は三井の三池炭砒を境界とし、其北部及東部に連なる」(T9.3.6内報①)「三井家所有の

炭砒付近の山を買収」(T14. 3. 9 徳毎)した「三井万田の坑区に取り囲まれた三池郡玉川村に唯申訳的の坑口を開き」(T14. 2. 8 徳毎)、「一個の横坑を穿ち、坑口に良質の石炭を詰め、一見坑内より掘出したかの如く極めて巧妙に粧ひ」(T14. 3. 9 徳毎)たとされた。徳毎紙が報じた「鉱床の処々に富鉱を欺装すること…鉱物堆積の上部に富鉱を履ふ」「¹⁰⁾鉱産の偽諱裝飾」手法は鉱業界では従前からありがちな奸策であった。こうした手の込んだ虚飾策は同社株式募集の勧誘に応じて「大株を所有せんと希望にて実地検踏し、又は炭質の良否を調査する為、三池に出張する」(T14. 3. 9 徳毎)大口見込客の籠絡手段として講じられた。さらにわざわざ三池炭砒の「営業報告の如き、三井炭砒とそっくりのものを作製」(T14. 2. 8 徳毎)した上、その中で技師長神沢勝也が三池「炭砒会社よりの依頼を受け坑区の設計を為したもの…炭量五億噸あるものの如く設計書を変造」(T14. 2. 26 徳毎)して、「同炭砒の炭層は極めて豊富で、炭丈七米余(二十四尺)に達し、貯炭量五億噸」(T14. 2. 9 徳毎)と吹聴したとされる。こうした誤信を誘発する手段を種々講じた上で、「三池炭坑と云へば三井炭坑を想像するもの多きを奇貨として、全国に亘り大募集を為し」(T14. 2. 10 徳毎)、「全国各府県は勿論、朝鮮、台湾等」(T14. 2. 8 徳毎)の投資家にも幅広く送付された。

その際に、地方の資産家が信用度の目安として重視する発起人には「松島氏が常に看板に使へる」(T14. 2. 10 徳毎)「戸水寛人博士、前代議士鈴木錠蔵氏」(T14. 2. 10 徳毎)、元司法次官の「故小山温、帝国通信社長頼母木桂吉氏」(T14. 2. 14 徳毎)、村井吉兵衛、今西林三郎、橋本喜造等(T9. 3. 6 内報①)、賛成人としては「侯爵花山院親家、侯爵大隈常信、子爵五辻治仲、工学博士国沢正兵衛、ドクトル羽太鋭治氏、及びシーメンス事件で有名な海軍少将藤井光五郎氏等」(T14. 2. 14 徳毎)の一見もっともらしい「知名の士の名を列記」(T14. 2. 10 徳毎)して、信用させた。

その後の大正9年3月9日糸崎船渠事件で松島が身柄を拘束されたため、「¹¹⁾〔松島〕肇及右〔西条〕教部ノ意ヲ受ケ」た中村は大正9年5月23日久留米で、梅原、椿原とともに「商号ヲ三池炭砒株式会社、資本ノ総額ヲ七百五十万円、

一株金額ヲ一時ニ全額払込トシテ金二十五円金銭出資ヲ三百万円、金銭以外ノ財産タル石炭鉱区ヲ以テ出資ノ目的ト為シ、其ノ価格ヲ四百五十万円ト見積リ、之ニ対スル株式数十八万株トシ、尚株式募集ニ関シ各自ノ分担ヲ定¹²⁾メ」るなど、同社設立の基礎的事項を定めた。

現地での株式募集を分担した椿原は、かねての手筈通り、大正9年2月上旬までの間に「福岡、佐賀、熊本各県下ニ亙リ福岡県吉井町居住ノ鳥越貞敏外三十五名ニ対シ株式ノ申込引受ノ勧誘¹³⁾」を行った結果、「株式ノ申込並其引受ヲ為サシメ、其ノ証拠金並株金払込名義ノ下ニ…合計五万七千十五円ヲ交付セシメ¹⁴⁾」た。

35名の株主の筆頭に挙げられた鳥越貞敏は福岡県浮羽郡吉井町の吉井銀行頭取(要録T11、役上P110)で、三池炭礦(株)の取締役にも加わり、判決でも当該「鉱業カ莫大ナル利益ヲ挙ゲ得ル見込アルモノノ如ク…相当ナル調査ノ結果ニ基キ真実右ノ如キ見込アルモノノ如ク誤信¹⁵⁾」したと認定された。三池から遠く離れた遠隔地の農民ならともかく、産炭地の本場の銀行家が軽率にも三井の三池炭坑と混同したとも思われず、不可解さは残る。ただし松島側の上告趣意書では中村定が「実地を踏査したる大塚工学博士の説明¹⁶⁾」として「極テ有望ニシテ莫大ナル利益ヲ挙ゲ得ルモノナル事明ナルノミナラス、炭量何程炭質ノ如何等ハ之レカ採掘ヲ為シ終リタル後ニアラサレハ確的ニ之ヲ知ル事能ハザルモノ¹⁷⁾」故に、高名な鉱山技師の調査に基礎を置いた「五億噸ノ炭量ヲ有シ、百億ノ富ヲ蔵スル¹⁸⁾」との「設立趣意書」記載の文言を「必スシモ誇大ニ吹聴シタルモノナリト言フヲ得ス¹⁹⁾」「原判決ハ事実誤認¹⁹⁾」と主張した。

こうして三池炭礦(株)は大正10年2月11日創立總會を開き、本店を京橋区南横町1に置き、資本金750万円(払込済)で設立された。(T10.4.10鉱業)三池炭礦(株)は「創立總會…等に対しては開会前日位に通知を発して、株主を参加せしめず、発起人のみで、全く虚偽の報告を捏造²⁰⁾」(T14.2.8徳毎)したとされる。

三池炭礦(株)の取締役は戸水寛人、*鳥越貞敏、*鈴木錠蔵、*西条教部、*梅原文次郎、*中村定、*宇野政次郎、*椿原乙蔵、監査役*宮本巖、中津親²¹⁾

²²⁾義であった。(T10.4.10鉱業)浮羽郡の鳥越貞敏、敦賀の宇野政次郎、熊本の中津親義の3名を除き、松島のダミーで占められた。後に中津親義に代り監査役に*堀内胖治郎が加わった。(要録、T11、東京P228)

しかし実際には三池炭砒の募集株式「残額は財界不況のため応募者なく、ために姉妹会社*日洋土地興業株式会社においてこれを引受け、払込みを了したるが如く仮装し、創立総会を終へ、爾来何等事業経営をなさず」(T14.10.2徳毎)とされた。大正10年12月5日の広島地裁での訊問で松島は糸崎船渠の「定款を変更し、鉱業権を事業の中に入れ、自分と梅原が共同経営してゐる福岡県三池炭砒を買収…其金で空株を補填した²³⁾」と述べ、坂井造酒松糸崎船渠元専務も「梅原氏が〈三池炭砒〉鉱区を売払った金で糸崎船渠の七万五千株を持って入社した」(T10.12.13法律)と答えた。こうして三池炭砒(株)所有の鉱区は*糸崎船渠に売却され、糸崎船渠は「昌栄貯金銀行大阪総支店から前記〈旧三池炭砒所属の〉炭坑を買収した財産を担保として小口当座預金通帳の交付を受け²⁴⁾」たとされ、結局三池炭砒の売却代金は糸崎船渠七万五千株に充当されたことが判明する。

大正11年2月17日主唱者であった椿原乙蔵は*日洋土地興業、三池炭砒各取締役を辞任した²⁵⁾。三池炭砒株式会社は日洋土地興業に合併のため(T14.2.14徳毎)、大正12年8月15日「株主総会ノ決議ニヨリ解散²⁶⁾」した。清算人には戸水寛人、鈴木錠蔵、*中村定が選任された²⁷⁾。

この「幽霊炭坑事件」の発端は松島肇が大正13年3月26日大正殖産銀行取締役伊藤養太(浮羽郡大石村)を相手取って、預金1万円の請求訴訟を、鈴木弁護士を代理人として東京地裁に起したことに始まる。(T13.3.27読売)訴状によれば松島は「訴外*椿原乙蔵の預金四万九千円の定期預金の保管と利子取立の委任を受けてゐたので、〈乙蔵の〉代理人として〈大正殖産銀行に〉支払ひを迫ったが、応じない」(T13.3.27読売)とされた。椿原名義の定期預金4.9万円は募集総額5.7万円(S6.7.7東朝)の86%に相当すると考えられる。松島が大口預金を武器に鳥越頭取の吉井銀行や大正殖産銀行など浮羽郡の小銀行に「幽霊炭坑事件」への何らかの加担を勧誘した可能性もあろう。この頃浮羽郡

周辺の小銀行の多くは多額の固定貸²⁹⁾に苦しんでいた時期と見られ、概して大口預金話に乗せられやすい環境にあったと考えられる。

なお「蔵内治郎作氏モ亦内地ノ某炭坑事件ニ連座シテ取調ベヲ受クル等幹部ニ不祥事続出³⁰⁾」とされた某炭坑事件は「福岡県三池郡三池炭坑株式会社なるものを組織し、国宝的大炭坑だと詐欺の広告をなし、株金を募集し数万円の詐欺をやった」(S 3.5.1 東日)との嫌疑で関係箇所が搜索を受けた当該「幽霊炭坑事件」(T14.4.6 徳毎)と考えられる。

2 九 州 炭 砒

松島自身が「大正八年五月主唱者となって資本金五百万円の南九州採炭株式会社を創設する際、表面発起人とならず内部で実権を握り³¹⁾」と供述したように、南九州採炭は「資本金五百万円の南九州採炭株式会社設立の計画にて、大部分は発起人賛成人にて引受け、一部を公募に付すべく、営業目的は石炭の採掘売買鉱業権の取得売買にあり、鉱区は熊本県下天草郡志岐村内 石炭鉱区五万四千六十三坪と、長崎県南高来郡加津佐村内の鉱区八十六万四千五百坪を買収し、尚ほ吉田三喜氏の所有に係る前記加津佐村内の二鉱区百九十一万八千七百坪を現物出資として、其価額四十万円に見積り、四分の一払込にて営業開始する計画なり」(T 8.6 増田 4-18)と報じられた。収支予算は第1期の採掘量1日平均210トンで純益20.6万円、配当率年20%、第2期の採掘量280トンで純益30.4万円、配当率年30%を見込んでいた。(T 8.6.15内報)

南九州採炭の発起人は今西林三郎、河崎助太郎、久保田権四郎、*尾崎敬義、下郷伝平、飯田新七、坂田美³³⁾、渡辺修³⁴⁾、肥田景之³⁵⁾、*横山一平、*原真一、*山口文右衛門、中井三之助、初田伴作、賛成人は栗原勇之助、鈴木寅彦、阿部克太郎、石井竹三郎、林安繁、矢野慶太郎、千頭茂寿、長尾薫であった。(T 8.6.15内報)

南九州採炭は糸崎船渠と同じく大阪市南区鰻谷西之町12番地の藤本系四ッ橋建物内に創立事務所を置き、大正8年9月30日大阪市中央電気倶楽部で「創立総会を開き…九州炭砒会社と変更するの件を可決」(T 8.10増田 4-29)、資本

金500万円、払込125万円で大阪市西区川口町8に設立された。(要録T9大阪、P106)

設立時の役員は社長*梅原文次郎、専務*神戸源右衛門、取締役*徳永賦、*伊藤忍、*西条教部、*宮本巖、*高田直三郎、栗田光一(大正10年6月18日辞任)、*堀内胖治郎、監査役*佐藤松垂、*高橋憲治、*五百木保義、吉原宗衛(大正10年10月25日辞任)、小梶勇吉(要録T9大阪、P106、T10.8.10鉱業)、相談役松島肇であった。(T8.10.4内報)

同社の鉱区は熊本県天草郡志岐村の5.4万坪、長崎県南高来郡加津佐村の86.4万坪を25万円で買収(T8.6.15内報)するほか、松島自身の説明によれば「株式十万株の中、三万二千株は吉田三喜から提供の長崎県大久保岩田出炭坑四十万円の現物出資、三万株は公募したが、残り三万八千株の空株については伊藤忍名義の手形で昌栄貯蓄から五十万円の手形割引を得て払込んだ³⁷⁾」とされる。

同社は「村田某より十五万円で福寿炭坑を買収し目下盛に採掘中」(T9.7.2福日)であったが、「六月三十日の総会に於て大波乱を惹起」(T9.8.2読売)した。信託業経営の井上角治は「自分等二三ノ株主協調ノ上、本社が大正九年前期総会開設ニ付、株主ハ会社側ノ報告ニ一驚シ、其ノ際会社ニ対シ調査委員ヲ設定」(T9.12.20大毎 意見広告)したとする。すなわち株主総会で「重役は株主総会の決議を経ずして吉田三喜氏より岩戸炭坑³⁸⁾を六十万円で、又同社長*梅原文次郎氏の個人所有の諫早炭鉱を六十三万円で買収した外、*昌栄銀行より五十万円の借入れ金までして、今期の営業成績は一万六千余円の欠損」(T9.7.2福日)であることが判明した。

第一回決算では現金は僅かに72円に過ぎないことに激昂した株主は、「正當の炭脈価値を有するものか否か…不正行為があるか無いか、又昌栄銀行から借入れた金が如何に使用されたか」(T9.7.2福日)を調査すべく吉田三喜、宇野信次郎、加藤誓也、箕口臣也³⁹⁾(T9.8.2読売)ら五人を調査委員に選任した。この調査委員による実地調査で「事実上の創立者にて現相談役たる松島肇氏が、現社長*梅原文次郎氏より五万五千円にて買収せる諫早炭鉱が六十三万八千余円にて会社に売却しあること。松島氏経営の*昌栄貯金銀行より会社が五十万

円の借入金をなし、多額の利子を引去られ、尚三十八万八千円の借入となり居れるも、会社は一文も現金を受取居らず、右炭砒代金の内として松島氏へ支払たる如く装へる」(T 9. 7. 27東日) 忌まわしい事実が判明した。

同様の構図は『公私経済』誌の主宰者・大橋敏郎をして「当社ほど不思議の会社はあらず⁴⁰⁾」と嘆かせた大東鋳業(大正元年11月設立)の創立時にも見られる。やはり鋳業家で創立者の山本久顕が「炭層薄く断層多き欠点」ある天草の無煙炭「鋳区を頗る高値に売付けたるが、当社の固定の資産を割高ならしめ⁴¹⁾」た結果経営不振に陥り、大東鋳業社長となっていた山本が「已むなく其職を退⁴²⁾」いた事例である。山本の場合は鋳業家、鋳区所有者(売主)、創立者(買主)、社長を一人で兼ねてすべての責任を問われたが、松島肇の場合は用心深く、梅原などの腹心を巧みに介在させて、山本のように表面立つことを避けた。そして責任を追及されると「自分は九州炭砒の創立者でもなければ重役でもない。諫早炭砒は梅原氏と別の取引で買ったものである。尚ほ昌栄銀行が会社経営上融通した金は是迄に約十五六万円に及び、最近にも相当額を出したばかりである」(T 9. 7. 27東日)と責任を否定した。大正11年4月10日広島地裁公判でも裁判長から九州炭砒事件について訊問を受けたが、松島は終始「知らぬ存ぜぬの一点張りにて極力否認」(T 11. 4. 18法律)し、九州炭砒について創立者ではなく「却って私は債権者の立場にあって、帳簿上の決算は既に完全に出来て、株主総会に於て承認を経た」(T 11. 4. 18法律)と強調した。

九州炭砒は6月30日の総会に引き続き大正9年8月1日大阪で総会を開き、堀田取締役が議長となり「前回選任したる箕口臣也、宇野新次郎、石井三二馬、加藤哲也、吉田三喜の諸氏等前後七回に亘り凝議したる結果を報告」(T 9. 8. 2読売)した。すなわち①「諫早炭砒を松島肇氏が五万五千円を以て現社長梅原文次郎氏より買収し夫れを六十三万八千余円にて会社に売付けたる件に関しては、同炭砒を速に松島氏に返還せしむべき事」(T 9. 8. 2読売)、②「松島氏経営の東京*昌栄銀行より会社が借入たる三十八万八千円の先引せる利子を会社に返戻せしめ、該借入れを原形に復せしむる事」(T 9. 8. 2読売)の2点の「条件を提示して重役に厳談し、其結果、取締役伊藤忍氏東上し松島氏に談

判せしむる事となりたる旨を報告」(T9.8.2読売)した。そして総会とは「別室に於て重役と前記調査委員及び松島氏の意を受けて来阪せる同氏実弟西条教部氏との間に種々折衝を重ね、略右の条件に近き程度迄の打合を得たるが故に之を確定すべく重役に調印を求め、更に来る二十五日の提示総会の席上に於て現重役全部解任を条件として決算報告を承認する事に決定し、最後に調査委員は議長指名南方仏次郎氏に決し」(T9.8.2読売)た。松島派は「臨時株主総会ヲ招集シ、先キニ会社側ノ提案ニ基キ、万事会社側ノ有利ニ決議」(T9.12.20大毎 意見広告)したため、井上角治ら反対派株主は「現重役ニ問責ヲ為シ、或ハ会社解散又ハ重役等ノ処分不当ヲ云ヒ、言及致シ度候ニ付、今回ノ総会ノ事項等ハ断然否決…セントスルノ方針」(T9.12.20大毎 意見広告)で委任状を集めた。その後九州炭鉱では役員の辞任が相次いだ。すなわち大正10年6月11日社長梅原文次郎は「資格を喪失し」(T10.8.10鉱業)、6月18日取締役栗田光一、監査役*五百木保義も辞任した。(T10.8.10鉱業)7月8日伊藤忍も九州炭鉱取締役を辞任した。(T10.10.20鉱業)10月25日*徳永賦は九州炭鉱取締役を、吉原宗衛は監査役をそれぞれ辞任した。(T10.12.20鉱業)

3 唐 津 炭 鉱

唐津炭鉱は高橋直賢⁴⁵⁾(T9.3.13藤本)、肥田景之⁴⁶⁾(前出)、田村彰一⁴⁴⁾、長島弘⁴⁵⁾、越山太刀三郎⁴⁶⁾、井上千吉⁴⁷⁾、今川卯三郎⁴⁸⁾、植木米蔵⁴⁹⁾(T8.10.29内報①)らにより、佐賀県西松浦郡黒川の黒川鉱区50.2万坪、伊万里湾内の釘島を含む84.7万坪、平戸島48.2万坪、その他とも265.6万坪を80万円(坪当たり約30銭)で買収し(T8.12.11D)、大正9年2月5日設立された。しかし「当社の買収すべき鉱区は目論見書の説明と実際とは雲泥の相違があり、鉱区としての価値さへ疑はしく」(T8.12.11D)、黒川鉱区は「当社の創立に先って、従来屢々売物となつて居り、黒人間には已に定評のある鉱区」(T8.12.11D)であり、さらに「平戸鉱区に至つては石炭の埋蔵されて居るか否かが既に疑問」(T8.12.11D)だという「炭質不良埋炭疑問」(T8.12.11D)な問題会社で、『ダイヤモンド』誌は「事業着手後に於て一大蹉躓を見るは想像に難くない」(T8.12.11

D)と批判したほどであった。会長高橋直賢、専務小林伊三郎、常務古宮新吾、取締役*高田襄坪、栗本市三郎、本村理助、木村準治⁵⁰⁾、横井富次郎、吉田弘喜、伊地知堯典、監査役井上光三郎、久保勇⁵¹⁾、尾崎才市、春名昇⁵²⁾、加藤鉄吉、相談役大戸喜三郎、川橋鉄雄、伊藤儀平であった。(T9.2.8内報①)本店を東京市京橋区南金六町15に置き、資本金500万円、払込125万円であった。(要録T11、P128)

大正10年6月18日松島系の役員が参加し取締役に*関良太郎、*大河原章弘、原田彦熊、*中村定、竹内和彦、監査役に*西条教部を選任した。(T10.8.20鉱業)大正11年では代表取締役伊地知堯典、同*関良太郎、取締役原田彦熊、*中村定、竹内和彦、監査役尾崎才市、春名昇、平賀喜之助、*西条教部であった。(要録T11、P128)唐津炭砦は大正13年6月8日帝国木材と商号を変更し⁵³⁾た。変更時の取締役は*中村定、*関良太郎、原田彦熊、石塚国太郎、戸賀崎源六郎、新井賢哉、奥隅太三郎、監査役尾崎才市、平賀喜之助、*西条教部⁵⁴⁾であった。

- 1) 神戸正雄『近代放資論 完』有斐閣、P49。たとえば上沖之山炭砦は字部炭田の最大の炭坑である著名な「沖ノ山」にあやかった新設会社の事例で、「斯の如き諸鉱山と同系同脈の鉱区に埋蔵されて居る石炭を採掘するものであれば、其会社は誰しも有利有望のものと考へ」(T8.12.21D)がちだが、『ダイヤモンド』誌も「是れは皮相の観察」(T8.12.21D)と排斥する。
- 2) 池島民理『株式会社裏面』精禾堂、大正8年、P118
- 3) 6) 7) 昭和6年(れ)第114号、昭和6年3月30日第二刑事部判決、理由、『大審院刑事判例集』第10巻、P125
- 4) 徳毎が報じた「(大正十四年度繫属ノ)福岡地方裁判所民事部ニ於ケル原告原田伊兵衛、被告松島肇間ノ違約金請求事件」に関して松島肇「上告趣意書」には「原判決援用証拠タル原田伊兵衛ト被告人<松島肇>トノ間ニ於ケル鉱区売買ノ期限タル大正九年六月初旬中村定カ被告人<松島>肇ノ代人トシテ違約金五万円付ノ更改契約ハ、被告人<中村>定カ被告人<松島>肇ノ代人ノ如ク見ユルモノナルモ、其ノ実右更改契約ハ、被告人ト全然没交渉ニシテ素ヨリ被告人<中村>定ハ被告人<松島>肇ノ代理権ナキコトヲ立証スルモノナリ。原判決援用証拠タル梅原文次郎、重

松末吉、原田伊兵衛、香田範吾四名ノ供述ヲ採証シテ、恰カモ被告人〈中村〉定ハ被告人〈松島〉肇ノ代人ノ如ク供述シ、從來モ亦被告人〈中村〉定ハ被告人〈松島〉肇ノ為ニ万事処理シ居リタルカ如ク供述シ、被告人〈中村〉定ハ被告人〈松島〉肇ノ意ヲ享ケ、右原田伊兵衛トノ再契約ヲ締結セシカ如ク証言シアル点ヲ鵜呑ミニシテ原審ハ全部援用証拠トシテ被告人〈松島〉肇ノ証拠トナセルカ…右重松、梅原、香田、原田ノ四名ハ初メヨリ該訴訟ノ目的タル違約金五万円欲シサノ計画的供述ニシテ、違約金ノ分配ヲ狙ツタ為態ト被告人〈中村〉定ニ代理権アルカ如ク宣伝供述セシコト明瞭ナルモノナリ」(『大審院刑事判例集』第10巻、P129)

- 5) 小原達明が接触した有名な政商「清辰」こと骨董商・清水辰三郎(『大日本重役大鑑』大正7年、P154)、乾新兵衛・西川末吉が接触した骨董商など当時の「骨董商」の政商的役割として、当時の骨董商は有名財界人・資産家との接触が多く、情報通で、しばしば政商的活動をおこなったと見られる。大正4年石川県の総選挙で政友会候補者・中橋徳五郎と公友派・横山章は激しく争い、「横山派は…大隈伯後援会の旗頭横山俊二郎等参謀となり、これに四十余の実業団体は勿論、骨董商や画家まで東西に奔走して作戦怠りなく…」(T4.3.14東日)と、金沢の骨董商は政治活動にも威力を発揮した。なお大正末期の京阪神の有力骨董商としては林新助(京都新門前)、服部来々堂(京都仏具屋町魚棚)、戸田弥七(大阪市東区新町)、池戸宗三郎(大阪市東区今橋)、春海商店(大阪市東区高麗橋)などが知られる。
- (大正15年12月22日中外商業新報)

8) 9) 11) 12) 13) 14) 15) 17) 18) 19) 事実、P123~127

10) 真継義一郎著『鉱山調査法』工業と鉱業社、明治44年、P45

- 16) 「実地を踏査したる大塚工學博士」が大塚専一(小石川区竹早町69)だとすれば、彼は日本石油の鉱山部顧問(『日本鉱業名鑑』大正6年、P23)で、大正8年12月設立された大北炭砒でも「大塚博士は山の鑑定者たる責任上、発起人総代となりて責任を分担する」(T8.9.3読売)発起人総代でもあった。大北炭砒の株式募集広告にも「三鉱区の埋蔵炭量は優等塊炭のみにても三億噸に余り、之を時価に見積れば五十億圓に達す。鉱区の調査は理學博士大塚専一責任を以て自ら其の衝に當り、実験に富める数名の炭砒技師補助の下に数回の踏査をなした」(T8.9.4読売)と「無尽蔵の富 希有の炭田」などと宣伝された。なお「五億噸ノ炭量ヲ有シ、百億ノ富ヲ蔵スル」三池炭砒の宣伝は大北炭砒の「三億噸…時価に見積れば五十億圓」の倍に相当する。

20) 京橋区南横町1の所在地は*熱海宝塚土地の創立事務所、*東京絹綿紡績の本

店に一致する。なおT14.2.14徳每では大正10年6月28日資本金750万円、一株25円、全額払込済で設立となっており、一致しない。

- 21) 宇野政次郎(福井県敦賀町泉)は敦賀銀行、敦賀電灯、東洋セメント、*日洋土地興業各取締役(要録T11、役中P134)。なお宇野信次郎(T9.8.2読売では宇野新次郎)は九州炭硯の調査委員
- 22) 中津親義(熊本市明円寺町)は九州磚茶、熊本物産各取締役、弘益殖産監査役(要録、T9役中P96)、熊本物産、熊本織物各取締役(要録、T10役中P125)
- 23) 24) 大正10年12月5日広島地裁第一回公判での審理(T10.12.13法律) 25) T11.6.16官報2961号 付録、P2
- 26) 27) T13.4.28官報3501号 号外、P27
- 28) 大正殖産銀行は明治33年4月12日設立、本店福岡県浮羽郡千年村、支店なし、資本金50万円、払込17.5万円、代表取締役三浦直次郎〔浮羽郡船越村、日吉銀行監査役(要録T11、役下P154)〕(『銀行総覧』大正13年、P384)
- 29) たとえば地元の中心企業たる両筑軌道は経営不振のため大正13年11月28日付で許可を受け、新両筑軌道への営業譲渡を実行したが、新両筑軌道の役員・株主は浮羽銀行、田主丸銀行、田主丸実業銀行の地元三行関係者が大半を占めた。また「田主丸及田主丸実業…の両行は殆んど株主及重役を同ふし、以前は両行共成績良好なりしが近年貸付金の回収意の如くならざる等にて成績挙がらず、殊に実業銀行は多額の固定貸を生じ内情困難に陥り昨年来整理中」(T15.4.OB)と報じられた田主丸実業銀行は預金者より破産を申請され、昭和2年6月27日破産宣告を受けた。また福岡県朝倉郡の比良松銀行も銀行員の田中栄次郎が190万円の横領事件を起し、有罪となったため、大正12年2月以降破産申請が一千数百件も殺到して大正12年6月破産宣告を受けた。(T12.7.28法律)
- 30) 『満洲会社興信録』大正12年、P178
- 31) 大正10年12月5日広島地裁第一回公判(T10.12.13法律)
- 32) 河崎助太郎(大阪市東区備後町)は洋反物卸商、*熱海宝塚土地発起人(T9.3.6読売)、京都土地建物社長、上毛モスリン、日宝石油各取締役、島津製作所、西沢金山各監査役
- 33) 坂田実は*宮本巖、宮本茂実らが役員の北海探炭社長(T8.7.6内報)、日之出鉱業取締役、東京土地住宅監査役(紳T11、下P51)、*日本緬羊毛織、日本海上倉庫各発起人総代
- 34) 渡辺修は安政6年12月10日伊予国宇和島の渡辺宇平太の次男に生れ、明治14年

慶応義塾卒、外務省参事官、通信参事官等を歴任、32年愛媛県総務部長就任の後に退官、佐世保市長となり、35年愛媛県郡部選出の立憲政友会代議士に当選(前後8回)、政友会に属して重きをなした。(『大阪現代人名辞書』P311、三善貞司編『大阪人物辞典』平成12年、清文堂、P1292)、39～40年大阪電灯支配人、40上期～42年上期大阪電灯常務、42年下期大阪電灯を辞任する際に「慰労金トシテ金六千円ヲ贈与」(『大阪電灯株式会社沿革史』大正14年、P601)された。大阪電灯と電球購入に関する契約関係があった(同P601)大阪電球常務、社長となったほか、淀川電力発起人、大阪三品取引所理事(紳M41、P75)、横浜取引所理事長、宇和水電社長、博愛、合同瓦斯各取締役(帝T5、P80)、松山電気軌道発起人・監査役、京電、日本瓦斯、第一火災海上各重役、岡山水電発起人(T5.1.27大朝)などを兼務した。大正8年大北炭鉱賛成人、昭和4年時点では電気協会々長として東京地下街株式会社発起人となった。(S4.4.2時事)

- 35) 肥田景之は戸水寛人と共に大正元年11月創立の大東鉱業監査役から社長に就任(『戦後の事業界と会社の内容』公私経済社、大正6年、P218)、大正8年大北炭鉱賛成人(T8.9.4読売)
- 36) 石井竹三郎(大阪市東区今橋2)は明治20年12月大阪府の石井尚祐の三男に生れ、兄は石井定七、妻のふくは藪田忠次郎長女、大阪府多額納税者、大株仲間、千日前土地建物社長、中華取引市場、大正農工具各取締役、中華金銀取引監査役。
- 37) 大正10年12月5日広島地裁第一回公判(T10.12.13法律)
- 38) 大正10年12月5日広島地裁第一回公判での審理で松島は「吉田三喜から提供の長崎県大久保岩田出炭坑四十万円の現物出資」(T10.12.13法律)があったと述べた。
- 39) 箕口臣也(天王寺)は御影土地監査役、亜細亜興業、日本鉄工各取締役(要録T11役下、P165)。他の調査委員(T9.8.2読売では宇野新次郎、加藤哲也と表記)は要録T11役なし、『日本鉱業名鑑』大正6年なし
- 40) 42) 『戦後の事業界と会社の内容』公私経済社、大正6年、P21841)
- 41) 山本久顕(麻布区飯倉片町)はM3.8.1高知県に生れ同志社、共立学校を経て、帝国大学中退、オハヨー大学留学、南日本製糖を創立し専務に就任、泊、赤谷鉱山、小平炭坑を所有する山本鉱業部無限責任社員(名鑑T7、P42)、大島炭鉱取締役(要T9、中P201)、鉱業会社役員(帝T14、P238)、大正3年4月(諸T5、上P326)「合資組織を以て山本鉱業部を創立して代表社員と為り…大正元年十一月を以て大東鉱業会社を創設して社長…已むなく其職を退き、今や専ら…東洋信託

取引会社の創立に鋭意熱心」(『大正人名辞典』P908) 合資会社山本鉱業部は資本金10万円、大正3年4月設立、無限責任社員山本久顕(諸T5、上P326)、本店は麴町区有楽町3丁目5(要録T11、P176)。大正8年6月資本金150万円で設立された益隈炭鉱は山本久顕からの現物出資になる嘉穂郡大隈町の第479鉱区など数鉱区に145万円を投資した。

43) 『大正人名辞典』P908

44) 田村彰一は福島県石城郡川部村の植田鉱区70.3万坪等を経営する鉱業家で大正8年12月15日創立し、1年で破綻した東京浴場炭鉱専務、大北炭鉱発起人(T8.9.4読売)、大正8年4月日本国債信託発起人(増田4巻13号)

45) 長島弘(芝区三田功運町31)は長島隆二の「実弟」(昭和5年5月3日東日)、東華生命社長、鴻巣銀行相談役(『銀行会社破綻史』大正15年、P140)ほか。「令兄隆二君の一喝をも顧みずして、遂に神田鑄藏君と交誼を結ぶ…爾来相互に一生の知己として親しむ間柄となって…君が事業の多くに神田君が関係して居る」(「平か凡か長島弘君」大正9年5月20日東京経済雑誌)といわれた。東華生命の新社長の長島弘は「真の事業家ではなく、利権漁りのプロモーター」(『本邦生命保険業史』P231)と見做された。長島弘は大正9年時点では富士鉱業、樺太興産各取締役(要録T9役中、P120)、大正10年時点では鴻巣商事監査役、朝鮮京南鉄道社長(要録T10役中、P122)

46) 越山太刀三郎(芝区高輪北)は東京電灯出身、越山合資無限社員、東京電灯、大和毛織各取締役、大正7年「斉藤一家の経営に係り…漸次衰退して一時は休業同様の状態」(『大日本銀行会社沿革史』、P38)にあった東台銀行の権利を買収し、東台銀行会長となり、減資後、武田明が頭取となり大正7年3月武田割引銀行[S2.04.21金融恐慌で休業]と改称し、越山太刀三郎らが取締役に就任した。(『大日本銀行会社沿革史』、P38)

47) 井上千吉は*生駒土地、*城南土地各取締役のほか日本家禽土地、芦屋土地、日下住宅、四ッ橋建物、垂水土地、生駒電気鉄道、極東鉱業、愛国貯金銀行ほかに関与した土地会社のプロモーター

48) 今川卯三郎(南区天王寺真法院町)は北浜の仲買人、大正六年十一月末の北浜信託290株主、藤本商事監査役のみ(要録T11役上P39、P88)第一線引退後の藤本清兵衛は北浜の「今川卯三郎仲買店に本拠を置いていた」「今川商店の一室に、機を狙って居る」といわれたように北浜の今川卯三郎仲買店を機関店としていた。藤本120株主、信越水電1、200株主(要録大正9年、大阪P113)、大正11年6月期の

浪速土地⑩1、213株主（『株式会社年鑑』大正11年、P20）

- 49) 植木米蔵は大阪株式取引所仲買人、城東土地社長、田中元七・胡四郎兄弟の土地投機仲間、植木の後任に当る城東土地社長の田中元七は小川元鉄相をめぐる私鉄疑獄事件に関係。
- 50) 木村準治は明治19年6月8日生れ、大成中学卒業、岡山医専出身、大阪新報経済部に記者として「五ヶ年勤務」（新聞之新聞社編『新聞人名鑑』昭和4年、P171）、古川浩の後任の電通記者を経て、「数個の土地会社に関係し経験深」（信貴土地建物広告）いプロモーターとなり、「信託業をなし有利に利益を揚げんとする」（大正9年7月商事信託広告）商事信託合資社長、御影土地専務、生駒聖天土地取締役、信貴土地建物社長、大阪野江土地専務、大阪天王寺土地、唐津炭砒、九州硅藻土各取締役
- 51) 久保勇は松方伯の甥で明治33年に破綻した横浜蠶絲銀行頭取、東海生命専務（要、M44、P303）、北海道の硫黄鉱山をはじめ「各種の事業に関係せる上に猶投機社会に出入し、現に本年春東京馬車鉄道会社株式二千株を買入れしに其相場二百四十円にて買入れたるもの百五十円位に下落し、また北海道炭鉄鉄道会社株、日本郵船会社株等の売買にて非常の損失を為したる噂」（M33.12.15B）があった。「価格約十五万円ノ鉱山、動産十万余、他ニ宝田石油株三五〇株、東海生命株一〇〇株、東洋火災株三〇株、日本傷害保険株一〇株、外ニ年取得金一万五千円ヲ有ス」（前掲調書）。大正6年岡本米蔵の主宰する日米興業賛成人（T6.3.22読売）、大正9年2月ころ創立した唐津炭砒の監査役に就任（増田5巻5号）
- 52) 春名昇は生駒聖天土地取締役、大阪野江土地、信貴土地建物、唐津炭砒各監査役（要録T11、役上P62）
- 53) 54) 大正13年9月26日官報、付録、P5

第7章 日本緬羊毛織事件

この章で取り上げる帝国毛織紡績、大日本原毛紡績、紡績木管、日本緬羊毛織の4社は豪州羊毛禁輸による原毛不足を奇貨として松島らが極めてタイムリーに発起・設立した毛織物関連企業であり、前二者は密接に関連したセット企画であった。松島らが他派と共同設立した後者の日本緬羊毛織では経営主導権すなわち無機能株主収奪の利権を巡り、重役間の暗闘が絶えなかった。この章では「配当保証」制度の開発など、ある側面では天才的革新者とも評価し得る松島ら専門的発起業者達の発案・創造する妙案奇策の水準の高さをうかがうことができる。

1 帝国毛織紡績

毛織物業界は原料のほとんどを依存していた「豪州羊毛禁輸の結果…原毛不足の為め其の操業短縮」(T 6 .11.15読売)を余儀なくされた結果、毛織物は第一次大戦期には極端な品不足から思惑需要が急増したため大正6年ころから9年にかけて、東京絹毛紡績(大正6年3月設立)、満蒙毛織¹⁾、後藤毛織(7年7月設立²⁾)、栗原紡績、東京毛布、千代田毛織³⁾、朝日毛織、名古屋モスリン、日本絹絨、日本緬羊毛織、帝国毛織紡績(8年10月)、羊毛整製、大日本原毛紡績(9年2月)、中華毛織⁵⁾などの新設会社が相次いで計画され、業界全体の資本金額は6倍に急膨張した。(T10. 8 .13T)

帝国毛織紡績もこうした毛織物界の最盛期の「需要旺盛、供給不足の期を見込み」(T 8 .11. 1 T)、大正6年に計画され、大正8年10月「東亜紡績界の先覚者たる工学博士」(T 8 .10.22内報)「谷口直貞、西田博太郎両博士其他東京実業家に依り設立計画中なる資本金一千万円の帝国毛織紡績会社は株式二十万株中十八万株を発起人にて引受け、残り二万株を十月十六日限り一般公募の上創立すべく決定したるが、設立の上は谷口博士社長に就任すべし」(T 8 .10増田4 -29)と報じられた。

帝国毛織紡績は鶴沢宇八、鈴木久次郎(T 8.6.8内報)、松島肇らにより大正8年12月29日「(イ)毛糸、(ロ)毛糸織布、(ハ)絹綿糸、(ニ)絹綿糸織布の製造販売並に付帯事業」(T 8.11.1 T)を目的として資本金1000万円、払込250万円で東京市京橋区南横町1に設立された。(T10.4.5法律) 資本金の使途は工場敷地買収20万円、工場建設55.8万円、気缶電動機15.6万円、紡績準備機18.2万円、紡績機械79.4万円、織機準備機20.5万円、仕上機械22.4万円など約238万円を工場設備一式に投資する計画であった。1年に羅紗773.5万円を売上げ、129.9万円の純利益、年20%配当を予想していた。(T 8.10.22内報) 同社の「毛織物の世界的欠乏を緩和せんと趣旨」(T 8.10.22内報)は「毛織物其他の昂騰底止する所を知らざる折柄」(T 8.10.22内報)、「谷口直貞⁶⁾氏の社長就任承諾等に依り頗る好景気を呈し」(T 8.10.23内報)、「東西各地有力家三百余名の賛助を得、株式総数二十万株中十八万株は発起人賛成人に於て引受確定」(T 8.10.22内報)したと報じられた。表面上は「二万株の公募額に対して応募高は約八、九十万株の多きに達し、既に締め切り、割り当ても済んだ」(T 8.11.1 T)と称していたが、2万株・250万円払込のうち現実の払込は231.3万円にとどまったため、「之が弥縫策として田村<範文>名義の五十万円を<松島側で>払込んだ」(T10.12.13法律)ことが後年になって判明した。

松島自身の供述によれば「田村範文…を救助する傍ら、毛織業の有望を予想して会社創立を計画し、之が⁷⁾広告を発表したのが大正八年十月のことであった」とする。大正8年12月29日創立総会を開催して谷口直貞を社長に、松島肇を専務に、東京製靴社長の門田猪三郎を常務に選任(T 8.12.31読売)、取締役には*原真一らが就任した。

しかし現実には谷口直貞は後述の*紡績木管の場合と同様に「事故ノ為メ其(社長)就任ヲ見ルニ至ラザリシモ技術顧問トシテ当社事業ヲ援助セラルルコトナレリ⁸⁾」、門田常務も大正9年7月辞任して営業顧問に就任、原真一も大正9年7月辞任するなど、松島の一人舞台となった。営業報告書には大正9年1月12日の重役会で「紡機及工場敷地購入ニ関スル一切ノ行為ヲ専務取締役松島肇氏ニ委嘱⁹⁾」、更に大正9年7月5日の重役会で「当社ノ整理及充実ヲ図ル為メ¹⁰⁾

依然専務取締役松島肇氏ヲシテ社務一切ヲ総理セシメ且ツ業務執行ヲ為サシムルコト¹¹⁾を重ねて決議した。松島自身は「総株数二十万株の倍数以上の応募者があったに拘らず、其後発起人の足並揃はぬ為め、約五万株の取消現象を見るに至った。仍って数度発起人会を開いた結果、之が解決は松島に一任することとなり、無限の権限を与へられた¹²⁾」と供述した。

この頃毛織物業界では「財界の恐慌と共に斯界も極度の不況を呈し生産過多、輸入過多、市価激落と云ふ悲境に陥り、毛織物全般を通じて好況時の半額乃至六掛程度の市価となり経営難を来した¹³⁾」のであった。当時東京、大阪、神戸の毛織物大手ですら「多額ノ手持原料ヲ擁シテ原毛代金支払ニ要スル資金調達ニ苦シミ¹⁴⁾」日本銀行に特別融通を要請したほどであった。

谷口、門田、原らが相次いで辞任した背景にはなんらかの路線対立があり、権力基盤の確保上、何度となく松島専務への権力集中を再確認しておく必要に迫られたものであろう。大正10年4月取締役となった山本文作は松島の義弟(T 11. 5. 11徳毎)で、*昌栄銀行監査役(T 13. 12. 14東朝)、*大阪計器製造監査役(要録T 9、P 48)、*木材倉庫監査役(要録T 15、P 226)、*関西土地建物取締役(要録T 9大阪、P 61)等を兼ねた腹心であり、監査役となった*金沢周太郎も昌栄銀行本店貸出係主任である。したがって松島は辞任した同社役員の抜けた穴を身内や腹心で固めたと思われる。

帝国毛織紡績は当初計画では「二十万円を工場敷地(千葉、静岡両県に合せて二万坪)買収費に、五十五万八千円を工場其他建物建築費に、十五万六千円を気罐電気其他動力費一切に当て…機械費百四十五万円」(T 8. 11. 1 T)を投じて薄羅紗年額52.8万碼、厚羅紗92.4万碼、毛糸20.8万封度を生産し、129.9万円の利益をあげ、2割配当を行なう目論見であった。(T 10. 1. 1 D)しかし『東洋経済』誌は「工場敷地の他一切数量を明記してをらぬ」(T 8. 11. 1 T)など目論見書が「頗る曖昧で…予算は…疑はしい節が多い」(T 8. 11. 1 T)と指摘した。その後の経過は「総テ消極的方針ヲ採リテ隱忍¹⁵⁾」すると称して、「当社は創立に際して機械の注文もせず、又た引合も試みず」(T 10. 1. 1 D)、「設備が何時竣成するか全く不明」(T 10. 1. 1 D)で、当初予算などは全く机上の

計算にすぎなかった。

ようやく12.5万円（T10.1.1D）で大正9年4月2日東京府大井町の「既設毛糸紡績工場ヲ買収」¹⁶⁾した後、大阪府堺市の前川タオル工場も買収するとの名目で（T10.1.1D）、「予メ資金ヲ充実シテ…社運ノ発展ヲ期セン」¹⁷⁾と大正9年10月5日第二回払込5円を徴収しようとした。そして肝心の操業開始に関する各回の営業報告を列記すれば「操業ヲ開始シタリ…然ルニ…一時操業ヲ中止」¹⁸⁾、「来期早々…操業ヲ開始…スルノ計画ヲ立テリ」¹⁹⁾、「操業ヲ開始…突如会社ノ為メ不祥事起リ折角ノ企画モ遂ニ一時中止」²⁰⁾、「操業開始ノ準備ニ着手スルノ道程ニ進捗セリ」²¹⁾という毎回計画が後退する始末で、全く目処が立っていない。

『ダイヤモンド』誌の記者は創立直後に年1回決算へ変更した理由も「殊更に株主総会の招集を回避した」（T10.1.1D）ためかと疑い、「多数幽霊株の存在する事、及第一回払込金の行衛等」（T10.1.1D）に関して「種々の浮説が伝へられて居る」（T10.1.1D）帝国毛織紡績の「奇怪極まる払込徴収」（T10.1.1D）の「真相を知らんが為め数回当局者の説明を求めたけれども、遂に徒労に終わった」（T10.1.1D）と疑念が全く払拭できず、「払込金の内容頗る不明」（T10.1.1D）であるとして「会社内部に重大なる欠陥のある」（T10.1.1D）同社の解散を強く主張した。

大正10年3月糸崎船渠事件の予審終結書の中で「〈帝国〉毛織〈紡績〉の払込株主中から金十三万七千七百余円をも横領した事実」（T10.4.5法律）が暴露された。「松島経営の帝国毛織〈紡績〉の株券二十八万五千円を日本土地に売り込み」（S2.10.2東朝）、「帝国毛織紡績株式会社から松島に対して有した債務二十八万五千百十円八十六銭の二重弁済をなさしめ」（S3.2.25東朝）たことが公判であきらかとなった。帝国毛織の営業報告書が「突如会社ノ為メ不祥事起リ」²²⁾と僅かに言及した部分が不正の発覚を意味しよう。このため株主の坂井正方、松本退蔵らは松島、*本堂平四郎に対して「営業に関する書類閲覧請求の訴訟を提起した」（T10.4.5法律）が、その理由は「会社は創立以来その目的たる毛織事業は全く営まずして、第一回払込金二百五十万円及第二回払込金五十九万円は挙げて重役関係の他事業に投資し、或は重役の間で費消し、今日

に至る迄一回の株主総会も開かず、会社の基礎は頗る疑はれるので…書類の閲覧を求めたる所、言を左右に託して応じない」(T10.4.5 法律)というものであった。「栄華物語」は株主からの訴訟による「帝国毛織…の会社騒動は今尚世人の記憶に新たなもの」(T13.12.21 徳毎)とする。

操業開始の目処すら立たないにもかかわらず、帝国毛織は「資金充実ノ必要ニヨリ株金払込ヲ要請シタルニ、第三、四回ノ払込ハ其成績酷タ不良ニシテ予期ノ額ニ達セサリシ為…第五回ノ払込ヲ請フ」²³⁾など、立て続けに株金払込を強要した。その一方で大正10年4月本店を麴町四丁目に移転するとともに、必要性の乏しい大阪、徳島各出張所を設置、さらに大正11年6月泰東紡績と改称するとともに本店を大阪に移転、公告手段も中外商業から大阪新報に²⁶⁾変更するなど、一連の雲隠れ・変態政策を採った。「従来ノ商号ヲ使用スルノ便宜多大ナル」²⁷⁾に拘らず、改称した理由は「業務ノ改善発展ヲ企画スル其第一着歩」²⁸⁾とするだけで極めて不明瞭である。²⁹⁾

おそらく大正10年6月「突如会社ノ為メ不祥事起リ」³⁰⁾松島が専務を辞任し、取締役*今中富三郎、*伊藤忍、*山本文作、監査役*鈴木久次郎も松島に³¹⁾続いた役員人事の反映であろう。しかし引責辞任した松島らに代って取締役に就いたのは松島が常に「悪事の看板に使へる」(T14.2.10 徳毎)戸水寛人をはじめ、*鈴木錠蔵、*堀内胖次郎、監査役は*高田忠吾らの腹心であった。大正11年では資本金1000万円、払込250万円、取締役田村範文、*宮本巖、*本堂平四郎、*戸水寛人、*鈴木錠蔵、*堀内胖治郎、監査役*高田忠吾、*金沢周太郎、支配人斉藤清吉であった。(帝T11、P294)さらに取締役に*佐藤松垂、*三島正吉、*松永隆一に変更した。しかし鈴木錠蔵は自ら「単に名義上の副社長であって、實際上の事務に就ては何も知らない」(T13.11.11 読売)の一点張りで株主の追及を逃げ回った人物で、いずれも松島の「傀儡」(T11.2.8 徳毎)と見られていたから、表面上、世間を憚り目立つ松島色を消して、疎開ないし非公然化したものと思われる。これを端的に示すのが大正11年6月「株主総会ハ便宜本店所在地以外ニ於テ開クコトヲ得」³²⁾と定款変更したことである。

「日洋土地会社の総会の如きは、千葉県夷隅郡の町から七里も人里離れた淋し

い山中の木こり小屋で開³³⁾いたといわれるが、帝国毛織も相次いで徳島県撫養町、徳島市で開催するなど、株主の出席を意図的に妨害する遠隔地開催を行なった。いずれも一般株主から不都合を追及されることを回避するための一連の雲隠れ策であったと思われる。このため書類閲覧請求の訴訟を提起した株主は「今日に至る迄一回の株主総会も開かず」(T10.4.5 法律)と主張するなど、一般株主に開催通知が届いていたかすら疑わしい。

しかし松島は公判では帝国毛織紡績の社金213.7万円を「引出し東京、大阪其他各地で横領費消した」(T10.12.13 法律)とされた点に関して、正当な職務上の「権限を掌握する自分としては会社繁栄策として手形を発行し又は土地工場を買収するに何等不思議はなく…³⁴⁾」と主張した。

大正13年6月(T13.11.11 読売)松島は大阪計器製作所を母体として、「糸崎ドック、九州炭砒、帝国毛織〈紡績〉、大日本原毛、日洋土地〈興業〉の諸会社を一九として日本土地株式会社なるものを創設」(S2.10.2 東朝)した。帝国興信所は「基礎薄弱な〈毛織物〉会社に在っては其処に幾多の悲活劇が演ぜられた。東京絹毛〈紡織³⁵⁾〉の如き、日本絹絨の如き何れも当時兎角の噂を立てられた一つであるが、泡沫的不良会社の末路にはまだまだ惨澹たるものがあり、詐欺横領、株主虐め等続出し、就中松島肇、鈴木久次郎氏等一派に依って企画された*日本緬羊毛織、*帝国毛織紡績両社の如きは、内部の素乱と云ひ、株主虐めの徹底と云ひ、其悪辣振りは実に筆紙に尽し得ないものであった。斯様に好況時濫興の泡沫会社の終焉迄には相当の時日を要し、中には永年に亘ってまだゴタゴタして居るものではない³⁶⁾」と指摘している。

2 大日本原毛紡績

ここでは「松島肇、鈴木久次郎氏等一派に依って企画された日本緬羊毛織、帝国毛織紡績³⁷⁾」とほぼ同一の背景の下に、同一人物によって発起された姉妹会社の大日本原毛紡績を概観しておく。大日本原毛紡績は大正9年2月資本金1,000万円で設立された新設の毛織会社の一つ(T10.8.13 T)であるが、ほぼ同時期に発起された帝国毛織紡績(前節)とも取引上密接な関係があり、「帝毛系

統は既定の方策に基づき更らに其の姉妹会社たる大日本原毛紡績株式会社設立の計画を立て」(T 8.11.20内報①)たとされる。松島自身の供述によれば「大正八年十一月月上旬東京市で自ら主唱者となり、資本金一千万円の大日本原毛紡績株式会社の創立を目論見、大正九年二月十三日大阪で創立総会を開き、自分が副社長となり創立事務主宰³⁸⁾」したとされる。

松島が専務として全権を掌握した前節の帝国毛織紡績の募集勧誘書では「豪州及支那に於ける特種関係者より確實低廉に仰ぎ得るの便宜」(T 8.11.1 T)という原毛調達上の優位性を強調していた。しかし帝国毛織の計画を調査した『東洋経済』誌は「紡機も僅に二十台前後では…原料毛糸の自給を計る訳には行かぬから…原料毛糸の製造は他工場に依頼するの不利を算入せねばならぬ」(T 8.11.1 T)と指摘した。こうした帝国毛織計画の弱点とされた「原料補給難を緩和救済せん趣旨」(T 8.11.20内報①)で、原毛調達上の優位性を発揮し、原料毛糸の自給を計る「姉妹会社」(T 8.11.20内報①)として、別途に大正8年11月松島自身が帝国毛織、紡績木管と同様に業界では著名な谷口直貞を表看板にして大日本原毛紡績を構想し、主唱したのではないかと考えられる。

大正9年2月「資本金一千万円を以て創立中なりし大日本原毛紡績は十三日創立総会を開き左の役員を選挙したり。取締役(社長)*戸水寛人、(副社長)松島肇、(常務)綾栄保」(T 9.2増田5-6)、取締役は*神戸源右衛門、*金沢周太郎(帝T11、職P197)、*鈴木錠蔵らであった。

松島自身の供述によれば「自分が副社長となり創立事務主宰³⁹⁾」した大日本原毛紡績の「現実払込み株金額六十万円中、二十五万円を自分が監査役である*日本緬羊会社に、十万円を静岡県熱海町及び兵庫県宝塚町付近の自己の土地買取資金に、二十万円を*昌栄貯蓄の*糸崎船渠の仮装預金額の減少を図る資金に一千四百八十一円七十銭を昌栄貯蓄の流動資金に融通…昌栄貯蓄銀行に預金したのは正当なことである⁴⁰⁾」として、いずれも正当な職務権限の行使であると主張した。そして株主から訴えられた「〈大日本〉原毛〈紡績〉会社事件…⁴¹⁾」に關し、全然関係なく、何うなっているか私には分りません」として事件への関与を全面否認して争った。結局松島は*大阪計器製作所を母体として、「*糸崎

ドック、*九州炭砒、*帝国毛織〈紡績〉、*大日本原毛、*日洋土地〈興業〉の諸会社を一丸として*日本土地株式会社なるものを創設」(S 2.10.2 東朝)した。大日本原毛紡績は松島系の帝国毛織、日洋土地興業(旧熱海宝塚土地)、海運興業(旧糸崎船渠)、九州炭砒の同系企業ともどもいわゆる松島系「五大株式会社を解散して」(T13.11.11読売)、大阪計器製作所に順次合併され、日本土地(資本金6500万円)と改称した。(T13.11.11読売)最後まで帝国毛織と合併・統合の道筋を共にしている点でも、大日本原毛紡績は帝国毛織とワン・セットで扱われていたものと思われる。「栄華物語」は帝国毛織などと同様に「大日本原毛…の会社騒動は今尚世人の記憶に新なもの」(T13.12.21徳毎)とする。

3 紡績木管→三光木材工業

松島は「紡績木管其他合計十八会社の設立に関係」(T11.3.16徳毎)⁴²⁾した。紡績木管は*梅原文次郎、*鈴木久次郎ら20名(T 8.10.21内報①)の発起により大正8年12月30日「木管シャトル其他紡績用機械器具及煉瓦ノ製造販売、製材業並ニ一般木工業」(T 9.2.21藤本)を目的として資本金500万円で東京に設立された。創立総会で松島肇を代表取締役・社長に、市来精、*宮本巖、大西与三郎らを選任(T 8.12.31読売)、*帝国毛織紡績の主唱者で初代社長を予定されていた谷口直貞を常任顧問に迎えた。(T 8.10.21内報①)

後年の公判で松島は「紡績木管会社事件の村井銀行の五万円は、村井銀行の送金小切手を〈紡績木管〉会社が成立前に送りしもので、会社発起人会で全権を委任されしもの」⁴³⁾で、「当時振出しの小切手に不渡りなく、悉く決算が出来居り、各会社は完全に成立し総会の承認を経居り」⁴⁴⁾、「同会社の整理は事実上付いて居る」⁴⁵⁾と主張した。裁判長が「〈紡績木管〉会社が完全に成せない以前に土地買収の登記を行ふて居るが、そんな事が出来るものか」と詰問すると、松島は「或は問題かも知れぬが、天下比々皆然り、他の会社にも例あれば差支えないと思ふ」⁴⁷⁾、「此事件が犯罪となるやうになれば、恐らく全国各地に設立せられたる会社は一として此種の犯罪の行はれない会社はない」⁴⁸⁾と答えた。

大正11年には戸水寛人が同社代表取締役(紳T11、上P102)に就任している

が、松島にとって「*大日本原毛…紡績木管…等に於る『法学博士戸水寛人』氏の如く傀儡」(T11.2.8徳毎)の典型と見られていた。

紡績木管はその後に三光木材工業と改称(帝T11、P324)、本店を麴町区麴町4-1に置き、代表取締役戸水寛人、取締役*関良太郎、*堀内胖治郎、*清水獎、監査役*田辺二郎、支配人*高田忠吾であった。(帝T11、P324)大正11年7月*城東木材工業が旧紡績木管たる「三光木材工業会社ヲ合併百五十万円…増資」(帝T13、P399)した。

4 日本緬羊毛織

欧州大戦を契機に毛織物業界は原料途絶のため「緬羊の飼育を奨励し、自給の方策を建つるの外なき」(T6.11.15読売)状態に陥った。そこで農務当局も原料自給策としての緬羊飼育奨励策を研究した結果、「将来に於て羊毛自給は有望なるもの」(T6.11.15読売)との見解を示した。そして大正8年1月4日「農商務大臣は緬羊の飼育を奨励するため、毎年度予算の範囲内に於いて、左に掲ぐる者に奨励金を交付」(T8.1.5時事)することを内容とする5ヶ条から成る「緬羊飼育奨励規則」を農商務省令として発令した。地方農家で副業として緬羊を飼育する者等に対する奨励金は1頭につき3円であった。ここに緬羊飼育⁴⁹⁾ブームが生まれる背景があった。

こうした緬羊飼育ブームを背景として井上⁵⁰⁾業敬、*大河原章弘「両氏の手にて緬羊飼育専門の会社創設を目論見」(内容)、まず同業者の矢崎好一(後述)に対して、「大崎町の有志及び四五事業家より、〈矢崎好一〉氏の投資する木下川純毛製絨所と紡績所を合併して株式会社となすべく頻りに慫慂し、氏も承諾の余儀なきに至り」(T8.2.11内報)、さらに*鈴木久次郎、大葉⁵¹⁾久吉を順に説いて、この5名が主唱者となって、木村庫之助、坂田実(前出)の2名を発起人総代に推した。(内容)

日本緬羊毛織は大正8年12月10日「緬羊飼育及種付売買、緬羊毛、皮、其他畜産品の加工売買」(T9.2.7藤本)を目的として、「資本金五百万円を以て設立計画中の日本緬羊毛織会社は〈大正8年12月〉十日創立総会を開き、左記

重役を挙げ成立を告げたり。取締役鈴木久次郎、社長大葉久吉」(T 8 .12増田 4-36)と報じられた。

大正8年9月18日 日本緬羊毛織発起人の*鈴木久次郎、大葉久吉、*矢崎好一の三名は日米信託⁵²⁾と配当保証依頼の契約を締結した。(T 9 .7 .21D) 矢崎好一(下谷区上野桜木町)は明治36年毛織物・毛糸紡績⁵³⁾を開業、「毛織物、襪襦原毛屑毛を取扱い、矢崎氏考案になる車両用バットの販売をなし」(T 8 .2 .11内報)、東京府大崎町の飯田絹綿紡績所を買収(T 8 .2 .11内報)し、矢崎第一工場⁵⁴⁾を大正5年9月に創業した。矢崎第二工場(南葛飾郡木下川)と併せ合計1415錘の旧式設備と賃借の織機18台を有する毛糸紡績2工場を経営していた。7年2月調査で14年前に毛屑及織物開業、正味身代未詳、商内高75~100万円、取引先の信用の程度5段階の中位Ca、6年度所得税105円(商、P 572)の「余り成績の挙げぬ工場」(T 8 .11.1D)にすぎず、識者には「機械旧式に属し能率低少なる事」(内容)が疑問視された。大正8年12月設立の*帝国毛織紡績監査役のほか、大正8年8月16日設立の起重機製造⁵⁵⁾(株)の100株主、13年には対物信用・負債、対人信用薄、年商未詳、盛衰は衰と判断された。⁵⁶⁾

矢崎好一は自己所有たる「矢崎工場買収に当り時価二十万円のを四十三万円とし、実際に三十五万円を支払ふて、其間八万円の行衛を不明となし」(T 9 .11.28北海)たとされた。しかし『ダイヤモンド』誌の独自の調査によれば、「日米信託は右〈矢崎〉工場を二十万円で買収し、之を四十五万円で当〈緬羊〉社に売付ける其差二十五万円は即ち日米信託の占むる処で、配当保証の代償である」(T 8 .11.1D)と探知したとスクープした。そして同誌記者は続報で「発起人三者が日米信託に提供すべき七万五千円の補償担保は実に此工場売却利益の一部を以て充つべき計画であった」(T 9 .7 .21D)ことを確問したとする。こうした批判に対して日米信託側は「当該会社より安全確実なる優先担保を徴して其配当を保証したるに過ぎず」(T 8 .12.18内報①)とし、工場売却説を全然無根と否定した。後年になって家村五郎は『投資之研究』の中で、日米信託の配当保証業務に関して「大正六、九年頃乱設された各種事業に対する配当保証が其主たるもので、当時東京方面で新設された会社は大抵日米信託に依りて

或は二割或は一割五分と謂ふが如き、最低の配当率を保証せしめ、此保証を餌に地方人を釣ったものである…全然経験もない、無関係の事業に対して、大胆にも其配当率を保証すると謂ふが如き、乱暴さもここに到っては、亦極まれりと謂はねばならぬ。而して其結果は什うであったか、保証された会社は惨々発起人共の食物となって、何れも将棋倒れとなり、保証した日米信託は遂に一大整理の止むなきに到り、現在千代田信託と改称して存続してゐるが、微々として振はず、其存在すらも忘られてゐる⁵⁷⁾」と批判している。

しかし他人に対する不信感の強い矢崎は「他重役の帳簿不正記入を恐れ、重要帳簿を自宅に持帰りて之を保管する等の出来事」(内容)があった上、「明治三十六年以来毛織物、襦褌原毛屑毛を取扱」(T 8. 2. 11内報)ってきた矢崎のことと思われる羊毛ビジネスに精通したある同社重役は阿部幸商店の倉庫に預け入れた「一度沈没して引揚げたる所謂塩食ひと称する古羊毛四十封度」(内容)を「私腹を肥さんが為」「倉荷証券を引出して全部の処分を為さんとしたる事発覚し他重役の抗議によりて之が取引を停止」(内容)するなど、その他にも「種々背任行為に及」(T 9. 12. 26東日)んだと報じられた。こうした矢崎らの私利行為と、役員相互不信は日本綿羊の「会社内部の素乱と財政の窮乏」(T 9. 7. 21D)と日本綿羊「重役間に閥閥のある」(T 9. 7. 21D)遠因をなしたと考えられる。

大正8年11月鈴木錠蔵は矢崎好一の経営していた矢崎工場を買収の上、松島肇、大葉久吉、*鶴沢字八、*矢崎好一、*大河原章弘、*横山一平を発起人として、「大正八年十二月十日商号ヲ日本綿羊毛織株式会社ト称シ資本金五百万円、一株ノ金額五十円、株式総数十万株、第一回株金払込一株ニ付十二円五十銭ノ払込ヲ了シ設立⁵⁸⁾」、払込125万円で「綿羊飼育及種付売買 同毛其他加工売買 綿糸ノ製造販売綿毛織布ノ製造」(要録T 9、p 63)を目的として日本綿羊毛織を京橋区南金六町15に創立した⁵⁹⁾。日本綿羊は東京絹毛紡織から「既に十数年の古きに達し」(T 8. 11. 1 D)た中古の紡機二組660錠を譲受けた。(T 8. 11. 1 D)

折からの綿羊飼育ブームを背景として、創立趣意書にまず羊毛自給の重大性

を強調し、緬羊飼育の予定地として樺太などを挙げ（内容）、自社は「自給自足以て製絨の独立を企画し、之が輸入を防遏せん」（T 8.11.1 D）、「根柢あり、且つ国家的有利有望なる事業」（T 9.12.3 法律）などと巧みに宣伝した。「政府の緬羊飼育奨励政策実行等の理由に基づき素人筋の人気を喚起して、其の応募熱を刺激」（内容）したため、日本緬羊総株数10万株中の「一万五千株の公募に対し二百五十倍⁶⁰⁾」もの応募があった。このため一時は5～8円程度のプレミアムが付いた（内容）が、『ダイヤモンド』誌は「当社が政府の緬羊飼育奨励規定に基いて緬羊の養牧を兼営し、原料の自給を図るといふ事と、創立後二ケ年間日米信託会社が配当の支払を保証するといふ事が、事情に通ぜざる一般世人の投機心を唆った為め」（T 8.11.1 D）と推測した。そして「此二ツの事こそは発起人諸氏が苦心案出した妙案」（T 8.11.1 D）として着目し、独自に調査を始めた。もともと日米信託には「事業の鑑識に欠くる所がある」（T 9.3.21 D）と懐疑的であった『ダイヤモンド』誌は調査の結果として「若干の利益を得んが為めに暗に日本緬羊の欺瞞的吹聴を裏書するが如き態度に出たのは、公的性質を有する信託会社として…余りに不信不徳」（T 9.7.21 D）だとして日米信託を「財界攪乱者」（T 8.11.21 D）と決め付けた。

今ひとつの「妙案」である政府奨励の緬羊飼育にも同誌は「払込金百二十五万円の内、緬羊飼育に投ぜらるる資本は、驚くべし、総計僅かに二万五千九百三十円、緬羊頭数⁶¹⁾は三百五頭に過ぎない…当社に於て…何程の価値を加へるものであろうか」（T 8.11.1 D）と疑問視し、「如何にも欺瞞的にして、世を愚にするが如き」（T 8.11.1 D）「羊頭狗肉⁶²⁾的の欺瞞」（T 8.11.1 D）と警告した。結局、形ばかりの緬羊飼育の兼営は、いかにも「国家的有利有望なる事業」という幻想を抱かせる意図のもとに松島らがブレンドした“幻覚剤”⁶²⁾にしかすぎなかったようだ。

果して日本緬羊毛織の株主となり、同社の「内幕漸く紊乱状態を呈するに至るや」（内容）二宮喜一（大正9年6月総会で調査委員）、三木麟らと「有志株主会」を組織し検査役選任を申請（内容）、総会でも調査委員の一人に選任され、後に重役を告訴した五十嵐与助は「此株募集の際は、国家的の事業でもあるの

で、自分の妻子女中の貯金までも出し、一割二分の配当保証があるからとて買はせた」(T 9.12.3 法律)と、同誌の危惧した通り、政府奨励と日米信託の配当保証に釣られたと証言している。五十嵐に寄せられた苦情によれば「或地方などでは中等学校の教員等多数に申込」(T 9.12.3 法律)んだが、「斯うした人々は多年辛酸を嘗めて貯蓄した秘蔵の臍繰金を全部出して買った」(T 9.12.3 法律)のであった。世間知らずのくせに生半可な知識で妙なプライドを持ち、しかも世間体だけを気にする「学校教員やお坊さん」は一般に多く取込み詐欺等の恰好のカモにされ、正直に全く知識がなくて見事に騙されたとも声を上げ難く、「身分柄泣き寝入りとなり勝ち⁶⁴⁾」で、最も深刻な被害者になっているといわれる。

9年の役員は代表取締役*鈴木久次郎、代表取締役大葉久吉、代表取締役*矢崎好一、取締役井上業敬、*横山一平、*鶴沢宇八、*大河原章弘、監査役松島肇、小沢浩であった。(要録T 9、P 63)

日本綿羊毛織の株価は「十二円五十銭払込が十三円五十銭と云ふ気配、即ち僅か一円権利であるが、こんな会社に一円でも権利が付いて居るのは配当保証付の御利益」(T 8.11.21D)と解されていた。重役は綿羊飼育の予定地として挙げていた「樺太庁より貸下を受けし百九十五万余町歩の牧場地及青島に於ける払下地の経営費に充つべく、第二回払込金を徴収せん」(T 9.11.17東日)とした。例えば大葉久吉は樺太拓殖(旧海府鉱業)の社長であったし、松島系の*日洋土地興業も「樺太に於ける陸軍駐屯地に貸家を経営する」(T10.4.21D)という第二期計画を有するなど、この時期樺太との接点を有していた。大正9年には「樺太ニ於ケル綿羊飼育ノ為メ、青島ニ於ケル羊毛売買ノタメ各々出張所ヲ設ケ社員及囑託員ヲ派遣⁶⁵⁾」する陽動作戦をとった。しかし翌年に早くも「樺太青島ニ於ケル企業モ亦中途ニシテ休止ノ罷ムナキニ至⁶⁶⁾」った。

日米信託に配当保証の契約の承認延期を乞うに当って、日本綿羊側は「重役間に閤闘のある趣をも告白した」(T 9.7.21D)が、日本綿羊總會直前の大正9年6月29日日米信託は①日本綿羊重役の相次ぐ辞任、②配当保証の契約の承認の遅延、③「企業援助の手段たる事業監査の不能」(T 9.7.2内報)の三

点を挙げ、「当社並に発起人にそれ丈けの実力と誠意なき事を認め」(T9.7.21D)、配当保証の契約解除を通告した。重役間の暗闘というのは具体的には「社長鈴木久次郎(代議士)、同重役松島肇(代議士)、同大河原章弘一派と、同重役横山一平、同大葉久吉、同鶴沢字八(代議士)、同小沢熊吉<浩の誤記>等一派との間に暗闘常に絶えず…意見一致せず」(T9.12.26東日)、「鈴木久次郎、松島肇氏等一派と、重役横山一平、大葉久吉、鶴沢字八等一派との暗闘絶えず」(T9.12.26東朝)と報じられたような鈴木=松島派と横山=大葉派との内部対立が深刻化した事態を指す。これは創立総会の直前から「鈴木久次郎氏対大葉久吉氏の間に社長就任の争奪戦開始され、且つ相共に自派より重役を選定せんと両々相降りざりし」(内容)という深刻な対立であった。鈴木・松島派のあまりの専横ぶりに不満を抱いたためか大正9年7月9日総会直前に「取締役横山一平、大葉久吉、鶴沢字八、監査役小沢浩の四氏辞任⁶⁷⁾」したが、大正9年7月の日本緬羊総会は鈴木社長が当日「貸借対照表、財産目録等の編成結了せず、従って重役会の決議、監査役の承認を経るに由なきを以て決算報告は今暫らく延期ありたし」(内容)との「奇怪千万なる申出を敢てした」(内容)ため紛糾し、五十嵐与助、成川時之進、安川政之助、渋谷正吉(唐津鉱業取締役)ら計15名の調査委員を選任して会社の内容を調査させることとなった。(内容)その後継続会を三回も開催したが、「遂に議案の決議を見ず⁶⁸⁾」に終わった。

矢崎好一が大正9年7月松島系の*帝国毛織紡績監査役を辞任⁶⁹⁾したのも、松島系との対立激化の反映であろう。「重役の或者は自から其班に伍するを潔しとせず、事情を検事局に具陳して公明なる取調を仰」(T9.7.2内報)いだと噂されたが、その後噂通り矢崎らの不正が発覚したとして吉田政次(本郷区西片町)外1名は「大葉、横山、鶴沢の三重役と相談し、警視庁に」(T9.12.26東日)矢崎を詐欺横領罪で告訴した。(T9.12.26東朝)これに反撃する形で矢崎も「各重役に対し工場買収残金の行方調査を名とし…告訴」(T9.12.26東朝)するなど重役同士の訴訟合戦という泥試合に陥り、9年12月から10年5月27日までに「提起サレタル訴訟ハ十二件⁷⁰⁾」にも上った。

「彼等の奸策の罠にかかったと知った時は発狂せんばかりに驚いた」(T9.

12.3 法律) 日本綿羊毛織の零細株主を代表して重役の告訴に踏み切った五十嵐与助は「最初…重役の良心に訴へて円満に解決せしめ様と思ひ、あらゆる交渉をして反省を促したるが何等の誠意なく言を左右にして益々毒手を拡げるので…止むなく告訴した」(T 9.12.3 法律)と証言している。五十嵐のもとには零細株主から「毎日にとどく書信」が「大梱二つに山積されて居る」(T 9.12.3 法律)ほどであったという。重役の毒手奸策を追及することを託された五十嵐は「彼等が此世から居り去るるまでは、何処までも正義のために私財を放棄しても戦ふ」(T 9.12.3 法律)と「昂奮して語った」(T 9.12.3 法律)と報じられた。

日本綿羊は「会社資金十六万六千円を預金するに当り、信用薄き松島氏経営の*昌栄銀行に預入れ、而も引出しを禁じ、昌栄銀行よりして費途不明に終らしめ」(T 9.11.28北海)たとされる。大正9年11月10日日本綿羊は両工場「建物ヲ昌栄貯蓄銀行ヨリノ借入金ノ担保トシテ抵当権ノ設定ヲナシタ」⁷¹⁾が、9年11月末の借入金は47.1万円であった。

9年11月12日日本綿羊は「株金第二回ノ払込ヲ為スベキ様株主ニ通知」⁷²⁾したが、「金融梗塞ノ為メ資金ノ運用意ノ如クナラズ、止ムナク事業休止ノ状態ニ至」⁷³⁾った。10年1月7日日本綿羊本社・両工場「建物ニ対シ債権者昌栄貯蓄銀行ハ競売手続ヲ開始」⁷⁴⁾した。10年3月10日日本綿羊の機械等に対し「債権者昌栄貯蓄銀行ハ競売ニ付シ之ヲ競落」⁷⁵⁾した結果、10年5月期の損益計算書では建物処分損失5.0万円、原料被競売損失27.5万円、在庫物品被競売損失3.5万円ほかを計上、大正10年5月末の借入金は17.8万円減少して29.3万円となった。⁷⁶⁾

樺太庁から貸下げられる「特権地の権利を失ふに至るべきことを慮」(T 9.11.17東日)った渋谷正吉(大正9年7月総会で調査委員)、「前川太兵衛氏外四名の協調委員の仲介にて問題解決…臨時総会を開会するの運びになれる」(T 9.11.19東朝)も、その後重役側は「協約を破棄し、総会を取消せしより、再び紛糾を重」(T 9.11.19東朝)ねた。株主団体の「協調会」「擁護会」中には告訴人の「五十嵐与吉氏と渋谷正吉氏とに会社乗取りの策ありと云ふ者ありて紛擾し、遂に流会」(T 9.11.23東朝)となるなど、混迷を深めた。ついに反松

島派の同社株主が鈴木、松島、矢崎、大河原ら（T 9 .12. 9 北海）松島派の取締役4名、監査役1名の業務執行禁止の仮処分を申請した。東京地裁は大正9年12月14日「鈴木社長以下四名ニ対シテ大正十年一月三十一日迄取締役及監査役ノ職務ヲ執行スベカラズ⁷⁷⁾」として反松島派の横山一平、大葉久吉、成川時之助、近藤友次郎に「取締役監査役ノ職務ヲ仮リニ執行スベシ⁷⁸⁾」との仮処分命令を出したが、この処分は役員の業務執行禁止の仮処分の嚆矢とされる。（T 9 .12.17北海）

検事局の取調によれば鈴木＝松島一味の不正行為としては、「第一回払込金百二十五万円の大部分を重役等が費消」（T 9 .12. 8 東日）「其急を救ふ為に事業有望を装ひ…第二回払込を命じ」（T 9 .12. 8 東日）た上に以下の通りであった。

- ①「重役側の払込は単に名義に止まり、其实預金によりて正当に払込をせず」（T 9 .11.28北海）
- ②「府下大崎町所在工場（元矢崎好一所有工場）」（T 9 .12.26東日）「府下の自己所有工場」（T 9 .12.26東朝）たる「矢崎工場買収に当り時価二十万円のを四十三万円とし、実際に三十五万円を支払ふて、其間八万円の行衛を不明となし」（T 9 .11.28北海）、「矢崎は自己及一味の者に一万七千株を分ち、他日…利を占めんとして在庫品、創業費、創立費等を横領し、種々背任行為に及び」（T 9 .12.26東日）
- ③「本年二月同社の第一期決算に当り、之れが挽回策として在庫品、営業家屋、什器等を時価より著しく高値に見積もり、不当の蝸配当をなし」（T 9 .12.26東日）、「第一期に当り在庫品を時価より十八万円も高く評価して不当の配当をなし」（T 9 .11.28北海）
- ④「社長たる鈴木個人の負担すべき八万八千円を会社資金にて仮払し」（T 9 .11.28北海）
- ⑤「会社資金十六万六千円を預金するに当り、信用薄き松島氏経営の昌栄銀行に預入れ、而も引出しを禁じ、昌栄銀行よりして費途不明に終らしめ」（T 9 .11.28北海）
- ⑥日本緬羊は「投資株金」として25万円を計上

日本緬羊は創立総会で定款39条に「当会社は他会社の株式を所有し、及び同種の事業に投資する事を得」という一項をわざわざ追加した。これは「松島肇氏の関係せる*大日本原毛株式会社の株式二万株を緬羊会社に於て引受けんが為めにして、此払込二十五万円は緬羊会社より原毛会社に払込み、更に緬羊に対しては松島氏経営の昌栄貯蓄銀行より同金額の貸付形式を執りたるもの」(内容)であった。事業が緒に就いてもいない段階の「会社が投資株券として二十五万円、払込をなすに殆ど価値なき松島経営の*大日本原毛会社の株券二万株を買入れて之に充て」(T 9.11.28北海)たと株主から糾弾された。日本緬羊の大正9年11月末の貸借対照表には「投資株金」として25万円を計上、同時に「投資株式払込未請求額」「投資株式未払込額」各75万円⁷⁹⁾両建計上していた。

松島が副社長の「大日本原毛紡績会社株券二万株に対し一株五円の第二回払込をせざれば失権されん怖れあるが為め、該資源として緬羊第二回払込金を徴せんとする」(T 9.11.19東朝)行動を招いた。かくて9年11月12日「株金第二回ノ払込ヲ為スベキ様株主ニ通知」⁸⁰⁾したが、「金融梗塞ノ為メ資金ノ運用意ノ如クナラズ」⁸¹⁾大日本原毛紡績2万株は失権し、大正10年5月末の貸借対照表に「投資株金失権損失」⁸²⁾として34.8万円を計上した。ただし、松島自身の供述によれば、全く逆になっており大日本原毛紡績の「現実払込み株金額六十万円中、二十五万円を自分が監査役である日本緬羊会社に…融通」⁸³⁾したとされる。

⑦「斯くて会社の資金の百二十余万円を全く不正に費消した」(T 9.11.28北海)ため、「第一回払込金百二十五万円の大部分を重役が費消」(T 9.12.9北海)したことになる。

⑧「大河原〈章弘〉等は矢崎〈好一取締役〉を恐喝して数千円を騙取したるなど数多の不正行為ある」(T 9.11.28北海)として告訴された。この時担当の小泉捜査係長は緬羊「重役と名のつく者は皆悪いやうだが、体刑にはなるまいと思ふ。就中松島、大河原の各重役は存外に関係が薄いが、鈴木、鵜沢、横山等の一派は会社を乗取らんとした程」(T 9.12.26東日)と何故か松島派に有利な見解を示した。恐らく意図的に表に出ることを避けた松島の役割を過小評価した結果とみられる。10年1月17日緬羊取締役の吉田銀治は「当会社は紛糾其極」⁸⁴⁾

に達し、最早解散の外なし。幸に善良なる株主諸君の委任状即時吉田銀治宛御送附被下度此段公告仕候也」(T10.1.20東日)との公告を日刊紙に出した。

大正10年秋横山一平が社長、成川時之助が専務に就任するに際して、「当社積年の紛紜も…円満解決を告げ、一段落⁸⁶⁾」したと樂觀し、横山、成川らは「社務の整理と債権者側に対する交渉とに没頭⁸⁷⁾」中と称した。

大正11年5月31日時点の日本緬羊毛織は資本金500万円、払込127.3万円、借入金29.3万円、当期損失・繰越損失1,028,133円、代表取締役*横山一平、成川時之助、安川政太郎、取締役阪本弥一郎、岡益民、*鶴沢字八、大葉久吉(大正9年12月東京地裁任命)、清水達也⁹¹⁾、監査役不破外喜次郎、野間要、小山清太郎、木村庫之助⁹⁴⁾であった。

日本緬羊毛織のその後の経過は「大正十一年十月三十日第二回株金払込トシテ一株ニ付七円五十銭ノ払込ヲ為シ、大正十二年一月二十七日商号ヲ現在〈日清毛織株式会社〉ノ如ク変更シタ⁹⁵⁾」が、結局のところ日清毛織は「大正十二年一月三十一日 破産宣告ヲ受ケ⁹⁶⁾」、「昭和二年六月十四日 強制和議認可決定確定シ破産ハ解止ト為リタリ⁹⁷⁾」という最悪の結末となった。

- 1) 満蒙毛織は大正7年12月資本金300万円で奉天に毛織物製造を目的に設立された。
- 2) 後藤毛織(第三次)は大正7年7月5日「本邦に於ける毛織物製造の率先者」後藤恕作によって東京毛織に転売されず「残った特許権と、聊かの工場設備」(『風雲六十二年神田鐮藏翁』昭和28年、紅葉会、P219)をもとに大正7年7月5日新たに設立された。経営が「万事派手に遣って放漫に流れ」(S8.9.2T)、資金繰りに窮し大正13年11月第1回担保付社債を発行したが、大正15年12月支払困難となった。
- 3) 千代田毛織は「個人より変体」(『財界二十五年史』大正15年、P180)により大正7年12月設立され、羊毛紡織と改称した。
- 4) 羊毛整製(社長久保勇)は大正8年11月資本金300万円、払込75万円で「廃物を解体反毛して紡績業者に供給」(T10.3.1D)する目的で日本橋区平松町12に設立され、(帝T11、P180)、既存会社を買収するとともに、川崎、名古屋両工場を

新設した。(T10.3.1D)

- 5) 中華毛織は社長河崎助太郎、取締役広沢耕作ら、監査役高倉為三ら。大正10年7月15日東華紡績と対等合併して解散(株式年鑑T10、P221)
- 6) 谷口直貞は同時期、松島系の*大日本原毛紡績設立を主唱(T8.11.20内報①)、松島系の*紡績木管の常任顧問(T8.10.21内報①)に就任、東洋調帯発起人
- 7) 12) 34) 大正10年12月7日広島地裁第一回公判(T10.12.13法律)。田村範文は8年12月*鈴木久次郎、*伊藤忍、*徳永斌、*福井甚三らと「発起人の顔触に見て稍物足らざる感」(T8.12.3内報①)あると評された大日本木炭発起人となった。
- 8) 9) 10) 11) 15) 16) 17) 18) 帝国毛織紡績『第一期営業報告書』
- 13) 『財界二十五年史』大正15年、P180
- 14) 日本銀行調査局『本邦財界動揺史』『日本金融史資料 明治大正編』第22巻、P614
- 19) 25) 26) 27) 28) 帝国毛織紡績『第二期営業報告書』
- 20) 22) 30) 31) 32) 帝国毛織紡績『第三期営業報告書』
- 21) 23) 帝国毛織紡績『第四期営業報告書』
- 24) 徳島市西新町2丁目、恐らく第一倉庫本店・昌栄貯蓄銀行徳島総代理店内と思われる。
- 29) 同様な変態政策は「殆ど事業もせぬ」(T11.11.24徳毎) 日邦製薬でも「松島が例の術策で手に入れてから松島製薬株式会社と社名を変更し、更に日東製薬と名称を換へ、会社は殆ど事業もせぬに第二回、第三回、第四回と例の悪辣な手段で株金の払込を徴収」(T11.11.24徳毎) した事例が見られる。
- 33) 大浜孤舟『暗黒面の社会・百鬼横行』新興社、大正15年、P111
- 35) 東京絹毛紡績は大正5年に「既設工場を買収拡張し」(T8.11.1D) で大正6年3月「濫興会社の先駆」(『財界二十五年史』大正15年、P180) として設立されたが、大正9年の「恐慌当時に於て…漸く工場の完成が近づいた」(同上) ため、「当時兎角の噂を立てられた」(同上、P181) 泡沫会社の一つであり、結局10年5月毛織部門を富士毛織として分離して解散した。この富士毛織も大正12年6月「上毛モスクリン」に合併(『財界二十五年史』、P181) して解散した。(『日本毛織六十年史』、昭和32年、P615、『主要企業の系譜図』、P134) なお工場が完成したため「既に十数年の古きに達し」(T8.11.1D) た既存の紡機二組660錠を不用となった「東京絹毛会社より譲受け」(T8.11.1D) たのが日本綿羊毛織という因

縁にあった。

- 36)37) 『財界二十五年史』帝国興信所、大正15年、P181
- 38)39)40) 大正10年12月5日広島地裁第一回公判(T10.12.13法律)
- 41) 大正11年4月10日広島地裁公判(T11.4.18法律)
- 42) 「紡績界の発展と共に紡績用木管は非常なる需用を呼び」(『徳島県商工人名録』大正8年、P42) 松島の郷里の大正木管も「其の供給を為し能はぬ現況」(同上)にあった。
- 43)45)48) 大正11年4月10日糸崎船渠事件の広島地裁公判(T11.4.18法律)
- 44)46)47) 同上公判(T11.4.11徳毎)
- 49) たとえば近藤士郎らは綿羊飼育奨励策に呼応して神奈川県下の4牧場を予定した日本綿羊を資本金150万円で発起(T8.10.15内報)、大連取引所銭鈔信託取締役支配人の神崎常一らも大正9年2月南満綿羊を大連に資本金30万円で設立し、取締役に就任した。(帝T11職、P199、要T15、関東州P12)
- 50) 井上業敬(目黒村)は日本肥料取締役、東京馬車自動車(要録T11、役上P5)、大正8年12月設立の旭炭砒各監査役(T8.12.13内報③)
- 51) 大葉久吉(日本橋区本石町)は出版業の傍ら、日本弘業、日本国債、別府観海寺土地、別府土地信託、荏原土地、北海炭砒鉄道、常盤採炭、海府鉱業ほか多数の新設企業に関与した。
- 52) 日米信託の保証業務については麻島昭一『本邦信託会社の史的研究』日本経済評論社、平成13年、P147以下に詳しい。しかし配当保証への言及はなく、同社としても異例の対応か。
- 53)56) 『帝国信用録』帝国興信所、14年、P223
- 54) 職工男35、女27、60馬力(『工場通覧』大正10年、P164)。
- 55) 起重機製造『第一回営業報告書』T8/11、P12。なお鈴木久次郎が取締役③1,000株主
- 57) 家村五郎『投資之研究』投資研究社、昭和5年、P73
- 58) 第一審の事実、『大審院民事判例集』第10巻、P549
- 59) カルチウム鉱泉は京橋区南金六町12
- 60) 越山堂編『明治大正成金没落史』『経済パンフレット』第2輯、越山堂、大正14年、P184
- 61) 大正7年の民間飼育綿羊頭数は2、958頭で、主なものは馬毛島牧羊場約700、千本松農場約400、小岩井農場約200、日本毛織130ほかであった。(佐々木悟「日本に

おける綿羊飼育の展開と衰退』『開発論集』第32号、北海学園大学開発研究所、1983年3月、P102)

- 62) 松島は同様に熱海宝塚土地でも熱海中心の計画に、宝塚の土地をほんの少しブレンドして、歌劇等を含む総合リゾート開発業の幻想を抱かせるという配合の妙を発揮している。
- 63) 64) 奥村千太郎『株式放資と売買術』文雅堂、昭和6年、P406
- 65) 67) 68) 71) 72) 73) 79) 80) 81) 日本綿羊毛織『第二期報告書』T9/11
- 66) 70) 74) 75) 76) 77) 78) 82) 日本綿羊毛織『第三期報告書』T10/5
- 69) 帝国毛織紡績『第一期営業報告書』
- 83) 大正10年12月5日広島地裁第一回公判(T10.12.13法律)
- 84) 吉田銀治(南葛飾郡吾嬬町)は鉱業ブローカーと目される鉱業信託取締役(要録T10役中、P17)。なお鉱業信託は南葛飾郡吾嬬町小村井1000、大正7年5月設立。大正10年6月河野英良の主宰する東日本炭砒は鉱業信託(大正7年5月設立)を合併した。(要録T10、P218)
- 85) 大正9年6月総会で調査委員。大正9年12月東京地裁任命
- 86) 87) 日本綿羊毛織『第三期報告書』T10/5の送付状
- 88) 安川政太郎(戸塚町)は大正9年6月総会で調査委員、日本薪炭代表取締役、高砂特許製紙取締役(帝T11、職P374)
- 89) 阪本弥一郎は慶応元年6月和歌山の阪本伝三の次男に生れ、英吉利法律学校卒、弁護士となり、和歌山市会議員、代議士(『一九二四年に於ける大日本人物史』大正13年、さP32)、能勢口土地取締役(T9.1.17藤本)、新花屋敷温泉土地社長、代議士、弁護士、扇田炭鉱、北大阪土地各社長、大正7年時点では北大阪土地取締役、大阪株式取引所監査役(人T7)、大正9年12月26日設立の豊田炭砒取締役(T10.1.20日本鉱業新聞)。大正12年時点では扇田炭鉱社長、酒類防腐素製造、富士鉱業、福松炭砒各取締役、大阪株式取引所、日東鉱業各監査役(『一九二四年に於ける大日本人物史』大正13年、さP32)。大正12年1月13日死亡、享年59(『大正13年毎日年鑑』大阪毎日新聞社、大正12年、P658)
- 90) 岡益民(赤坂区青山南町)は日本綿羊毛織取締役のみ(帝T11、職P141)
- 91) 清水達也は河野英良系統の東日本炭砒、東京屑物市場各取締役(帝T11、職P541)。「昭和三年八月十日株主総会ニ於テ株主中清水康男、清水八重子ノ所有株式各百五十株、清水俊ノ所有株式三万六千四百四十株、清水清秋ノ所有株式四百五十株、佐竹寅次郎ノ所有株式二千八百十株ヲ孰レモ無償ニテ会社ニ提供セシメ之ヲ

消却シ以テ資本ノ総額ヲ三百万円、株式総数ヲ六万株ニ減資スル旨ノ決議ヲ為シ、同月十六日之ヲ実行」(第一審の事実、『大審院民事判例集』第10巻、P 550)した。

「右消却株式ハ夫々前主カ失権シタルニヨリ、前記清水等ニ於テ競落ニヨリ取得シタルモノ」(第二審の事実、『大審院民事判例集』第10巻、P 551)

- 92) 不破外喜次郎(本郷区春木町)は日本綿羊毛織監査役のみ(帝T11、職P401)
- 93) 野間要(渋谷町)は日本綿羊毛織監査役のみ(帝T11、職P330)
- 94) 木村庫之助(横浜)は日本綿羊の発起人総代、「横浜実業界の重鎮」(『明治大正史 13巻』昭和5年、実業之世界社、キP8)、生糸売込商・木村商店主・木村合名代表社員(『大日本実業家名鑑』8年、P98)、横浜商業銀行専務、横浜電気工業社長、横浜興信銀行取締役ほか多数(帝T11、職P505)、大安生命社長、相模紡績、綾部製糸各取締役、八千代生命監査役(帝T11、P63)、大安生命を福島県郡山の富豪橋本万右衛門へ譲渡し、「その際売買価格百二十万円の内木村氏等が手にした金は七十万円余であったが、其の七十余万円の内の約半数以上の金は川崎肇氏の手より出て居る」(T15.9.6保銀)とされた。
- 95) 第一審の事実、『大審院民事判例集』第10巻、P549～550
- 96)97) 第二審の事実、『大審院民事判例集』第10巻、P551

第8章 熱海宝塚土地事件

この章では松島系の最大企業である日本土地（前身は熱海宝塚土地→日洋土地興業ほか）を取り上げる。松島は丹那トンネル開通後の熱海温泉の将来性を吹聴してまず熱海偕楽園、次に熱海宝塚土地を設立した。期待を裏切られた両社の株主には医師・知識人等も多く、株主擁護団を組織するなど松島らの株主収奪に激しく抵抗しようとした。この章では松島系企業の株主が被ったりリスクと、その防止、回復如何が主題となる。

1 熱海偕楽園→伊豆偕楽園（大正8年12月設立）

大正6年時点で熱海の東隣の伊豆山温泉の旅館数は9軒（熱海は43軒）で、同地老舗の浜田家経営の「相模屋の千人風呂は、遊泳自在にして浴槽の偉大なること其の比を見ず。之を伊豆山名物の一となす¹⁾」とされた。伊豆山温泉で医学博士の田沢録二、深川区の病院長矢崎高など「東京市内の知名の医師実業家を株主とし熱海に療養所を経営」（S2.10.26東日）することを企画し、大正8年12月22日「一、海水浴場及病後療養所ノ事業ヲ営ムコト。二、土地建物温泉海水浴場ノ権利ノ売買賃貸借並ニ仲介業ヲ営ムコト」（T9.1.7内報③）を目的として資本金50万円、払込12.5万円で熱海偕楽園を麴町区麴町四丁目1に設立した。創立総会で尾高次郎を会長に、松島肇を専務に、取締役²⁾に*福島宜三、*矢崎高、*宮本巖、前田勝次、*栗山博、監査役*横山一平、*本堂平四郎、堀越幸次郎、熊谷修一郎を選任した。（T9.1.7内報③）田沢録二を顧問に迎え、ホテル経験者の前田勝次を経営主任として3月上旬から仮開業した。（T9.4.24内報①）偕楽園ホテルは「眺望絶佳の場所に在り、且つ待遇極めて懇切なるが為め開業日浅きに拘はらず業況相当繁栄」（T9.4.24内報①）と報じられた。

「松島は創立の際一万株の内三千株をひき受けて、会社を食物にする目的で定員十二名の重役中八名まで腹心の者をわりこませ」（S2.10.26東日）たと報

じられたが、尾高会長は死亡、松島専務も糸崎船渠「疑獄事件の為に責を引いて専務の地位を辞退」(T 9. 4. 24内報①)した。このため大正11年時点では代表取締役*西条教部、取締役*福島宜三、*矢崎高、*宮本巖、前田勝次、*栗山博、監査役*横山一平、*本堂平四郎、堀越幸次郎、*松永孫七郎、支配人*清水燐であった。(帝T 11、P 23) また大正15年時点でも資本金50万円、払込27.5万円、代表取締役*中川豊、取締役*福島宜三、*矢崎高、*栗山博、松島肇、*佐藤松垂、*高橋憲治、*平松茂夫、*高田直三郎、監査役堀越孝次郎、*松永孫七郎であった。(要録、T 15 P 20) *印は松島と関係が深い人物〔参考資料1〕参照)であり、「腹心の者をわりこませ」たとの報道を裏付けている。「松島肇の四天王の筆頭と称せらるる」(T 12. 8. 18徳毎) 大久保彦四郎は「慰労として郷田と昌栄銀行代理店主任の山田某を偕楽園に連れて行って御馳走をして居る」(T 12. 8. 24徳毎)と報道されるなど、グループ企業幹部も接待等に伊豆山偕楽園を利用していたのであろうか。

昭和2年6月30日の株主総会では「療養所建築費二万余円、同所震災復興費五万余円を横領した外、種々不正をはたらいた」(S 2. 10. 26東日)として、「松島の専横に憤慨した株主有志が裁判所に監査役を申請すること外二ヶ條を提案し、容認しない場合は決算を承認しない」(S 2. 10. 26東日)と騒ぎ、4回の継続会を開くほど紛糾した。昭和2年8月9日「松島が…自己に利益ある〈伊豆山偕楽園〉監査役三名を裁判所に申請」(S 2. 10. 26東日)したため、さらに反感を高めた株主側は昭和2年10月25日旧昌栄銀行建物内で開催された株主総会で「株主有志の名で新に監査役六名を申請すると同時に…訴訟を起すことに決定」(S 2. 10. 26東日)した。

「東京市内の知名の医師」(S 2. 10. 26東日)として当初から偕楽園設立に関わるなど、同社の内情に精通していた矢崎高の告訴状によれば松島肇は「九年前、偕楽園創立以来取締役の地位を利用し、会社の財産を四十万円も費消し、然も会社³⁾に四万円の貸しがある如く帳簿面をごまかし…偕楽園の乗っ取り策を講じてゐた」(S 3. 7. 27東朝)と報じられた。

昭和6年時点では伊豆山偕楽園は熱海偕楽園に商号を変更済みで、一般旅館

として営業しており、代表取締役は松島派に反対した矢崎高が就任していた。⁴⁾

2 熱海宝塚土地（大正9年7月設立）

大正9年「政界の老妖星三浦親樹將軍」（T9.9.3東日）の「熱心尽力せられたる賜⁵⁾」で熱海の別荘を入手した船成金の内田信也によれば大正9年ころの熱海では「人々は何れも土地売買を為さぬものなし。曰く誰は地所の為め莫大の収利を獲たりと。地所の転売者とならざれば人にあらざるものの如く対話…熱海は土地の転売尤も盛にして甲より乙へと転々反復して毎日権利の受授に忙⁶⁾し」と、さすがの成金も熱海の地所熱に圧倒されている。また熱海の「温泉湧出の範囲が広くなく、量が豊富でないために、導管の権利が現在でも頗る高価に達してをる」と、温泉権、引湯権まで高騰を続けた。『ダイヤモンド』誌も熱海が東海道本線の「予定線となると共に将来の繁栄を見越し、既に著しく地価の騰貴したのは事実」（T9.3.11D）としている。

こうした「土地の転売尤も盛」んな熱海の地所熱に目を付けた「代議士松島肇氏等計画」（T10.12.18法律）にかかる熱海宝塚土地は「熱海の温泉場に大阪の宝塚土地会社と連絡を取る土地会社を設立し、小田原熱海の土地繁栄を招来する意気込み」（T10.12.18法律）で大正9年3月ころ「馬越恭平、藤本清兵衛、越山太刀三郎、*鈴木錠蔵、河崎助太郎氏等発起人となり、資本金三千万円の熱海宝塚土地会社創立の計画あり。第一回払込七百五十万円を以て、熱海町所在の温泉及旅館付土地二十一万二千余坪及阪急電鉄宝塚沿線土地七万四千余坪を買収し、別荘住宅経営を為すべし」（T9.3増田5-8）と報じられた。「右土地は会社計画の発表に先ち発起人に於て既にも買収してあるものを、其儘会社に承継するもの」（T9.3.11D）であり、表面には出ない真のプロモーターである松島自身の公判での供述によれば*大日本原毛紡績の「現実払込み株金額六十万円中…十万円を静岡県熱海町及び兵庫県宝塚町付近の自己の土地買収資金に…融通⁸⁾…したのは正当」とであると主張した。

熱海宝塚土地社長となる戸水寛人は大正9年7月ころ熱海との地縁を「私は今から三年前の夏の頃、初めて熱海に来て富士屋旅館に投宿したことがあった。

今回此の翠光園に参ったので、前後参回しか熱海に来たことがない⁹⁾」「翠光園で代議士松島肇氏等が創立總會を開いて会社の成立を謀り¹⁰⁾」として「土地に対して不案内」な自分ではなく、松島が主役であることを告白する一方、「会社は熱海を中心に種々の経営を為さんが為めに出来たものであるから、数年の後には東海道線の開通するに至らば、其の地は期せずして東洋唯一の楽天地と化し繁栄するに相違ない¹¹⁾」と、東海道線開通で「益々隆昌の域に赴く」熱海を吹聴した。一方、「当社の理想とし標榜する処の大ホテル、大娯楽場、大別荘地」(T 9.3.11D)のイメージを具体的に抱かせるために、「事業の中心となるべき」(T 9.3.11D)熱海に加えて、少女歌劇のブームにより全国的にも著名となった宝塚の名称をも社名に巧みに添加・配合した。総合的娯楽機関の代表としてブレンドされた宝塚の土地は阪急宝塚線の中山駅と清荒神駅の中間の山側に位置し、「昨今設立せられたと聞く熱海宝塚土地株式会社…の経営地は宝塚住宅土地の経営地の東方数町の山林地にあり」(T 9.3.11大朝)、1坪当りの買入値段は40万坪もの大規模開発地である宝塚住宅土地の5円20銭に比して「熱海宝塚〈土地〉の経営地は七円平均であり」(T 9.3.11大朝)、若干高目になっているが、地理的位置から見て、温泉とも総合的娯楽機関とも無縁の単なる大阪近郊の宅地見込地にすぎず、所詮「刺身のつま」でしかなかった。

同社の中心事業地として「代表的旅館たる樋口旅館及び河本別荘を首め天神山其他同町枢要の地域」(T 9.3.7内報①)すなわち「熱海では一流の旅館、樋口氏の邸宅を数十万円で買収し、此处を中心に旅館の経営も行る筈で…買収契約の際樋口氏に…十万円」(T10.12.18法律)を交付した。地元熱海から同社発起人に加わった樋口忠助が経営する「熱海に於ては土地に聞えた樋口旅館」(T 9.3.11D)は明治17年発行の『熱海文藝』には「本日浴楼樋口ノ新功成ルヲ以テ…該楼頗ル宏壮且ツ清潔ナレバ、後來浴客ノ愛顧ヲ得ルヤ必セリ¹²⁾」とあり、雨宮敬次郎が後援し、「糸平と私との間と云ふ者は非常に親密であつて、親子とも兄弟とも云ふべき間柄…糸平と乃公とは兄弟とも云ふ程の友達¹³⁾」の田中平八(糸平)らが顧客となっていた老舗であった。明治25年1月発行の『熱海一覽温泉双六』(熱海市立図書館所蔵)には「おんせん楼 樋口忠助義…樋口

の西洋館」として洋風三階建てで描かれている。明治32年8月発行の『豆州熱海全図』(熱海市立図書館所蔵)には豆相人車鉄道会社、天神社、熱海電灯会社、熱海町役場(現ホテル貫一の位置)、小林屋が並ぶ小田原新道の官庁街の一角に、「樋口食堂」を併設した旅館「樋口」が丸屋根の塔楼付の西洋館として描かれている。道路の反対側には福島屋、郵便局、高砂屋、酒舂屋が位置していた。大正14年3月発行の『最新熱海案内全図』(熱海市立図書館所蔵)には熱海町役場の南隣の広大な一角に「樋口旅館」が面積としては熱海の「御用邸」(現熱海市役所)と大差ない広さとして描かれている。

熱海宝塚土地は熱海の一流旅館「翠光園で代議士松島肇氏等が創立総会を開いて会社の成立を謀り」、京橋区槇町1に創立事務所を置き、創立委員長戸水寛人名による株式募集広告(T9.3.6読売)では資本金3,000万円、うち払込750万円、「当会社の経営地は静岡県下熱海町に於ける代表的旅館たる樋口旅館を首め同町内枢要の地域を占むる温泉付土地二十一万二千六百余坪及び兵庫県下阪神急行電鉄宝塚終点近く清荒神停留場に沿へる土地七万四千四百余坪の広大な地積を占有す…理想的の別荘住宅地 熱海宝塚共に交通至便に文明的別荘住宅地として第一の要件を具へ…熱海の土地は目抜の場所今日既に一坪五百円以上にて売買せられ居るに係らず、当会社の経営地は熱海町の中央に位し第一の景勝地たる樋口旅館其他枢要の地域に豊富なる温泉を加へ一坪当り二十一円の驚くべき廉価にて買収せり…宝塚又一坪七円平均の廉価なり」(株式募集広告T9.3.6読売)とあり、「銀行方面に於ても前記買収価格ならば何時にても金融を計るべしと声明」(T9.3.7内報①)していると宣伝し、大いに「地方人の注目を惹いた」(T10.12.18法律)ようだ。

反動恐慌の寸前に発起された熱海宝塚土地の発起人には②今西林三郎、①上田弥兵衛、小山田信蔵、③若尾璋八、④*倉知鉄吉、②河崎助太郎、松山与兵衛、三谷軌秀、松井伊助、⑥*加島安治郎、酒井猪太郎、樋口六左衛門、坪田十郎、*福島宣三、杉野喜精、越山太刀三郎、横井藤四郎、③吉村鉄之助、金杉英五郎、*世古松朗、樋口忠助(熱海町、樋口旅館主)ら、賛成人には⑥藤本清兵衛、神田鐮蔵ら、この種の企業に関与しそうな東西の著名な顔触れが参

加している。(○数字は『実業之日本』誌調査の「日本重役肩書数番付」²⁸⁾による
兼務会社数)

熱海宝塚土地の募集広告は「全国共通の融通株…当会社の経営地は関東関西
に跨り…資本金の尠大なる…本邦土地会社の霸王」(T 9 . 3 . 8 北国)である故
に流通範囲が「局限されたる観ある」(T 9 . 3 . 7 内報①)土地会社株券の中で
同株は「東京、大阪は勿論全国に亘りて株式の融通円滑」(T 9 . 3 . 7 内報①)
と誇示した。事実同社の資本金3,000万円は大正5年以降に新設された土地会社
69社(資本金総計24,200万円)の1社平均350万円に比して際立って大きく、安
治川土地の2,500万円、大阪住宅経営、城東土地、阪東土地、阪神住宅土地、木
津川運河土地、宝塚住宅土地の1,000万円以下を大きく引き離して断トツの1位
を占めていた。(T 9 . 10.16T)また主要な新設69社中唯一東京に本社を置く土
地会社としてもユニークな存在に映ったものと思われる。²⁹⁾

新設会社に概して辛口の評価を下すことの多かった『ダイヤモンド』誌も熱
海宝塚土地は娯楽場経営に「適材を得るに至ったならば相当の成績を挙げ得る
であらう…大資本を擁して熱海宝塚の如き景勝の地を握った処に強身があり…
将来を楽しむものとしては相当考慮するに足るもの」(T 9 . 3 . 11D)との甘い
結論を出した。その理由は記者が会社側の説明に眩惑され、「当会社の土地が停
車場予定地付近並に市内枢要の地点を多く占むるの好都合もあり、熱海開発の
上に貢献する処尠らざるべきを信ずる」(T 9 . 3 . 11D)に至ったためと思われる。
大正7年10月23日の『帝国興信所内報』で「虚業家松島氏を弾劾する」(松
島)特集記事を掲げた帝国興信所でさえ、背後に隠れた黒幕の松島に気付かず
同社の公募を「近時続出せる此種事業中の出色」(T 9 . 3 . 7 内報①)と評した。

当該計画は当時周囲の目が厳しくなり、資金繰面でも追い込まれつつあった
松島にとって、「虚業家」と見られがちな自己の名を秘して手掛けた乾坤一擲、
起死回生の大勝負であったと考えられる。すなわち松島は「其手段から生じた
欠陥を補ふ手段として、熱海、宝塚等の土地を安価に買収して幾層倍の高価に
売却し、則ち自己は一文の出資もせず、之が結末を告げんとした」³⁰⁾、「最後に資
本金三千万円の熱海宝塚土地会社を起し、法学博士戸水寛人氏を社長に就任さ

せて、同会社をして、大穴を生じて居る〈関係〉会社を買収せしめ、積み積った二百万円の横領金を埋める覚悟であったが、財界の不振に遭ひ、一頓挫を来した」(T9.12.14大朝)という見方が強かった。

同社計画の大きさを示すものとして樋口氏が経営して来た「樋口旅館をも同時に引継」(T9.3.11D)ぎ、「他の一般土地会社と等しく不動産の担保貸付及仲介並びに信託業を兼ねると共に、別にホテル、旅館、温泉、劇場その他の娯楽場をも経営せん」(T9.3.11D)との総合的リゾート開発のふれこみであった。このころ熱海では別に竹内同族(株)による熱海桃山潮見崎温泉分譲地計画や、日本観光(株)(資本金100万円、社長小野金六)による工費約60万円の本格的な洋式ホテル建設計画も進行中で、後者は「ホテルの土地を買収するのみに三ヶ年の歳月を要し」(T11.12.1実業之日本)ながらも、大正11年には約70室、約170名収容の熱海ホテルが熱海と伊豆山との間の新熱海の海岸に完成した。³¹⁾

しかし立派な計画の熱海宝塚土地の方は「種々の事情があって、現在当社に継承したものは十三四万坪に過ぎなく…且つ現在の買収地は宅地、畑の外に田もありと云ふ状態で、其内容は創立当時の予定より余程不良になってゐる」(T10.4.21D)と、当初の優良物件が後述の通り巧妙な手品により「十五年後でなければ利用し難たき山林原野」(T10.4.21D)という「荒蕪地」にすり替えられた。この結果、「旅館の経営も行る筈であったが、其の後財界の不況の為め初期の目論見が齟齬した為め、当時買収契約の際樋口氏に交付した十万円が問題となり、樋口氏と松島代議士との間に紛争を惹起し久しい紛争の結果」(T10.12.18法律)、花井博士を代理人として静岡地裁に「松島代議士が熱海旅館を訴ふ」(T10.12.18法律)る事態となった。また「資金の用途に就て頗る疑はしき処があり、世上亦種々の風評が伝へられ」(T10.4.21D)るなど、熱海宝塚土地「会社設立に際し、株主中に悪風評を立てられ株金の払込をしない者が多いので、之れが調停方を松田〈哲〉弁護士に依頼」(T11.3.14徳毎)したが、担当した松田弁護士も松島を大正11年3月11日報酬金5千円不払いで訴えるという松島陣営内部のトラブルまで露呈した。(T11.3.14徳毎)また大正10年11月29日樋口との関係は未詳だが、対木熊藏、青沼沃(熱海町345番地)は松島を熱

海土地の「売買契約ノ不履行ヲ原因トシ其損害金ノ支払ヲ求」(T14. 2.20法律)め、提訴するなど、松島の周辺にはこうした金銭トラブルに起因する訴訟が頻発した。

松島自身は公判で*大日本原毛紡績の「現実払込み株金額六十万円中…十万円を静岡県熱海町及び兵庫県宝塚町付近の自己の土地買収資金に…融通³²⁾」したと供述している。他社の払込金を同社設立用の「見せ玉」としての熱海「停車場予定地付近並に市内枢要の地点」(T9. 3.11D)買収に不当流用するなど、かなり際どい綱渡りを繰り返した結果のほころびが、随所に頻発する訴訟リスクとして顕在化したのであろうと想像される。

3 日洋土地興業

熱海宝塚土地は大正10年日洋土地興業と改称(T10. 4.21D)、本店を麴町区麴町四丁目4-1から京橋区三十間堀3-7に移転³³⁾、目的を「土地建物ノ取得売買賃貸借及不動産担保貸金並信託業林業製材業及商行為ノ代理等」(要録、T10、P69)に変更した。資本金3,000万円、払込750万円、役員は取締役*戸水寛人、*西条教部、*山下佐太郎、*後藤正基、*世古松朗、*本堂平四郎、*佐藤松垂、*関良太郎、*宇野政次郎、*金沢周太郎、*椿原乙蔵、監査役*高橋憲治、*田村範文、古谷豊三郎、林政太郎、前川市三郎であった。(要録、T10、P69)

熱海宝塚土地を甘く評価するという見落としをおこなった『ダイヤモンド』誌も1年後の大正10年4月には「創立当時は前途を祝福された新会社の一つであった。処が其後財界の激変に逢着し、一時旺盛であった土地熱も漸次冷却し、加ふるに計画当時発表された程の土地を購入する事が出来なくなり」(T10. 4.21D)と、事情変更の言い訳をした上、次のように同社の格付けを大幅に引き下げた。すなわち「創立後未だ第一回の決算を行はざるに拘らず、過般一株五円総額三百万円の払込を徴収した…資金の用途に就て頗る疑はしき処があり、世上亦種々の風評が伝へられて居る。…其計画は余りに膨大に失し、寧ろ放漫であるべく思はれるので、万一第二期計画に於て蹉躓するが如き事あらば惨澹

たる結果に陥いるであらう」(T10.4.21D)

第二期計画というのは「福岡、若松、大里、熊本県、佐賀県、宮城県及北海道に於て数千町歩の市街地、山林、牧場地を購入し、外に樺太に於ける陸軍駐屯地に貸家を経営する」(T10.4.21D)という「全国各地に亘りて将来有望なる土地を購入」(T10.4.21D)する方針大転換であった。『ダイヤモンド』誌は「更に三百万円の払込を徴収して、十年或は十五年後でなければ利用し難たき山林原野を購入する」(T10.4.21D)意味をはかり兼ねた。実は日洋土地興業はこのあと松島系の*糸崎船渠(海運興業と改称)、*帝国毛織、*大日本原毛紡績、*九州炭砒等の同系企業を順次合併することになる。このうち定款を変更して、梅原文次郎らから九州などの砒区を買収した糸崎船渠所有の砒区なども上記の購入山林に含まれているのであろう。樺太の牧場地なるものも日本緬羊毛織の当時の払下申請の事実と符合する。いずれにせよ日洋土地興業に「大穴を生じて居る〈関係〉会社を買収せしめ、積み積った二百万円の横領金を埋める」(T9.12.14大朝)計画の一環と考えられる。関係会社から将来有望なる土地を購入するという名目で一般株主から「更に三百万円の払込を徴収」(T10.4.21D)しようとはかったと見られる。こうした良からぬ買収案を可決するためか、「日洋土地会社の総会の如きは、千葉県夷隅郡の町から七里も人里離れた淋しい山中の木こり小屋で開³⁴⁾いたとされ、後身の「日本土地の総会も徳島、若狭、熱海等のずっと田舎へ引っ込んで開会³⁵⁾」するなど遠隔地開催を通例としたとされる。このため、後に重役を訴えた「株主擁護団」員の中村は「総会らしい総会も開かないで勝手に減資」(T13.11.11東朝)するのは株主権行使を阻害するものと抗議した。³⁶⁾

4 日 本 土 地

大正13年6月松島は大阪計器製作所を母体として、「糸崎ドック、九州炭砒、帝国毛織〈紡績〉、大日本原毛、日洋土地〈興業〉の諸会社を丸として日本土地株式会社なるものを創設」(S2.10.2東朝)した。その手順は大阪計器製作所(資本金50万円)がまず海運興業(糸崎船渠が改称)を大正11年3月合併し

資本金を400万円に増加した（要録T11、大阪P47）のをはじめ、帝国毛織（資本金1000万円）、大日本原毛紡績（資本金1000万円）、日洋土地興業（資本金3000万円）、九州炭砒（資本金500万円）を順次合併して大正13年6月日本土地（資本金6500万円）と改称したのであった。（T13.11.11読売）

糸崎船渠から海運興業への改称をはじめ日本土地への統合まで複雑な再編成が断行されたが、「此の間株主は再三の名義変更や合併の爲め、知らぬ間に失権者となり、或は全額を払込みの株主にも決算報告をしないので、始めて松島氏の奸手段に乗ぜられた事を知り」（T13.11.11読売）、「株主擁護団」員の中村は「会社の所在すら株主に教へないやうな不都合をしてゐる」（T13.11.11東朝）と批判した。³⁷⁾大正13年7月19日日本土地は最後の総会を「新潟県下の一小村で開くといふ通知を出しておき乍ら、事實は赤倉温泉でコッソリ開いて、漸く尋ね出して来た二三人が出席した上、直ちに会社解散を決議³⁸⁾」、「松島が清算人になった地位を利用」（S2.10.2東朝）したとされた。かずかずの不都合に憤った日本土地株主は「八方松島氏の所在を尋ねた末、沼津の駿豆病院に病氣と称して隠れてゐる事を突き止め、面会を求めたが、何うしても会はない。そこで株主団は擁護団を組織して前記清算事務所へ押掛けた」（T13.11.11読売）という。難航を極めた会見も「麴町署の手を借りて」（T13.11.11東朝）ようやく実現した。11月10日午後2時、麴町三丁目の日本土地で鈴木錠蔵清算人に対して「『正式の総会に依らずして三千万円の会社を僅か椅子二脚しかないやうなものにしたのは怪しからぬ』と喰ってかかり、激論」（T13.11.11東朝）となり、鈴木錠蔵に対して激しく「不当解散」（T13.11.11読売）³⁹⁾を詰問した。

「重役を背任罪として告訴…何処迄も会社と争ふ積り」（T13.11.11東朝）で固く結束した日本土地株主は「松島の刑事事件発生のため新清算人を選」（S2.10.2東朝）んだ。新しい清算人となった小野沢龍吉は大正15年3月ころ松島肇を「日本土地株式の熱海土地及現金合せ二百万円を横領」（T15.3.25読売）し、「日本土地株式会社を食ひ潰し」（T15.11.18読売）たとして告訴した。その結果大正15年11月「今回松島氏の所有する熱海伊豆山の土地三十五万坪、時価約五十万円を〈日本土地〉会社に提供するといふ条件で示談が成立」（T15.11.18

読売) し、ここに「日本土地と松島との私的関係は示談となり、熱海の土地の大部分は返還」(S 2.10.2 東朝) された。

また松島が看板に利用した「戸水寛人博士の人格と学位に釣られた」(T13.11.11読売) として株主からの批判が集中した弁護士でもある戸水寛人は「松島氏の為に名義を貸したまでの事で、全く内情は知らなかった」(T13.11.11読売) と釈明した。おそらく単に依頼者に代って弁護士の職務として正当な代理行為を行っただけとのスタンスかと解される。

また日本土地前副社長で清算人となった鈴木錠蔵の方も大正13年11月10日面会を求めた「株主擁護会」所属の日本土地株主4～5名の抗議に対して、「言を左右にして全く取合はず」(T13.11.11東朝)、戸水の場合と全く同様に自分は「単に名義上の副社長であって、實際上の事務に就ては何も知らない」(T13.11.11読売) との一点張りで逃げ回り、「結局要領を得なかった」(T13.11.11東朝) という。

日本土地の社長、副社長の重責をになっていたはずの戸水、鈴木両元重役は予審でもこれと同様の供述に終始したようで、松島は「予審決定書にある事実は全部うそです」(S 3.1.31東朝) と全面否認する一方、こうした日本土地「会社の重役をしてゐた戸水寛人、鈴木錠蔵氏等の供述に対しても、『これは皆責任転嫁をしてゐるのです』」(S 3.1.31東朝) として、あくまで兩人と争う姿勢をとった。松島は自己のとった経済行動は「あくまで正当の行為で一点やましいことの無い」(S 3.1.31東朝) と強調した上、自分にはもう財産はないとして「私は一切の物欲を捨てざることを決意しました。そしてとん世し、健康が許すならば将来この種の事業から去り、心靈界に身を投じ余道人心を導きたいと思ひます」(S 3.1.31東朝) と神妙に述べた。

5 関西計器製作所→大阪計器

大正13年2月14日大阪市西区市岡町543番地の大阪計器製作所本社内に黒崎電機製作所の役員により関西計器製作所が設立された。代表取締役*山本文作、⁴⁰⁾ 取締役*松永隆一、*内田守、監査役*森依信であった。大正14年3月関西計

器製作所は大阪計器と改称し(帝T14、大阪P66)、資本金50万円、払込12.5万円、取締役には*鈴木錠蔵、*木村勇が加わった。一連の動きは日本土地への統合に伴うメーカー部門の分離と考えられる。昭和4年では業種は計器製造業のうちの計圧器、代表者小山梅吉であった⁴¹⁾。昭和5年では代表取締役*高橋憲治、取締役*鈴木錠蔵、*松島円、小山梅吉(天王寺区勝山)、坂野常礼(天王寺町)、江田節男(岡山県御津郡横井村)、監査役*森依信、倉田正男⁴²⁾であった。(要録、S5、P43)

昭和10年では大阪計器は資本金50万円、払込12.5万円、本社大阪市港区市場通一丁目2、尻無川分工場(港区尻無川北通五丁目)、茶園町分工場(此花区茶園町)、専務小山梅吉、取締役坂野常礼、江田節男、監査役倉田正男、尻無川分工場長右下友一、茶園町分工場長岡本政吉であった。(諸、S10、上P485)

- 1) 『熱海町誌』大正6年、P156。同旅館は「創業約三百年前…全国各地千人風呂の始祖」(『財界二千五百人集』昭和9年、P464)を標榜した。
- 2) 前田勝次(熱海町伊豆山)は「ホテル事業に就て経験ある」(T9.4.24内報①)人物で、伊豆山偕楽園取締役のみ(帝T11、職P394)
- 3) 寺井伊平が熱海偕楽園に5,000円の貸金債権を有して、仮差押を申請、昭和3年9月6日東京地裁は寺井伊平の仮差押申請を許可した。(S6.10.20法律)かねて伊豆山偕楽園「会社に四万円の貸しがある」と主張する債権者・松島肇と5,000円の債権者・寺井伊平の関係は未詳である。
- 4) 昭和5年版『全国都市名勝温泉旅館名鑑』(日本遊覧旅行社、昭和5年8月、P196)では館主名佛熱海偕楽園、所在地伊豆山町、客室数36、客室量数346、宿泊料3.5-6.5円であった。なお昭和9年現在の『熱海・伊豆山温泉と付近鳥瞰図』(熱海市立図書館所蔵)には相模屋と中田屋の間に「伊豆屋」という旅館が描かれているが、偕楽園は見当たらない。現在では伊豆山温泉の名所「走り湯」の近傍に「偕楽園」という同名の旅館が「ホテル・ニューさがみや」(千人風呂)、「うみのホテル中田屋」などの老舗とともに盛業中である。
- 5) 6) 7) 内田信也「地所の売買よりも先づ国家の為といふことを思ふべし」斎藤要八編『熱海と五十名家』大正9年12月、P126、125、124。編者の斎藤要八は大正3年熱海温泉組合取締所から『新撰熱海案内』を、大正6年熱海町役場から『熱海

町誌』を相次いで著した熱海在住の文筆家。三浦観樹は野中に別荘のあった陸軍中将・枢密顧問・子爵三浦梧楼（『新撰熱海案内』P189）

- 8) 大正10年12月6日広島地裁第一回公判（T10.12.13法律）
- 9) 10) 11) 戸水寛人「熱海は将来東洋の理想的楽天地」斎藤要八編『熱海と五十名家』大正9年12月、P60～62
- 12) 大正6年発行『熱海町誌』P196所収
- 13) 雨宮敬次郎『過去六十年事蹟』明治44年、P373～380
- 14) 明治22年雨宮敬次郎と、おそらく樋口忠助ら熱海の有力者によって出願され、「当地小田原間に人車鉄道を敷設せんとて当地の有志者発起し、中途にして電気鉄道に変更の計画ありし」（青木純造『改正増補熱海鉱泉誌』34年）も、24～6年頃に開始された雨宮・小山田共同の電気鉄道計画が実地調査による計画変更のため、それぞれ別の豆相人車鉄道と豆相鉄道へと分離し（静岡新聞社『静岡県鉄道物語』昭和56年、P89）、豆相人車鉄道として29年3月全線開通した。熱海の終点は現南明ホテル貫一の位置
- 15) 字本町459番地、明治26年新築移転、現ときわぎ銘菓
- 16) 昭和5年版『全国都市名勝温泉旅館名鑑』（日本遊覧旅行社、昭和5年8月、P197）では館主名樋口文子、所在地熱海町、客室数41、客室畳数450、宿泊料4.0円～7.0円となっている。樋口旅館は『全国著名旅館名録』昭和3年にはなし。
- 17) 榎町1は＊三池炭鉱、＊東京絹綿紡績の本店に一致
- 18) 小山田信蔵は旧水戸藩重役小山田勝貞の長男、代議士、水戸商業銀行頭取、豆相鉄道社長、北海道炭鉱鉄道、金沢電気各監査役、横浜港南数万坪を埋立て、東洋ペイント製造社長、日本電機製作所代表取締役、漢口取引所理事、鹿島参宮鉄道取締役、大正8年9月大北炭鉱賛成人（T8.9.4読売）
- 19) 若尾璋八（東京）は若尾銀行頭取の若尾民造養子、若尾銀行支配人、若尾貯蓄銀行取、東京電灯取、飯山鉄道社長、箱根土地取、東京乗合自動車取ほか、大正7年末江若鉄道原始発起人千株主
- 20) 河崎助太郎は洋反物・河崎商店主、大正4年代議士、日本毛糸紡績、共同毛織、朝日毛糸紡績、日本絹紬、中華毛織、東京絹綿紡績、京都土地建物、花屋敷土地、城北土地、日宝石油、昭和金鉱、茂世路鉱業各社長、モス綸紡織、日本毛糸モスリン、日本ラミー紡織、柏原紡織、東華紡績、大阪住宅経営、秋田石油鉱業各取締役、東洋紡織、西沢金山各監査役ほか多数。
- 21) 酒井猪太郎は株式仲買人の帯谷伝三郎の実弟（『大阪財界一百人』P2、大阪雑

- 喉場の魚問屋・阪又（『大阪財界一百人』P80）、市会議員、日本動産火災保険副社長（T5.5.6保銀）、帯谷伝三郎商店取締役、大阪乗合社長、大阪証券交換所監査役（『銀行会社要録』T11、P53）、別府温泉土地社長（『株主年鑑』T14、P392）、日本商事信託、朝日酒類、大阪住宅、大阪証券各取締役（14年10月18日大阪毎日新聞）、T8/5キャバレーズパノン100株主（#1営）
- 22) 樋口六左衛門（大阪）は呉服商、日本動産火災保険監査役、大正13年11月時点で大阪乗合取締役1545株
- 23) 坪田十郎は大正6年11月28日南洋製糖監査役就任（T6.11.29読売）、阪神水電興業、阪神石材工業、播磨鉄道、神戸土地、大正水力電気各取締役、益隈炭砒代表取締役、播磨造船所監査役、神戸鉄工社長（要録T9中P78）、有馬電気軌道社長（『帝国鉄道年鑑』S3、P564）
- 24) 越山太刀三郎（芝区高輪北）は東京電灯出身、越山合資無限社員、東京電灯、大和毛織、池上電気鉄道各取締役、大正9年織田昇次郎、宮崎敬介らと日本石材工業を発起（増田4-22）、セントラルビルディング発起人（増田5-8）
- 25) 横井藤四郎（兵庫精道村）は福井県三宅村出身の前代議士、共立物産専務、明治40年10月に設立の恵美須ホテル3株主（明治41年9月30日「株主人名簿」）、大正7年末江若鉄道原始発起人千株主
- 26) 吉村鉄之助（東京）は代議士、吉村商会社長、箱根土地、山陰紡織、東京乗合自動車各取締役、大正7年末江若鉄道原始発起人二千株主、大正8年9月大北炭砒発起人（T8.9.4読売）、大正8年12月23日創立の東京浴場炭砒発起人（T11.5.25法律）、大正9年9月帝国炭砒発起人
- 27) 金杉英五郎は長島隆三、小泉策太郎らとともに「政界の謀士」（S3.9.12読売）と称され、大正9年6月設立の大陸貿易取締役（要T11P142）、大正8年9月大北炭砒発起人（T8.9.4読売）
- 28) 大正12年1月15日『実業之日本』、P80
- 29) 東京に土地会社が少なかった理由を『東洋経済新報』誌は「地方的企業心理として、関西人の土地に対する思惑の旺なりしこと…郊外発展の電鉄による便否」（T10.8.20T）等を挙げている。
- 30) 広島地裁公判での宮重検事論告（T11.5.14大朝）
- 31) 大正11年12月1日『実業之日本』
- 32) 大正10年12月5日広島地裁第一回公判（T10.12.13法律）
- 33) 麴町四丁目4-1は*日本資金信託、*伊豆山偕楽園、*木材倉庫等の本社に一

致、三十間堀 3-7 (帝、T11、P75) は大正10年12月設立の*赤倉温泉スキーホテル本店に一致 (要録T15、P226)

- 34) 35) 38) 大浜孤舟『暗黒面の社会・百鬼横行』新興社、大正15年、P111、113。この日本土地の総会開催地の熱海は松島の関係企業の伊豆山偕楽園、赤倉温泉は赤倉温泉スキーホテル (大正10年12月資本金30万円 (払込済) で設立、代表取締役*西条教部、取締役は*中村定、*山下佐太郎、関正蔵ら) と関係あるものと思われる。
- 36) 大正11年に広島瓦斯電軌松浦泰次郎社長に反対する株主の提訴に対して広島地裁は「株主の予期せざる遠隔若しくは交通不便の地に於て株主総会を招集せらるることあらんか、株主は之が為に全然其株主権の行使を阻害せられ」(T11.6.18法律) として「本店所在地外の総会は無効なりとの新判例を下した」(T11.6.18法律)
- 37) たとえば日本土地は大正13年11月10日本店を東京市芝区愛宕町二丁目十四番地へ移転した登記を東京区裁判所で行った。(大正14年1月20日『官報』第三七二一号付録、P3)
- 39) 膝詰談判を行なった株主擁護団に立ち会った『読売』記者は「新聞記者に金を包んで差出した」(T13.11.11読売)「変な擁護団」の態度に「醜悪」(T13.11.11読売)さを嗅ぎ取っている。恐らく職業的な連中が株主擁護団の実行委員に潜入していたものと見られる。「醜悪」な三流記者に「利益を分ちて」「味方の幕僚たらし」(T8.10.21D)め、都合の良い提灯記事を書かせるのは「新会社製造法」(T8.10.21D)での常套手段だからである。
- 40) 大正13年9月15日官報号外、P42
- 41) 商工省の昭和4年工場調査 (『全国工場通覧』昭和6年、P504)
- 42) 倉田正男 (天王寺区勝山) は摂津ゴム専務 (要録、S5役上P346)

第9章 徳島県下の事業

松島は郷里の徳島県内にも多くの関係事業を有したが、代議士としての選挙地盤を培養・温存する見地からも、他の地域とは若干異なる配慮を加えたものと考えられる。特に徳島日日新報社では一連の関係事業群を清算・店仕舞いして、財界から隠遁したのちも長らく支配を継続した。そのため競合する徳島毎日新聞サイドからは彼の買収資金源に疑義がある「不浄新聞」として激しく攻撃された。また県内の零細・不振企業の乗取り計画（多くは未遂）は松島の配下による「松島式」収奪システムの一端を垣間見ることができる事例である。この章では自己の帝国の崩壊の危機が迫りつつある時期に収奪した資金の大半を投じて郷里の地方新聞社を支配しようとした松島の意図の解明が中心的な主題となる。

1 徳島日日新報社

悪徳人物が新聞社を乗取った例として近年では小針暦治による福島民報支配が有名だが、戦前にも「嘗テ佐賀貯蓄銀行ヲ食ミタル」¹⁾「本名は田中猪作、往年細民の粒々辛苦の貯蓄機関たる佐賀貯蓄銀行を一朝にして踏みつぶし…たる悪党」²⁾との非難も受けた田中恭平という人物が「肥前日日新聞社長ノ地位ニ就」³⁾いた事例がある。『肥前日日新聞』は政友本党幹部の川原茂輔の経営で、『佐賀新聞』編集局長・家永盛種等を招聘したものの、「購読者がすくなく…〈川原茂輔〉氏が衆院議長在職のまま昭和四年五月十九日死亡したのは田中恭平氏の経営に移ったが、これまた思わしくいかなかった」⁴⁾ため、「昭和七年『佐賀日報』と改題して細々と煙りを立てていたが、間もなく消えてしまった」新聞であった。なお田中恭平が関与した佐賀県の佐賀貯蓄銀行は大正13年11月26日破産宣告⁶⁾を受け、その配当は債権総額992,050円53.1銭に対して、第二回（最終）配当額はわずかに8,001円46銭にすぎなかった。（S 6.10.8 法律）

（株）徳島日日新報社（略称徳日）は明治9年4月10日「創刊の古き閱歴と全県

下の大衆に鞏固なる地盤と信用を有してゐる」⁷⁾老舗の地方新聞であった。徳島日日新報社は明治29年9月に設立され、本店徳島市富田浦町浜側64、資本金3万円、社長住友定吉、兄の藤岡八次郎が営業部長、「政派関係 政友会」⁸⁾、大正2年の所得税…営業税33円51銭(商T3、アP6)、資本金4.2万円、払込4.2万円、大正5年には社長住友定吉、取締役横野隆太郎、森甫、浜田稻生、監査役的場甚七、坂本平八郎、資本金3万円、払込2.9万円、支局池田町(帝T5、P2)、大正8年の資本金4.2万円、払込4.2万円、積立金…円、利益…円、配当率…%であった。(通覧P1096)

大正9年12月松島は徳日のライバルである徳島毎日新聞社(略称徳毎)での須見千次郎⁹⁾と多田為太郎¹⁰⁾との対立に乗じて、株式買占めを開始したが、「取得できた徳毎株は一割程度で、須見派の株と合わせても過半数に達せず、徳日に¹¹⁾予先を転じた」とされる。

徳日支配の直前、大正10年2月松島はまず手始めに直系の徳島民報社をおそらく徳日への対抗機関として徳島市寺島町本町に設立した。(帝T11、P5)寺島町には「寺島町なる松島社長別邸」(T10.4.10徳日)があり、ここに本社を置いたものと見られる。代表取締役には*新居政太郎を据え、松島自身のほか腹心の*宮本厳、*高木正一を取締役、*大久保彦四郎、*川上安太郎を監査役とした。彼らの多くは松島が支配した後の徳島日日新報社でも要職に就くか、睨みを利かせている。

一方の帛徳島毎日新聞社は首藤貞吉、須見千次郎ら数名が31年6月15日進歩党機関紙として創立し、明治36年6月設立、39年井上¹²⁾一が主筆となり、本店を徳島市寺島町93に置き、資本金4万円、払込4万円、大正2年の所得税…営業税51円48銭(商T3、アP6)、大正5年には社長多田為太郎、取締役須見忠次郎、門田佐平、筒井善吉、吉田藤七、太田利平、森幸雄(脇町自動車代表取締役、徳島練炭取締役)、森政緒、福田清平、上田豊太郎、岡島武三郎、武田謹三、監査役渡辺正清、勢井利久太郎、資本金4.5万円、支局脇町、大阪(帝T5、P3)、大正8年の資本金4.5万円(払込済)、積立金1,010円、損失7,210円、配当率…%であった。(通覧P1096)

松島の実弟の西条教部は当時噂された徳毎買占めを「虚構の流言」¹³⁾と完全否定した。しかし松島はその後、徳島毎日新聞社に対して検査役選任を徳島地裁に申請した。地裁は「毎日社の内幕を暴露して其経営を困難にし、之を破綻せしむる目的」(T10.5.29徳日)と見て、「少数株主権の濫用なり」(T10.5.29徳日)として却下した。『徳島日日新報』は申請代理人である当の岡林一美弁護士による「不当の裁判と信じ抗告する」(T10.5.29徳日)長文の反論を掲載した。この中で岡林弁護士は「法律は少数株主権を行使する為め資本の十分の一以上の株主たることを要求するが…松島君は幸ひに一人で以て法律所定以上の株主である…自ら其申請をなすべく奮起した」(T10.5.29徳日)と、松島が徳島毎日新聞社株式の10%超を買占めたことを明らかにした。

大正10年2月松島は「徳島の新聞全部を独占しやうとするの計画から、先づ我々〈徳島毎日新聞〉社を乗取らうとし、重役の改選期に際し株式の買占めにかかったが…我社の株主諸氏は金のために株式を松島に売渡すやうなものは殆どなく、其の計画が全然失敗したので、徳島日日新報社を買収し同社に不浄の金を投じ以て我社を圧倒しやうとし、全力を同社に注いだ」(T11.2.27徳毎)と報じられた。

完全支配直前の徳島日日新報社の役員は社長住友定吉¹⁴⁾、取締役榎野隆太郎、*西条教部、市来精、*中村定、*松島肇、監査役の場甚七、米田英二(徳島市富田浦町)、*山本文作であった。(帝T11、p4)

大正10年3月徳島日日新報社は資本金を30万円に増加し、松島が社長に就任した。この時点で直系の*徳島民報社を収束し、資本やスタッフを徳日に一本化したと見られる。大正11年時点の役員は社長松島肇(#徳島民報社取締役)、専務兼主筆市原理之、専務兼政治経済部長*宮本厳(#徳島民報社取締役)、取締役兼東京支局長*西条教部、取締役兼大阪支局長住友定吉、取締役市来精、*中村定、理事*島田雅雄(*徳島無尽代表取締役)、*川上安太郎(#徳島民報社監査役、*徳島無尽代表取締役)、社会部長*高木正一(#徳島民報社取締役)、硬派編輯長伊藤武二郎、軟派編輯長川畑伊三郎、学術部長豊泉豊蔵、写真部長片岡昇¹⁵⁾、営業部長高橋盛二¹⁶⁾、販売部長岡哲と、徳島民報社の役職員(#印)

が数名も加わっている。¹⁷⁾大正12年時点では宮本巖が退任したほか、取締役営業部長・広告部長高橋盛二、取締役会計部長*秋山寛、取締役*森依信、監査役*山本文作、米田英二、技術部長谷沢旭、植版部長秋本柰夫、政治部長・経済部長*高木正一、社会部長高田広一、広告副部長坂東賢次郎、販売副部長鍛川与平、会計副部長板東節助、政治副部長江口幸雄、経済副部長高橋三郎、社会副部長桜木幸治であった。¹⁸⁾

大正10年4月徳島日日新報は東京支局を京橋区横町1に設置した。¹⁹⁾(T10.4.8徳日)4月9日昌栄貯蓄銀行徳島総代理店の新築披露宴で松島は「不肖自ら攜らず新報社の社長に推薦されたるが、新聞に関しては何等経験を有せざるも…全力を傾注し新生面を作らん…不肖は今後県下にては銀行と新聞に就て真摯熱誠を払い、財界と文化の開発に努力する」(T10.4.10徳日)と述べた。4月13日松島は「個人として資金を投じ、本社接続の土地建物五百坪を購入、昨日登記を完了すると同時に本社に之れを提供」(T10.4.14徳日社告)と広告した。5月31日 徳日は「新聞代価は従前通り」据え置いたまま、「本紙愈よ近く夕刊発行断行」(T10.5.31徳日社告)と広告した。

さらに松島は大正11年1月芝区佐久間町1丁目10番地(徳島日日新報東京支局とは別)に大東京新報社を資本金3万円(払込済)で設立し、代表取締役社長に就任した。常務兼編輯長山口正剛、取締役は*西条教部、監査役*中村定(帝T11、P192)、社会部長渡辺七郎、広告部長鈴木邦三郎(神田区五軒町20)、販売部長古賀賢之助であった。²⁰⁾大阪支局を大阪市北区堂島中一丁目二十五番地に置いた。(T11.5.10大毎広告)大正11年4月松島は東京の新聞『民声』を買収して「徳日の姉妹紙」²¹⁾として『大東京新報』を発行した。その広告には「一世の怪傑星亨氏の遺図を継承して、日刊大東京新報出たり。読んで分りよく、見て面白く、値段の安い、世間必読の新聞なり。定価一ヶ月五十五銭(郵税十五銭)」(T11.5.10大毎広告)、「保険銀行諸会社の内容を調査し…実業家の身分を解剖す」(T11.4.25徳毎)と謳った。たとえば松島が乗り込んだばかりの徳日は大正10年5月26日には「大同生命の放資に就て」と題して「今日全然工場を閉鎖し窮状を暴露せる」(T10.5.26徳日社説)「小松島ゼラチン会社に対²²⁾

する放資が果して国家の生産力を増進せしむる」(T10. 5. 26徳日社説)かと同社に融資した大同生命に「苦言を呈した」社説を掲げている。

また大正10年5月31日には「多田徳島毎日新聞社長に纏る怪事実の数々」(T10. 5. 31徳日)として日本林産工業疑獄事件の報道を連続的に掲載した。これらは徳毎乗取りの一環としての多田徳毎社長追落しの意図が感じられる。こうした松島²³⁾の数多くの“解剖”実績を熟知する対立紙の徳毎は「誠実なる実業家を脅喝威怖せしめ、不正の利益を収めんとせる」「脅喝新聞」(T11. 4. 25徳毎)なりと批判した。

大正11年9月25日大東京新報は資本金3万円(払込済)を5万円資本増加を決議²³⁾、10月19日広告部長の鈴木邦三郎が大東京新報取締役²⁴⁾に就任した。

大正13年3月2日徳日は「愈々社屋新築と輪転機増置計画」(T13. 3. 2徳日社告)を広告し、本格的に拡販に乗り出して、ライバル紙の徳毎を追いつけた。こうして徳毎・徳日両紙は販売面だけでなく、お互いの紙面でも激しい攻撃を繰り返すこととなる。二三の例を挙げると大正13年5月6日徳日は「本社長松島肇氏にくひかかり、昨今の徳毎は松島氏のみの攻撃をしてゐる。『松島新聞』のお株は却って徳毎が取って仕舞った」(T13. 5. 6徳日)との世評を紹介して、「全紙松島氏の記事のみを以て埋め新聞の使命を尽さず」(T13. 5. 6徳日)と攻撃した。また大正13年5月30日徳日は2面のトップに「己の汚ない心で他を律する徳毎の奴さん達に教へて遣る」(T13. 5. 30徳日)との見出しを使って「オイ徳毎の奴さん達此の道理がよく判ったか」(T13. 5. 30徳日)と徳毎を口汚く批判するという具合であった。

大正13年7月24日には松島の実弟である徳島日日新報社取締役の西条教部が沼津別荘で死亡し(T11. 9. 6徳毎)、9月には松島自身も沼津駿東病院に「病氣入院」(T13. 10. 2徳日)するというピンチに陥った。こうした松島を巡る世間の目が一層厳しさを増すなかで、徳島日日新報社においても大正14年4月「寺井家から出て松島家に入り」²⁵⁾、松島の義理の甥となった松島円が徳島日日新報社に入社、「入社後間もなく代表取締役となり、前<肇>社長の後を承けて経営を主宰」²⁶⁾して、退勢の挽回に努めた。大正14年1月の電通調査による広告統計で

は全国98地方新聞中、徳島毎日は第6位の広告行数(97,961行)に対して、徳島日日は第26位68、917行(T14.1.27徳毎)と差がつき、『毎日』は再び勢いを盛り返し²⁷⁾、四面楚歌状態の「松島が積極的に資金を投入しなくなると、『日日』の紙面は見劣りして来た」とされた。²⁸⁾

大正14年時点の役員は社長松島肇、専務市原理之²⁹⁾、*森依信、取締役高橋盛二、住友定吉、*秋山寛、*松島円、取締役兼大阪支局長*山本文作、監査役兼石井支局長米田英二(徳島市富田浦町)、長野幾之助、営業部長・広告部長高橋盛二、販売部長岡哲、会計主任板東節助³⁰⁾であった。

大正15年ころ「松島肇が経済活動に伴うトラブルで一時的社長を退いて」³¹⁾、松島の義理のおに当る松島円が「入社後間もなく代表取締役となり、前社長の後を承けて経営を主宰」³²⁾した。

昭和4年時点の徳島日日新報社の陣容は代表取締役*松島円、専務・主筆市原理之、専務*森依信、常任取締役・営業部長高橋盛二、取締役*川上安太郎、住友定吉、佐藤為三郎、監査役長野幾之助、社会部長高田広一、政治経済部長高木正一、会計部長郡幸三郎、広告部長石田幾治、販売部長井沢龍二、写真部長清水長三、植版部長梅谷政一、印刷部長松本芳一³³⁾であった。

その後の経過は『徳島新聞五十年史』に詳しいので省略するが、結局昭和16年12月15日社歴が長いだけの徳日と、経営的にあった優位にあった徳毎が知事の戦時統合斡旋により「あくまで強引に対等の立場で合同しようとする」松島と、多田の両実力者が何度も協議した。「国策一本で追及する」³⁵⁾松島の勢いに「一騎打ちになると…到底松島の敵ではなかった」³⁶⁾「もともと機械屋」³⁷⁾の多田が圧倒されて、結局両社の出資評価5:5の条件で統合し、新たに株式会社徳島新聞社として『徳島新聞』を創刊した。両実力者は株式会社徳島新聞社顧問となった。³⁸⁾しかし統合後も「重役間では事毎に角突合いをして、勢力争いが絶えない」³⁹⁾深刻な内紛が続いたため、憂慮した警察が全重役に辞表を提出させ「不浄」資本家を全面排除した上、昭和19年6月1日営利性を否定した全国唯一の社団法人形態の徳島新聞に改組させた。⁴⁰⁾警察が言論機関に介入し、資本家を駆逐するという資本制の完全否定はいかに戦時下とはいえ異例であり、司法当局の積年

の松島への不信感の強さを物語るものであろう。

2 徳島無尽

徳島無尽は大正5年6月徳島市富田浦町に資本金10万円、払込2.5万円で設立された。大正8年末時点では利益748円、配当…（通覧、P1095）、取締役服部幸太郎、長瀬頼平、大島直次郎、*西条教部、監査役浜田源太郎、松島巖（北麓製糸取締役）、山田劉であった。（要録T9、P2）

徳島無尽はその後松島色を強めて、大正11年時点では代表取締役*島田雅雄（*徳島日日新報社理事）、取締役*西条教部、佐々木卯左二、松島巖（留任）、*宮本巖（徳島日日新報社専務）、*住友定吉（*徳島日日新報社元社長）、監査役山田劉、大島直次郎（留任）、*山本文作であった。（帝T11、P4）

大正12年時点では「松島肇の大株主たる会社」（T12.8.18徳毎）の一つであった。破綻した*昌栄銀行徳島総代理店の滞納税金処分のため徳島市役所徴税課が昌栄銀行の金庫を差押えた際に、徳島無尽側では「全然錯誤より出でた無関係者の〈徳島無尽〉金庫を差押へた」（T13.10.20徳毎）として差押解除を要求した。これに対して徳島市役所徴税課では「徳島無尽も松島氏が大いに関係して居る会社である事を聞いて居るので、市徴税課長もオイソレと先方の要求を聞く事には行かない」（T13.10.20徳毎）、「昌栄銀行徳島支店営業所と元徳島無尽とは隣家といふよりは同一家屋と云ふ方が真に近い」（T13.10.20徳毎）と判断している。つまり徳島無尽と昌栄銀行徳島総代理店とは経営者が共通するだけでなく、事実上同一家屋内で共通の金庫を仲良く使用するほど、おそらく共通の事務を執っていたものと解される。他の立地を同じくする松島系企業同士も徳島無尽と昌栄銀行の関係に近い形態であったものと推測される。

社長は*大久保彦四郎（T12.8.18徳毎）であった。しかし後述する関西木工事件で大久保は「将来は改心し、徳島無尽会社々長其他松島関係の会社重役は辞任して誠意を披瀝致します」（T12.8.23徳毎）と当局に嘆願したため、大正13年時点では代表取締役*新居政太郎（*徳島民報社元代表取締役）、取締役*西条教部、佐々木卯左二（留任）、*住友定吉（留任）、*森依信（徳島日日

新報社専務)、*川上安太郎(徳島日日新報社理事)、監査役山田劉(留任)、秋山寛(徳島日日新報社取締役会計部長)となっている。(帝T13、P4)取締役にはその後松島肇の義理の甥の*松島円も加わった。

3 美馬郡是製糸

美馬郡是製糸は大正6年1月資本金18万円で徳島県美馬郡重清村に設立され、大正6年6月創業した。(通覧、P146)大正7年3月時点で代表取締役青木伊三郎⁴¹⁾、取締役*松島肇、武田源七(三島村)、山下伊平(池田町)、前田与三郎(岩倉村)、藤沢利兵衛(重清村)、喜多牧雄(郡里村)、宮田啓助(重清村、美馬倉庫監査役)、監査役飯田儀平(貞光町、美馬倉庫監査役)、佃差吉(穴吹村)であった。大正9年1月時点で職工男0、女150、動力蒸気1、12馬力、電気1、5馬力(通覧、P146)、払込5.4万円、松島は取締役在任中であつた。(要録T9、P7)

4 第一倉庫

第一倉庫は「松島肇の大株主たる会社」(T12.8.18徳毎)の一つで、大正6年3月「小松島においては松島肇等により資本金三十万円⁴³⁾」で倉庫業を目的として設立された。(通覧P1095)第一倉庫は小松島港で種別「其他の倉庫」1棟を所有していた。第一倉庫の本店徳島市西新町は昌栄貯蓄銀行が大正4年2月に徳島総代理店を設置した徳島市西新町2丁目と一致すると思われ、大正10年4月8日の徳日紙には同一場所を思わせる「新築成れる昌栄銀行(上)と第一倉庫会社(下)」(T10.4.8徳日)の写真が掲載されている。同所には例えば同系の帝国毛織も大正10年4月出張所を設置した⁴⁵⁾。

大正8年では資本金30万円、払込12万円、積立金510円、利益…円、配当率…%であつた。(通覧P1095)大正9年では払込20万円、代表取締役松島肇、取締役*篠野寛治、*青木伊三郎、大島直次郎(*徳島無尽取締役)、平田利太郎、中島匡男(那賀郡新野町)、*脇田豊吉、渡部繁三郎、岡田周二⁴⁶⁾、*大久保彦四郎、*西条教部、監査役谷六三郎⁴⁷⁾、石原勝見、斎藤勢一、浅川岩太郎、*喜田牧雄⁴⁸⁾

であった。(要録T9 徳島、P4)大正11年2月第一倉庫は徳島自動車とともに松島汽船に合併された。(帝T11大阪、P147)

5 共正海運→糸崎船渠→海運興業→松島汽船→共正海運

共正海運は大正7年3月資本金15万円で徳島市堀裏町に設立された。(要録T9、P7) 共正海運は大正7年12月末現在で佐野吉蔵より取得した汽船の第三共正丸を、大正8年12月末現在で汽船の第三共正丸を、大正9年12月末現在で汽船の第三共正丸、「機関ヲ有スル帆船」の第一共正丸、同第二共正丸、同第五共正丸、同第六共正丸を各々所有していた。⁴⁹⁾

大正8年12月末現在、三福丸⁵⁰⁾を所有していた*糸崎船渠は「四国共正海運会社を買収するに当り、合併の形式をとり、代金支払には三株に一株の割にて(糸崎船渠)会社の株式を割当」(T9、3.10大朝)てた。合併前の共正海運の払込は7.2万円で役員は代表取締役田村嘉平、取締役*西川漸、佐野吉蔵(船主)、郡桎太郎、*西条教部、渡辺鶴吉、監査役富永勝太郎、新居愿三郎であった。(要録T9、P7)

大正11年時点では本店を*関西土地建物と同じく大阪市北区中之島5-30に置き、資本金48.5万円(払込済)の松島汽船(大正7年3月設立)が存在した。正確な系譜は未詳ながら、糸崎船渠が改称した海運興業が大正11年3月「大阪計器製作所へ合併解散」(要録T11、大阪P59)するに際して、実質的には汽船部門が新たに松島汽船として独立したと思われる。松島汽船の役員は代表取締役*西川漸(旧共正海運取締役)、松島肇、取締役*西条教部(旧共正海運取締役)、*中村定、監査役*山本文作であった。(帝T11、大阪P147)

糸崎船渠との合併後、旧共正海運所有の第三共正丸(久共丸と改称)を大正10年に富田久に譲渡、第六共正丸を富永半蔵に譲渡するなど、支配船腹に大きな変動が生じた。大正11年2月松島汽船は*第一倉庫、*徳島自動車を合併し(帝T11大阪、P147)、徳島港における海陸・倉庫の総合経営体制を確立した。松島が関与した数多くの企業群のうち、なぜ松島汽船だけに公然と彼自身の姓を冠したのか不明だが、郷土の徳島への特別な思い入れの結果であろうか。

大正11年3月松島汽船（主任宮本復生）は大阪阿波沢庵卸商組合、神戸漬物卸商組合等の指定を受け、専属就航発動機船の「八幡丸、大吉丸、住若丸、碓石丸、蛭子丸、大宝丸、鷗丸、観音丸、其他臨時船数隻」（T13.4.1徳毎広告）を擁して、「発動機船、定期出帆といふ『理想』が当汽船部の努力により『実現』」（T13.4.1徳毎広告）の結果、徳島市中洲港において「三月中当汽船部取扱船舶数、入港三十隻、出港二十五隻、計五十五隻」という「徳島海運界の新レコード」（T13.4.1徳毎広告）達成を広告した。このころ汽船で小松島港に圧倒されていた徳島港では「帆船並発動機船は出入増加し、新町川左岸汽船発着場より下中洲鼻に至る間常に数十隻の碇泊を見るに至れり⁵²⁾」という活況が見られた。大正14年時点では松島汽船は徳島市中洲港に旧第一倉庫から継承したとみられる「発動機貨物倉庫1棟90坪⁵³⁾」を所有するとともに、「発動機貨物上屋1棟30坪⁵⁴⁾」を経営した。松島汽船と競合関係にあった同業者は阿波国共同汽船（倉庫2棟56坪、32坪）、石川回漕店（倉庫1棟20坪）、丸高屋回漕店（倉庫1棟52坪）、宝扇運輸⁵⁵⁾（倉庫1棟56坪）、青木回漕店（倉庫1棟56坪）、上屋経営者は阿波生産運輸組合（上屋1棟42坪⁵⁶⁾）等であった。

大正14年4月松島汽船の汽船部主任宮本復生⁵⁶⁾が松島汽船側の手放した汽船部を「今回之を譲り受け、元共正海運株式会社の旧名を復活し、茲に共正海運と改称、同汽船部の営業一切を継承」（T14.4.29徳毎広告）した。共正海運社は「阿摂間発動機船積貨物専門」（T14.4.29徳毎広告）で、大阪松島町の中島回漕店、神戸兵庫島上町の兵庫小池商店を取引店としていた。（T14.4.29徳毎広告）その後も共正海運社は昭和6年12月株式会社に改組し、徳島・阪神間の機帆船（木船）での貨物輸送を行なった⁵⁷⁾。

6 徳島自動車

徳島自動車は徳島市船場町に事務所を置いて、少なくとも数台の乗合自動車⁵⁸⁾で営業していた模様で、「松島肇の大株主たる会社」（T12.8.18徳毎）、「既に彼等<松島>一味の手に入…株主が苦しめられつつある」「県下のボロ会社」（T12.8.23徳毎）の一つで、取締役は関西木工「事件の黒幕役者」（T12.8.18徳

毎)で「松島が徳島に居らぬ際松島の代理となって各種の解決をなし、松島が…片腕と頼んで居る」(T12. 8. 24徳毎)、「松島肇の四天王の筆頭と称せらるる」(T12. 8. 18徳毎) *大久保彦四郎ほかであった。大正11年2月松島汽船は同系の第一倉庫、徳島自動車と合併した。(帝T11大阪、P147) この結果、旧徳島自動車の経営していた乗合自動車は松島汽船株式会社営業所所属の乗合自動車に変更された。合併後の大正12年8月23日「中通町字南側松島汽船株式会社営業所の乗合自動車」(T12. 8. 24徳毎)の「徳五号」が他の乗合自動車と衝突する事故を起こしたとの報道がある。

大正14年4月松島汽船は汽船部主任宮本復生がMBOにより「共正海運と改称、同汽船部の営業一切を継承」(T14. 4. 29徳毎広告)したが、松島汽船の乗合自動車部の消息は『徳島市史 第3巻』にも記載されていない。「大正十年ごろから昭和のはじめにかけて、〈徳島〉市内には多くのバス会社が相次いで創設され、いつ統廃合されたかわからないものが多く存する⁵⁸⁾」からである。

7 関西土地建物(大正10年11月設立)

関西土地建物は、大正10年11月資本金200万円、払込50万円で設立され、本店を松島汽船と同じく大阪市北区中之島5丁目30に置き、役員は取締役*山本文作、*西条教部、*中村定、監査役*宮本巖であった。(帝T11、大阪P93)

*徳島日日新報社は「関西土地建物会社の所有にかかる新富座を借り入れて興行を始め、此の収入で新聞の欠損を補ふ計画を樹てる」(T11. 2. 27徳毎)とされた。「例の松島肇等の設立にかかる関西土地株式会社」(T11. 2. 22徳毎)と引田源之丞(徳島市新栄町、稻荷座主)は「引田所有の劇場稻荷座を三万五千円を以て関西土地株式会社に売却」(T11. 2. 22徳毎)する契約を結んだ。松島は「〈関西土地株式〉会社が出来れば重役の報酬を多額に渡すの、演芸主任とするのと随分甘言を弄したが、其後会社は容易に成立せず…手付金と云ってもまだ成立して居らぬ会社の第一回株金払込領収書といふ当にならぬものであり、会社が成立しても現金を貰へるのは僅々二千五百円」(T11. 2. 22徳毎)であった。引田源之丞の死亡後、相続人の引田喜三は民事訴訟を起し、「松島の経

営にかかる関西土地建物株式会社も引田氏を相手取って訴訟を提起」(T11. 2. 25徳毎) した。松島は「自分が経営の新富座に観客を集中せしめやうと画策」(T11. 2. 25徳毎) した。徳日紙の「えんげい」欄には徳日が主催する演芸会の読者優待先として提携していた映画館の相生座 (T13. 5. 30徳日) などとともに、新富座の広告が常時掲載され、徳名興行合資会社の「新富座初秋興行、大阪歌舞伎好劇家の人気を湧かす」(T13. 9. 6 徳日) といった提灯記事も見られた。なお松島は大正13年下期の劇場税 (新富座分) 73円が未払いと指摘されている。⁵⁹⁾ 大正13年5月28日関西土地建物は「株主総会ノ決議ニ因リ…解散」⁶⁰⁾、清算人は松島の義弟 (T11. 5. 11徳毎) の*山本文作と、松島が「自己ニ代リテ其ノ設立計画実行ノ局ニ当ラシムルコトト為シタ」⁶¹⁾、「松島氏の親族」(T14. 2. 8 徳毎) *中村定という、「松島式」解散であった。

8 徳島木工製作→関西木工

大正12年8月17日の『徳島毎日新聞』紙上で徳島地裁の平井検事正は関西木工という「只今取調中の会社」(T. 12. 8. 17徳毎) を念頭に置きつつ、「会社ゴロ」について社会全体に警告した。「関西木工事件」の概要は「松島肇の四天王の筆頭と称せらるる」(T12. 8. 18徳毎) *大久保彦四郎が「事件の黒幕役者」(T12. 8. 18徳毎) として関西木工という「悲況会社を見付け出し、有資力の株主のある会社を見出し、これを乗取らんと…過半数を取込んで…会社を食物にする」(T. 12. 8. 17徳毎) もので、松島自身が関与したのか否かは未詳である。しかし「松島が戸水寛人の如きイカモノ学者を看板に使ひ、自分は黒幕になって盛に幽霊会社を作…て居るのを其の儘、関西木工会社事件に就て」(T12. 8. 24徳毎)、「大久保が…松島の故智を其儘応用」(T12. 8. 24徳毎) したとされる。事件関係者が定款変更などの際に依拠した「台本」は明らかに松島自身が案出したノウハウを活用したとみられ、松島一派に広くノウハウが流布・共有されていたことをうかがわせる。このことは松島自身が不在でも、一連の経済活動が支障なく遂行できる組織的な連携体制が松島一派内に確立していたことも意味しよう。大久保は当局の追及に対して「今後は一切松島関係の会社

を退き、正道に帰りますから」(T12.8.24徳毎)と「頻に哀訴嘆願したといふ」(T12.8.24徳毎)が、かつて「昌栄貯蓄銀行を破産に瀕せしめ」(T11.5.14大毎)た際に松島自身も東京地方裁判所検事局で、「今後は会社事業に絶対に関係せぬ」⁶²⁾、「爾今会社事業に関係しないことを誓って起訴猶予の処分を受け」⁶³⁾ており、大久保は最後まで松島流の「台本」に忠実に演技したことになろうか。

関西木工(徳島市堀裏町中州)は大正8年11月(通覧、P1092)徳島木工製作として徳島市堀裏町に資本金10万円、払込2.5万円で設立され、同年10月木工品製作の木工業を開始した。代表取締役三木利五郎(関西貯蓄銀行監査役)、取締役支配人福本増吉、取締役中川文兵衛、岡田周二(前出)、遊佐六三郎⁶⁴⁾、玉田弥伊太⁶⁵⁾、後藤源一、益田丞三郎⁶⁶⁾、監査役児玉宗四郎、大串歆次郎⁶⁷⁾であった。(要録T9、P3)徳島の素封家・高木次郎らの経営する内外商事・明正銀行系統の人物⁶⁸⁾が4名も含まれていた。

しかし設立当初から2,711円の赤字を出し(通覧、P1092)、「大正九年の一般経済界の大打撃と共に悲慘に陥り」⁶⁹⁾、大正11年以降に関西木工と改称、資本金10万円で第一回12.5円、第二回10.0円払込み、なお27.5円の未払込株金があり、宮本谷蔵ら⁷⁰⁾に対して日歩6～9銭の高利の約2万円の債務(T12.8.18徳毎)があるため、収支償わず、大正11年12月ころから休業に追い込まれていた。東条保⁷¹⁾は「大久保彦四郎等の顧問の下に」⁷²⁾、「大久保が参謀となり、昌栄銀行員郷田某を使って一株僅々三銭で競落せしめ」(T12.8.24徳毎)たと報じられた。資金繰りに窮した高木次郎系統の持株を株式担保等で融資していた昌栄銀行が代物弁済で取得した可能性が考えられる。⁷³⁾

関西木工株競落の際の「郷田の保証金は久保が支出し…慰労として郷田と昌栄銀行代理店主任の山田某を偕楽園に連れて行って御馳走をして居る」(T12.8.24徳毎)とされた。こうして総株数2,000株中、現金「僅々六十円で他は約束手形やロハで会社の死命を制する丈の株式を手に入れた」(T12.8.25徳毎)東条保は大正12年3月「現在の会社の窮状を大整理し、次で完全に営業を為さしむべき旨誇張して」⁷⁴⁾同社副支配人として入社し、支配人を兼ねていた「取締役福本増吉を懐柔して自家薬籠中のものとし」⁷⁵⁾、大正12年4月4日臨時株主総

会を「未だ他の株主の参集せざるに先たちて開会」⁷⁶⁾、社長東条保、取締役東条要、中川文兵衛⁷⁷⁾、岡田周二、益田丞三郎、監査役児玉宗四郎⁷⁸⁾を選任した。

4月11日取締役会を招集、例の松島式に「定款を変更して会社は有価証券及他会社の株券の取得、有望事業に対する投資及貸付を為すこと、株主総会は便宜の地に於て開く事を得るものとし、尚重役報酬を年三千円とし、その処分は社長に一任する事」⁷⁹⁾を決議した。さらに「嚴重なる監査を避くる為め、弟東条要を監査役に選任」⁸⁰⁾した。その上で8月2日までに第三回払込合計4,825円65銭を「騙取」⁸¹⁾した。しかし関西木工事件の発覚により、大正12年8月17日付で「取締役及会社ヲ代表スヘキ取締役東条保ハ辞任」⁸²⁾に追い込まれた。

9 そ の 他

松島系統にはこのほか「既に彼等〈松島〉一味の手に入…株主が苦しめられつつある」徳島「県下のボロ会社」(T12.8.23徳毎)として①日邦薬剤→松島製薬→日東製薬、②阿波煉瓦、③大正窯業、④大正酒類、⑤龍山石灰、⑥麻植製絲等がある。

まず①日邦薬剤は大正7年11月合資会社を改組し、「売薬及化粧品製造」(通覧、P1091)を目的として資本金10万円、払込2.5万円で徳島市寺島町本町に設立された。大正8年末には積立金250円、利益319円、配当…(通覧、P1091)、大正9年では徳島市船場町、取締役は沢口勘五、米田正一、天羽邦二⁸³⁾、監査役小梶勇吉(親善興産、日本アッテンドロード各代表取締役)、松田吉五郎であった。(要録T9、P1)その後松島系統となり大正11年では社長天羽邦二、取締役米田正一、内藤淡爾、*松島肇、*川上安太郎、監査役新居儀三郎であった。(帝T11、P3)

徳毎は「天羽邦三氏⁷⁷⁾が社長してゐた、公園剣先橋詰の日邦製薬株式会社は松島が例の術策で手に入れてから松島製薬株式会社と社名を変更し、更に日東製薬と名称を換へ、会社は殆ど事業もせぬに第二回、第三回、第四回と例の悪辣な手段で株金の払込を徴収し…株主は何れも泣き面に蜂の態で、今更ながら松島の不都合な手段を憤慨して居る」(T11.11.24徳毎)と報じた。「松島が乗取つ

て、事務所の所在不明なりと云はるる日邦製薬」(T12.8.18徳毎)の大株主は松島肇(T12.8.18徳毎)、代表取締役は松島(帝T11職P390)、取締役は*大久保彦四郎らであった。(T12.8.18徳毎)

②阿波煉瓦は大正7年12月板野郡瀬戸村に煉瓦製造を目的に資本金20万円で設立され、職工男12、女11であった。⁸⁴⁾東条は「阿波煉瓦会社の株式を手に入れかけ」(T12.8.26徳毎)、「東条保の名義で…阿波煉瓦会社株を三百株買入れ」(T12.8.23徳毎)だが、久次米倍之進代表取締役ら同社重役が警戒して目的を果たせなかったとされる。

③大正窯業は大正8年12月板野郡板東町萩原に資本金10万円、払込2.5万円で設立され、代表取締役黒田徳太郎、取締役黒田隆一、浜藤平、前野則之、藤井嘉之助、黒田藤吉、市川孝兵衛、監査役萩原辰蔵、近藤三郎兵衛、大森重蔵であった。(帝T11、P7)その後一味は資本金15万円5,000株のうち、「東条保の名義で大正窯業会社株を二百九十五株…買入れ」(T12.8.23徳毎)、「財政に行詰って居る」(T12.8.26徳毎)のを「昌栄銀行板東出張所主任の安芸広幸を介して同社の取締役黒田隆一を抱込み」(T12.8.26徳毎)296株を590円で買い入れたとされた。大正12年7月25日の株主総会で、「東条を救ひの神のやうに思ひ」(T12.8.26徳毎)社長に選出した。

④大正酒類は徳島県名西郡石井、「松島肇の大株主たる会社」(T12.8.18徳毎)、監査役は*大久保彦四郎ら(T12.8.18徳毎)

⑤龍山石灰は取締役は西条教部ら。松島肇300株、西条教部100株(T11.3.20徳毎)

⑥麻植製絲は大正9年1月徳島県麻植郡鴨島町に資本金50万円で設立、代表取締役川真田忠平、取締役杉浦左右平、重本政吉、鈴木長三郎、*西条教部、笠井嘉納次、戸田万平、監査役森喜三郎、原田武平(帝T11、P6)

1) 理由、『大審院刑事判例集』第10巻、P724

2) 3) 『月刊新聞佐賀評論』理由、『大審院刑事判例集』第10巻、P716、724

4) 5) 難波栄「佐賀県新聞史」日本新聞協会編『地方別日本新聞史』昭和31年、P

451、454

- 6) 「大正十三年（ネ）第三号破産事件」の破産管財人は佐賀市の弁護士大坪春雄、弁護士内田清治の2名。（S 6.10.8 法律）
- 7) 新聞研究所編『昭和新聞名家録』昭和5年、P318。徳島県の新聞史に関しては近刊の『徳島新聞五十年史』のほか、徳島新聞社顧問の横山春陽が「自身の見聞を基礎とした」（横山春陽「徳島県新聞史」日本新聞協会編『地方別日本新聞史』昭和31年、P393）「徳島県新聞史」などに負う所が多い。
- 8) 『新聞総覧』日本電報通信社、大正5年版、P525
- 9) 明治「三十一年六月…徳島毎日創立」（『昭和新聞名家録』、P7）した須見千次郎（麻植郡西尾村）は生糸製造業（『日本全国商工人名録』大正3年、アP8）、多額納税者947円56銭、地価23,896円（『日本全国商工人名録』明治31年、あP33）、徳島毎日新聞社、阿波製糸各取締役、田12.0、畑61.3、計73.3町の大地主、金貸業（農商務省編『五十町歩以上ノ大地主』、渋谷隆一編『都道府県別資産家地主総覧』徳島・香川・高知編、1998年、日本図書センター、P31所収）、大正12年度所得26,134、13年度所得23,720円（うち田畑16,632円、貸金2,773円）（『大正十三年分第三種所得大納税者所得金額調』大阪税務監督局、P11、『都道府県別資産家地主総覧』所収）は同上書所収の「大正十三年分第三種所得大納税者順位表 香川県徳島県高知県」で120位
- 10) 多田為太郎は明治14年麻植郡牛島村の藤井家に生れ、藤井真信大蔵大臣（昭和10年2月高橋蔵相の後任）の兄、先代・多田為太郎〔勝浦郡小松島村中町、清酒醸造、所得税9.69円、営業税28.19円（『日本全国商工人名録』明治31年、あP13）〕の養子となり、「機械屋」を経て明治44年徳島毎日新聞社社長に就任、日本化学工業代表取締役、多田商行代表取締役（帝T11職、P231）。「自らナッパ服を着て輪転機いじりもやれば、東京や大阪の広告主とも折衝」（『徳島県新聞史』、P398）するほど、「新聞経営のために陣頭に立って活躍」（山田明『現代四国人物夜話』昭和26年、四国郷土史研究会、P261）して徳毎に打ち込んだ人物であったが、昭和16年統合後の徳島新聞最高顧問となった直後の昭和17年8月満60才（『現代四国人物夜話』、P261）で病没（『徳島県新聞史』、P399）／なお合名会社多田商行（通町）は工業用品、自転車（『日本全国商工人名録』大正3年、アP6）、小松島村の多田勝太郎は多額納税者1,279円33銭、地価29,489円（『日本全国商工人名録』明治31年、あP33）、農、所得税2,527円（『日本全国商工人名録』大正3年、アP12）
- 11) 13) 21) 38) 『徳島新聞五十年史』P73

- 12) 井上一(羽城)は明治4年2月9日福井市の医家に生れ、金沢医専中退、福島民報記者を経て、「須見社長の徳島毎日創立に尽力…三十九年…主筆となり今日に至る」(『昭和新聞名家録』、P7)「温厚の君子人」(『徳島県新聞史』、P398)、昭和16年統合後の徳島新聞主筆(『徳島県新聞史』、P399)
- 14) 住友定吉(徳島市富田浦町)は藤岡盛の次男に生れ、住友家の養嗣子となる。明治25年兄藤岡八次郎が経営する『徳島新報』に参画、後に社長となり、『徳島日日新聞』を合併し徳島日日新報社社長。徳島市議員、政友会徳島支部常任幹事として「地元政界に活躍」(『阿波人物鑑』徳島日日新報社、昭和3年、P480)、兼務なし(要録、T15役下P285)
- 15) 片岡昇は「大阪朝日新聞に在りて技能卓越の称あり」(『新聞総覧』日本電報通信社、大正11年版、P627)とされ、写真版充実のために招聘
- 16) 高橋盛二(徳島市)は常務兼営業部長、明治21年入社(新聞之新聞社編『新聞人名鑑』昭和5年、P211)、大正5年時点で広告部長・販売部長、兼務なし(要録、T15役上P232)
- 17) 『新聞総覧』日本電報通信社、大正11年版、P627
- 18) 『新聞総覧』日本電報通信社、大正12年版、P565
- 19) 京橋区榎町1は*三池炭礦の本店、*熱海宝塚土地創立事務所に一致
- 20) 『新聞総覧』日本電報通信社、大正11年版、P57。山口正剛(牛込区赤城下町)は大東京新報社取締役のみ(帝T11職、P363)
- 22) 小松島の通称ゼラチン会社とは小松島の多田家に養子となった多田徳毎社長が高木次郎らと大正6年11月資本金50万円で小松島に設立したゼラチン・メーカーの日本化学工業所(帝T11、P2)のことであるが、社会面の半分以上を使い、「多田為悪運の果て 狐狸の住家ゼラチンの醜状」(T10.6.7徳日)を報道した。結局、徳日報道の通り、日本化学工業所の工場は大正11年5月操業停止となった。(『小松島市史 中巻』、P366)大正11年4月小松島町に設立された日本ゼラチン[資本金25万円、払込6万円、代表取締役柴田為三郎(帝T13徳島P2)]は日本化学工業所の第二会社か。取締役には門司築港(第3章)のフィクサーを勤めた傍士定治代議士も就任(『衆議院要覧』大正13年、P33)
- 23)24) T11.12.15官報3113号付録、P2
- 25) 『人物阿波風景112』(S31.2徳島新聞)。「徳島新聞常務をつとめたが現在は大阪に出ている」とされる。
- 26) 新聞研究所編『昭和新聞名家録』昭和5年、P318

- 27)28)34)35)40) 前掲「徳島県新聞史」、P398、399
- 29) 市原理之(痴羊、徳島市富田浦町)は明治8年4月15日高知県出身、日本大学卒、高知の土陽新聞編輯長を経て、明治45年入社、徳島日日主筆(『新聞通信記者名鑑』大正10年、P74)、「一度市会議員に出た…以外には新聞一本やり」(『徳島県新聞史』、P398)で兼務なし(要録、T15役上P24)、昭和16年統合後の徳島新聞編集局長(『徳島県新聞史』、P399)を松島の子分扱いで追放され昭和19年7月郷里の高知で寂しく死亡(『徳島県新聞史』、P399)
- 30) 『新聞総覧』日本電報通信社、大正14年版、P223、要録T15徳島、P2
- 31) 『徳島新聞五十年史』P93
- 32) 新聞研究所編『昭和新聞名家録』昭和5年、P318
- 33) 新聞之新聞社編『新聞人名鑑』昭和4年、P52
- 37) 前掲『現代四国人物夜話』、P260
- 41) 青木伊三郎(徳島県美馬郡重清村)は*第一倉庫、美馬倉庫各取締役、*美馬郡是製糸代表取締役
- 42) 「大日本重役録」大正7年3月現在『大日本重役大観』大正7年、P372
- 43) 『徳島県史』第6巻、P365
- 44) 内務省土木局編『日本の港湾』大正14年、P255
- 45) 帝国毛織『第二期営業報告書』
- 46) 岡田周二(板野郡大津村)は明正銀行常務、*第一倉庫、*徳島木工製作、内外物産、南海鉱業各取締役、コンピラ染料、有馬温泉各監査役(要録T9役上、P166)、阿讃商船代表取締役(帝T11、P13)、東条保を雇い入れた関西木工取締役(T12.8.17徳毎)
- 47) 谷六三郎(那賀郡羽ノ浦町)は阿南自動車商会社長(帝T11、P13)
- 48) 喜多牧雄は*美馬郡是製糸取締役
- 49) 『日本船名録』大正9～10年、『日本汽船件名録』大正12年
- 50) 鉄、総トン数66トン、船籍港大阪(『日本船名録』大正9年、P119)
- 51) 『日本汽船件名録』大正13年、P49、『日本船名録』昭和3年、P141
- 52)53)54)55) 内務省土木局編『日本の港湾』大正14年、P240、244
- 56) 宮本復生は元共正海運(株)経営者か
- 57) 前掲『徳島市史 第3巻』、P717
- 58) 前掲『徳島市史 第3巻』、P585
- 59) 前掲『徳島市史 第3巻』、P422

- 60) 大正13年9月18日官報号外、P17
- 61) 事実『大審院刑事判例集』第10巻、P125
- 62) 広島地裁公判で宮重検事論告論告（T11.5.14大毎）
- 63) 広島地裁公判で宮重検事論告論告（T11.5.14大朝）
- 64) 遊佐六三郎（徳島市新蔵丁南）は阿波公道無尽取締役（帝T5、P7）、内外物産、南海鉱業各取締役、有馬温泉監査役（要録T9役下、P127）、金主の宮本谷蔵が代表取締役（要録T9、P2）の日本大豆肥料監査役
- 65) 玉田弥伊太（徳島市西新町）は織物卸、内外信託商事、有馬温泉各取締役、内外物産監査役（要録T9役中、P59）、徳島商業会議所常議員
- 66) 益田丞三郎は徳島木炭取締役（帝T11、P5）
- 67) 大串歆次郎は徳島護謨工業取締役、（資）坂東商店出資社員（帝T5、P7）
- 68) いずれも遠隔地の兵庫県有馬郡有馬町に大正6年11月設立された有馬温泉株式会社役員を兼務
- 69) 72) 74) 76) 79) 80) 81) 予審決定書（T12.11.27徳毎）
- 70) 宮本谷蔵（小松島町仲郷）は貴族院議員、阿波紡績社長、高木次郎辞任後の明正銀行頭取（要録T9香川、P2）、日本大豆肥料代表取締役（要録T9、P2）、四国生糸（社長加島安次郎、本店大阪、支店小松島町）取締役（要録T9役下、P147）
- 71) 東条保は阿波電気軌道駅員から松島系の第一倉庫書記を経て（T12.8.17徳毎）、徳島日日新報社各社員（T12.8.26徳毎）
- 73) 大正11年3月15日ごろ松島肇の実弟で昌栄貯蓄銀行取締役（要録T9役下、P93）の西条教部は「高木次郎氏が社長たる日英興業会社並に同社元徳島支店長森敬則氏に関係する」（T11.3.20徳毎号外）事件で東京地裁に召喚された。高木次郎の關係する日英興業等と松島側との關係の可能性を示すものと考えられる。
- 75) 予審決定書（T12.11.27徳毎）。福本増吉は徳島木工製作筆頭取締役（要録T9、P3）
- 77) 中川文兵衛（鳴門村）は徳島木工製作取締役（要録T9、P3）、徳島護謨工業取締役（要録T9、P3）、関西木工前社長（T12.8.17徳毎）、徳島練炭取締役（帝T11、P4）
- 78) 予審決定書（T12.11.27徳毎）。なお高木系と目される旧徳島木工製作役員の遊佐六三郎、玉田弥伊太は選任されていない。益田丞三郎は徳島木工製作取締役（要録T9、P3）、児玉宗四郎（徳島市富田浦町東富田）は徳島木工製作監査役（要録T9、P3）、阿波大理石取締役（要録T9役下、P40）

82) 商業登記公告 (T12. 8.30徳毎)

83) 天羽邦二 (徳島市西新町四丁目) は撫養の老舗・天野屋の別家、徳島市議、徳島豆粕製造取締役 (「大日本重役録」大正7年3月現在『大日本重役大観』大正7年、P374)、有馬温泉監査役 (要録T9役下、P74)、日本アッテント取締役 (要録T9、P2)、*日邦薬剤社長 (帝T11、P3)、合資会社天羽商店無限責任社員 (帝T14、P12)。合資会社天羽商店は売薬、通町南側、大正11年8月設立 (帝T14、P12)。なお天羽化学工業所 (板野郡里浦村) は天羽貫一が経営する大正6年2月創業の食塩、塩化カリ、臭素、酸化苦土等のメーカー (『工場通覧』大正10年、P915)

84) 『工場通覧』大正10年、P840

第10章 松島肇のパートナー

松島は「戸水寛人の如きイカモノ学者を看板に使い、自分は黒幕になって盛に幽霊会社を作…て居る」(T12.8.24徳毎)と報じられた。戸水と同様に松島肇が実権を握っていた*糸崎船渠社長の男爵、貴族院議員の肝付兼行も「温容童心春風¹⁾煽々の感あり」と評された人物であったが、「自分は社長と云ふ名義ばかりで深い事は知らぬ」(T9.3.15読売)と看板社長であることをあっさり認めた。また大正8年12月設立の*伊豆山偕楽園を例にとると、「松島は創立の際一万株の内三千株をひき受け…定員十二名の重役中八名まで腹心の者をわりこませ」(S2.10.26東日)たとされるなど、関係企業の重役の大半を「腹心の者」で固めたとされる。この章ではこうした松島肇のパートナーを取り上げる。

1 戸 水 寛 人

戸水寛人<とみず・ひろんど>は芝区三田四国町、弁護士(紳、S3、P520)、文久元年6月25日金沢藩国老・本多家の儒臣の戸水信義の長男辛太郎として生まれ(人、T7、とP7)、松寺竹雄の兄、明治19年7月帝国大学法科大学法律学科(英法)卒、判事試補・東京始審裁判所詰、明治20年8月始審裁判所判事、明治22年11月英国等に留学、明治26年1月バリスル・アト・ローの称号を受く、明治27年8月欧州留学から帰朝、明治27年9月東京帝国大学法科大学教授として法理学と民法を担当、明治32年3月法学博士という輝かしい学歴・経歴の持主であった²⁾。

戸水は日清戦争後の三国干渉に憤った反ロシア感情の高まりの中で、日露開戦論者が台頭した際に「私共は是非露国を貝加爾湖まで追撃しなければならぬと思ってる…東部西比利亜を制服することが出来るのみならず、満洲を挙げて日本の権力下に立たしめることを得る」(M38.5.26読売)としてバイカル湖以東の東部シベリア占領を主張した「主戦論七博士」の一人として有名であった。戸水の周囲には「眼光確々と時局を洞察するや、主戦の意気勃々として抑へ

難く、遂に豪然振ひ立って、天下に怒号した七博士の一人」(T 3.12.21読売)という過剰に英雄視する風潮が見られた。萬朝報は「彼れが曾て時事に憤慨して時の政府を攻撃し、之が為に、明治38年大学教授を罷免された時、天下皆彼れの高風を仰慕した」(T12.2.28法律)とした。「戸水寛人さんをはじめ、所謂七博士が挙って、バイカル湖以東の占領を主張したもので、戸水さんの如きは、バイカル博士の別名さえ頂戴した³⁾」として、広く証券界にまで彼の勇名は轟いていた。

明治42年12月復帰した法科大学を辞して弁護士となり「京橋の事務所を中心として活動」(T 3.12.21読売)し、日大専務理事、早大教授もつとめた。日大での講義では「絶えずニコツキながら…一種鏜のある声にて面白さうに講義す⁴⁾」と形容された。

明治41年5月の第10回総選挙に郷里の金沢より代議士当選、戊申倶楽部を組織した後、政友会に鞍替え、さらに政友本党に変わった。『大阪滑稽新聞』は「理想的政党を樹立するとか…彼等が喧ましく騒いで組織した戊申倶楽部も、何日の間にか尻に帆懸けて逃げ出し、御用党たる政友会に加入後は『大博士々々』と煽て上げられてホクホク然⁵⁾」と戸水を批判した。『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』掲載の履歴にも代議士以降の官歴の記載なく、『全国株主要覧』大正9年版に記載なく、重要会社の300株以上の株主には登場しない。大正期以降に戸水が関与した企業を列举すれば大正元年富田生命保険相互会社創立委員長(T 1.8.28読売)、大東鉱業監査役(帝T 5職P 47)、大東塗料監査役⁶⁾、東京製針取締役(人T 7、とP 7)、大正8年大日本海草パルプ製紙創立委員(T10.2.14東日)、大正9年5月政友会の神田重義と「石川県で同士討をやり僅々三票の差で落選」(T 9.5.17読売)。大正9年安楽兼道⁷⁾、園田安賢とともに改良農具(資本金200万円)の発起人(T 9.3.14読売)、帝国炭砒の発起人(T 9.9.8東日 募集広告)、*熱海宝塚土地創立委員長、大正9年3月ころ千葉製粉発起人(T 9.3増田5-8)、麴町区飯田町四丁目、大東鉱業監査役、大北炭砒監査役(要録T10、P 161)、中外証券信託(大正8年11月設立)社長(要録T11、P 114)、*逗子土地代表取締役(帝T14、P 236)、大正9年11月時点で

東洋繊維工業監査役（株T10、P215）、＊紡績木管代表取締役、＊帝国毛織取締役（紳T11、上P102）などであった。大正11年12月21日＊亜細亜炭硯株主の小林平吉外2名から「〈戸水寛人〉博士が社長格で会社設立の為株式募集をやった処が、一向其の後成立しないので、株主は…払込金の返還を求めたのに、会社は応じない」（T11.12.22読売）として亜細亜炭硯社長戸水寛人を背任罪で告訴した。（T11.12.22読売）大正13年12月13日の＊昌栄銀行破産宣告時には同行取締役となっていた。（T13.12.14東朝）また＊帝国毛織紡績ほか松島系統の各社を承継した＊大阪計器製作所の社長となっていた。（T14.9.18法律）（戸水の兼務状況は巻末〔表－3〕〔表－4〕〔表－5〕参照。）

このように「学者として、政治家として、博士の名既に著聞⁹⁾」な戸水も大正8年以降には「一種の会社屋」的傾向を見せたため、萬朝報は「彼れは国士として尊敬を博収し民望隆々たる者で有った。然るに一たび屈して政友会代議士となつてから、或は泡沫会社に関係し、或は印紙魔¹⁰⁾の疑獄事件の調書中にも其の名を列し、名声頻に墜落して、殆ど收拾するに由なく…今や全く耻を知らぬ男となった」（T12.2.28法律に転載）として「ヘミツユルンド」なりと酷評した。

日本土地50株主となった旭川地裁検事夫人や法学博士夫人などはいずれも「戸水寛人博士の人格と学位に釣られた」（T13.11.11読売）と語った。戸水は弁護士の立場で依頼者たる松島に、単に名義を貸しただけという言い訳をしているが、当時の弁護士全般に対しては「『正義の擁護者』たる聖壇から、九天を直下して『法律商人』として『経済力の濫用』の支持者、『私権濫用』の番犬たる地位に墮落しつつあらざるか¹¹⁾」という批判も見られた。大正13年発行の『一九二四年に於ける大日本人物史』（大正13年、とP4）および昭和3年7月発行の『人事興信録』（人、S3、トP10）には法博、弁護士以外の兼務は一切記載されず、松島系統の役員兼務を意識的に経歴から外す意図が感じられるなど、かつての「会社屋」稼業は廃業したものとみられる。従四位勲三等、昭和10年1月20日死亡、享年75であった¹²⁾。

2 鈴木 錠 蔵

鈴木錠蔵は自ら日本土地株主に対して「単に名義上の副社長であって、実際上の事務に就ては何も知らない」(T13.11.11読売)と述べたように、松島系企業では名目上のダミー役員であったと考えられる。鈴木錠蔵(豊多摩郡大久保百人町)は明治2年12月4日(紳T11、付P4)常陸国真壁郡下館町に生まれ、明治26年東京高商本科卒、朝鮮国内閣雇となって法規編纂に従事、明治39年6月共同火災名古屋支部長となり(人、T7、すP51)、同時期に入社した松島と一時期ながら同僚の関係にあった。翌40年4月「横浜生命保険株式会社支配人、大同藍株式会社理事、東洋皮革株式会社取締役ニ挙¹³⁾げられ、東京硫酸常務、硫酸販売、*関東機械ナット、*東京リベット製造、東京煉陶各取締役等を歴¹⁴⁾任、大正8年末には東京硫酸旧50新250日本兵機新100、計400株主であった。¹⁵⁾

大正6年4月茨城県第7区から代議士当選、憲政会に所属した。¹⁶⁾同時期に徳島県第4区から代議士当選した松島とは所属政党を異にするが、事業経営を共にした仲間であったが、昭和14年発行の『財界人物選集』の経歴からは以下の¹⁷⁾ように主に松島肇の関係事業の兼務だけが注意深く除外されている。すなわち
*大日本原毛紡績、東北石炭各取締役、*昌栄貯蓄銀行、*常盤商工、*安全印刷各監査役、*日洋土地興業などの発起人を兼ねたほか、大正7年10月岩手採炭の社長に就任(T7.10.1読売)、大正7年10月24日設立の*関東機械ナット取締役に就任¹⁸⁾⑬300株、7年11月時点で*東亜織布500株主、¹⁹⁾大正8年12月末には*東京リベット製造取締役200株主、²⁰⁾大正10年4月9日*昌栄貯蓄銀行新築披露宴に「東京より来県し、此宴に加はりたる鈴木代議士起ちて松島代議士の功績を述べ」(T10.4.10徳日)た。大正13年12月12日破産宣告を受けた時点でおお昌栄銀行取締役であった。(T13.12.14東朝)

なお松島関係とは別に鈴木錠蔵は大正10年2月5日旭石油の初代監査役に就任(T10.2.20鉱業)、12年京和銀行の整理の際に、鈴木錠蔵が新頭取に決定した。(T12.7.6読売)。大正13年時点では東北石炭取締役であった。(名鑑13、P32)

3 鈴木久次郎

鈴木久次郎は「慶応二年七月上総国君津郡小櫃村ニ生ル。千葉県会議員ニ選ハル。南総銀行、久留里〈原文は米〉銀行各取締役、満韓塩業株式会社監査役外数会社ノ重役ニ挙ケラル。現ニ製絲業及文房具製造業ヲ営ム」²²⁾千葉県選出立憲同志会（後に憲政会）所属代議士で、大正4年時点で当選5回を数えた。大正8年には蔵内次郎作²³⁾、渡辺修²⁴⁾、松浦五兵衛²⁵⁾、片岡直温²⁶⁾、友常穀三郎²⁷⁾、鹿島秀麿²⁸⁾の新旧代議士とともに舞子住宅土地の賛成人・発起人に名を連ねた。このうち蔵内、渡辺、松浦3代議士は「何れも政友会に於ける知名の士」²⁹⁾であるとともに大正8年2月17日博済生命（8年6月国際生命と改称）役員に就任（T8.5.24官報）するなど、経済面でも連携していた。

大正8年6月27日設立の太平炭砒社長に就任、8月16日設立の起重機製造株式の取締役³¹⁾③1,000株主に就任した。大正8年10月*梅原文次郎らと紡績木管発起人（T8.10.21内報①）、東京屑物市場取締役（T8.10.25内報①）、8年11月*日本緬羊毛織社長、8年12月田村彰一、蔵内次郎作らと東京浴場炭砒取締役（T8.12.17内報①）、8年12月*伊藤忍、*徳永斌、*福井甚三、*田村範文らと京都府農林課技師から「到底不可能」（T8.12.3内報①）と批評され、「発起人の顔触に見て稍物足らざる感」（T8.12.3内報①）あると評された大日本木炭発起人、8年12月小山田信蔵、*山口文右衛門、竹村欽次郎らが賛助した富士林業発起人総代（T8.12.16内報①）、8年末では鈴木久次郎は明治商業銀行旧70新70福島県農工銀行旧55新60台南製糖新110、計365株主であった³²⁾。

大正9年2月河野英良らと設立した中央紙器取締役（要T9、P138）、11月28日太平炭砒社長を辞任した³³⁾。5月末では太平炭砒の⑤2,000株主であったが、大正12年5月末ではすでに売却済みであった³⁴⁾。

大正11年3月21日齊藤宇一郎ら6代議士とともに憲政会を脱党（T11.3.22読売）し、無所属となったが、その際にも「例の緬羊会社の一件で問題となった鈴木久次郎氏」（T11.3.23東朝）と報じられた。

4 松島のパートナー

前述の松島の実弟・西条教部（第2章）、看板の戸水寛人、鈴木錠蔵、鈴木久次郎以外にも、松島のパートナーと考えられる人物を抽出したのが巻末の〔参考資料1〕である。ここに列記した76名の資本家としての属性を分析してみよう。

まず松島との共同投資回数（松島の役員兼務先企業の兼務数）が多いなど、松島と親密な人物としては14社（①山本）、13社（①中村、②佐藤、③宮本、）、10社（③高橋）、9社（③堀内）、8社（③松永隆一、②大久保）、6社（②三島、③山下）、5社（④梅原、④伊藤、③後藤、②清水、②金沢、③五百木、⑤川上、⑥山口）、4社（⑤森、尾崎、関、高田直三郎、原、⑤脇田、⑥加島、⑥皆川）、3社以下（④日能、①松島円、⑥福井ら多数）などが挙げられる。（カッコ内の丸数字は以下に分類した類型番号）

これらのうち共同投資回数が多い人物ほど概して資産力が乏しく、逆に資産力ある有力資本家とは共同投資回数が少ないように思われる。つまり松島の周辺にいた仲間の大半は、対等な立場のパートナーというよりはむしろ彼の持株を借受けたダミー的な人物であったと考えられる。ダミーが必要な理由としては松島が数多くの企業に関係し、関係企業が全国に分布していた関係上、「松島が徳島に居らぬ際松島の代理となって各種の解決をなし、松島が…片腕と頼んで居る」（T12.8.24徳毎）大久保彦四郎のような「松島肇の四天王の筆頭と称せらるる」（T12.8.18徳毎）人物が少なくとも東京、大阪、徳島といった松島の各拠点ごとに必要であったと考えられる。とりわけ松島が当局にマークされ行動に制約を加えられてからは、黒幕になって陰から指示を出すいわば黒頭巾着用の松島に代って公然と行動可能な社長格の大物の代役が不可欠な存在となったものと推測される。たとえば多数存在した「松島乾分中のキケモノ」（T12.8.24徳毎）である大久保は「徳島日日新報の社員、記者に対しても社長然として臨み、同新聞記者を電話で自分の宅に呼び付け自己のためにする宣伝記事を書かし」（T12.8.24徳毎）たほどの強い権限をふるったとされた。

すなわち彼のパートナーの資本家としての属性を分類すれば、次のように①～⑥に分けることができよう。

①松島の親族等

住所が松島と同一で、同居人と思われる中川豊も親族等と推定される。「松島氏の親族」(T14.2.8徳毎)である中村定、松島の義弟(T11.5.11徳毎)の山本文作の両名の共同投資回数がずば抜けて多い。中村・山本の両名は大正9年以降公然活動が困難となった松島自身が実弟・西条教部とともに「〈中村〉定ヲシテ自己ニ代リテ其ノ設立計画実行ノ局ニ当ラシムルコトト為シタ³⁵⁾」り、大正13年死亡した松島の実弟・西条教部の代役を担わされたものと思われる。三池炭砒事件の裁判で弁護側は「〈中村〉定ハ被告人〈松島〉肇ノ代理権ナキコト³⁶⁾」を立証すべく、原判決が援用した証拠である梅原文次郎らの「〈中村〉定ハ被告人〈松島〉肇ノ代人ノ如ク供述シ、従来モ亦被告人〈中村〉定ハ被告人〈松島〉肇ノ為ニ万事処理シ居リタルカ如ク供述³⁷⁾」したのを供述の鵜呑みだと主張した。しかし法的な代理権付与の有無は別としても、当時の松島の関係者の多くが中村定を「表見代理」として松島の「代人」だと直感し、周囲もそのように扱っていたことは明らかである。

②松島の関係企業の使用人

判明しただけでも昌栄貯蓄銀行支配人(諸T5、上P61)の佐藤、第一倉庫支配人(T12.8.17徳毎)の大久保、伊豆山偕楽園支配人(帝T11、P23)の清水、千代田織物取締役兼支配人(要録T11、役下P157)の三島、昌栄銀行本店貸出係主任(T11.5.13大毎)の金沢、三光木材工業支配人(帝T11、P324)の高田忠吾など多数存在した。たとえば大久保が「松島乾分中のケケモノ」(T12.8.24徳毎)、「松島肇の四天王の筆頭と称せらるる男」(T12.8.18徳毎)と報道されたように、彼らの他の企業の役員兼務も実質的には松島の使用人身分の延長であったと想像される。

③所得税が未詳で資産力が劣るにもかかわらず、共同投資回数が多い人物。

たとえば宮本徹、松永隆一、後藤正基は役員兼務先のすべてが松島銘柄(＊印)である。また高橋憲治は東京金属工業、東京測量器製作など、堀内胖治郎

(松山)は伊予米穀取引所、松山瓦斯、南海酒類製造など、五百木保義は勝山織布など、それぞれ非松島銘柄と思われる地元企業等の役員兼務もあるが、圧倒的に松島銘柄が多い。また在郷砲中佐(紳T14、P450)の山下佐太郎は当初は「松島氏等にそそのかされ」(S4.3.9東朝)たとされる平松茂夫らともども太陽(株)取締役のみであったが、太陽(株)に松島派が加わって太陽商事となったのを契機に松島系各社の役員に名をつらねるようになったものと思われる。彼らは実質的には上記①②の類型に準ずるものと思われる。③の類型には昌栄貯蓄銀行代理店主も含まれよう。

④本来は独立した商工業者であったが、松島に説得されて後に仲間に加わった人物。

たとえば日能喜三郎は明治38年日能印刷工場を創設、経営していたが、経営不振で不渡りを出したため(商、P604)、7年4月松島らに買収され、安全印刷常務・技術部主任として実質松島の使用人として勤務するようになった。また伊藤忍は「伊藤式両面謄写版」という特許も有する独自の商品を持つ明治45年開業の謄写版商(帝信T13、大阪P7)の「伊藤博文堂主」(T9.3.10大朝)であった。また梅原文次郎も「九州其他に於て多数の炭坑を有せる」(T9.3.11時事)「鉦山ブローカー」(T14.2.10徳毎)を営む「梅原鉦業部大阪支店主人」(T9.3.11時事)であった。

椿原乙蔵(三池炭砦主唱者)が松島と接触するまでの経路は「骨董商小松登ナルモノノ紹介ニ依リ被告人〈梅原〉文次郎ニ対シ、其ノ出資ニ付尽力方ヲ依頼シ…之ニ基キ予テ知合ノ西条教部ニ諮リ、同人ト共ニ其ノ実兄ナル被告人〈松島〉肇ニ対シ右出資方ヲ勧誘シタ」という、椿原・骨董商(紹介)・梅原(知合)・西条(兄弟)・松島の連鎖によるものであった。当時の多くの投資話に骨董商や鉦山ブローカー等が介在して盛んに仲介を行う様子が見える。

また*三池炭砦(株)の場合でも株主となった鳥越貞敏(吉井銀行頭取)ら35名は椿原らにより「其ノ鉦業カ莫大ナル利益ヲ挙げ得ル見込アルモノノ如ク虚構シテ吹聴シ以テ同人等ヲシテ該鉦業カ相当ナル調査ノ結果ニ基キ真実右ノ如キ見込アルモノノ如ク誤信セシメ」³⁹⁾られ、なかでも鳥越は三池炭砦(株)取締役に

加わった。椿原らとともに株主を巧みに誤信させる側に居たはずの梅原自身も大正10年12月5日広島地裁第一回公判での審理で「全部松島氏を信用したことから細かなことについて万事松島氏に委してをった」(T10.12.13法律)と供述した。松島をすっかり信用した結果、「松島肇の勧めに応じ…昌栄銀行より借入れ」(T9.3.11時事)するなど、松島の意を受け、松島のダミー的存在として行動した結果、新聞等で「松島肇氏の相棒」(T14.2.7徳毎)、「松島肇氏の乾分」(T14.2.19徳毎)と見做されたものと思われる。検察側の判断でも「*阪井造酒松、*伊藤忍、*今中富三郎、*梅原文次郎は松島の輩下で、松島の巧妙な会社創立の手腕に巻込まれた観」⁴⁰⁾があるとして情状酌量された。

⑤松島の郷里である徳島県の在住資本家

①の山本文作(徳島県小松島町)、③で挙げた宮本巖(徳島市徳島裏町)のほかにも、森依信(徳島県寺島町)、篠野貫治(徳島県那賀郡富岡町)、脇田豊吉(徳島県美馬郡脇田猪尻)などが該当する。彼らのうち篠野が大正4年に「地方金融の為に尽さん」⁴¹⁾として昌栄貯蓄銀行富岡代理店を引受けたことが判明しているが、他にも同行および日本資金信託の代理店引受、松島代議士の政治的支援者などの関係が考えられる。

⑥松島よりも資産額、所得税等で優位にある有力資本家

大正5年時点で資産額50万円以上の資産家としてリストアップされているのは、加島安次郎300万円、横山一平50万円、芹沢多根50万円〔参考資料1(B)〕以外でも町田豊千代(日本鋼管シャフト専務ほか)⁴²⁾50万円など、ごく少数に過ぎない。また所得税額が多いのは加島安次郎13,490円、赤松範一3,658円、横山一平1,545円、倉知鉄吉941円、皆川芳造365円、福島宜三167円、脇田豊吉120円、福井甚三76円、本堂平四郎69円、福島太明67円、山本文作67円、鶴沢宇八36円などである。

結論としては上記①～④のタイプの人物が、松島のダミーとして彼と行動をもにすることが多かったものと思われる。⑥のタイプの人物は2～3社、偶然に松島と役員会で同席した程度の関係で、それ以上には関係が濃密化しなかった場合も多いと考えられる。

また②の種類の人物でも大久保のように当局に取調べを受けた結果、「将来は改心し、徳島無尽会社々長其他松島関係の会社重役は辞任して誠意を披瀝致します」(T12.8.23徳毎)と松島派離脱を宣言した部下も出てきた。また④の種類の人物でも当初は松島と行動を共にした糸崎船渠専務の阪井造酒松のように後に松島派と全面対決する場合も出てきた。阪井が糸崎船渠の解散を目論む松島側に「極力反対したる為め、解散は否決…今や松島派對阪井派の争ひとなり、阪井派は…再び臨時総会を開くことを強要し、地方株主に対し…左の檄を飛」(T9.10.15東朝)ばした。

- 1) 『明治大正史 13巻』昭和5年、実業之世界社、キP36。しかし松島は「大野銀行、*昌栄貯蓄から八十五万円の為替手形を作って割引貸付を受けることは創立委員長の肝付男爵と相談した」(大正10年12月5日広島地裁第一回公判T10.12.13法律)と供述している。
- 2) 『実業家人名辞典』明治44年、トP4、秦郁彦『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』東京大学出版会、1981年、P159)
- 3) 前掲『兜町盛衰記』1、P231
- 4) 明治39年6月19日『日本』湯本豪一編『図説 明治人物事典』2000年、日外アソシエーツ、P345
- 5) 明治43年1月15日『大阪滑稽新聞』湯本豪一編『図説 明治人物事典』2000年、日外アソシエーツ、P347
- 6) 「大日本重役録」『大日本重役会大観』大正7年、P18
- 7) 安楽兼道は警察官僚を経て明治37年貴族院議員(『一九二四年に於ける大日本人物史』大正13年、あP6)、猪野鉦業代表取締役、大日本人造肥料会長(『日本鉦業名鑑』大正6年、P16、79)
- 8) 『改訂日本鉦業名鑑』大正6年10月現在、P37
- 9) 『実業家人名辞典』明治44年、トP4
- 10) 印紙魔事件に関与したため、大正12年2月戸水が政友会を代表して普通選挙の反対論を演説しようと登壇すると提案した憲政会側から一大疑獄に発展中の「印紙事件の弁明をしろ」(T12.2.25大朝)などと野次られた。
- 11) 古野周蔵「弁護士会則改正問題一営業性及投機性に就て」(T14.9.18法律)
- 12) S17.1.21東朝 訃報。戸水の関連文献としては『一九二四年に於ける大日本人

物史』大正13年、とP4、『法学博士戸水寛人遺稿』昭和17年、秦誓、「漫録 戸水博士談片」『法政新誌』39号、明治33年、告天子「戸水博士談片」『中央公論』22巻3号、明治40年など多数。

- 13) 『衆議院要覧』大正6年11月、P320、同期には熊本出身の守山又蔵ら（如水会『会員名簿』昭和18年、P456）
- 14) 17) 『財界人物選集』昭和14年、P38
- 15) 『全国株主要覧』大正9年版、下P610
- 16) 『衆議院要覧』大正6年11月、P320。『人事興信録』（T7すP51）では政友会
- 18) 関東機械ナット『第1回営業報告書』T8/5、P11。松島も関東機械ナット㊟200株主
- 19) 東亜織布『第二回営業報告書』T7/11、P13、松島も取締役500株主
- 20) 東京リベット製造『第四回営業報告書』、P15、*赤松範一が社長500株、松島も監査役200株主
- 21) 京和銀行は木村ユウという女性頭取が全国70余の代理店を百店に拡張するとい
う、昌栄と類似の政策をとったが、大正11年12月休業に追い込まれ、鈴木らが整理
に入り昭和6年4月任意解散（前掲『本邦銀行変遷史』P213）
- 22) 『衆議院要覧』大正4年11月、P307
- 23) 蔵内次郎作と松島との関係はなお精査を要するので、昌栄貯蓄銀行のビジネス・
モデルを検討する際に詳述することとしたい。
- 24) 渡辺修は政友会代議士、大正8年2月17日蔵内次郎作と同時に博済生命取締役
就任（T8.5.24官報）、舞子住宅土地賛成人・発起人
- 25) 松浦五兵衛は政友会代議士、大正8年2月17日博済生命取締役就任、舞子住宅土
地賛成人・発起人
- 26) 片岡直温は滋賀県官吏、日本生命社長を経て代議士、後に商相蔵相
- 27) 友常穀三郎（神戸市山本通）は政友会代議士、九州商業銀行頭取、大阪火災大株
主1267株、大正3年現在九州肥筑鉄道の社長、香櫨園の土地を43年5月16日入手
- 28) 鹿島秀麿は洲本（徳島藩）の医師・大村純道の次男として、嘉永5年、父の赴任
地である甲賀郡水口で生まれ、同じ徳島藩医・鹿島家の養子となり、徳島藩に出仕、
明治12年淡路汽船を社主として創設、13年淡路共立舎を創設、同年神戸新報を発
刊、主幹として活躍、17年神戸新報は神戸又新日報に吸収合併されたため政界に転
じ17年県議、21年県会副議長を経て23年第1回選挙で衆議院議員当選。（『兵庫県人
物史』P261、『神戸財界開拓者伝』P554）

- 29) 『土地会社総覧』大正9年、P123
- 30) 『本邦生命保険業史』昭和8年、P226
- 31) 起重機製造『第一回営業報告書』T8/11、P11
- 32) 『全国株主要覧』大正9年版、下P608
- 33) 関係の有無未詳ながら同日付で太平炭砒は山形県西田川郡加茂町の石炭試掘権を10.3万円で買収した。(太平炭砒『第二回営業報告書』、P13) なお山形県西田川郡温海町五十川では大正8年6月設立(通覧P8)の田川炭砒(東京100万円、代表取締役小西栄三郎)が稼業した。(『稼業鉱山名簿』S25、P25)
- 34) 太平炭砒『第一回営業報告書』、P13、同『第七回営業報告書』
- 35)36)37) 『大審院刑事判例集』第10巻、P129
- 38)39) 昭和6年(れ)第114号、昭和6年3月30日第二刑事部判決、事実、『大審院刑事判例集』第10巻、P125~126
- 40) 広島地裁公判での宮重検事論告(T11.5.14大毎)
- 41) 『徳島名鑑』徳島日日新報社、大正4年、さP17
- 42) 渋谷隆一ほか「大正初期の大資産家名簿」『地方金融史研究』第14号、1983年4月、P54~81

終章 松島肇の功罪

1 松島肇の論難

『阿波銀行百年史』は「昌栄貯蓄銀行…頭取松島肇は徳島県板野郡…の出身で、衆議院議員に当選したほか、徳島日日新聞〈新報の誤り〉を買収して社長となり、その他数多くの会社を設立したが、第一次大戦後の不況で次々と破産したため、同行は不良債権が激増した¹⁾」とする。松島肇自身は「自ら第二の岩下清周を以て任じてゐた」(栄華物語)とされ、帝国興信所は一連の事件が発覚する以前の大正7年10月時点ではやくも松島の本質を「虚業家」(松島)と断じ、「自から財界の花形を気取り、大戦勃発以来企業熱旺盛の機運に乗じて新設会社の重役たり若くは発起人たる事無慮数十社、三面六臂を有するも尚及ばざるかの観あり…氏の真個目的は事業其ものにあらずして会社の創立に際し所謂トサクサ紛れに何等かの利権を獲得せんとするに外ならざる」(松島)ものと決め付けた。また松島は「近時新設の会社に顔を出さざるはなく、有名なる会社屋」(T9.3.14大朝)、「会社詐欺師」(S2.10.2東朝)、「金箔付きの会社荒し」(T15.4.12読売)などとも称された。相場記者として活躍した奥村千太郎は「現物出資で、二束三文の荒蕪地や鉱山…を高価に見積って売抜けるなどは虚業家の常套手段だ。自分の名義を出し、責任を負はねばならぬ株などは…お先へ利益を失敬しておくのが、虚業家の手腕で…甲の会社を一つ製造し終ると、更に乙会社を目論見、甲の会社に乙会社の株を持たしめ、乙の会社によって丙の会社を造り、順繰りにプレミアム稼ぎを行ふ²⁾」独特の会社設立手法を「松島式」と命名した。その理由は「最も此の式で遣繰りを為し、遂に裁判沙汰となり、天下に名を揚げたからだ。併しながら之は敢て松島某の新発明でもない。昔からよくある手だ。それで一つの会社が躓くと、爾余の会社も将棋倒しとなることは云ふ迄もない³⁾」とする。

松島自身は大正7年ころにはすでに「百個会社の重役就任」(T7.10.23内報)

を目標として、「最近創立計画を発表せる新設会社に対して氏は常に発起人たることを承諾し、会社設立登記に要する払込株金の証明書作製の報酬として重役の椅子を占め」(T 7.10.23内報)続けたとされる。かくして松島の関わった関係会社は大正9年ころには「東京、大阪、山陰、中国、四国、九州に亘り約三十八会社であって、総資本金一億円に達するが、是等の会社創設の表裏に活躍して約二百万円の株金払込金を収受」(T 9.11.30東朝)したとされる。

松島の関与したと思われる会社を巻末付属資料〔表―3〕以下に示したが、ざっと60社以上もあり、彼の分身・部下・仲間等が兼務した間接的な関係企業をふくめれば、「栄華物語」のいうように「発起した泡沫会社の数は殆ど百にも達した」(T13.12.21徳毎)ものと思われ、松島が期待した「百個会社の重役就任」の目標はほぼ達成できたのではなかろうかと思われる。ただし将来何らかの活用を考えて、単に予備のストックとして設立しただけのような関係企業もあり、全貌の把握は不可能である⁵⁾。

これら関係会社の分布と、松島らが静岡、名古屋、京都、大阪、四国、中国、九州方面に「代理店、出張所及び支店の開設用務を帯び」(T 4.2.13保銀)で順次開設した昌栄貯蓄銀行の代理店配置はほぼ一致する。

こうした関係会社設立の動機の不純性に関して後年各地の裁判所で長く争われた。無罪か有罪かといった法的な問題を取り上げているわけではない本書は裁判の可否を論評する立場にはないので、検事当局の主張(予審終結決定書、検事論告)と、これに対する松島側の反論の両論を以下に併記するにとどめたい。広島地裁裁判で宮重検事は「〈松島〉被告の罪跡を見るに、其創立方法一として悪辣ならざるはなく、其何れの会社の創立より見るも、唯一時を弥縫して設立せしめ、其間不当の私利を得んとするにあり」(T11.5.14大朝)、「松島は…経済界を攪乱し商取引を不安ならしめ、世を蚕毒すること大なると共に、一面株主を欺罔して株金を払込ませ、これを横領したのであるから、詐欺である。当時の経済界は不自然に膨張し各地に会社が創立されてゐた時であるから、松島の犯罪が偶発的のものかと思へばさに非ず。以前から連続的にこの種の罪を犯し、嘗てはこれにより昌栄貯蓄銀行を破産に瀕せしめ、東京地方裁判所検事

局で、今後は会社事業に絶対に関係せぬとの証言によって不起訴となったこともある。今回の事件後、保釈出獄して尚改悛の情なく、この種の会社を創設しつつあるのを見るも、厳罪に処すべき必要あり」(T11.5.14大毎)、「殊に前予審に於ては爾今会社事業に関係しないことを誓って起訴猶予の処分を受けて居るにも拘らず、同質の犯罪を反復するは毫も改悛の情なきことを証するのである」(T11.5.14大朝)と論告した。

そして昭和2年10月1日予審終結した決定書などの報道によれば、

- ①「当初から私利を営む意志で活動し、三十六万円の社金を横領した」(S2.10.2東朝)のをはじめ
- ②「松島経営の城東木材〈工業〉会社の無価値の株券を二十五万円で日本土地に売り込み」(S2.10.2東朝)
- ③「日本土地所有熱海の土地約七万坪その他現金を自己に詐取」(S2.10.2東朝)
- ④大正10年ころ「松島経営の帝国毛織〈紡績〉の株券二十八万五千円を日本土地に売り込み」(S2.10.2東朝)
- ⑤「日本土地所有熱海の土地の残部数万坪を自己にとった」(S2.10.2東朝)
松島は大正8年12月10日対木熊蔵、青沼沃(熱海町345番地)から熱海町字立石190番地の畑一反三畝十五歩外3筆を買収したが、売買契約を巡り訴訟に発展した。(T14.2.20法律)
- ⑥「大阪計器製作所へ無価値な城東木材工業株式会社の株券一万株(二十五万円)を売り付、帳簿面をごまかしてその代金の二重取りをなし」(S3.2.25東朝)
- ⑦「帝国毛織紡績株式会社から松島に対して有した債務二十八万五千百十円八十六銭の二重弁済をなさしめ」(S3.2.25東朝)
- ⑧「後に解散し松島が清算人になった地位を利用し、震災で帳簿を焼失したを奇貨として債務はほとんど記載せず、債権のみ記載せる計算表を偽り作成」(S2.10.2東朝)するなど「日本土地、其の他の千二百万円の行末も全然不明なところから、これも同人(松島)の所為と見られて居る⁶⁾」ので、「松島がく日

本土土地>会社の社金を詐取横領した額は総計一千万円」(S 2.10.2 東朝)、「松島の毒手に雇った者は全国に亘って五、六万人」(T13.11.11読売)とも、「被害者は一万五千人に及」(S 2.10.2 東日)んだとも言われる。

検察側の論告に対する松島自身の公判での一連の主張を要約すれば、①昌栄貯蓄銀行「掛員が間違へたもの」(T11.4.18法律)など単なるミス

②部下の「今中、伊藤両人は知ってるらしいが自分は知らず」(T10.12.13法律)と「知らぬ存ぜぬの一点張り」(T11.4.18法律)

③糸崎船渠事件などでは「私は債権者の立場」(T11.4.18法律)

④糸崎船渠では「創立委員長の肝付男爵と相談した」(T10.12.13法律)、また「創立委員長は阪井造酒松である。〈現物出資等〉運用の如何は阪井に在って、自分の関知せぬ所である」(T11.4.10大朝)

⑤紡績木管では「発起人会で全権を委任されしもの」(T11.4.18法律)、帝国毛織紡績では「発起人会を開いた結果…無限の権限を与へられた」(T10.12.13法律)

⑥「権限を掌握する自分としては会社繁栄策として手形を発行…するに何等不思議はなく」(T10.12.13法律)と、自己の権限内を強調し、

⑦「決算は…完全に出来て株主総会に於て承認を経た」(T11.4.18法律)と合理合法を強調し、

⑧「会社の整理は事実上付いて居る」(T11.4.18法律)

⑨「種々関係事業の欠損補填のため丸裸となりました」(T10.12.13法律)と私財提供を強調して情状酌量を訴え、

⑩「要するに今回の事件に就ては横領などと云ふことは絶対になく」(T11.4.18法律)と「極力否認」(T11.4.18法律)し、

⑪「此事件が犯罪となるやうなれば…全国各地…犯罪の行はれない会社はない」(T11.4.18法律)と弁じた。松島は自身の裁判が各地で相次いだことを口実に「巧な公判忌避延引策」(S 5.1.30東朝)をとったため裁判の進行は大幅に遅延した。

2 松島肇の特色

松島肇を著者がこれまでの「虚業家」ではないかとして取り上げてきた数名の人物と比較してみると、彼の選択したビジネスの手法の特色は次のような点にあると思われる。

①短期間に関与した企業数が極めて多数で、製作中の予備もあり全貌の把握不能

広島地裁公判の論告では「松島は…会社の濫造を為し、放漫乱恣し…会社が成立すれば足れりと為し」（T11.5.18徳毎）たとして「松島の濫造会社」（T11.5.22徳毎）の異常性を強調した。

②関与した業種が種々雑多で、地域も極めて広範囲

製造業から非製造業まで数多くの業種に及ぶ。松島が尊敬していた岩下清周は鉄道、電気、瓦斯等の免許事業に多く関与したのに対して、松島の場合は免許事業は昌栄貯蓄銀行を除けば皆無に近い。恐らく監督官庁による検査や統制、情報の開示義務等の諸介入を松島が極端に嫌った結果と考えられる。

③概して資本金額が不必要なまでに大きく、表面的には大企業を仮装

たとえば熱海宝塚土地の株式募集では「当会社の経営地は関東関西に跨り…資本金の尠大なる…本邦土地会社の霸王」（T9.3.8北国）と誇示した。

④関与企業は実際の設備投資をほとんど行なわず、松島個人・同系企業等からの内容空虚な資産（株式、鉱業権、荒蕪地等）を購入するのみ

平井検事正は「第二の会社乗っ取りを為し得るの便を供し得る」（T12.8.27徳毎）ような会社新設の連鎖手法を松島式とした。たとえば帝国毛織紡績の場合「工業会社でありながら敷地も買はず機械も買はず一切何の事業もせず」（T12.8.25徳毎）、その一方で「営業の目的は必ず有価証券及び他会社の株式を所有し得られ、貸付をなし得ること」（T12.8.25徳毎）に定款の変更を行なった。

⑤関与企業のほとんどが任意解散の形で「自己破綻」し、存続企業が新聞等を除き皆無に近い

岩下の創業支援した阪急・近鉄等が大企業に成長したのに比べ、松島の関与

企業中では徳島日日新報社は系譜的には現在の社団法人徳島新聞社に事業が継承されているが、これは唯一に近い例外と考えられる。また黒崎電機製作所も松島時代の繰越欠損を償却した後、少なくとも昭和4年時点までは電気機械製造業の操業を継続していたので、松島一派の退任後も企業が暫く存続した例として確認できた。しかし上記の例はまれな事例であると思われ、ほとんどの関係企業（特に松島一派が主導権を掌握していた場合）は松島自身か彼の腹心の手により解散され、残余財産は徳島日日新報社の買収資金や、松島個人経営の有名旅館等の買収に流用・転用されたものと推定される。関係企業一覧記載の約60社の中にも、その後上場企業に買収・合併されるなど、解散後も事業そのものが継承されたものはほとんどないと考えられる。⁷⁾

したがって、松島の創立した企業群は糸崎船渠事件予審決定書のいうように「戦時戦後の財界振興の機運に乗じて松島自ら財界の有象無象を糾合して…創立」(T 9.12.20法律)した幽霊会社、泡沫会社であったことは否めない事実といわざるを得ない。

⑥彼自身が当初から表に立つことは少なく、戸水寛人のような著名な人物をダミーとして利用（この点では小沢武雄男爵を推戴した河村隆実⁸⁾に類似）

井上準之助日銀総裁は大正8年12月3日の演説で「事業計画者中ニハ往々本人ノ承諾ヲ得ズシテ発起人又ハ賛成人ノ中ニ加ヘ之ヲ新聞紙ナトニ広告シテ株式ノ募集ヲナス向モアル…銀行業者ハ如何ハシキ会社ノ発起人ナトニ名義ヲ用キラレルコトハ絶対ニ謝絶スルヤウニ願ヒタイ⁹⁾」と、銀行家に警告した。昌栄貯蓄銀行頭取である松島は*九州炭砒の場合でも「自分は九州炭砒の創立者でもなければ重役でもない」(T 9.7.27東日)と記者に語ったが、これは大正8年ごろ昌栄貯蓄銀行が破産寸前に追い込まれた時、「東京地方裁判所検事局で、今後は会社事業に絶対に関係せぬとの証言によって不起訴となった¹⁰⁾」ため、少なくとも表立って堂々と発起人に名を連ねられない事情にあったものと思われる。

⑦「代議士」という肩書きを利用し他の代議士等有力者を巻き込む（この点では小山田信蔵、守山又三、高柳淳之助¹¹⁾らに類似）

- ⑧改称、合併、総会の遠隔地開催など、株主追及の回避策を多数用意（後述）
 - ⑨彼自身、彼のダミーを含めて現実の株金払込を行なわない空株が大半（この点では高柳に類似）
 - ⑩彼自身も一流株式に投資した形跡はほとんどない
 - ⑪何度も失敗しながらも、その都度はい上がって、再度挑戦する不屈魂
 - ⑫鉱山ブーム・綿羊ブーム等への便乗など、時流を読み巧みに利用
 - ⑬日米信託への配当保証依頼など、巧妙な金融テクニックを縦横に駆使（この点では高柳に類似）
 - ⑭欲深い投資家を刺激する募集広告と、もっともらしい虚飾的な陣建てが巧妙（この点では松谷元三郎¹²⁾や高柳に類似）
- 広島地裁公判の論告では「株を買へば其の株が子でも生むかのやうに早合点して、これが為め欲に目のない地方民は一も二もなく松島の濫造会社の株式募集に応じた」（T11.5.22徳毎）ため、「善良なる地方株主を窮地に陥れた」（T11.5.18徳毎）とされた。
- ⑮現実の投資需要がないのに、次々と大口の払込を株主に強要（この点では高柳に類似）
 - ⑯解散時には一派で清算人を独占し、清算者利潤を享受
 - ⑰株主からの怨嗟の声や告発が異常に多い
 - ⑱郷里徳島には特別の思い出があり、別の行動パターンを採用（この点でも高柳に類似）
 - ⑲彼自身が個人として現実に投資した先は優良リゾート物件と新聞社のみ（この点でも市街地の優良不動産で財産を保全した高柳に類似）
 - ⑳松島一派は松島が多数の配下を抱え、直属の幹部もさらに各々子分を抱える重層構造（この点でも高柳に類似）

以上の松島の特徴の中でももっともユニークであり、彼自身が開発したと思われる⑧の株主追及の回避策のノウハウを列挙してみよう。（カッコ内は帝国毛織紡績の実例）

- ①総会開催をなるべく回避すべく年一回決算への移行

②本社の移転（大正10年4月麴町四丁目に移転、大正11年6月大阪に移転）

日本土地「株主擁護団」員の中村は「会社の所在すら株主に教へないやうな不都合をしてゐる」（T13.11.11東朝）と非難した。

③必要性の疑問な出張所の増設（大正10年4月大阪、徳島各出張所を設置）

④本社以外の遠隔地での総会開催（第一回総会を徳島県撫養町、第二回を徳島市で開催）

⑤公告手段の実質的形骸化や遠隔地への変更（大正11年6月中外商業から大阪新報に変更）

⑥相次ぐ改称（大正10年11月改称を準備するも一時中止、大正11年6月泰東紡績と改称）

⑦合併

日本土地株主も「再三の名義変更や合併の為め、知らぬ間に失権者」（T13.11.11読売）となった。

⑧総会開催地の非原則化

帝国毛織紡績では大正11年6月「株主総会ハ便宜本店所在地以外ニ於テ開クコトヲ得¹³⁾」と定款変更した。平井検事正は「他の株主共の招集に応じ難い場所に於て開会し、自分の横暴を貫徹せん」（T12.8.27徳毎）ために、松島らは「株主総会は全国何れの地でも開催出来ること」（T12.8.25徳毎）に定款の変更を行い、「東京の会社の総会を撫養で開いたり、熱海の会社の総会を九州や、大阪や東京へ持って行って開いたり」（T12.8.25徳毎）するのが「松島一味」の「手段と方法」（T12.8.25徳毎）とした。日本土地の「株主擁護団」も「総会らしい総会も開かないで勝手に減資」（T13.11.11東朝）したと非難した。

⑨決算、総会開催等の非通知

「全額払込みの株主にも決算報告をしない」（T13.11.11読売）ためか、松島系企業の営業報告書は日本工業倶楽部、大阪株式取引所等にも提出されず、著者も探索したがほとんど入手出来なかった。

⑩腹心による一方的な清算

情報公開には極端に消極的で、株主の当然の権利である総会参加を妨害する

など、非公然性志向が顕著であった。松島の数々の巧妙な手法に乗せられたのは経済に通じない一般庶民だけではなく、相応の経済知識を有する経済人も全く同様であった。氏名・肩書きが判明する例では大正10年9月糸崎船渠100株主の留岡武（京都電灯大津支社支配人）は資性剛直な薩摩人であるため「価値がない」「株式…を自分に擱ませた」（T10.9.23大毎）松島を相手どり株式代金を返還せよと訴えた。こうした株主の怨嗟の声が組織化されたのが日本土地「株主擁護団」の一連の役員糾弾活動であろう。

3 松島肇の評価

最後に松島肇という人物をどのように位置付けるか、若干の評価を試みてみたい。

①向上心・出世意欲の強さ（高木次郎との関係）

彼の郷里の徳島で高木次郎は¹⁴⁾「地方実業界の重鎮として名声頗る高」（人T7、たP123）く、四国一の成金と称せられた。高木の邸宅は徳島市内の「大きな山の半面に建てられ、境界は長城の如き塀で取囲み別荘としては全国有数の宏壮なもので、十数年前さる成金が三十万円で建てたものだが、失敗して他の成金の手に移り、その男も没落の悲運に遭ったのを高木氏が五万円で買入れ更に手入れしたもので、今日では五十万円以上の価格がある」（T14.4.23法律）大豪邸であった。

東京に常駐する松島が帰省の際に利用するだけのために徳島市の滝跳橋畔の「旧蜂須賀侯の邸宅跡を買収して、宏壮なる別荘」（栄華物語）を所有した心理も、「長城の如き」高木邸の向こうを張るためかも知れない。大正10年5月9日松島は「予て組織成立せる在東京の徳島県人の首脳人物の集合たる重々会」（T10.5.9徳日）の会合の初回の正客として高木次郎を招待し、「松島高木両氏の固き握手を行ひ歓談豪語」（T10.5.9徳日）したことからも、銀行家、財界人、政治家、資産、豪邸のいずれの次元でも松島を遙かに凌駕していた高木をすべての面での目標として強く意識していたことがうかがえる。しかし高木は「重々会」での会合のあと、まもなく「社長を兼務していた内外商事株式会

社の行き詰まり¹⁵⁾」など「関係事業失敗の為め大損失を取りたりとの風説伝はり、預金の取付を受け¹⁶⁾」たため、「高木氏一族ノ経営ニ係リシ¹⁷⁾」関西貯蓄銀行も休業に追い込まれた。大正11年3月松島の実弟の西条教部は「高木次郎氏が社長たる日英興業会社並に同社元徳島支店長森敬則氏に關係する」(T11. 3. 20徳毎号外) 事件で東京地裁に召喚されるなど、松島サイドも高木失脚の間接的悪影響を被った。高木は「財界の不況の台風に巻込まれ余程財産を減らし、最近では吉野川水電の事で株主から大阪地方裁判所検事局に告訴され、戌亥検事の取調を受けつつある…一面増田ブローカー銀行から内外商事の責任者として四十四万円を借受けた金の弁済が出来ぬ為め、増田銀行…から差押へを受けるに至り、成金時代に買い入れた徳島市寺町の宏大な邸宅に対し差押へを受け」(T14. 4. 23法律) るまでに陥った。結局、松島の銀行も高木の二の舞を免れなかった。

②人心籠絡の天才

「栄華物語」は「彼れは實に人心籠絡の天才で…彼の不敵の魂を知るものでも彼と面談すると何時のまにやら、其彙籠中のものとなつてゐる事に自ら気付かない位であつた」(栄華物語)とされる。徳島県会の非公友派議員の多くは「松島肇の崇拜者であり、常に松島系のものと事業を共にし、政治系統を同一にして居る」(T11.12.14徳毎)とされ、松島が県政にも大きな影響力を与える基盤を形成した。たとえば「松島崇拜の熱心家」(T11.12.14徳毎)の代表格の篠原弥次兵衛は松島の数々の醜聞が露呈した後も「世間では松島を悪くいふが、松島ほど豪いものは徳島県下にはない。横領しても三百五十万円といふが如き巨額は何人も真似の出来ないことだ」(T11.12.14徳毎)と徳毎記者に明言した。こうした松島崇拜者を輩出した背景には「徳島県の産業界における、最大欠陥は、企業家に乏しいこと¹⁸⁾」と称されたように、藍のもたらす富を背景とした阿波商人の没落以降、「ここに大企業家¹⁹⁾が出現しなかつた」という英雄待望事情も作用しているのかもしれない。しかしその後、徳島市の「武市市長は、モウ松島の名さへ嫌つて居り、岩野君も松島君との關係を絶ち、モウ松島とは一切關係はない」(T14. 3. 13徳毎)と、松島が徳島市「助役として、岩野三根君を推薦した」(徳日記事をT14. 3. 13徳毎が引用) 当の腹心からも毛嫌いされ始め、

次第にその影響力を喪失しつつあったと考えられる。

③はたして「第二の岩下清周」か？

松島が大正7年頃から急速に新設会社の発起に奔走し好んで発起人となった一因として、小規模な銀行ながら、地域金融機関の域を超えて、彼自身が関与する企業の創業金融一本にはば絞り込んだと見られる機関銀行としての昌栄貯蓄銀行のビジネス・モデルの特異性があるのではなからうか。無謀な代理店拡大策の結果、昌栄貯蓄銀行の各地の解職代理店主から身元保証金返還要求²⁰⁾が強まり、「余儀なき者のみに対しては預金の一割を払戻し、残額は近く実行すべき同行増資新株並に氏の計画に係る新設会社の株式に振替ふべく極力交渉中」(T 6.9.7 内報)であった事情もあった。150あまりの各地の解職代理店主・預金者への株券での払戻を同意させるため、彼らの希望にかなう多種多様な「新設会社の株式」(T 6.9.7 内報)の提供可能メニューを豊富に品揃えする実際的な必要性も存在したことがうかがえる。

帝国興信所は早くも大正7年10月時点で松島を評して「自から財界の花形を気取り…新設会社の重役たり若くは発起人たる事無慮数十社、三面六臂を有するも尚及ばざるかの観あり」(松島)としたが、松島自身は「自ら第二の岩下清周を以て任じてゐた」(栄華物語)とされる。北浜銀行を破綻させて引責辞任して間もない頃の銀行界では横紙破りの岩下を「不良分子中でも最不良のもの」²¹⁾と酷評する風潮が強く、自ら「第二の岩下清周」を気取るような銀行家は稀であった。²²⁾

おそらく松島は果敢に新興企業に大口の創業金融を敢行した岩下のベンチャーキャピタル的性格を高く評価し、自ら岩下の投資銀行ビジネス・モデルの継承者たらんことを吹聴したものと見られる。また岩下が夢想して果たせなかった関門架橋プロジェクトの向うを張って、松島も気宇壮大な門司築港プロジェクトに深く関与するなどの外形上の類似点も見られた。たしかに兼務役員数のみを単純比較すると松島は岩下を凌駕していたようであるが、はたして松島は「第二の岩下清周」たり得るであろうか。岩下自身が松島をどのように見ていたかは知らないが、大正11年11月蟄居謹慎中の岩下は当時破綻したばかり

の日本積善銀行（オーナー高倉為三²³⁾）には関心を有しており、東日記者に次のように大正バブルの本質を突く興味深い発言をおこなっている。

「実業家などといふものは景気がよいとひとりよがりのインテリゲンチエアになりたがる。儲けると有頂天になる。そして近來のような状態になってめがさめる。いま日本の泡ぶく金を吐きだしてゐる。これを全部吐き終るまでは苦悩がとれぬ。大阪の〈日本〉積善銀行問題の如き、僕はあなるものと既に思つてゐた。これは僕が自由の身になれば大いに論ずるつもりだ」(T11.11.30東日)

儲けると有頂天になって泡沫会社を製造し、朝日・毎日両紙から「悪むべき資本家」²⁴⁾「虚業家」と酷評された高倉為三を、兼務役員数では凌ぐほどの同類の松島に対して、(果して松島を十分に認識していたか否かは別として)岩下は同様の観測をするものと推測され、「第二の岩下清周」を名乗るなど甚だ迷惑千万と感じたことであろう。

④機関銀行の駆使

たとえば糸崎船渠の場合、「梅原文次郎氏を説き、その所有の炭砒を抵当に七万五千株を持株とし、その株金は八十余万円は昌栄銀行本店にて仮支出をなした」(T9.3.14大朝)とされた。昌栄銀行本店貸出係主任の*金沢修太郎は公判で「昌栄銀行が糸崎船渠のため、大野銀行東京支店から八十五万円の割引手形を受けた。その担保品熊本県の炭坑は当時百万円以上の価値があったと思ふが、銀行では担保に重きを置かず、主として松島の対人信用による」(T11.5.13大毎)と証言した。また金沢は自身が監査役を兼ねていた大日本原毛紡績からの「一千四百八十一円七十銭の横領に付昌栄貯蓄の流動資金の融通に充当したもの」(T11.5.18徳毎)とも証言している。

帝国興信所は真っ先に「会社設立登記に要する払込株金の証明書作製の報酬として重役の椅子を占め」(T7.10.23内報)た昌栄銀行を松島「氏の牙城」「氏が会社計画の策源地」(T7.10.23内報)と見做した。また各紙も「常に自己の経営せる…昌栄銀行を唯一の金融機関とし、中には如何はしき事をなし居り」(T9.3.14大朝)などと報じた。

糸崎船渠事件の予審決定書では松島は「其の大地元たる昌栄貯蓄銀行をして

計算報告表に胡魔化しの利かぬ会社には悉く昌栄銀行の空手形を利用し、巧に表面を糊塗せしめて来た」(T 9.12.14大朝)とし、宮繁検事は論告で松島は「会社創立に関し自己の配下にある機関銀行を利用して巧みに法網を潜らんと…一時昌栄銀行の口座を潜らただけで被告等に於て費消」(広島地裁公判論告T 11.5.18徳毎)したと指摘した。「栄華物語」も「彼れは此等の会社の払込金を私するのに悉く昌栄銀行を仲介に立てた…昌栄銀行は…松島の詐欺横領の機関銀行に過ぎなかった」(栄華物語)とする。徳毎はまた「色んな方面に費ひ、残った金は情婦の名義として昌栄銀行等に預け入れ」(T12.8.25徳毎)るのが「松島一味」の「手段と方法」(T12.8.25徳毎)とした。『徳島市史』も「栄華物語」に準拠して昌栄銀行の「松島肇の詐欺横領の機関銀行」²⁵⁾説を採った。しかし松島の「機関銀行」たる昌栄貯蓄銀行のビジネス・モデルそのものの検討ならびに彼の宗教観などは与えられた紙面も尽きたので、別の機会に詳述することとし、最後に事件後の彼の生き様に言及して筆を擱きたい。

⑤その後の松島

その後の松島は獄中では「終日黄八丈の綿入を着て、宗教書を読みつつあり」(T 9.3.27大朝)と表面は神妙を装っていたが、現実には「獄中には頗る驕奢を極め、食事は一日五円の差入をなし居れり」(T 9.3.27大朝)と世俗を脱却できてはいなかった。出獄後の大正10年4月9日昌栄貯蓄銀行新築披露宴で松島は「不肖は今後県下にては銀行と新聞に就て真摯熱誠を払ひ、財界と文化の開発に努力する」(T10.4.10徳日)と述べた。公判で松島は「一時資産は土地家屋動産を合して約五百十三万円あったが、今日では種々関係事業の欠損補填のため丸裸となりましたとケロリとした顔で申立て」²⁶⁾た。日本土地「会社の重役をしてゐた戸水寛人、鈴木錠蔵氏等の証言に対しても、『これは皆責任転嫁をしてゐるのです』」(S 3.1.31東朝)と争う姿勢をとった松島は「あくまで正当の行為で一点やましいことの無い」(S 3.1.31東朝)と強調した上、財産はないとして「私は一切の物欲を捨てざることを決意しました。そしてとん世し、健康が許すならば将来この種の事業から去り、心靈界に身を投じ余道人心を導きたいと思ひます」(S 3.1.31東朝)と神妙に述べた。しかし「栄華物

語」が「坊主出身として世に恐らく彼れ程なまぐさいものはあるまい」（栄華物語）とするように、その後の松島の行動は残念ながら「この種の事業から去り」「一切の物欲を捨て」た「とん世」生活とは無縁のものであったようで、この面でも彼は「第二の岩下清周」を名乗る資格を欠くと思われる。前述の斉藤弁護士は、一般論としてこうした「発起者の不都合に対して、刑事訴追はありたるも、文書偽造と商法違反だけで、詐欺取財罪の擬律なく、刑は僅かに四ヶ月にして、而も執行猶予の恩典あり、何等被害者を満足せしめず、世人をして其お情の厚きを驚かしめ、民事は却て発起者に有利ならんとす。吾等の浅識の致す処ならんも、法灯蔭暗く、百鬼夜行の感なき能はず」（T12.8.8法律）と慨嘆し、広く法曹界に「株金を払込まざる株式引受人又は発起人を膺懲する方法はありますまい乎」（T12.8.8法律）と呼び掛けた。大正15年大浜孤舟も大正バブル期の社会現象としての「百鬼横行」をテーマとする『暗黒面の社会・百鬼横行』（新興社）を著し、この中で「泡沫会社製造の天才」（同書、P82）として「稀代の吸血漢高柳淳之助」（同書、P115）、「陋劣卑劣の詐欺漢松島肇」（同書、P110）などを取り上げ著書の中で膺懲²⁷⁾した。

- 1) 『阿波銀行百年史』平成9年、P160
- 2) 3) 奥村千太郎『株式放資と売買術』文雅堂、昭和6年、P510。奥村が「松島式」と名付けた方式は原典と思われる糸崎船渠事件予審決定書では松島が「創立者となって…応募した株金を以て甲乙丙丁と次から次へと新設の会社に融通し、一会社には必ず費途不明の金額二三十万円宛の大穴を明け」（T9.12.14大朝）たと表現している。徳毎も関西木工事件の予審決定書や平井検事正の談話に基づき、松島「一味が行ふ手段は殆ど同一」（T12.8.25徳毎）であるとして「松島一味」の「手段と方法」（T12.8.25徳毎）を列挙した。
- 4) 『徳島市史』も松島は「泡沫会社を一〇〇社近くも設立した」（『徳島市史 第三巻産業経済・交通通信編』昭和58年、P420）とする。
- 5) たとえば大正9年12月ころ終結した糸崎船渠事件の予審決定書では「戦時戦後の財界振興の機運に乗じて松島自ら財界の有象無象を糾合して前記の五〈糸崎船渠、帝国原毛、大日本絹糸、日本紡績木管、九州炭硯〉会社を創立し、東京麹町区

昌栄銀行、日本綿羊株式会社、日本計量株式会社、関東機械ナット株式会社、日本鋼器株式会社、ミナミ株式会社、帝国絹硝子株式会社、城崎温泉土地株式会社の創立者」(T9.12.14大朝)となったとあるが、このうち日本計量、日本鋼器、ミナミ、帝国絹硝子〔日本絹硝子が改称か〕は手元資料では未確認であるなど、松島の製造した泡沫会社数は〔表一3〕以下より増加する可能性がある。

- 6) 大浜孤舟『暗黒面の社会・百鬼横行』新興社、大正15年、P111
- 7) 矢倉伸太郎・生島芳郎編『主要企業の系譜図』1986年、雄松堂出版の巻末索引に該当ない。
- 8) 河村隆実は拙稿「生保破綻と“虚業家”による収奪—九州生命詐欺破産事件と河村隆実のリスク選好—」『滋賀大学経済学部研究年報』第9巻、平成14年12月参照
- 9) 日本銀行調査局『本邦財界動揺史』『日本金融史資料 明治大正編』第22巻、P488所収
- 10) 広島地裁公判で宮重検事諭告(T11.5.14大毎)
- 11) 小山田信蔵は拙著『企業破綻と金融破綻』P126以下、守山又三は拙稿「“虚業家” 守山又三のハイ・リスク行動と京都財界」『京都学園大学経済学部論集』第12巻第2号、平成14年12月、高柳淳之助は拙稿「“虚業家” 高柳淳之助による似非・企業再生ファンドの挫折—ハイ・リスクの池上電気鉄道への大衆資金誘導システムを中心に—」『滋賀大学経済学部研究年報』第11巻、平成16年12月、同「“虚業家” 集団『高柳王国』の形成と崩壊—大衆資金のハイ・リスク分野への誘導と収奪—」『彦根論叢』第351号、平成16年11月参照
- 12) 松谷元三郎は拙稿「証券業者による鉱山経営とリスク管理—八溝金山事件を中心として—」『彦根論叢』第354号、2005年5月
- 13) 関西木工会社子審決定書(T12.11.27徳毎)
- 14) 高木次郎(徳島市藍屋町)は徳島の素封家、関西貯蓄銀行頭取、徳島水力電気常務、阿波電気軌道、阿波製紙各取締役(諸T5、下P915~923)、辛亥組合を経営、大正6年6月1日徳島市西新町の辛亥商事(資本金50万円内外商事、内外信託商事と変更)社長、内外物産、内外証券(資本金200万円)、阿波織物(資本金100万円)を経営。大正10年下期には一時国東鉄道社長の座にあった高木次郎の経営する「日英興業会社ニ対スル債務四十五万円ヲ十二万円ニ、松岡武右衛門ニ対スル債務二万六千余円ヲ一万円ニ…減額」(T10下期国東鉄道営業報告書)された。
- 15) 『四国銀行百年史』昭和55年、P141
- 16) 阿部直躬『三十年之回顧』商業興信所、大正11年、P357

- 17) T11. 2『日本銀行調査月報』、P448
- 18) 19) 大阪毎日新聞経済部編『経済風土記 四国の巻』昭和5年、刀江書院、P200、225
- 20) 全国220ヶ所に短期間に代理店網を構築し、「一時表面上相当の〈預金〉額を有する」(T6. 9. 7内報)に至ったものの、「募集費其他に多大の犠牲を払ひたる」(同)など無理な代理店拡大政策が祟って、代理店網を維持できず70~80店まで削減された。同行は代理店主から「身元保証金(定期預金に振替)三百円乃至一千円内外を徴収」(同)していたから、閉鎖された「各地代理店主並に月掛預金加入者より続々其預金の返還請求を受け」(同)た。しかし支払能力のないため「預金の一割を払戻し残額は…松島氏の計画に係る新設会社の株式に振替ふべく、極力交渉中」(同)とされる。
- 21) 明石照男『大正銀行史』昭和13年、p8
- 22) 拙稿「『企業家』と『虚業家』の境界―岩下清周のリスク選好度を例として―」『彦根論叢』第342号、平成15年6月参照
- 23) 拙稿「大正バブル期における起業活動とリスク管理―高倉藤平・為三経営の日本積善銀行破綻の背景―」『滋賀大学経済学部研究年報』第10巻、平成15年12月参照
- 24) 当時の大毎社説は「悪むべき資本家」と題して「高倉 為三」氏が今の悪しき資本家のタイプ其俚、自己の腹を肥さんが為めには何事をなすも顧慮するに足らずとし、平然として預金を流用せる厚顔無恥は悪みても余りある」(大正11年12月3日大毎)と論じている。また大朝記者も「繊細な注意力を欠いた」、「良心の麻痺」した高倉為三は「当然斯うなるべき人」で、こうした資質は為三のみならず「虚業家通有」(大正11年12月2日大朝)であると評した。
- 25) 前掲『徳島市史』P421
- 26) 大正10年12月5日広島地裁第一回公判での審理(T10.12.13法律)
- 27) 松島肇と同時期の「虚業家」高柳淳之助も同様な手口を使った。(T14. 9. 25法律) 高柳淳之助は「今誰れ知らぬものなき全国的」(巨海省吾「池上電気鉄道と高柳淳之助君」『交通と電気』4巻10号、大正14年10月、P55) 事件として世間から注目され、「多数善男善女を泣かせ、自分は百万長者となり、いはゆる貯金法に成功する。この種の不正業者は、唯に彼の高柳のみではない」(東京朝日新聞編『経営百態』大正15年、P79)として、不正業者の代名詞ともなっている。

〔表一 2〕 松島肇・昌栄貯蓄銀行・関係企業年表

| | |
|-------------|---|
| 明治14年 5月15日 | 松島肇は徳島県阿波郡土成村の教覚寺住職松島素敬の次男に生れる |
| 明治33年 3月 3日 | 横浜貯蔵銀行（後の昌栄貯蓄銀行）設立（第三十回銀行総覧、P 60） |
| | 京都の中学校を経て |
| 明治34年 | 明治大学法科〈徳島市史では明治専門学校〉で法学を学ぶ |
| 明治37年 | 卒業と同時に生徒監督の任に当たった |
| 明治39年 6月 | 共同火災の創立時に入社し、営業主任 |
| 明治45年 4月29日 | 石井貯蓄銀行臨時休業 |
| 大正 2年 5月 | 共同火災の重役陣が国民生命を買収し共同生命と改称 |
| 大正 2年10月中旬 | 共同火災の姉妹会社となった共同生命に入り、主事外務課長に就任 |
| 大正 3年 1月30日 | 帝国済美独立資金(株)開業、総支配人に就任 |
| 大正 3年 | 帝国済美独立資金(株)解散で松島は失職 |
| 大正 3年11月28日 | 石井貯蓄銀行が昌栄貯蓄銀行に改称（変遷史 P 351）、専務 |
| 大正 4年 1月 | 昌栄貯蓄銀行は本店を神奈川から東京市麴町区麴町 3-4へ移転（変遷史 P 351） |
| 大正 4年時点 | 石井貯蓄銀行頭取の石井直は横浜貯蔵銀行取締役、門司興業監査役を兼務（人、T 4、い P 130） |
| 大正 4年 2月 | 昌栄貯蓄銀行は徳島市西新町 2丁目に徳島総代理店を設置し、2月から4月にかけて徳島県下に十数代理店を設置（阿波銀行百年史、平成 9年、P 160） |
| 大正 5年 2月 | 昌栄貯蓄銀行は旧資本金10万円を50万円へ増資 |
| 大正 5年 2月 2日 | 松島肇は昌栄貯蓄銀行専務より頭取に昇格 |
| 大正 5年 5月 | 「金銭貸付有価証券売買其他信託業一般」（帝要、T 5 P 63）を目的として資本金10万円で日本資金信託を設立、代表取締役 |

- 大正5年8月 城東木材工業設立（帝T11、P359）
- 大正5年11月1日 昌栄貯蓄銀行は土成村成当字神ノ木513に土成代理店を設置（土成町史下巻、昭和50年、P194）したが、「短期間で廃業」（土成町史下巻、P190）
- 大正6年1月 美馬郡是製糸設立（要録T9、P7）取締役
- 大正6年3月 「小松島においては松島肇等により資本金三十万円の第一倉庫（株）が設立された」（徳島県史第6巻、昭和42年、P365）、本店徳島市西新町（会社通覧、P1095）、大正6年までに代表取締役就任
- 大正6年4月 松島肇は徳島県郡部より代議士当選し、清和倶楽部に所属（人T7、まP69、徳島市史、P420）
- 大正6年 昌栄貯蓄銀行は「今回現資本金五十万を百万円に倍加し、将来の発展を期す可く、其第一着手として来る二十三日より貯蓄事務の外、一般銀行業務を開始し、日本全国への為替送金荷為替等の便宜を計る可し」（T6.1.19読売）と業務拡大を志向
- 大正6年9月 西舞子企業設立、取締役
- 大正6年12月 東京リベット製造設立、監査役
- 大正6年12月 安全印刷設立、大正7年までに取締役就任（重役、大正7年3月、P79）
- 大正7年ころ 門司興業の経営に関与。「当時は松島肇氏等が経営して居たものですが、財政困難な為、片岡彦治氏を介して宮崎（敬介）氏へ其後再三（売却の）交渉」（T10.9.21東朝）があったと宮崎敬介の元秘書の高橋が証言
- 大正7年3月 木材倉庫設立（要録T15、P226）
- 大正7年3月 松島汽船設立、本店大阪市北区、資本金48.5万円（払込済）（帝T11、大阪P147）
- 大正7年3月 大日本蚕種設立、取締役（人、T7、まP69）
- 大正7年4月 東洋調帯設立、取締役（人、T7、まP69）
- 大正7年4月 大阪計器製作所設立、代表取締役
- 大正7年4月 日本絹硝子設立、取締役

大正7年4月18日 常盤商工設立、取締役(T7.4.19読売)

大正7年8月 逗子土地設立(帝T14、P236)、本店麴町区麴町3-4、資本金80万円(払込20万円)

大正7年9月5日 日本鋼管シャフト設立、監査役就任(T7/11第2回営業報告書、P1)

大正7年11月時点 松島は東亜織布取締役500株(T7/11第1回営業報告書、P13)、鈴木錠蔵も500株主

大正7年11月時点 松島は日本鋼管シャフト監査役⑦500株(T7/11第2回営業報告書、P13)

大正8年3月26日 蔵内次郎作は松島に「無期限で金十八万円を貸与した」(T11.3.5読売)、「昌栄銀行が苦境に陥った際、松島代議士は蔵内氏に…借用書を入れ、無期限で十八万円を借用した」(T11.3.6徳毎)(蔵内は「大阪造船〈所〉は例の松島肇君に引張り込まれたので、大変迷惑をして、百二十万円許り損をしました」(T9.12.15東朝))

大正8年3月ころ 「昌栄貯蓄銀行を破産に瀕せしめ、東京地方裁判所検事局で、今後は会社事業に絶対に関係せぬとの証言によって不起訴となった」(広島地裁公判で宮重検事論告T11.5.14大毎)、起訴猶予(大朝)

大正8年5月 松島は糸崎船渠発起(予審T10.12.13法律)

大正8年5月 松島は九州炭礦発起(予審T10.12.13法律)

大正8年5月16日 糸崎船渠株式募集広告が読売、東京朝日等に掲載

大正8年5月末 松島は関東機械ナットの②200株(T8/5第1回営業報告書、P11)、鈴木錠蔵も取締役⑬300株主

大正8年6月10日 「松島肇氏頭取の昌栄貯蓄銀行は六月十日付を以て一百万円増資認可」(増田BB旬報4巻18号)

大正8年8月 福岡市で松島肇、梅原文次郎、椿原乙蔵が会合、三池炭礦(株)を共同発起(大審集第10巻、P125)

大正8年8月28日 原田伊兵衛は鉾区を松島、梅原に譲渡の契約締結(T13.12.21徳毎)

大正 8 年 糸崎船渠は徳島市の共正海運(株)を合併 (T14. 4 .29徳毎広告)「四国共正海運会社を買収するに当り、合併の形式をとり、代金支払には三株に一株の割にて〈糸崎船渠〉会社の株式を割当」(T 9 . 3 .10大朝)

大正 8 年 9 月 18 日 日本綿羊毛織発起人の鈴木久次郎、大葉久吉、矢崎好一は日米信託と配当保証依頼の契約締結

大正 8 年 10 月 日本綿羊毛織設立

大正 8 年 11 月 松島は大日本原毛紡績発起 (予審 T10.12.13法律)

大正 8 年 12 月 8 日～創立委員長梅原文次郎、相談役蔵内次郎作の勝浦炭礦総株数 10 万株中の 1.5 万株を公募

大正 8 年 12 月 10 日 松島は対木熊蔵、青沼沃(熱海町 345 番地)から熱海町字立石 190 番地の畑一反三畝十五歩外 3 筆を買収したが、売買契約を巡り訴訟に発展 (T14. 2 .20法律)

大正 8 年 12 月 三角鉱泉「肥料商品売買、工業運漕」を目的に設立、代表取締役戸水寛人

大正 8 年 12 月 23 日 鈴木錠蔵、今泉知三郎、芳川寛治、小風亥真穂らと東京浴場炭礦発起人 (T11. 5 .25法律)

大正 8 年 12 月 29 日 帝国毛織紡績創立総会開催

大正 8 年 12 月 30 日 紡績木管設立

大正 8 年 12 月末 松島は東京リベット製造監査役 200 株 (第 4 回営業報告書、P15)、赤松範一は社長 500 株、鈴木錠蔵は取締役 200 株

大正 9 年 2 月 13 日 大日本原毛紡績設立

大正 9 年 2 月 昌栄貯蓄銀行徳島支店を開設 (徳島市史 P424)

大正 9 年 3 月 9 日 糸崎船渠事件発覚、松島らを取調べ

大正 9 年 3 月 14 日 昌栄貯蓄銀行相談役・蔵内次郎作名による謹告「松島肇に対する新聞報道に関し御疑念の方も可有之拝察仕候へ共、当行一切之業務は拙者に於て全責任を負ひ、且つ監督の任に当り居り候に付、関係者に對し聊か御迷惑相掛け申間敷候間、御安心の上、御取引被成下度、為念此段及広告候也」

(T 9 . 3 .14および 3 .15読売)

大正9年3月17日 蔵内次郎作名での取消広告「昌栄貯蓄銀行及拙者の關係に付、去十四日十五日の各新聞紙上に於ける広告は茲に之を取消し、拙者は独り右銀行關係のみに止まらず、松島氏の諸關係に因りて生ずべき經濟界の混雜不安救済の爲め、一応松島氏との面談の上、整理方法講究致し度、茲に改めて広告致し候也」(T9.3.17読売)

大正9年3月 松島は「未決勾留の獄中から立候補して当選」(徳島新聞五十年史、P73)

大正9年3月25日 門司築港発起人は門司興業の利権を買収

大正9年5月23日 中村は久留米で、梅原、椿原とともに三池炭砒の「基礎的事項を定め」(大審集第10巻、P123)た

大正9年6月初旬 中村定は松島肇代人として違約金5万円付の更改契約を原田伊兵衛と締結(大審集第10巻、P129)

大正9年8月 亜細亜炭礦は戸水を「社長又は副社長に其他の重役も内定」(T10.5.27東日)し創立へ

大正9年上期 損失続きの昌栄貯蓄銀行の「整理もつき…五朱の配当」を開始、松島は「基礎も確実となった」(公判での審理T10.12.13法律)と供述

大正9年10月7日 糸崎船渠総会で松島側は解散決議提出(T9.10.8東朝)

大正9年11月15日 鉾山採掘を目的として資本金3,000万円で亜細亜炭礦を創立(T12.1.25法律)戸水が社長就任

大正9年11月10日 日本緬羊は両工場「建物ヲ昌栄貯蓄銀行ヨリノ借入金ノ担保トシテ抵当権ノ設定ヲナシタ」(T9/11第二期報告書)

大正9年11月18日 東京市の農工貯蓄銀行破綻

大正9年11月30日 広島地裁の予審部取調べの結果、「松島氏關係の会社は東京、大阪、山陰、中国、四国、九州に亘り約三十八会社であつて、総資本金一億円に達するが、是等の会社創設の表裏に活躍して約二百万円の株金払込金を収受の形式の下に横領したといふのが本事件の骨子」(T9.11.30東朝)

大正9年12月 業務執行禁止の仮処分申請を受けて東京地裁は日本緬羊毛織の取締役に横山一平、大葉久吉、成川時之助、監査役近藤友次郎を任命(T

9.12.17北海)

大正9年12月7日 大野銀行支払停止

大正9年12月15日 松島は筑前炭礦取締役を退任 (T10.3.10鉱業)

大正9年12月20日 田川銀行休業

大正9年12月 松島は徳毎社内での須見千次郎と多田為太郎との対立に乗じて、徳毎の株式買占めを開始

大正10年1月7日 日本緬羊本社両工場「建物ニ対シ債権者昌栄貯蓄銀行ハ競売手続ヲ開始」(T10/5第三期報告書)

大正10年2月11日 三池炭砒は資本金750万円、一株25円、全額払込済で設立

大正10年2月 松島は直系の徳島民報社を寺島町に設立(帝T11、p5)、「徳島の新聞全部を独占しやうとするの計画から、先づ我〈徳毎〉社を乗取らうとし、重役の改選期に際し株式の買占めにかかったが…我社の株主諸氏は金のために株式を松島に売渡すやうなものは殆どなく、其の計画が全然失敗したので、徳島日日新報社を買収し同社に不浄の金を投じ以て我社を圧倒しやうとし、全力を同社に注いだ」(T11.2.27徳毎)

大正10年3月10日 日本緬羊の機械等に対し「債権者昌栄貯蓄銀行ハ競売ニ付シ之ヲ競落」(T10/5第三期報告書)

大正10年3月19日 広島地裁で糸崎船渠事件の予審終結 (T10.12.13法律)

大正10年3月19日 糸崎船渠事件の公判開始 (T10.4.5法律)

大正10年4月 帝国毛織紡績株主の坂井正方ら「営業に関する書類閲覧請求の訴訟を提起」(T10.4.5法律)

大正10年4月 徳島日日新報社を買収し社長に就任(徳島市史、p420)

大正10年4月9日 昌栄貯蓄銀行新築披露宴で松島は「不肖自ら攜らず新報社の社長に推薦されたるが、新聞に関しては何等経験を有せざるも…全力を傾注し新生面を作らん…不肖は今後県下にては銀行と新聞に就て真摯熱誠を払ひ、財界と文化の開発に努力する」(T10.4.10徳日)「〈昌栄貯蓄〉銀行と不肖の関係に就て兎角の風評を伝ふるものあるも、不肖に於ては俯仰天地に愧ぢざる確信あり」と「銀行の内容其他に付隔意なく心事を披瀝」(T10.4.10徳日)

大正10年4月13日 松島は「個人として資金を投じ、本社接続の土地建物五百坪を購入、昨日登記を完了すると同時に本社に之れを提供」(T10.4.14徳日社告)と広告

大正10年5月9日 松島が「予て組織成立せる在東京の徳島県人の首脳人物の集合たる重々会」(T10.5.9徳日)のメンバー高木次郎、多田忠七、安藤二六(興信所長)、佐藤支配人等が会食。

大正10年5月25日 戸水寛人が創立委員長の亜細亜炭礦は発起人総会で解散を決議(T10.5.27東日)

大正10年5月31日 徳日は「新聞代価は従前通り」据置いたまま「愈よ近く夕刊発行断行」(T10.5.31徳日社告)

大正10年6月 唐津炭砒に松島系役員多数が就任

大正10年9月 大津の会社員である留岡武(京都電灯大津支社支配人、比叡山鉄道取締役)は糸崎船渠株主として「法律上認めざる同会社の株式代金を返還せよ」(T10.9.23読売)と1250円返還の付帯私訴

大正10年10月4日 広島地裁で糸崎船渠事件の公判開始(T10.9.23読売)

大正10年 次点者の生田和平(徳島県名西郡石井村)より松島代議士当選無効の上告(T11.5.18法律)

大正10年11月8日 松島代議士当選無効上告で大審院民事部で上告理由陳述(T11.5.18法律)

大正10年11月29日 村木熊蔵、青沼沃(熱海町345番地)は松島を熱海土地の「売買契約ノ不履行ヲ原因トシ其損害金ノ支払ヲ求」(T14.2.20法律)め提訴

大正10年12月 赤倉温泉スキーホテル設立

大正11年 糸崎船渠は海運興業と改称(要録T11、大阪p59)、旧共正海運(株)の海運業を経営

大正11年1月 昌栄貯蓄銀行(資本金140万円)は貯蓄銀行から普通銀行に変更し、昌栄銀行と改称

大正11年1月 芝区佐久間町1丁目10番地に大東京新報社設立、代表取締役就任、取締役西条教部、山口正剛、監査役中村定(帝T11職、p390)、大阪

支局を大阪市北区堂島中一丁目二十五番地に設置（T11. 5 .10大毎広告）

大正11年 2 月 松島汽船は第一倉庫、徳島自動車を合併（帝T11大阪、P 147）

大正11年 3 月 2 日 蔵内は「松島代議士除名を提議せんとし窃かに計画中なるが、先づ以て自己の債権に対し、二日松島代議士の破産申請を其筋に提出」（T 11. 3 .16徳毎）

大正11年 3 月 4 日 蔵内は大正 8 年 3 月「昌栄銀行が苦境に陥った際、松島代議士は蔵内氏に対し『貴下を再生の恩人として其徳に酬ゆる為、爾今正道を守る云々』の借用書を入れ、無期限で十八万円を借用したが、其の後蔵内氏より請求しても、松島氏は知らずと否認した」ので、松島に18万円の請求訴訟を東京地裁に提起（T11. 3 . 6 徳毎）

大正11年 3 月 海運興業は大阪計器製作所へ合併解散（要録T11、大阪P 59）、海運部門は松島汽船へ？

大正11年 4 月 松島は東京の新聞『民声』を買収して「徳日の姉妹紙」『大東京新報』発行

大正11年 7 月 城東木材工業は「三光木材工業会社ヲ合併百五十万円…増資」（帝T13、P399）

大正11年 8 月時点 昌栄銀行は資本金140万円、払込75万円、代表取締役戸水寛人、取締役松島肇、永井直厚、西条教部、監査役鈴木錠蔵、鈴木久次郎（帝T 11、P19）

大正11年12月21日 亜細亜炭礦株主が戸水寛人を背任罪で告訴

大正12年 1 月27日 日本緬羊毛織は日清毛織と改称（第一審の事実、大審集、第10巻、P550）

大正12年 1 月31日 日清毛織は破産宣告を受ける（第二審の事実、大審集、第10巻、P551）

大正12年 3 月 城東木材工業は「木材倉庫会社ヲ合併四十八万五千円増資」（帝T13、P399）

大正12年 8 月15日 三池炭砒は日洋土地興業に合併のため「株主総会ノ決議ニ

ヨリ解散」(T13.4.28官報3501号)

大正12年9月1日 徳日によれば昌栄銀行は「大震災火災により本店は金庫其他全部焼失、貸付金は殆ど震災火災の被害を蒙り、回収困難」(T13.12.18徳日)化
大正12年9月 逗子土地は東京金属工業を合併30万円増資(帝T14、P236)

大正12年11月20日 松島は関西銀行に7.9万円の担保として寺島町別邸を提供(T14.3.13徳毎)、「松島が…買入れた新富座を担保に入れて借入れた金まで注ぎ込み、松島自ら同選挙区に乗り込、小室氏を援助」(T13.5.14徳毎)

大正12年11月 松島は「第二審も有罪なるを覚悟し…昨今事業、財産の整理に努めつつあり」(T12.11.12徳毎)、「松島肇又震災のため大損害を受け居れる上に、刑事被告事件は控訴審の判決目睫に迫り、地方政治又は選挙地盤の擁護どころに非ず、昨今整理に汲々たる有様」(T12.12.31徳毎)

大正12年 松島肇は「収監中に獄中から立候補して当選」(徳島市史、P420)

大正12年末現在 『第三十回銀行総覧』には「株式会社昌栄銀行 本店麴町区麴町三丁目 支店数 空欄 資本金1,100,000円、資本金払込高450,000円、設立年月日 明治33年3月3日、代表者氏名 戸水寛人」

大正13年2月14日 大阪計器製作所本社内に関西計器製作所設立(大正13年9月15日官報)

大正13年3月9日 城東木材工業解散

大正13年5月 昌栄銀行は「検査に照らして発せられたる主務省の整理命令に従って、その業態を改善することが出来なかった」(T13.12.6保銀)ため、大蔵省は愛媛県の佐海銀行と昌栄銀行との「二銀行の営業全部停止」(T13.12.6保銀)処分。ただし昌栄銀行処分は影響を考えて公表されなかったか?大正13年6月9日大蔵省告示108号で営業認可取消の共立銀行以前の「官報目録」で大正13年大蔵省告示1~107号には営業認可取消、新規取引停止の告示なし

大正13年5月 総選挙に際し松島は須見派を応援し、代議士を退く(徳島市史、P420)

大正13年5月28日 関西土地建物は「株主総会ノ決議ニ因リ…解散」(大正13年

9月18日官報)

大正13年5月31日 昌栄銀行取締役永井直厚は在任中に死亡(大正13年9月22日官報)

大正13年6月 昌栄銀行徳島総代理店消滅(徳島県史第6巻P408)「市内の西新町、船場及助任、前川の地所建物を市内及津田預金者に提供処分して支払に充当し…引き続き郡部の預金者とも協議中」(T13.12.18徳日)

大正13年6月 松島は糸崎船渠(資本金1000万円)、帝国毛織(資本金1000万円)、大日本原毛紡績(資本金1000万円)、日洋土地(資本金3000万円)、九州炭砒(資本金500万円)の松島肇系列の「五大株式会社を解散して」(T13.11.11読売)大阪計器製作所(資本金50万円)に合併、資本金6500万円

大正13年6月5日 大阪計器製作所は日本土地と改称(T13.9.19官報第3624号)

大正13年6月8日 唐津炭礦は帝国木材と改称

大正13年6月25日 岩手採炭「株主総会ノ決議ニヨリ…解散」(大正13年10月1日官報第3633号)

大正13年6月30日 中川豊(松島と同居)は伊豆山偕楽園代表取締役に就任(大正13年10月4日官報第3636号)

大正13年7月5日 安全印刷「株主総会ノ決議ニヨリ同日解散」(大正13年10月2日官報)

大正13年7月19日 日本土地は新潟県赤倉温泉で最後の総会を開催し、解散を決議(T13.11.11読売)

大正13年7月24日 実弟の西条教部が沼津別荘で死亡(T13.9.6徳毎)

大正13年11月10日 「株主擁護会」所属の日本土地株主4～5名は日本土地清算人鈴木錠蔵に面会を求めたが、鈴木は「単に名義上の副社長であって、実際上の事務に就ては何も知らない」(T13.11.11読売)一点張り

大正13年12月12日 昌栄銀行破産宣告 徳日によれば「〈預金者を〉救済せんとする松島氏の義侠心を拒絶し」(T13.12.18徳日)、「或政敵の関係より感情的に」(T13.12.18徳日)、「徳島県三好郡三庄村の預金者より破産の申請をなしたる

結果」(T13.12.19徳毎) 破産宣告を受けたものとする。徳日によれば「此感情的破産の為、精算終了約十ヶ年以上而も払戻は一割弱の見込」(T13.12.18徳日)

大正14年3月 松島所有の新富座(債権者の阿波農工銀行が競売)を徳島市堀裏町の宇野岩三郎ほか12名が買収

大正14年3月12日 徳島市は松島の寺島町別邸[阿波農工銀行2.8万円、関西銀行7.9万円の担保]を差押え

大正14年3月 関西計器製作所を大阪計器と改称(帝T14、大阪P66)

大正14年4月 松島汽船の汽船部主任宮本復生が譲受け、共正海運と改称(T14.4.29徳毎広告)

大正14年4月 松島の義理の甥・松島円が松島に代り徳日に入社、代表取締役

大正15年3月 日本土地の新清算人は松島を「日本土地株式の熱海土地及現金合せ二百万円を横領して告訴」(T15.3.25読売)

昭和16年12月15日 社歴の長い徳日と、熾烈な対立関係にあった徳毎が知事の斡旋で統合、新たに株式会社徳島新聞社として『徳島新聞』を創刊、松島は顧問に就任

昭和21年 総選挙で徳島県から立候補して落選(徳島新聞五十年史、P73)

昭和44年2月7日 東京で死亡、享年89

〔表一 3〕 松島肇の兼務先一覧(大正9年~15年)

| 役 員
社 名 | 松島 肇 | 鈴木錠蔵 | 鈴木久次郎 | そ の 他 | 西条教部 | 戸水寛人 |
|-------------------|-------|------|-------|--|------|------|
| 昌栄貯蓄銀行 | 代表取締役 | 監査役 | 監査役 | 永井直厚
<small>草野儀左衛門</small> | 取締役 | 取締役 |
| 日本資金信託 | 代表取締役 | | | 脇田豊吉 | | |
| 日本硬化煉瓦 | 監査役 | | 取締役 | | | |
| 南部製鉄 | 取締役 | | | | | |
| 炭礦商船 | 代表取締役 | | | 福井甚三 | | |
| 生駒土地 | 監査役 | | | 小野寺道夫 | | |
| 第一倉庫 | 代表取締役 | 監査役 | | 大久保彦四郎 | 取締役 | |
| 安全印刷 | 代表取締役 | 取締役 | | 中村定 | 取締役 | |
| 東京リベット製造 | 監査役 | | 取締役 | 佐藤松垂 | | |
| カルチウム鉱泉 | 取締役 | | | | | |
| 東亜織布 | 取締役 | | | 山本文作 | 取締役 | 社長 |
| 摂津煉瓦 | 代表取締役 | | | 森依信 | | |
| 大阪計器製造 | 代表取締役 | | | | | |
| 中央インキ | 代表取締役 | 監査役 | 取締役 | | | |
| 常盤商工 | 代表取締役 | | 社長 | | | |
| 東海市場 | 代表取締役 | | | | | |
| 日東炭礦 | 監査役 | | | | | |
| 黒崎電機製作所 | 社長 | | | 山本文作
三島正吉
<small>草野儀左衛門</small>
五百木保義
脇田豊吉 | 取締役 | |
| 市岡電気工業 | 代表取締役 | | 取締役 | 福井甚三 | | |
| 日本鋼管シャフト | 監査役 | | | | | |
| 城南土地 | 監査役 | | | | | |
| 東京絹綿紡績 | 取締役 | | | | | |
| 美馬郡是製糸 | 取締役 | | | | | |
| (以上 要録T9 役中、P226) | | | | | | |

| | 松島 | 鈴木錠蔵 | 鈴木久次郎 | その 他 | 西条 | 戸水 |
|--|---|----------------|-------------------|--|----------------|------------------------|
| 日本綿羊毛織
伊豆山偕楽園
大日本原毛紡績
筑前炭礦
帝国毛織紡績
紡績木管
三重セメント
(以上 要録T10役中、P296) | 監査役
取締役
副社長
取締役
代表取締役
代表取締役
取締役 | 取締役

取締役 | 社長

取締役 | 高橋憲治
金沢周太郎

宮本巖
佐藤松垂 | | 代表取締役
社長

取締役 |
| 昌栄銀行
(以上 要録T11役中、P230) | 取締役 | 監査役 | | 山本文作 | 取締役 | 代表取締役 |
| 松島汽船

大東京新報社

日邦薬剤
(以上 帝T11職、P390) | 代表取締役

代表取締役

代表取締役 | | | 西川漸
中村定
山本文作
中村定
山口正剛
鈴木邦三郎
大久保彦四郎 | 取締役

取締役 | |
| 大阪計器
徳島日日新報社

木材倉庫

大同商事
(以上 要録T15役下、P80) | 社長

代表取締役

取締役 | | | 松島円
松島円
山本文作
森依信
中村定
山本文作 | 取締役

取締役 | |
| 日本計量
日本鋼器
ミナミ
帝国絹硝子 | 創立者
創立者
創立者
創立者 | | | | | |

〔資料〕 『銀行会社要録』T9役中、P226、『銀行会社要録』T10役中、P296、『銀行会社要録』T11役中、P230、『帝国銀行会社要録』T11職、P390、『銀行会社要録』

要録T15役下、P 80、「栄華物語—松島肇」(T 13.12.21徳毎)、『予審決定書』(T 9 .
12.20法律新聞) その他、官報・新聞雑誌記事により作成

〔表一 4〕 松島一派の兼務先一覧（上記以外）

| 社 名 \ 役 員 | 鈴木錠蔵 | 鈴木久次郎 | そ の 他 | 西条 | 戸水 |
|--|------------|-------|---|--|------------|
| 日洋土地興業 | 取締役 | | 佐藤松垂
高橋憲治
山下佐太郎
後藤正基 | 取締役 | 社長 |
| 岩手採炭 | 社長 | | | | |
| 三池炭礦 | 取締役
清算人 | | 梅原文次郎
椿原乙蔵
中村定(清) | 取締役 | 取締役
清算人 |
| 海運興業（旧糸崎船渠） | 取締役 | | 五百木保義
山本文作 | | 社長 |
| 九州炭礦 | | | 梅原文次郎
伊藤忍
五百木保義 | 取締役 | |
| 龍山石灰
東京住宅建築
東京出版
唐津炭礦
麻植製絲
泰正社 | | | 中村定 | 取締役
取締役
監査役
監査役
取締役
監査役 | |
| 赤倉温泉スキーホテル

岩手鉱業
東京塗料
帝国木材
大日本石油
自動車興業 | | | 中村定
山下佐太郎
佐藤松垂
佐藤松垂
中村定
中村定
宮本巖 | 取締役 | |
| 日華採炭 | | | 宮本巖
佐藤松垂 | 取締役 | |

| | | | | | |
|--|-----------------|--|---|-----------------------|----------------|
| | | | 高橋憲治
堀内胖治郎 | | |
| 三光木材工業

糸崎船渠

関西土地建物
日本航空機具製作所
千代田織物

三角鉱泉 | 代表取締役

顧問 | | 堀内胖治郎
関良太郎
清水樊
梅原文次郎
福井甚三
宮本巖
後藤正基
三島正吉
宮本巖
後藤正基 | 取締役

取締役
監査役 | 取締役

取締役 |
| 城東木材工業 | | | 佐藤松垂
高橋憲次
平松茂夫
金沢周太郎 | | 社長
清算人 |
| 逗子土地 | | | 清水樊
堀内胖治郎 | | 代表取締役 |
| 南州製糖 | | | 中村定
三島正吉
松永孫七郎 | | |
| 徳島無尽 | | | 宮本巖
山本文作
松島円 | 取締役 | |
| 太陽商事 | | | 高橋憲治
山下佐太郎
平松茂夫 | | |

[資料] (表一2)に同じ

〔表― 5〕 戸水寛人の兼務先一覧（上記以外）

| 社 名 | 役 職 |
|-----------|-------|
| 亜細亜炭礦 | 創立委員長 |
| 大日本海草パルプ | 創立委員 |
| 大東鉱業 | 監査役 |
| 中外証券信託 | 社長 |
| 台湾証券交換所 | 監査役 |
| 千代田土地興業 | 代表取締役 |
| 東都土地興業 | 社長 |
| 大北炭礦 | 監査役 |
| 東洋信託保証取引所 | 社長 |

〔資料〕 〔表― 2〕 に同じ

〔参考資料1〕 松島肇のパートナー一覧

(A) 松島肇と関係深い人物 (五十音順)

○青木伊三郎 (2社 …円)

青木伊三郎 (徳島県美馬郡重清村) は土木・鉱山業、長崎商業会議所議員、

*** 美馬郡製糸代表取締役、* 第一倉庫取締役**

○秋山寛 (2社 …円)

秋山寛は*** 徳島日日新報社取締役会計部長** (『新聞総覧』日本電報通信社、大正12年版、P565、帝T13、P4)、*** 徳島無尽監査役** (帝T13、P4)、徳毎は「昌栄預金者団なるものは徳島日日新報社の重役秋山某が松島の命を受け、何か為にせんとする例の松島式の宣伝」(T14.1.3 徳毎) と解した。

○秋山貢 (1社 …円)

秋山貢 (代々幡町代々木) は (要録T9、T10、役なし)、日本薪炭代表取締役 (帝T11、職474)、自動車興業支配人 (帝T11、P355)

○新居政太郎 (2社 …円)

*** 徳島民報社、* 徳島無尽各代表取締役**

◎五百木保義 (5社 …円)

五百木保義 (愛媛県温泉郡雄群村小栗) は*** 黒崎電機製作所取締役、* 糸崎船渠、* 九州炭礦各監査役** (要録T9 役上、P1)、*** 日華採炭監査役** (要録T15、P51)、*** 海運興業監査役** (要録T11、P59)、九州炭礦監査役 (要録T11、大阪、P106)、大正10年6月18日九州炭硯監査役辞任 (T10.8.10 鉱業)、勝山織布取締役のみ (帝T11、職P7)、(帝信T13、愛媛なし)

◎伊藤忍 (5社 80円)

伊藤忍 (大阪市東区絲屋町一丁目 後に谷町2丁目) は大正3年では復写器商、所得税20.0円、営業税94.8円 (『日本商工人名録 第5版』大正3年、大阪ハP92)、「伊藤式両面謄写版」(『帝国商工信用録』博信社、大正2年、大阪P208)の明治45年開業の謄写版商 (帝信T13、大阪P7)の「博文堂」、所得税80円、営業税99円 (紳T11大阪P6)、「文具商」(T10.12.13 法律新聞)「伊藤

博文堂主」(T 9. 3. 10大朝)、「斯業の造詣浅からざる」(T 8. 10. 3 内報) * 糸崎船渠幹部として「発起人、賛成人の物色、其の他準備中」(T 8. 3. 13内報)、8 年12月「発起人の顔触に見て稍物足らざる感」(T 8. 12. 3 内報①) があると評された大日本木炭発起人、糸崎船渠、* 九州炭砒各取締役、* 黒崎電機製作所監査役(要録T 9 役上、P 15)

大正 8 年 2 月設立のサイダー製造の三朝鉱泉(鳥取県三朝村)代表社員(『工場通覧』大正10年、P 788)、大正 9 年1月13日「三朝サイダー会社の事業一切を金四万円を以て買収継承」(T 8. 3. 30内報)して設立の* 三朝ラヂウム鉱泉「[鳥取県三朝村ニ湧出スルラヂウム鉱泉ヲ以テラヂウムサイダー、ラヂウム炭酸水其他清涼飲料水ノ製造販売」(T 9. 4. 10藤本)」に西条教部とともに取締役に就任した。大正 9 年 3 月 9 日召喚され、大正11年 5 月13日広島地裁で罰金 500円の求刑(T 11. 5. 14徳毎)大正10年 7 月 8 日九州炭砒取締役辞任(T 10. 10. 20鉱業)、13年には対物信用3000円以下、対人信用薄、年商 2 ～ 3 万円、盛衰は衰(帝信 T 13、大阪 P 7)、(紳 T 14、大阪なし)

○今泉知三郎(2 社 …円)

今泉知三郎(芝区神谷町)は東京麻糸紡織、* 日東炭礦各取締役、東洋コンスターチ監査役(要録、T 11、役上 P 39)、* カルチウム鉱泉代表取締役(要録 T 9 役中、P 226)

○今中富三郎(2 社 …円)

今中富三郎(呉市和庄町／東京市牛込区納戸町)は「今中氏は…松島氏と共に去る七日朝来阪、花屋に投宿」(T 9. 3. 10大朝)した「会社員」(T 10. 12. 13法律)、* 糸崎船渠取締役(要録 T 9 役上、P 41)、* 帝国毛織紡績取締役(第三期営業報告書)、* 東亜織布100株主(『第二回営業報告書』T 7/11、P 16)

○内田守(2 社 …円)

内田守(大阪市北区与力町)は* 黒崎電機製作所取締役(要録 T 10 役中、P 174)、大正13年 2 月14日* 関西計器製作所取締役(大正13年 9 月15日官報号外、P 42)

◎梅原文次郎(5 社 …円)

梅原文次郎（大阪市西区江戸堀北通北通）は「松島肇氏の乾分」（T14.2.19徳毎）、「松島肇氏の相棒として知られ」（T14.2.7徳毎）た「鉾山業」（T10.12.13法律新聞）、「鉾山ブローカー」（T14.2.10徳毎）を営む「梅原鉾業部大阪支店主人」（T9.3.11時事）で、「九州其他に於て多数の炭坑を有せるもの」（T9.3.11時事）であった。

大正8年10月*紡績木管発起人（T8.10.21内報①）、8年11月ころ勝浦炭礦創立委員長（蔵内次郎作が相談役、高倉為三、太田光熙らが発起人 T9.1.1D）、大正8年12月18日*自動車興業発起人（T8.12.9内報①）、*糸崎船渠、九州炭砒各取締役（要録T9役中、P144）、糸崎船渠、九州炭砒各取締役（要録T10役中、P186）、*三池炭砒株式会社取締役のみ（要録、T11中P145、帝T11職P323）、（紳T11大阪なし）（帝信T13、大阪なし）（紳T14、大阪なし）。

大正9年3月「入獄の際大金を所持し看守を驚かした」（T9.3.11大朝）
○大河原章弘（2社 …円）

大河原章弘（代々幡町）は井上業敬とともに*日本緬羊毛織の原始発起人、大正9年2月設立の中央紙器（河野英良、鈴木久次郎らが取締役）監査役（要T9、P138）、（要T9役なし）、北海道パルプ製紙取締役、中央興業監査役（紳T11、上P132）、*南州製糖取締役のみ（帝T11、職P125）、（商T7、なし）（帝信T13、なし）（紳T14、なし）

◎大久保彦四郎（8社 …円）

大久保彦四郎（徳島県名西郡藍畑村）は「松島肇の四天王の筆頭と称せらるる男」（T12.8.18徳毎）で、大正10年2月設立の*徳島民報社監査役、「徳島日日新報の社員、記者に対しても社長然として臨み、同新聞記者を電話で自分の宅に呼び付け自己のためにする宣伝記事を書かしむる等、松島乾分中のキケモノ」（T12.8.24徳毎）とされた。元郡会議員、*第一倉庫取締役、*大阪計器製作所監査役（要録T9、役上P151、要録T10、役上P187）、*徳島無尽社長、第一倉庫支配人（T12.8.17徳毎）・常務、*徳島自動車、*日邦製薬各取締役、*大正酒類監査役（T12.8.18徳毎）、*徳島日日新報社株主、（帝信T13、徳島なし）

○尾崎敬義（４社 …円）

尾崎敬義（千駄ヶ谷町）は＊朝鮮京南鉄道発起人、大正８年＊九州炭砒発起人（Ｔ８．６．15内報）、大正８年11月蔵内派による勝浦炭砒発起人（Ｔ８．11.26内報③）、＊日本鋼管シャフト取締役⑩400株（要録Ｔ９、Ｐ56）、＊東京絹綿紡績取締役（要録Ｔ９、Ｐ116）、日英醸造監査役（要録Ｔ９、役上Ｐ136）、中日実業専務、中国綿業、中国工業各代表取締役、東洋運鉱、松山電気軌道、東洋電業、中華毛織各取締役、大正電気、金華紡織各監査役（要録Ｔ10、役上Ｐ168）

○小野安太郎（２社 …円）

小野安太郎（神奈川県都築郡都田村）は大日本時計硝子製造取締役（要録Ｔ９、役上Ｐ130）、＊南州製糖、大日本時計硝子製造、＊湘南ホテル各取締役、石油乳剤石鹼監査役（帝Ｔ11、職Ｐ112）

○小野寺道夫（２社 …円）

小野寺道夫（兵庫県武庫郡大社村）は＊城南土地、＊東亜フェルト、木谷黒鉛電化、＊生駒土地、日本硅石各取締役（要録Ｔ９、役上Ｐ131）、日本水電、大華電気各常務、城南土地、東亜フェルト、生駒土地、日本硅石、日本無軌条電車、日本綿紡各取締役、台湾芋麻農産監査役（要録Ｔ10、役上Ｐ163）、＊東亜フェルト、木谷黒鉛電化、＊生駒土地、日本硅石各取締役、11年では＊生駒土地取締役のみ（帝Ｔ11、職Ｐ114）、13年には会社役員、対物信用未詳、対人信用普通、年商未詳、盛衰は常態（帝信Ｔ13、兵庫Ｐ17）、（紳Ｔ14、なし）

○加倉井卯之吉（２社 …円）

加倉井卯之吉（荏原郡大崎町）は＊関東機械ナット常務、＊常盤商工取締役（要録、Ｔ９、役上Ｐ196）、＊常盤商工取締役、関東機械ナット常務、日光工業監査役（要録、Ｔ11役上Ｐ190）、山形炭砒にも関与か

○金沢周太郎（５社 62円）

金沢周太郎（品川町南品川宿）は（商Ｔ７、なし）（要録Ｔ９、役なし）、＊日洋土地興業取締役、＊大日本原毛紡績、＊帝国毛織紡績、国益肥料各監査役（要録Ｔ10、役上Ｐ275）、大正10年４月帝国毛織紡績監査役（第二期営業報告書）、日洋土地興業取締役、帝国毛織紡績監査役（帝Ｔ11職Ｐ191）、大正13年で

は*城東木材工業監査役(帝T13、P399)、(帝信T13なし)、会社員、所得税62円(紳T14、P233)、大正11年5月12日広島地裁での糸崎船渠事件公判の証人として証言した*昌栄銀行本店貸出係主任の金沢修太郎(T11.5.13大毎。なおT11.4.18法律新聞の「大野銀行大阪支店長金沢秀太郎」は誤りか)、松島が「九炭鉱業権を担保に入れた手続に就いて…全部委任した」(T11.4.10大朝)金沢修太郎と同一人と思われる。

◎川上安太郎(5社 …円)

川上安太郎(徳島県阿波郡大俣村日開谷)は*日本資金信託取締役(帝T5職P86)、*松永孫七郎とともに市場倉庫(徳島県阿波郡市場町)監査役(帝T5、P1)、大正10年2月設立の*徳島民報社監査役(帝T11、P5)、*徳島日日新報社理事(『新聞総覧』日本電報通信社、大正11年版、P627、新聞之新聞社編『新聞人名鑑』昭和4年、P52)、*日邦薬剤取締役(帝T11、P3)、徳島鑄工取締役(帝T11、P4)、*徳島無尽取締役(帝T13、P4)。昌栄貯蓄銀行市場代理店主か？

○神戸源右衛門(3社 …円)

神戸源右衛門(四谷区南伊賀町3/京都市上京区堺町通御池下ル)は(名鑑T6なし)(商T7、なし)、*九州炭礦取締役のみ(要録T9、役上P227、要録T10、役上P275)、*日華採炭代表取締役、*大日本原毛紡績取締役(帝T11、職P197)、(帝信T13東京・京都なし)(紳T14なし)

○喜多牧雄(2社 …円)

喜多牧雄は*美馬郡製糸取締役、*第一倉庫監査役

○木村勇(2社 …円)

木村勇は(要録T11、役なし)、*大阪計器取締役(帝T14、大阪P66)、*逗子土地監査役(帝T14、P236)

○倉橋泰昌(2社 …円)

倉橋泰昌(麻布区三河台町)は子爵、*昌栄貯蓄銀行、*日本資金信託各監査役

○栗山博(2社 …円)

栗山博（牛込区下戸塚）は（要録T 9 役なし）、*熱海偕楽園取締役（要録T 10、役中P 211）、*伊豆山偕楽園取締役、*自動車興業監査役（帝T 11、職P 340）、（商T 7、なし）（帝信T 13なし）（紳T 14なし）

◎後藤正基（5 社 …円）

後藤正基（赤坂区青山南町）は（商T 7、なし）、*安全印刷取締役、*カルチウム鉱泉監査役（要録、T 9 下、P 42）、安全印刷、旭電気、*日洋土地興業各取締役、*日本航空機具製作所代表取締役、カルチウム鉱泉監査役（要録、T 10、下、P 61）、*三角鉱泉監査役（要録、T 11、役下P 48）、*カルチウム鉱泉監査役（要録、T 11、P 124）、13年には日本航空機具製作所社長外会社役員、対物信用5000～1 万円、対人信用普通、年商3～5 千円、盛衰は常態（帝信T 13、P 283）、（紳T 14なし）

◎斉藤清吉

斉藤清吉は帝国毛織紡績支配人（帝T 11、P 294）

○阪井造酒松（2 社 …円）

阪井造酒松（大阪市西区三条通）は「会社員」（T 10.12.13法律新聞）、*糸崎船渠の「糸崎駐在の専務」（T 9 . 3 .11大朝）として「斯業の経験に富める」（T 8 .10. 3 内報）阪井は現地糸崎事務所に駐在（T 9 . 3 .11大朝）した会計係の阿部書記等とともに、「糸崎工場経営…自ら之れに当」（T 8 .10. 3 内報）った。）、糸崎船渠、*大阪計器製作所各取締役（要録T 9 役下、P 100要録、T 10 役下P 148）、糸崎船渠取締役のみ（帝T 11、職P 494）、その後松島側は「重役会にて解散を決行せんと東京に総会を開」（T 9 .10.15東朝）いたが、「糸崎赤松哲二郎氏等一派の関西に於ける株主、専務取締役阪井造酒松氏等加はりて極力反対したるため、解散は否決された」（T 9 .10.15東朝③）結果、糸崎船渠は「今や松島派對阪井派の争ひとなり、阪井派は…再び臨時総会を開くことを強要し、地方株主に対し…左の檄を飛ばせり」（T 9 .10.15東朝）阪井は大正10年12月5日広島地裁第一回公判での審理で「私は資産なく…創立総会終了後入社した…私が引受けた〈糸崎船渠〉一千七百株は某発起人が引受ないのを譲り受けたもの」（T 10.12.13法律）と供述。（帝信T 13大阪なし）（紳T 14大阪なし）

○佐藤馨（2社 …円）

佐藤馨（本郷区妻恋町）は（要録T9役なし）、*南州製糖代表取締役、*湘南ホテル監査役（帝T11、職P479）

◎佐藤松垂（13社 …円）

佐藤松垂（北豊島郡西巢鴨町宮仲）は大正5年時点では*昌栄貯蓄銀行支配人（諸T5、上P61）、合資高丸商会代表社員（帝T5職）、（商T7、なし）、*黒崎電機製作所T8/11 100株主、大正9年時点では*岩手鉱業、東京糊料各取締役、*九州炭礦、*カルチウム鉱泉各監査役（要録、T9役下P84）、大正10年時点では岩手鉱業、東京糊料、*紡績木管、*大日本原毛紡績、*日洋土地興業各取締役、九州炭礦、カルチウム鉱泉各監査役（要録、T10役下P239）、*太陽商事（要録T10、P168）、*日本資金信託監査役、岩手鉱業、東京糊料、日洋土地興業各取締役（要録、T11、役下P100）、カルチウム鉱泉監査役（要録、T11、役下P100）、*日華採炭監査役（帝T11、職P480）、大正13年では*城東木材工業取締役（帝T13、P399）、（帝信T13、なし）（紳T14なし）、*伊豆山偕楽園取締役（要録、T15P20）

○島田雅雄（2社 …円）

島田雅雄（小松島町）は徳島県議、徳島毎夕新聞社長を経て、*徳島無尽代表取締役、*徳島日日新報社理事

◎清水獎（5社 …円）

清水獎（芝区白金三光町）は（商T7、なし）（要録、T9役なし）、*伊豆山偕楽園支配人（帝T11、P23）、*三光木材工業取締役（帝T11、職P543）、大正13年では*城東木材工業取締役（帝T13、P399）清算人（大正13年10月2日官報号外、P47）、（帝信T13、なし）、*逗子土地取締役（帝T14、P236）、（紳T14なし）、*赤倉温泉スキーホテル取締役（要録T15、P226）

○住友定吉（2社 …円）

*徳島日日新報社元社長、取締役、*徳島無尽取締役

○関良太郎（4社 …円）

関良太郎（釧路区／渋谷町中渋谷）は（商T7、なし）（要録、T9役なし）、

* 日洋土地興業取締役(要録、T10、P69)、大正10年6月18日* 唐津炭礦取締役選任(T10.8.20日本鉱業新聞)、唐津炭礦代表取締役(要録T11、P128)、唐津炭礦社長、* 三光木材工業取締役(帝T11、職P588)、* 城東木材工業取締役(帝T13、P399)、(帝信T13、なし)(紳T14なし)

○世古松朗(2社 …円)

世古松朗(静岡県駿東郡揚原村)は大正9年3月* 熱海宝塚土地発起人(T9.3.6読売)、(要録、T9役なし)、* 日洋土地興業取締役(要録、T10役下P291)、沼津市香貫町296に所在する旅館「三島館」館主(『名勝案内全国著名旅館名録』昭和3年12月、P101)(参考)熱海の西郷参議の常宿「<参議西郷>君は来遊せらるる毎に必ず世古氏に館するを常とせられし」(明治17年発行『熱海文叢』『熱海町誌』大正6年P197所収)世古<直道>は小沢町にある屋号「真誠社」の旅館主(明治25年1月発行『熱海一覽温泉双六』熱海市立図書館所蔵)、(帝信T13、静岡なし)

○高木正一(2社 …円)

大正10年2月設立の* 徳島民報社取締役(帝T11、P5)、* 徳島日日新報社社会部長(『新聞総覧』日本電報通信社、大正11年版、P627)、同政治部長・経済部長(『新聞総覧』日本電報通信社、大正12年版、P565)

○高田忠吾(2社 …円)

高田忠吾(下谷区御徒町 高田直三郎と同居)は(商T7、なし)(要録T9役なし)、* 三光木材工業支配人(帝T11、P324)、* 帝国毛織紡績監査役(帝T11、職P243)、(帝信T13、なし)(紳T14、なし)

○高田直三郎(4社 …円)

高田直三郎(下谷区御徒町 高田忠吾と同居)は(商T7、なし)、* 九州炭砒取締役のみ(要録T9役中、P49)、九州炭砒、大正鉱業各取締役、* 紡績木管監査役(要録、T10役中P64)、大正鉱業、* 日華採炭、九州炭砒各取締役(帝T11、職P243)、(帝信T13、なし)(紳T14、なし)、* 伊豆山偕楽園取締役(要録、T15P20)

○高橋憲治(10社 …円)

高橋憲治（渋谷町中渋谷）は（商T 7、なし）、東京金属工業、*太陽㈱、*九州炭砒各監査役（要録T 9 役中、P 44）、*日洋土地興業監査役（要録、T10、P 69）、*大日本原毛紡績、*紡績木管、富善製薬各取締役、日洋土地興業、九州炭砒、*東京金属工業各監査役（要録、T10役中P 58）、*太陽商事監査役（要録T10、P 168）、東京金属工業、日洋土地興業、*日華採炭各監査役、紡績木管、東京測量器製作各取締役（帝T11、職P 240）、*大阪計器代表取締役、*黒崎電機製作所T 8/11 100株主、日華採炭監査役（帝T11、P 74、要録T15、P 51）、（帝信T13、なし）、*伊豆偕楽園取締役（要録、T15P 20）、（紳T14、なし）、昭和5年では大阪計器代表取締役（要録、S 5、P 43）

○高山襄坪（2社880円）

高山襄坪（千駄ヶ谷町原宿）は千代田製紙、起重機製造各社長、*自動車興業、*唐津炭砒各取締役（紳T11上P 262）

○滝野覚（1社…円）

滝野覚（芝区日本榎西）は合名会社日本製作所社員、7年9月調査で正味身代未詳、商内高未詳、取引先の信用の程度5段階の中位Ca、所得税…（商、P 572）、*東京リベット製造専務、珪藻土工業取締役（要録T 9 役中、P 72、要録、T10役中P 91）、*黒崎電機T 8/11 150株主、（帝信T13、なし）（紳T14、なし）

○田辺二郎（2社…円）

田辺二郎（西巢鴨町）は（商T 7、なし）（要録T 9 役なし）、*三光木材工業監査役（帝T11、P 324）、大正13年では*城東木材工業監査役（帝T13、P 399）、（帝信T13、なし）（紳T14、なし）

○椿原乙蔵（2社…円）

椿原乙蔵（福岡県八女郡羽犬塚町）は（要録T 9 役なし）、*日洋土地興業（要録、T10、P 69）（帝T11職なし）、帝国実業奨励会編『福岡県一万元以上実業家資産名鑑』大正11年の八女郡になし、（帝信T13、福岡なし）（紳T14、なし）、九州拓殖取締役、九州農具製造監査役（要録、T15役上、P 256）、*三池炭砒五万七千円詐欺事件で松島肇と共謀した（S 3.5.1 東朝）。大正14年5月

の第一審で井上斗一を弁護人に選定（理由、P134）したが、井上は大正15年5月15日弁護士登録を取り消した。

○徳永斌（2社 …円）

徳永斌（松山市北京町）は（商T7、なし）、8年12月大日本木炭発起人（T8.12.3内報①）、*大阪計器製造、*九州炭砒各取締役（要録T9役上、P117）、大正10年10月25日九州炭砒取締役辞任（T10.12.20鉱業）、（帝信T13、愛媛なし）（要録T15役なし）

◎中川豊（1社 …円）

中川豊（牛込区南町、松島と同居）は（商T7、なし）（要録T9役なし）、*伊豆山偕楽園取締役のみ（帝T13、職P291）（帝信T13、東京神奈川静岡なし）、（紳T14、なし）、伊豆山偕楽園代表取締役（要録、T15P20）、「熱海偕楽園」の館主（『名勝案内全国著名旅館名録』昭和3年12月、P99）で、三浦郡逗子町新宿原252番地の旅館「養神亭」の館主（『名勝案内全国著名旅館名録』昭和3年12月、P113）、「養神亭」は昭和5年では館主中川豊、客室数30、客室畳数360、宿泊料4.0円～6.0円（昭和5年版『全国都市名勝温泉旅館名鑑』日本遊覧旅行社、昭和5年8月、P43）、なお「養神亭支店」の館主は丸熊太郎

○永田利一（2社 …円）

永田利一（大久保町東大久保）は（要録T9役なし）、*太陽商事取締役（要録T10、P168）、*大日本原毛紡績監査役（要録、T10役中、P148）

◎中村定（13社 …円）

中村定（豊多摩郡東大久保）は「松島氏の親族」（T14.2.8徳毎）で、松島系企業10余社に幅広く役員となって、「同人の参謀として活躍した人物」（T14.2.9徳毎）で、松島「肇ハ右教部…＜中村＞定ヲシテ自己ニ代リテ其ノ設立計画実行ノ局ニ当ラムルコトト為シタ」（事実『大審院刑事判例集』第10巻、P125）松島の腹心中の腹心と考えられる。（商T7、なし）（要録T9役なし）、*関西土地建物取締役（要録T9大阪、P61）・清算人（大正13年9月18日官報号外、P17）、*唐津炭礦取締役（要録T11、P128）、*安全印刷、*三池炭礦、唐津炭礦、大日本石油、中日興業、関西土地建物、*松島汽船、*徳島日日新

報社、*南州製糖各取締役、*自動車興業監査役（帝T11職、P287）、*大東京新報社監査役（帝T11職、P390）、松島汽船取締役（帝T11、大阪P147）、自動車興業監査役（帝T11、P355）、安全印刷取締役・清算人（大正13年10月2日官報号外、P45）、*三池炭砒清算人（T13.4.28官報3501号 号外、P27）、*赤倉温泉スキーホテル、*日本土地、安全印刷、唐津炭礦、大日本石油、徳島日日新報社、南州製糖各取締役、自動車興業監査役（帝T13、職P297）、（帝信T13、なし）（紳T14、なし）、赤倉温泉スキーホテル代表取締役、帝国木材常務、大日本石油取締役（要録、T15役上P278）、*木材倉庫取締役（要録T15、P226）、昭和3年4月30日福岡地裁で三池炭坑事件で無罪の判決（S3.5.1東日）

○中山貞雄（3社 …円）

中山貞雄（豊多摩郡原宿）は明治23年1月熊本県杉橋村に生れ、東京朝日新聞記者を経て、熊本県五区選出、政友本党所属代議士（『衆議院要覧』大正13年、P110）、瑞穂炭礦代表取締役、奉天商品証券交易所理事、丸之内銀行、製々舎耐火煉瓦、奉天証券各取締役（要録、T11、役中P108）、*筑前炭礦、*東亜証券商品信託、豊田炭礦〔大正9年12月26日設立、取締役は新花屋敷温泉土地社長の阪本弥一郎ら（T10.1.20鉱業）〕、福松炭礦各取締役、*富士鉱業発起人（T8.4.17内報）監査役ほか（帝T11職P291）、東亜拓殖専務、富士鉱業、亜細亜活動写真各取締役（『衆議院要覧』、P110）

○西川漸（1社 …円）

西川漸（徳島町字本町南）は弁護士、大正8年時点で共正海運取締役（要録T9、P7）、共正汽船、*松島汽船各代表取締役（帝T11職、P74）

○原真一（4社 …円）

原真一（長崎／大阪）は捕鯨・造船・貿易業、東洋捕鯨常務、東洋製氷、佐賀紡績各取締役（人事興信録T7、はP34）、南洋製糖取締役（T6.11.29読売）、*糸崎船渠発起人（T8.5.16読売）、*九州炭砒発起人（T8.6.15内報）、*帝国毛織紡績取締役（第一期営業報告書）、*富士製鋼取締役（株式年鑑T8、P638）、南洋製糖取締役（T6.11.29読売）、大正14年では1隻1、224トンの

船主（『財界二十五年史』大正15年、P 63）

◎日能喜三郎（3社 19円）

日能喜三郎（牛込区横寺町）は明治38年創設の日能印刷工場経営者、大正3年では芝区南佐久間町で印刷業、所得税19.5円、営業税67.3円（『日本商工人名録 第5版』大正3年、イP 62）、7年3月調査で13年前に印刷開業、正味身代未詳、商内高7.5～10万円、取引先の信用の程度は不渡のFa、所得税…（商、P 604）、*安全印刷常務・技術部主任、東京薬化学工業取締役（要録T 9 役下、P 170）、*糸崎船渠監査役、*海運興業監査役、（帝信T13、なし）（紳T14、なし）

○平松茂夫（3社 …円）

平松茂夫（本郷区真砂町）は*太陽取締役のみ（要録、T 9 役下、P 181）、*太陽、山東製油各取締役、*黒崎電機製作所監査役（要録、T10役下、P 270）、黒崎電機製作所監査役のみ（帝T11、職P 571）、「松島氏等にそそのかされ」（S 4.3.9 東朝）事件を起し取調べを受けた。*太陽商事取締役のみ（帝T13、下P 137）、（帝信T13、なし）（紳T14、なし）

○福島太明（2社 67円）

福島太明（赤坂区氷川町）は*日本鋼管シャフト発起人総代・専務（帝T11、職P 419）、*東亜織布監査役（要録T 9、P 104）200株（T 9 / 5 東亜織布第5回営業報告書、P 13）、日本鋼管シャフト専務、東亜織布監査役、所得税67円（紳T11、中P 181）（紳T14、なし）

◎堀内胖治郎（9社 …円）

堀内胖治郎（松山市萱町）は*糸崎船渠発起人、*九州炭砒取締役、伊予米穀取引所、南海酒類製造、*黒崎電機製作所各監査役（要録、T 9 役上、P 100）、九州炭砒取締役、伊予米穀取引所、黒崎電機製作所、南海酒類製造各監査役（要録、T10役上、P 124）、*三池炭砒監査役（要録、T11、東京P 228）、*三光木材工業取締役（帝T11、P 324）、*帝国毛織紡績取締役（第三期営業報告書）、松山瓦斯、帝国毛織紡績、三光木材工業、東信実業、*日華採炭、*東亜フェルト各取締役、三池炭砒、南海酒類製造各監査役（帝T11、職P 83）、*逗子土

地取締役（帝T14、P236）、日華採炭取締役（要録T15、P51）、（帝信T13、愛媛なし）

○本堂平四郎（3社 69円）

本堂平四郎（麴町区元園町）は「元警視庁警視・麴町署長」（T10.4.5法律）、無線電話器製造販売輸出入商・平山房、麴町区会議員（紳T11、P112）、（要録、T9役なし）、*帝国毛織紡績取締役、*伊豆山偕楽園監査役、所得税69円（紳T11、上P98）、*日洋土地興業取締役（要録、T10、P69）、伊豆山偕楽園取締役（帝T11、P23）、帝国毛織紡績監査役（帝T11、P294）、（帝信T13、なし）、東洋レヂオ社長、伊豆山偕楽園監査役、所得税268円（紳T11、P112）

◎松島円（3社 …円）

松島円（徳島市富浦町東富田）は松島肇の義理のおい、明治35年10月28日徳島県阿波郡土成村に生まれ（新聞研究所編『昭和新聞名家録』昭和5年、P318）、法政大学法律科卒、大正14年4月松島に代り徳島日日新報社に入社（新聞研究所編『昭和新聞名家録』昭和5年、P318）、大正14年時点で徳島日日新報社取締役会計主任（『新聞総覧』日本電報通信社、大正15年版、P328）、「入社後間もなく代表取締役」（前掲『昭和新聞名家録』、P318）、*大阪計器監査役・取締役を歴任（新聞之新聞社編『新聞人名鑑』昭和4年、P169）、昭和5年時点で*昌栄銀行代表取締役、*徳島無尽取締役（『昭和新聞名家録』、P318）、昭和16年統合後の徳島新聞営業局長（『徳島県新聞史』、P399）

○松永孫七郎（3社 …円）

松永孫七郎（牛込区矢来町）は*川上安太郎とともに市場倉庫（徳島県阿波郡市場町）監査役（帝T5、P1）、（要録、T9役なし）、東京出版取締役（要録、T10役中、P289）、*南州製糖代表取締役、*安全印刷、*伊豆山偕楽園各取締役（帝T11、職P385）、（紳T11、なし）、13年には会社役員、対物信用未詳、対人信用薄、年商未詳、盛衰は衰（帝信T13、P247）、安全印刷取締役・清算人（大正13年10月2日官報号外、P45）、（紳T14、なし）、伊豆山偕楽園取締役（要録、T15P20）

◎松永隆一（8社 …円）

松永隆一（大阪府東成郡天王寺村）は大正9年では佐賀県佐賀郡高木瀬村、
 ＊太陽監査役のみ（要録、T9役中、P221）、大正10年では＊太陽監査役のみ
 （要録、T10役中、P289）、＊黒崎電機製作所、＊大阪計器製作所、＊千代田
 織物各取締役（帝T11、職P385）、大阪計器製作所取締役（要録T11、役下P
 157）、＊海運興業取締役（要録T11、P59）、＊帝国毛織取締役（第三期営業
 報告書）、＊徳島日日新報社取締役（帝T13、P4）、＊関西計器製作所取締役
 （大正13年9月15日官報号外、P42）、（紳T11、大阪なし）（帝信T13、大阪な
 し）（紳T14、大阪なし）

○三溝誠一郎（2社 …円）

三溝誠一郎（麻布区森本町）は（要録、T9役なし）、岩越炭礦〈高木次郎ら
 が取締役〉、＊湘南ホテル（神奈川）、日本ストレートアスファルト工業、＊南
 州製糖（大阪）各取締役（帝T11、職P527）

◎三島正吉（6社 …円）

三島正吉（大阪府西成郡今宮町今宮）は（要録、T9役なし）、＊千代田織物
 取締役兼支配人、帝国燃料取締役（要録、T10役下、P199）、＊帝国毛織取締
 役、＊東亜フェルト、千代田織物、＊黒崎電機製作所取締役、＊大阪計器製作
 所取締役（要録T11、役下P157）、＊黒崎電機製作所各取締役、＊南州製糖監
 査役（帝T11、職P528）、（紳T11、大阪なし）（帝信T13、大阪なし）（紳T14、
 大阪なし）

◎宮本巖（13社 …円）

宮本巖（徳島市富田浦町／牛込区若宮町）は大正8年12月＊紡績木管役員（T
 8.12.31読売）、＊糸崎船渠取締役のみ（要録T9役下、P146）、＊九州炭砒取
 締役（要録T9大阪、P106）、＊熱海偕楽園代表取締役、紡績木管、北海採炭、
 ＊自動車興業、＊帝国毛糸紡績、＊糸崎船渠、九州炭砒各取締役、＊三池炭砒
 監査役（要録、T10役下、P219）、＊関西土地建物監査役（帝T11、大阪P
 93）、帝国毛糸紡績、＊千代田織物、自動車興業各取締役（要録、T11役下P171）、
 紡績木管、＊日華採炭、＊伊豆山偕楽園、千代田織物各取締役、関西土地建物、
 三池炭砒監査役（帝T1職、P539）、大正10年2月設立の＊徳島民報社取締役

(帝T11、P5)、大正11年時点で*徳島日日新報社専務兼政治経済部長(『新聞総覧』日本電報通信社、大正11年版、P625)翌年は退任済み。(帝信T13、徳島なし)、日華採炭取締役(要録T15、P51)

○森依信(4社 …円)

森依信(徳島県寺島町)は(要録、T9役なし)(帝信T13、徳島なし)、*昌栄銀行監査役(T13.12.14東朝)、*徳島日日新報社専務、*大阪計器監査役(要録、T15役下P265)、*黒崎電機製作所監査役

◎山下佐太郎(6社 …円)

山下佐太郎(小石川区雑司が谷町)は在郷砲中佐(紳T14、P450)、(商T7なし)、大正9年では太陽(株)取締役のみ(要録、T9役中、P196)、*太陽商事、*日洋土地興業各取締役、*大日本原毛紡績監査役(要録、T10役中、P256)、日本綿紡、第百物産各代表取締役、日洋土地興業、東京住宅建築、日本農林産業、*日本航空機具製作所各取締役、*赤倉温泉スキーホテル監査役(帝T11、職P367)、日本航空機具製作所取締役(紳T11、中P121)、*三角鉱泉取締役(帝T13、P384)、13年には日本農林産業外会社役員、対物信用負債、対人信用薄、年商未詳、盛衰は衰(帝信T13、P236)、赤倉温泉スキーホテル監査役(要録T15、P226)

◎山本文作(14社 67円)

山本文作(堂島/西宮町前松原/徳島県小松島町)は松島の義弟(T11.5.11徳毎)で、黒崎電機の債権者たる合資会社山本文商店(黒崎電機第十二期営業報告書)主、*糸崎船渠、*大阪計器製造各監査役、*黒崎電機製作所取締役(要録T9役中、P200)、*徳島日日新報社取締役(要録T9、P48)、*関西土地建物取締役(要録T9大阪、P61)・清算人(大正13年9月18日官報号外、P17)、大正10年4月*帝国毛織紡績取締役(第二期営業報告書)、黒崎電機製作所常務、帝国毛織紡績取締役、*大日本原毛紡績、*糸崎船渠、大阪計器製作所各監査役(要録T10役中、P261)、*松島汽船監査役(帝T11、大阪P147)、黒崎電機製作所代表取締役、関西土地建物取締役、松島汽船監査役(帝T11、職P371)、(紳T11、神戸なし)、*昌栄銀行監査役(T13.12.14東朝)、黒崎電

機製作所、* 関西計器製作所各代表取締役、徳島日日新報社、関西土地建物各
取締役、昌栄銀行、* 千代田織物、松島汽船、* 安全印刷、大阪計器製作所各
監査役（帝T13、職P385）、（帝信T13、兵庫なし）、会社員、所得税67円（紳
T11、神戸P124）、* 大阪計器代表取締役（要録、T15役下P58）、* 木材倉庫
監査役（要録T15、P226）

(B) 松島肇と関係深い資産家・名望家一覧 (五十音順)

□赤松範一 (2社 3,658円)

赤松範一(千駄ヶ谷町)は男爵、貴族院議員、所得税3,658円(紳T11下P14)、大正3年では印刷業、所得税90.5円、営業税117.3円(『日本商工人名録 第5版』大正3年、イP62)、7年4月経営する印刷工場公木社を*安全印刷に売却(T8.5.16内報)、東京製綱常務、*安全印刷、*東京リベット製造、大野銀行、東洋拓殖工業、東京針金工業、日本銑鉄、珪藻土工業、日本特産*、阪川牛乳商店各取締役、帝国特殊煉瓦、大阪船渠監査役(要録T9役下、P68)、加えて東京特産鉄社長、台湾纖維取締役、両江戸拓殖鉄道監査役(帝T11、職P464)、13年には東京製綱常務外会社役員、対物信用40~50万円、対人信用厚、年商3~5万円、盛衰は常態(帝信T13、P300)

□鵜沢宇八 (2社 36円)

鵜沢宇八(芝区日陰町)は代議士、所得税36円(紳T11中P58)、慶応3年5月千葉県に生れ、東京専門学校、慶応に学び、「日露戦後には、満蒙の地に入り…常に事業のために新天地を開拓するの志を忘れなかった」(柏村一介『昭和国勢人物史』昭和5年、P48)人物で、「樺太に渡り、敷香港にて北寄貝採取を試み、更に回漕店、雑貨店等を営み」(『明治大正史 13巻』昭和5年、実業之世界社、ウP4)、「樺太に於ける…漁業、回漕業、及び雑貨の販売」(柏村一介『昭和国勢人物史』昭和5年、P48)、三重県古和浦で鰯大敷漁業を開始、明治45年以来千葉県二区選出の代議士、大正2年桂公と立憲同志会を結成、杉浦メリヤス製針<鈴木久次郎が社長>監査役(人事興信録、T7、うP10)、*東海市場<代表取締役松島肇>発起人(T7.5.5読売)、大正8年11月*日本緬羊毛織発起人・取締役(要録T9、P63)、大正水産、日本亜鉛各取締役、朝鮮製粉監査役(要録T11役中、P135)、大正14年貴族院議員を経て立憲民政党総務、共済商事社長、満洲製粉、神中鉄道、東洋捕鯨各取締役、芝ロビルディング代表社員(『明治大正史 13巻』ウP4)

□宇野政次郎 (2社 …円)

宇野政次郎(福井県敦賀町泉)は敦賀銀行、敦賀電灯、東洋セメント、*三

池炭磁株式会社各取締役（要録T11、役中P134）、＊日洋土地興業（要録、T10、P69）

□加島安次郎（4社 13,490円）

加島安次郎は株式仲買・加島商店主、＊城南土地取締役、＊炭磁商船取締役（株T8、P619）、＊熱海宝塚土地発起人（T9.3.6読売）、＊糸崎船渠発起人、所得税13490円、営業税7104円（紳T11、大阪P90）、北浜銀行頭取、泉尾綿毛製糸、北大阪土地、摂津土地、日本絹布、大阪アルカリ、花屋敷土地、四国生糸、信越水電、泉尾土地各取締役、亜鉛電解鋳業、大正清酒、浪速土地各監査役（『大日本実業家名鑑下巻』8年、P33）、大阪土地運河、日本家禽土地、城東土地、山陽炭磁、大日本放射線製薬、扇田炭礦、北浜ビルヂング、内外商事各社長、大神中央土地、大阪郊外住宅、大阪住宅経営、別府温泉土地、名古屋新市街、ナニハビルヂング、中華土地建物、豊国鋳業、東邦炭磁、日本電気製鉄、吉野川水電興業各取締役、信貴生駒電鉄相談役ほか多数（要録T11、P160ほか）

□草野儀左衛門（2社 …円）

草野儀左衛門（滋賀県東浅井郡上草野村鍛冶屋）は明治19年5月28日滋賀県人先代草野儀左衛門の長男栄三郎として生れ（『一九二四年に於ける大日本人物史』大正13年、くP32）、明治43年10月家督相続・襲名、「滋賀県及び外二県之多額納税者数名を重役に推選する予定なり」（T3.12.6保銀）との松島の方針で昌栄貯蓄銀行監査役に就任、大正5年時点で＊昌栄貯蓄銀行監査役（帝要、T5P29）、大正4年11月設立の草野川電気（昭和10年3月宇治川電気に合併）社長（帝要、T5職P169）、鍛冶屋支店を置く共栄銀行取締役（人事興信録T7、くP58）、＊黒崎電機製作所取締役（要録T9、P82）T8/11⑦700株主、大正10年時点では昌栄貯蓄銀行監査役、共栄銀行、黒崎電機製作所各取締役、草野川電気代表取締役（要録T10、役中P220）、大正11年時点では草野川電気社長のみ（帝T11、職P344）、（帝信T13、滋賀なし。登載の草野鶴治郎は上草野の先々代からの農具商）

□倉知鉄吉（2社 941円）

倉知鉄吉(千駄ヶ谷町原宿)は貴族院議員、所得税941円、外務次官を退官後、中日実業副総裁、華南銀行中国工業、東洋製鉄、東洋塩業、中国綿業、日英醸造、旭紡織、原町紡織各取締役、*日本鋼管シャフト、金剛山電気鉄道各監査役(人事興信録T7、くP46、紳T11中P90)、大正8年9月*熱海宝塚土地発起人(株式募集広告T9.3.6読売)、大正8年9月大北炭砒賛成人(T8.9.4読売)、大正9年10月帝都循環鉄道たる東京鉄道発起人(T9.10.17東日)、内外信託発起人(麻島昭一『本邦信託会社の史的研究』、p138)ほか多数

□篠野貫治(3社 …円)

篠野貫治は徳島県那賀郡富岡町、安政5年2月見能林村に生れ、「素封家にして又た徳望高く」(『徳島名鑑』徳島日日新報社、大正4年、さP16)、平島村長、見能林村名誉村長、村会議員、郡農会副会長など「凡そ地方の名誉職は悉く干与」(『徳島名鑑』)、徳島毎日新聞社監査役(諸、T5、下P919)、大正4年に「地方金融の為に尽さん」(『徳島名鑑』)として*昌栄貯蓄銀行富岡代理店長となり、大正5年2月昌栄貯蓄銀行取締役に就任した。(T5.2.5読売)*第一倉庫、*徳島無尽、徳島毎日新聞社各取締役、第一倉庫、日本資金信託、八千代生命、帝国火災各代理店(『徳島県商工人名録』(帝信T13、徳島なし)/なお篠野正敏(那賀郡見能林村)は多額納税者830円91銭、地価31、719円(『日本全国商工人名録』明治31年、あP34)

□芹沢多根(2社 …円)

芹沢多根(静岡県駿東郡泉村菊畑)は大正5年では芹沢銀行、伊豆銀行、駿豆銀行、産業銀行、東駿銀行、御厨銀行、駿豆電気鉄道、御殿場委託各取締役、資産額50万円(渋谷隆一ほか「大正初期の大資産家名簿」『地方金融史研究』第14号、1983年4月、P67)、芹沢銀行常務、伊豆銀行取締役、*富士鉱業、*筑前炭礦、三河鉄道各監査役ほか多数(帝T11職P586)、東洋耐火煉瓦、帝国火薬各監査役(T14.6.5法律)

□田村秀次郎(2社 …円)

田村秀次郎(徳島県板野郡松坂村)は藍製造、多額納税者明治31年558.276円、地価20、097円、営業税65.60円、所得税209.71円(『日本全国商工人名録二版』

明治31年、あP33)、* 昌栄貯蓄銀行監査役、松坂村那東字泉ノ西に支店を有する* 日本資金信託取締役、板西倉庫監査役(帝T5、P2)、昌栄貯蓄銀行松坂代理店主か？

□鳥越貞敏(1社 …円)

鳥越貞敏(福岡県浮羽郡吉井町)は吉井銀行頭取(要録T11、役上P110)、大正10年2月11日創立の三池炭砒(株)取締役(T10.4.10鉱業)。松島一派は「鳥越貞敏外三十五名ニ対シ株式ノ申込引受ノ勧誘ヲ為スニ方リ…其ノ鉱業カ莫大ナル利益ヲ挙げ得ル見込アルモノノ如ク虚構シテ吹聴シ以テ同人等ヲシテ該鉱業カ相当ナル調査ノ結果ニ基キ真実右ノ如キ見込アルモノノ如ク誤信セシメ」

(昭和6年(レ)第114号、昭和6年3月30日第二刑事部判決、理由『大審院刑事判例集』第10巻、P125~126)たとされた。／なお吉井町の鳥越誠之助は酒造、純資産10万円(帝国実業奨励会編『福岡県一万元以上実業家資産名鑑』大正11年、P155)、吉井町の鳥越繁は雑穀、純資産2万円(同上)

□永井直厚(2社 …円)

永井直厚(牛込区南町)は子爵、正五位勲八等であったが、大正3年10月10日従四位に叙された(T3.10.11読売)、* 昌栄貯蓄銀行取締役、* 日本資金信託監査役

□中津親義(1社 …円)

中津親義(熊本市明円寺町)は九州磚茶、熊本物産各取締役、弘益殖産監査役(要録、T9役中P96)、熊本物産、熊本織物各取締役(要録、T10役中P125)、大正10年2月11日創立の三池炭砒(株)監査役(T10.4.10鉱業)

□福井甚三(3社 76円)

福井甚三(大阪市東区高麗橋)は代議士、所得税76円(紳T11、P231)、明治7年12月奈良県生駒郡富郷村に生れ、8年12月大日本木炭発起人(T8.12.3内報①)、* 城南土地、日本家禽土地、有明炭砒各取締役、* 糸崎船渠監査役(要録T9役下、P18)、* 生駒土地代表取締役、大阪郊外住宅取締役、北鮮産業監査役(帝T11、職P416)、生駒土地社長、大阪郊外住宅専務、大阪現株取引、有明炭礦各常務、城南土地、日本家禽土地各取締役、大和日報社ほか数社

の役員、奈良県二区選出の政友本党代議士（『衆議院要覧』大正13年、P160）、
 所得税444円（紳T14、P301）

□福島宜三（2社 167円）

福島宜三（淀橋町角筈）は農商務省嘱託として農工業調査に従事し、明治35
 年代議士当選（人事興信録T7、ふP67）、東洋生命常務、城東電気軌道、東洋
 捕鯨、千代田ゴム各監査役ほか（要録、T9、役下P22）、東洋生命、東京運河
 土地各社長、東洋電気工業、南洋殖産、*熱海偕楽園各取締役、千代田ゴム、
 東洋捕鯨各監査役、所得税167円（紳T11中P183）、加えて金沢電気軌道監査役
 ほか（紳T14、P510）、*熱海宝塚土地発起人、*伊豆山偕楽園取締役（要録
 T15、P20）、南部製鉄監査役、横山一平五女を養子（人事興信録T7、ふP67）

□皆川芳造（4社 365円）

皆川芳造（日本橋区富沢町）は皆川商店代表取締役（帝T11、職P532）、商
 業会議所常議員、所得税365円（紳T11、下P91）、*日本硬化煉瓦取締役（要
 録T9、P55）、*日本鋼管シャフト取締役（要録T9、P56）、*東京絹綿紡
 績監査役（要録T9、P116）、豊玉織物社長、富士製鋼、日英醸造、*日本鋼
 管シャフト、*日本硬化煉瓦、日本味噌製造、原町紡績、日本コルク、ホワイ
 シテイ各取締役（帝T11、職P532）、13年には会社役員、対物信用負債、対人
 信用普通、年商未詳、盛衰は衰（帝信T13、P345）

□矢崎高（1社 …円）

矢崎高（深川区東森下町）は矢崎病院長、（商T7なし）（要録、T9役なし）、
 医学博士の田沢鐸二（熱海偕楽園顧問）らとともに*熱海偕楽園の主唱人（T
 9.4.24内報①）で同取締役（要録、T10役中、P227、紳T11、中P98）、（帝
 信T13、なし）（紳T14なし）、昭和6年時点では熱海偕楽園代表取締役（昭和
 6年（ヲ）第二八号事件東京控訴院民事第一部判決 S6.10.20法律新聞）

□山口文右衛門（5社 …円）

山口文右衛門（千葉県銚子町）は明治6年2月先代の三男孝吉として生れ、
 山口電線工場主、明治34年4月5日浜口儀兵衛らと武総貯蓄銀行（→家満佐<
 ヤマサ>貯蓄銀行→農工貯蓄銀行）を創立（『大日本銀行会社沿革史』、P36）、

大正6年12月12日池上電気鉄道代表取締役辞任、大正7年10月設立の*日東炭礦取締役200株主（第二回営業報告）、大正8年5月16日*糸崎船渠発起人（T8.5.16読売）、大正8年*南九州採炭発起人（T8.6.15内報）、11年では化学豆油、東洋繊維工業、第二東海ラミー紡織各取締役（帝T11、P362）、水鉛鉱業取締役（要録T11、P249）、*黒崎電機製作所取締役200株（要録T9、P82）、大正12年時点では上記に加え諏訪工業、帝国シャンパン各社長、安中電機製作所、*カルチウム鉱泉、東亜興産、日本理化学工業、共立電気電線各取締役（『一九二四年に於ける大日本人物史』大正13年、やP37）、（帝信T13、千葉なし）

□横山一平（2社 1、545円）

横山一平（四谷区霞ヶ丘）は旧金沢藩士の次男、鉱山業、千葉県選出の代議士。明治40年石井直と日本養魚設立、監査役、東洋捕鯨、日本石材、日本水道木管各取締役、資産額50万円（渋谷隆一ほか「大正初期の大資産家名簿」『地方金融史研究』第14号、1983年4月、P54）、大正5年時点の持株は帝国電灯200、東洋捕鯨503、*日本綿羊毛織発起人・取締役（要録T9、P63）、大正9年12月東京地裁任命により日本綿羊毛織代表取締役。常磐興業社長、東洋捕鯨、南部製鉄、大日本水道木管、東洋水道木管、北海道製網船具、山下黒鉛、一柳産物各取締役、*熱海偕楽園監査役、所得税69円（紳T11上P217）、東洋捕鯨社長、所得税1545円（紳T14、P250）、東洋捕鯨専務、常磐興業専務、南部製鉄専務、一柳産物、東洋水道木管、金沢電気軌道各取締役、*伊豆山偕楽園、北海道製網船具各監査役（『大衆人事録』第三版、P10）、福島宜三と姻戚関係あり。

□吉岡又三郎（2社 …円）

吉岡又三郎（麻布区斧町）は*日東炭礦取締役500株主で、「日本公債代表者」としても日東炭礦300株主、日本採炭の筆頭株主たる日本公債社長990株主（要録T9、P147）、*杉浦メリヤス製針取締役（要録T10、中P8）、東都染料製造取締役（要録T11、役中P8）。『全国株主要覧』大正9年版に記載なし

□脇田豊吉（4社 120円）

脇田豊吉（徳島県美馬郡脇田猪尻）は明治12年3月北の庄の地主「南脇田家」に生れ、40年脇田収入役、大正2年名誉職助役に昇任、「声望益加はる」（『徳島名鑑』徳島日日新報社、大正4年、わP14）、他に兼務なし。後に＊黒崎電機製作所取締役役に就任（要録T9、P82）、自宅と思われる脇田大字猪尻154に支店をおいた＊日本資金信託取締役、＊第一倉庫取締役（要録T9徳島、P4）、第一倉庫、黒崎電機製作所各取締役（要録T10役上、P234）、＊太陽商事取締役（要録T10、P168）、黒崎電機製作所監査役のみ（帝T11職P162）、（帝信T13、徳島なし）／なお猪尻の脇田嘉一郎は藍商、所得税3.15円、営業税9.46円（『日本全国商工人名録』明治31年、あP28）、昌栄貯蓄銀行脇田代理店主か？

〔凡例〕

◎印…腹心・配下・ダミーと目される人物（判断の根拠：①松島肇の親族等、②松島肇系企業の使用人、③資産・納税額に比して松島肇との共同事業数が5社以上と多い人物）

□印…松島肇と対等以上の優位性を有すると思われる有力資本家

○印…松島肇と関係の深い資本家（上記の2類型以外）

＊印…松島肇の役員兼務先企業（同一人の初出のみ表示）

（ ）内は松島肇との共同事業数、所得税

〔出典〕『日本紳士録26版』大正11年（所得税31円または営業税71円以上の資産家約10万人登載）、『徳島名鑑』大正4年、各種会社録、紳士録その他（企業役職の後に個々に明記）

〔参考資料 2〕「虚業家」とその類語に関連する参考文献・先行研究

(A) 単行本

瀬川光行『商海英傑伝』、明治26年

鳥谷部春汀『統明治人物評論』博文館、明治33年

野城久吉『投機新論』私家版、明治34年

足立栗園『今村清之助君事歴』小谷松次郎、明治39年

雨宮敬次郎述『過去六十年事蹟』桜内幸雄、明治40年

山路愛山『現代金権史』服部書店、明治41年

朝比奈知泉『財界名士失敗談 上巻』毎夕新聞社、明治42年

野城久吉『商機』民友社出版部、明治43年

神戸正雄『近代放資論 完』有斐閣、明治44年

『日本米界人名辞彙』毎夕新聞社、明治44年

鵜崎鷺城(熊吉)『人物評論朝野の五大閥』東亜堂書房、明治45年

岡本鵜園『兜町繁昌記』壬子出版社、明治45年

沢本江南『人の今昔』開成社書店、大正元年

藤井忠兵衛編『北浜堂島仲買事件予審決定書』藤井忠兵衛、大正元年

内田魯庵『社会百面相』岩波書店、大正2年

三木幾太郎編『疑問の人』東京毎夕新聞社、大正2年

本郷直彦『神戸権勢史』平野宝盛堂、大正2年

山路愛山『現代富豪論』中央書院、大正3年

千原伊之吉『成金物語』采女社、大正5年

致富研究会『千載一遇 成金世界』愛生堂出版、大正5年

『成金読本 確定利殖』相生屋株式会社、東京、大正6年

『戦時株式の研究』相生屋株式会社調査部、東京、大正6年

鵜崎鷺城『当世策士伝』、大正7年

山本唯三郎『征虎記』、私家版、大正7年

上野景明・三上徳三郎『本邦鉱業と金融』丸善、大正7年

- 小西栄三郎『一攫千金 一名最新欧米成金物語』小西書店、大正7年
- 岡本学『投資秘訣 成金術』大修館書店、大正7年
- 池島民理『株式会社の裏面』精禾堂、大正8年
- 小田律『大事業家・成金小説』玄文社、大正8年
- 秋元宏『銀行や会社の破綻を予知するには』大京堂書店、大正9年
- 遠藤樓外樓『銀行罪惡史』日本評論社、大正11年
- 阿部直躬『三十年之回顧』商業興信所、大正11年
- 小川市太郎『住宅及土地問題』大阪毎日新聞社、大正11年
- 遠藤樓外樓『銀行罪惡史』日本評論社出版部、大正11年
- 岡村周量『黄金の渦巻へ』蒼天書房、大正13年
- 矢野文雄『安田善次郎伝』安田保善社、大正14年
- 越山堂編『明治大正成金没落史』『経済パンフレット』第2輯、越山堂、大正14年
- 大浜孤舟著『暗黒面の社会・百鬼横行』新興社、大正15年
- 狩野雅郎『買占物語』銀行問題研究会、大正15年
- 時事新報社経済部編『財づる物語』東洋経済新報社、大正15年
- 安田与四郎『株式市場の裏表』大日本雄弁会、昭和2年
- 武内義雄『軽雲外山翁伝』商業興信所、昭和3年
- 時事新報社経済部編『利権物語』東洋経済新報社、昭和3年
- 佐藤善郎『株屋町五十年と算盤哲学』大阪屋号書店、昭和4年
- 高橋亀吉『株式会社亡国論』萬里閣書房、昭和5年
- 南波礼吉『日本買占史』春陽堂、昭和5年
- 家村五郎『投資之研究』投資研究社、昭和5年
- 高橋亀吉『株式会社亡国論』萬里閣書房、昭和5年
- 岸柳莊『黄金街秘話』雄興社、昭和5年
- 奥村千太郎『株式放資と売買術』文雅堂、昭和6年
- 小林一三ほか『岩下清周伝』故岩下清周君伝記編纂会、昭和6年
- 報知新聞経済部編『相場実話』千倉書房、昭和7年

村尾政明『相場成金帳』東京景気観測所、昭和7年
 伊藤悌造『田附政次郎伝』田附商店、昭和10年
 野依秀市編『財界物故傑物伝』上下、実業之世界社、昭和11年
 三猿老人『株成金之鍵』三洋堂書店、昭和11年
 南城政夫『近世成金物語』東亜書房、昭和11年
 鈴木正吾『戦争成金断じて許さず』日本講演通信社、昭和14年
 沢本孟虎『近世人物評伝山河人あり』昭和18年
 池田成彬『財界回顧』世界の日本社、昭和24年
 関谷兵助ほか『相場今昔物語』日本経済新聞社、昭和27年
 南波礼吉『株界生活六十年』河出書房、昭和28年
 『風雲六十三年 神田鑄藏翁』紅葉会、昭和28年
 沙羅双樹『近世成金伝一恋の鈴久』産業経済新聞社、昭和29年
 土屋喬雄『日本の政商』経済往来社、昭和31年
 古川浩『会社問題の理論考察』昭和31年
 長谷川光太郎『兜町盛衰記』1～4、日本証券新聞社、昭和32年
 村田弘『中野金次郎伝』東洋書館、昭和32年
 松永定一『北浜盛衰記』東洋経済新報社、昭和34年
 鈴木隆『成金とは』新思社、昭和35年
 藤木光城『松方・金子物語』兵庫新聞社、昭和35年
 宮本又次『大阪商人太平記』明治中期篇、昭和36年
 村松梢風『梢風名勝負物語—黄金街の覇者』読売新聞社、昭和36年
 楫西光速『政商から財閥へ』筑摩書房、昭和39年
 久保祐三郎『総会屋五十年』昭和40年
 大宅壮一『実業と虚業 企業編』サンケイ新聞社、昭和41年
 生形要『兜町百年』東洋経済新報社、昭和42年
 森川哲郎『乗取り百年』久保書店、昭和42年
 小林健男『乗取屋・買占屋・総会屋』三一書房、昭和42年
 志村嘉一『日本資本市場分析』東京大学出版会、昭和44年

- 水沼知一『『実業』と『虚業』』『近代日本経済思想史1』有斐閣、昭和44年
- 生形要『相場師』日本経済新聞社、昭和44年
- 赤松啓介『神戸財界開拓者伝』太陽出版、昭和44年
- 奥村宏『買占め乗取り・TOB』東洋経済新報社、昭和48年
- 邦光史郎「成金列伝」『日本人の100年 第9巻 成金の天下』世界文化社、昭和49年
- 豊田隆介ほか『相場師列伝』東洋経済新報社、昭和51年
- 志村嘉一『現代日本公社債論』東京大学出版会、昭和53年
- 梅津和郎『成金時代』教育社、昭和53年
- 野田正穂『日本証券市場成立史』有斐閣、昭和55年
- 志村嘉一監修『日本公社債市場史』公社債引受協会、昭和55年
- 黒沢正男『小林光次伝』私家版、昭和57年
- 壁井与三郎『かぶと町回顧五十年』東洋経済新報社、昭和57年
- 黒沢正男『証券人物百年史Ⅰ 草創期の群像』政経時事、昭和58年
- 三島康雄『阪神財閥 野村、山口、川崎』日本経済新聞社、昭和59年
- 壁井与三郎『大相場師—その戦略と決断』東洋経済新報社、昭和59年
- 田井弘『虚業百科』心交社、昭和61年
- 宮本又次『近代大阪の展開と人物誌』文献出版、昭和61年
- 小林正彬『政商の誕生—もうひとつの明治維新—』東洋経済新報社、昭和62年
- 岩田龍子『虚業の研究』日本経済新聞社、昭和62年
- 桂芳男『関西系総合商社の原像』啓文社、昭和62年
- 小林和子『証券』産業の昭和社會史10、日本経済評論社、昭和62年
- 渋谷隆一・加藤隆・岡田和喜『地方財閥の展開と銀行』日本評論社、平成元年
- 『日本証券史資料 戦後編別巻一 証券関係文献目録』日本証券経済研究所、平成元年
- 小島直記『日本策士伝』中央公論社、平成元年
- 奥村宏『買占め・乗取り・TOB—株式取得の経済学—』社会思想社、平成元年
- 二上季代司『日本の証券会社経営—歴史・現状・課題』東洋経済新報社、平成

2 年

神田豊晴『総会屋100年』リッチ・マインド、平成3年

石田朗『東京の米穀取引所 戦前の理事長』東京穀物商品取引所、平成4年

三島康雄『造船王川崎正蔵の生涯』同文館出版、平成5年

麻島昭一『戦前期信託会社の諸業務』日本経済評論社、平成7年

岡田和喜『貯蓄奨励運動の史的展開—少額貯蓄非課税制度の源流—』同文館、平成8年

麻島昭一、大塩武『昭和電工成立史の研究』日本経済評論社、平成9年

斎藤憲『稼ぐに追いつく貧乏なし—浅野総一郎と浅野財閥』東洋経済新報社、平成10年

石井寛治『近代日本金融史序説』東京大学出版会、平成11年

今口忠政、柴孝夫『日本企業の衰退メカニズムと再生化』多賀出版、平成11年

山崎廣明『昭和金融恐慌』東洋経済新報社、平成12年

栗原るみ『一九二〇年代の金融恐慌—福島県蚕糸業を事例として—』日本経済評論社、平成12年

辻節雄『新版 関西系総合商社』晃洋書房、平成12年

伊藤正直・霧見誠良・浅井良夫編『金融危機と革新一歴史から現代へ—』日本経済評論社、平成12年

渋谷隆一『高利貸金融の展開構造』日本図書センター、平成12年

小川功『地方企業集団の財務破綻と投機的経営者—大正期「播州長者」分家の暴走と金融構造の病弊—』滋賀大学研究叢書第32号、平成12年

石井寛治・杉山和雄編『金融危機と地方銀行』東大出版会、平成13年

麻島昭一『本邦信託会社の史的研究』日本経済評論社、平成13年

石井寛治・杉山和雄編『金融危機と地方銀行』東京大学出版会、平成13年

岡田和喜『地方銀行史論—為替取組と支店銀行制度の展開—』日本経済評論社、平成13年

小川功『破綻銀行経営者の行動と責任—岩手金融恐慌を中心に—』滋賀大学研究叢書第34号、平成13年

石井寛治編『日本銀行金融政策史』東京大学出版会、平成13年
 渋谷隆一『庶民金融の展開と政策対応』日本図書センター、平成14年
 伊牟田敏充『昭和金融恐慌の構造』経済産業調査会、平成14年
 鍋島高明『相場師異聞』五台山書房、平成14年
 小川功『企業破綻と金融破綻一負の連鎖とリスク増幅のメカニズム』九州大学出版会、平成14年
 渡辺恵一『浅野セメントの物流史—近代日本の産業発展と輸送』立教大学出版会、平成18年

(B) 論文、雑誌ほか

「新富豪物語」大正6年1月24日～5月10日『時事新報』88回連載
 菅野和太郎「会社屋」『経済史研究』経済史研究会、昭和6年6月
 三島康雄「島徳蔵と日魯漁業株式会社」『漁業経済研究』13巻4号、昭和40年4月
 伊牟田敏充「岩下清周と北浜銀行—明治、大正期における『機関銀行』に関する覚書—」大塚久雄他編『資本主義の形成と発展』東京大学出版会、昭和43年
 森泰博「株式現物問屋の社債・株式引受—大阪株式現物団」『大阪大学経済学』23巻2-3合併号、昭和48年12月
 小早川洋一「浅野財閥の多角化と経営組織—大正期から昭和初期の分析」『経営史学』第16巻第1号、昭和56年4月
 西藤二郎「岩下清周の経営理念をめぐって—三井銀行時代を中心として—」『京都学園大学論集』第10巻第1号、昭和56年9月
 西藤二郎「岩下清周と北浜銀行—彼の経営理念をめぐって—」『京都学園大学論集』第10巻第2号、昭和57年2月
 森泰博「総合証券会社の成立過程」『商学論究』第31巻1号、昭和58年7月
 小早川洋一「安田財閥と浅野財閥—大正期から昭和初期における両財閥の関係を中心とした考察—」『経営情報』第2巻3・4号、昭和58年12月
 二上季代司「証券業経営の史的展開」『証券経済』146号、昭和58年12月

西藤二郎「明治・大正期の奈良県を中心とする鉄道敷設運動—未成線を中心として—」『京都学園大学論集』13巻2号、昭和59年12月

西藤二郎「大和鉄道の経営戦略—役割理論の観点から—」『京都学園大学論集』14巻1号、昭和60年7月

西藤二郎「摂丹鉄道の計画と挫折」『京都学園大学論集』14巻3号、昭和60年3月

二上季代司「本邦証券会社史論序説(1)(2)(3)」『証券経済』156号、159号、170号、(財)日本証券経済研究所、昭和61年6月～平成元年12月

片岡豊「明治期の株式市場と株価形成」『社会経済史学』53巻2号、昭和62年6月

二上季代司「メインバンクと幹事証券の歴史的系譜」『証券研究』84巻、昭和63年10月

* 霧見誠良「証券財閥」渋谷隆一・加藤隆・岡田和喜『地方財閥の展開と銀行』日本評論社、平成元年

佐藤英達「藤田伝三郎小伝(上下)」『大阪春秋』77～78号、大阪春秋社、平成7年

森泰博「大阪における証券業者の抬頭」作道洋太郎編『近代大阪の企業者活動』思文閣出版、平成9年

高嶋雅明「大阪における銀行業の発展と銀行経営者」作道洋太郎編『近代大阪の企業者活動』思文閣出版、平成9年

佐藤英達「藤田銀行の挫折」『関西実践経営』14号、平成9年9月

野田正穂「1920年代の担保付き社債—箱根土地のデフォルトについて—」『経営志林』34巻3号、平成9年10月

小早川洋一「浅野総一郎と明治期における浅野セメントの考察」明治大学『経営論集』45巻2、3、4合併号、平成10年3月

佐藤英達「ビジネスリーダーとしての藤田傳三郎」『所報』第2号、愛知産業大学経営研究所、平成11年6月

佐藤英達「藤田銀行の収束」『帝塚山学術論集』第6号、平成11年12月

- 石井寛治「近江銀行の救済と破綻」『地方金融史研究』31号、平成12年3月
- 佐藤英達「北濱銀行の没落」『帝塚山学術論集』第7号、平成12年12月
- 麻島昭一「戦後復興期における昭和電工の経営体制」『専修大学経営学論集』第76号、平成15年3月
- 生島淳「水島廣雄—そごうのワンマン経営者—」宇田川勝編『戦後日本の企業家活動』、平成16年
- 久保文克「大日本製糖の破綻と再生」宇田川勝『失敗と再生の経営史』有斐閣、平成17年
- 小林和子「日本市場の乗っ取り拒否体質と法制—東洋精糖事件を顧みる—」『証券アナリストジャーナル』43巻7号、平成17年7月
- 小林和子「昭和30年代の買占め熱を顧みる」『証研レビュー』45巻12号、日本証券経済研究所、平成17年12月

(C) 著者の「虚業家」関連論文(Aに載せた拙著に掲載済を除く)

- 「銀行家の資質とリスク管理—金融恐慌期の広島産業銀行を中心に—」『滋賀大学経済学部研究年報』第8巻、平成14年3月
- 「生保破綻と“虚業家”による収奪—九州生命詐欺破産事件と河村隆実のリスク選好—」『滋賀大学経済学部研究年報』第9巻、平成14年12月
- 「“虚業家”守山又三のハイ・リスク行動と京都財界」『京都学園大学経済学部論集』第12巻第2号、平成14年12月
- 「藤本ビルブローカー銀行のベンチャー企業関与とリスク管理—葛原冷蔵の破綻事例を中心として—」『地方金融史研究』第34号、平成15年3月
- 「『企業家』と『虚業家』の境界—岩下清周のリスク選好度を例として—」『彦根論叢』第342号、平成15年6月
- 「湯布院・別府の観光開発の先駆者・小野駿一と油屋熊八」『滋賀大学産業共同研究センター報』第2号、平成15年6月
- 「大正バブル期における起業活動とリスク管理—高倉藤平・為三経営の日本積善銀行破綻の背景—」『滋賀大学経済学部研究年報』第10巻、平成15年12月

「“虚業家”集団『高柳王国』の形成と崩壊—大衆資金のハイ・リスク分野への誘導と収奪—」『彦根論叢』第351号、平成16年11月

「“虚業家”高柳淳之助による似非・企業再生ファンドの挫折—ハイ・リスクの池上電気鉄道への大衆資金誘導システムを中心に—」『滋賀大学経済学部研究年報』第11巻、平成16年12月

「証券業者による鉱山経営とリスク管理—八溝金山事件を中心として—」『彦根論叢』第354号、平成17年5月

「企業家と虚業家」『企業家研究』第2号、企業家研究フォーラム、有斐閣、平成17年6月

「鉱業投資とリスク管理（序説）—鉱業リスクの諸態様を中心として—」『彦根論叢』第355号、平成17年9月

「邦人向“海外投資不動産ファンド”の創始者のリスク選好—紐育土地建物社長・岡本米蔵の前半生—」『彦根論叢』第357号、平成18年2月

「ハイリスクの海外不動産投資ファンドの内地販売戦略—大正期紐育土地建物会社のビジネス・モデルの虚構—」『彦根論叢』第359号、平成18年3月

〔資料〕小林和子ほか編『日本証券史資料 戦後編別巻一 証券関係文献目録』日本証券経済研究所、平成元年、鍋島高明『相場師異聞』五台山書房、平成14年ほか

「虚業家」による泡沫会社乱造・自己破綻
と株主リスク

—大正期“会社魔”松島肇の事例を中心に—

平成18年2月28日発行

非 売 品

著 者 小 川 功

発行者 滋 賀 大 学 経 済 学 部

印 刷 西 濃 印 刷 株 式 会 社

岐阜市七軒町15番地

TEL (058) 263-4101

滋賀大学経済学部研究叢書既刊目録

| | | | |
|------|---|-------------|---------|
| 第1号 | 中国官僚資本主義研究序説
—帝國主義下の半植民地的後進資本制の構造— | 中 寫 太 一 | 昭和45年3月 |
| 第2号 | 物權的返還請求權論序論
—実体權的理解への疑問として— | 伊 藤 高 義 | 昭和46年3月 |
| 第3号 | 經濟理論の基礎をなす仮説について | 梶 田 公 | 昭和52年3月 |
| 第4号 | 情報會計の基礎 | 清 水 哲 雄 | 昭和54年2月 |
| 第5号 | 國際通貨発行特權と國際通貨制度 | 有 馬 敏 則 | 昭和54年3月 |
| 第6号 | 現代西ドイツ直接原価計算論序説
—相對的 direct 原価計算論を中心として— | 両 頭 正 明 | 昭和56年3月 |
| 第7号 | THE TALE OF THE SOGA BROTHERS | 北 川 弘 | 昭和56年3月 |
| 第8号 | 北欧初期社会の構成 | 熊 野 聰 | 昭和59年3月 |
| 第9号 | 欠損下における税効果會計の理論 | 西 村 幹 仁 | 昭和59年3月 |
| 第10号 | THE TALE OF THE SOGA BROTHERS PART II | 北 川 弘 | 昭和60年3月 |
| 第11号 | ワーズワスの初期の神秘思想 | 原 田 俊 孝 | 昭和60年3月 |
| 第12号 | 〈基礎的組織〉と政治統合
—M.P. フォレットの研究— | 岡 本 仁 宏 | 昭和61年3月 |
| 第13号 | 世界市場と國際資本主義の連節構造 | 中 寫 太 一 | 昭和61年3月 |
| 第14号 | 内外金融システムの変化と対外不均衡 | 有 馬 敏 則 | 昭和62年3月 |
| 第15号 | 市場と体制
—經濟体制論研究序説— | 經濟体制論研究会 | 昭和63年3月 |
| 第16号 | プロトコルの形式的記述と検証 | 森 將 豪 | 平成元年3月 |
| 第17号 | 生産計画問題の同値変形による解法
—凸目的関数の場合— | 吉 田 稔 | 平成元年3月 |
| 第18号 | 唐代中期の文学と思想
—柳宗元とその周辺— | 戸 崎 哲 彦 | 平成2年3月 |
| 第19号 | デューイ政治哲学研究序説
—思想形成過程試論— | 小 西 中 和 | 平成3年3月 |
| 第20号 | 經濟時系列の統計的研究
—岡部の理論とその応用— | 中 野 裕 治 | 平成4年2月 |
| 第21号 | IN-HOUSE R&D VERSUS EXTERNAL TECHNOLOGY ACQUISITIONS:
Small Technology-Based Firms in the U.S. and Japan | 黒 川 晋 | 平成4年3月 |

| | | | |
|------|--|---------|------------|
| 第22号 | ネットワークシステムにおける基本方式 | 葛 山 善 基 | 平成 5 年 1 月 |
| 第23号 | 連結会計論 | 蛭 木 實 | 平成 5 年 3 月 |
| 第24号 | ユーゴ労働者自主管理の挑戦と崩壊 | 藤 村 博 之 | 平成 6 年 3 月 |
| 第25号 | 柳宗元在永州
—永州流謫期における柳宗元の活動に関する一研究— | 戸 崎 哲 彦 | 平成 7 年 3 月 |
| 第26号 | 市場経済の展開と発生主義会計の変容 | 久保田 秀 樹 | 平成 8 年 1 月 |
| 第27号 | 日本企業の人事管理改革 | 藤 村 博 之 | 平成 9 年 3 月 |
| 第28号 | 移行経済の研究
—理論と戦略— | 福 田 敏 浩 | 平成 9 年12月 |
| 第29号 | 退職後所得保護の法理
—ERISA 研究— | 小 櫻 純 | 平成10年 2 月 |
| 第30号 | 現代日本のセントラル・バンキング
—金融経済環境の変化と日本銀行— | 小 栗 誠 治 | 平成10年12月 |
| 第31号 | 独占、蓄積と環境 | 近 藤 学 | 平成11年 1 月 |
| 第32号 | 地方企業集団の財務破綻と投機的経営者
—大正期「播州長者」分家の暴走と金融構造の病弊— | 小 川 功 | 平成12年 2 月 |
| 第33号 | ラオス経済の移行過程と国際化 | 堂 本 健 二 | 平成12年 3 月 |
| 第34号 | 破綻銀行経営者の行動と責任
—岩手金融恐慌を中心に— | 小 川 功 | 平成13年 3 月 |
| 第35号 | 不安定性原理とハロッド＝ドーマー型経済変動成長理論 | 鈴 木 康 夫 | 平成13年 3 月 |
| 第36号 | グローバル経済下の内外金融のリスク管理 | 有 馬 敏 則 | 平成14年 3 月 |
| 第37号 | 業績管理のための共通費の配分
—公平性と動機づけをめぐる— | 頼 誠 | 平成15年 3 月 |
| 第38号 | Sapid によるソフトウェア解析技法 | 斉 藤 邦 彦 | 平成15年 3 月 |
| 第39号 | 平均＝分散平面と資産評価理論の検証 | 堀 本 三 郎 | 平成16年 2 月 |
| 第40号 | 性の消費行動
—現代社会における性の商品化と商品価値— | 神 山 進 | 平成16年 8 月 |
| 第41号 | 欧米制度の移植と日本型会計制度 | 久保田 秀 樹 | 平成17年 2 月 |